

# 菊模様皿山奇談

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫



## 序

大奸は忠に似て大智は愚なるが如しと宜なり。此書は三遊亭圓朝子が演述に係る人情話を筆記せるものとは雖も、其の原を美作国久米郡南条村に有名なる皿山の話に起して、松蔭大藏が忠に似たる大奸と遠山權六が愚なるが如き大智とを骨子とし、以て因果応報有為転変、恋と無常の世態を縷述し、読む者をして或は喜び或は怒り或は哀み或は榮ましむるの結構は実に当時の状況を耳聞目撃するが如き感ありて、圓朝子が高座に上り、扱て引続きまして今晚お聞きに入れまするは、とお客の御機嫌に供えたる作り物語りとは思われざるなり。蓋し当時某藩に起りたる御家騒動に

基き、之を潤飾敷衍せしものにて、其人名等の世に知られざるは、  
憚る所あつて故らに仮設せるに因るならん、読者以て如何とす。

明治二十四年十一月

春濤居士識

美作みまさかのくにくめごおり 美作国 桑郡まなごに皿山という山があります。美作や桑の皿

山まなごほどの眼まなこで見ても見のこした山、という狂歌がある。その皿

山の根方ねがたに皿塚ともいい小皿山ともいう、こんもり高い処がある。

その謂いわれを尋ねると、昔南みなみ桑郡くめごおりの東山村ひがしやまむらという処に、

東山ひがしやまさくざえもん作左衛門さへもんと申す郷士ごうしがありました。頗すこぶる豪家ごうかであります

が、奉公人よしまは余り沢山使あまいません。此の人の先祖は東山將軍よしま義

政まさに事つかえて、東山という苗字を貰ったという旧家ふるいであります。

其の家に東山公から拝領の皿が三十枚あります。今九枚残つてい

るのが、肥後ひごの熊本の本願寺支配の長峰山ちようほうざん随正寺ずいしょうじという寺の宝物ほうもつになつて居ります。これは彼の諸方かで経済学の講釈をしたり、平天平地へいてんへいちとかいう機械をもつて天文学を説いて廻りました佐田介石和尚さだかいせきが確かに見たと私わたくしへ話わされました。何どの様な皿かと尋ねましたら、非常に良い皿で、色は紫がゝつた処もあり、また赤いような生臙脂しょうえんじがゝつた処があり、それに青貝のようにピカピカした処もあると云いますから、交趾焼こうちやきのような物かと聞きましたら、いや左様そうでもない、珍らしい皿で、成程一枚こわ毀したら其の人を殺すであろうと思うほどの皿であると云いました。其の外ほかにある二十枚の皿を白菊と云つて、極薄手ごくくの物であると申すことですが、東山時分に其様そんな薄作うすさくの唐物はない筈、決して薄

作ではあるまいと仰しやる方もございましょうが、ちよいと触つても毀れるような薄い皿で、欠けたり割れたりして、継いだのが有るといふことです。此の皿には菊の模様が出ていたので白菊と名づけ、あとの十枚は野菊のような色気がある処から野菊と云いました由で、此の皿は東山家伝来の ちようほう 重宝であるゆえ大事にするためでも有りましょう、先祖が此の皿を一枚毀す者は実子たりとも指一本を切るといふ遺言状をこの皿に添えて置きましたと申すことで、ちと馬鹿々々しい訳ですが、昔は其様なことが随分沢山有りましたそうでございます。其の皿は実に結構な品でありますゆえ、誰たれも見たがりますから、作左衛門は自慢で、件くだんの皿を出しますのは、何どういうものか家例かれいで九月の節句に十八人の客を招し

ようだい  
待たいして、これを出します。尤もつとも豪家ですから善よい道具も沢山

所持して居ります。殊に茶器には余程の名器を持つて居りますから自慢で人に見せません。又御領主の重役方などを呼びましては度た々びく々びく饗応を致します。左様な理由わけゆえ道具係という奉公人がありますが、此の奉公人が頓とんと居附きません。何故なぜというのと、毀せば指一本を切ると云うのですから、皆道具係というと怖れて御免を蒙こうむります。そこで道具係の奉公人には給金を過分に出します。其の頃三年で拾両と云つては大した給金であります。それでも道具係の奉公人になる者がありません。中には苦しまぎれに、なんの小指一本ぐらい切られても構わんなど、度胸で奉公にまいる者がありますが、薄作だからつい過あやまつては毀して指を切られ、



だんく此の話を聞伝えて奉公に参る者がなくなりました。陶器  
 と申す物も唐土からには古来から有つた物ですが、日本では行基菩薩ぎよきぼさ  
 薩つが始まりだとか申します。この行基菩薩という方は大和国やまとのくに  
 菅原寺すがわらでらの住僧じゆうそうでありましたが、陶器の製法を發明致された  
 との事であります。其の後元祖藤四郎とうしろうという人がヘーシを發明  
 致したは貞応ていおうの二年、開山道元どうげんに従い、唐土へ渡つて覚えて  
 来て焼き始めたのでございましょうが、これが古瀬戸こせとと申すもの  
 で、安貞あんてい元年に帰朝致し、人にも其の焼法やきほうを教えたという。  
 是れは今明治二十四年から六百六十三年前ぜんのことで、又祥瑞五  
 郎ろだゆう太夫たふ頃になりました、追々と薄作うすくの美しくしい物も出来ました  
 が、其の昔足利の時代にも極綺麗ごくな毀れ易い薄いものが出来てい



の使いをしてわず僅かの小島こはたをもつて其の日をやつと送つて居る内に、母が病氣附きまして、娘は母に良い薬を飲ませたいと、昼は人に雇われ、夜は内職などをして種々いろく介抱に力を尽しましたが、母は次第に病が重おもりました。こゝに以前此の家に奉公を致してゐました丹治たんじと申す老翁じやういが、時々見舞に参ります。

丹「えゝお嬢様、何うでがす今日は……」

千「おや爺じいやか、まアお上りな、爺や此こないだ間は誠に何よりの品を有難うよ」

丹「なに碌なものでもございせんが、少しも早く母かあさまの御病気が御全快になれば宜よいと心配してはいますが、何うも御様子が宜くねえだね」

千「何うかして少しお気をお晴しなさると宜いが、私はもういけない、所詮死ぬからなんて御自分の気から漸々御病気を重くなさるのだから困るよ、今朝はお医者様を有難う、早速来て下さったよ」

丹「参りましたかえ、あのお医者さまはえらい人でござえまして、何でもは此の近辺の者で彼の人に掛つて癒らねえのはねえと云う、宅も小さくつて良いお出入場も無えようだが、城下から頼まれて、立派なお医者さまが見放した病人を癒した事が幾許もありやすので、諸方へ頼まれて往きますが、年い老つて居るから診ようが丁寧だてえまず、脈を診るのに両方の手を押めえて考えるのが小一時もかゝつて、余り永いもんだで病人が大儀だから、少

し寝かしてくんろてえまで、診るそうです」

千「誠に御親切に診て下さいますけれども、爺や彼の先生の仰しやるには、朝鮮の人参の入ってるお薬を飲ませないとお母<sup>つか</sup>さまはいけないと仰しやっただよ」

## 二

其の時に丹治は首を前へ出しまして、

丹「へえー何を飲ませます」

千「人参の入ってるお薬を」

丹「何<sup>ど</sup>のくらい飲ませるんで」

千「一箱も飲ませれば宜いと仰しやったの」

丹「それなら何も心配は入りません、一箱で一両も二両もする訳のものじゃアございやせん、多寡の知れた胡蘿蔔ぐらいを」

千「なに胡蘿蔔ではない人参だわね」

丹「人参てえのは何だい」

千「人の形に成つて居るような草の根だというが、私は知らないけれども、誠に少ないもので、本邦へも余り渡らない物だけれども、其のお薬をお母さまに服させせる事もできないんだよ」

丹「何うかして癒らば買って上げたいもんだが、何の位のものでがす」

千「一箱三拾両だとさ」

丹「そりやア高<sup>たけ</sup>えな、一箱三拾両なんて魂<sup>たまげ</sup>消た、怖ろしい高え薬を売<sup>た</sup>りたがる奴じやアねえか」

千「なに売<sup>た</sup>りたがると云う訳ではないが、其のお薬を飲ませればお母さまの御病気が癒ると仰しやるから、私は其れを買<sup>た</sup>いたいと思<sup>た</sup>うが買<sup>た</sup>えないの」

丹「むゝう三拾両じやア仕様がねえ、是れが三両ぐらいのことなら大事な御主人の病<sup>やめえ</sup>には換えられねえから、宅<sup>うち</sup>を売<sup>た</sup>つたつて其の薬を買<sup>た</sup>つて上げた<sup>い</sup>とは思<sup>い</sup>ますが、三拾両なんてえらい話だ、そんな出来ねえ相談<sup>ぶ</sup>を打<sup>ぶ</sup>たれちやア困<sup>ま</sup>ります、御病人の前<sup>で</sup>で高<sup>たけ</sup>え声じやア云<sup>い</sup>えねえが、殊<sup>こと</sup>に寄<sup>よ</sup>つたら其<sup>そん</sup>様な事を機<sup>しお</sup>会<sup>かい</sup>にして他<sup>ほか</sup>へ見<sup>み</sup>せてくんろという事ではないかと思<sup>た</sup>うと、誠<sup>まこと</sup>に氣が痛<sup>いた</sup>みやすな」

千「私も実は左様思っているの、それに就いて少しお前に相談があるからお母さまへ 共々とも／＼に願っておくれな、私が其のお薬を買うだけの手当を拵こしらえますよ」

丹「拵えるたつて無いものは仕様があんめえ」

千「そこが工夫だから、兎も角お母さまの処へ一緒に」

と枕元の屏風を開け、

千「もしお母様つかさま、二番が出来ましたから召上れ、少し詰つて濃くなりましたから上り悪にくうございましたよう、お忌いやならば半分召上れ、あとの滓おりのあります所は私が戴かきますから」

母「此の娘こは詰こらんことを云う、達者な者がお薬を服たべて何うする、私は幾あら浴びるほどお薬を飲んでも効験きくめがないからいけないよ、



私はもう死ぬと諦らめましたから、お前そんな其様に薬を勧めておくれでない」

千「あら、またお母さまはあんな事ばかり云つていらつしやるんですもの、御病気は時節が来ないと癒りませんから、私は一生懸命に神さまへお願がんが掛けをして居ますが、あなた世間には七十八十まで生きます者は幾許いくらも有りますよ」

母「いゝえ私は若い時分に苦勞をしたものだからの、それが矢張やっぱり身体あたに中つているのだよ」

千「あの爺やが参りましたよ」

母「おゝ丹治、此方こっちへ入つておくれ」

丹「はい御免なせえまし、何うでござえますな、些ちつとは胸はれの晴る

事もござえますかね、お嬢さんも心配しておいでなさいますから、  
能くお考えなせえまし、併しま旧が旧で、あゝいう生活をなすつ  
た方が、急に此様な片田舎へ来て、私のような者を頼みに思つて、  
親一人子一人で僅かな畠を持つて仕つけもしねえ内職をしたりし  
て斯うやつて入らつしやるだから、あゝ詰らねえと昔を思つて氣  
を落とすところから御病氣になつたものと考えますが、私だつて貧  
乏だから金づくではお力になれませんが、以前はあなたの処へ奉  
公した家来だアから、何うかして御病氣の癒るように蔭ながら信  
心をぶつて居りますが、お嬢さまの心配は一通りでないから、我  
慢してお薬を上んなせえまし」

母「有難う、お前の眞実は忘れません、他にも以前勧めたものは

幾許いくらもあるが、お前のように未々すえまで力になつてくれる人は少ない、私は死んでも厭いといはないけれども、まだ十九つゞや廿歳はたちの千代あとを後に残して死ぬのはのう……」

丹「あなた、然そう死ぬ死ぬと云わねえが宜うござえます、幾ら死ぬたつて死なれません、寿命が尽きねえば死ぬるもんではねえから、どうも然そう意地の悪い事ばかり考えちやア困りますなア、死ぬまでも薬を」

千「何だよう、死ぬまでもなんて、そんな挨拶があるものか」

丹「はい御免なせえまし、それじゃア、死なねえまでもお上んなせえ」

千「お前もう心配しておくれでない」

丹「はい」

千「お母さま、あの先刻桑田くわださまが仰しやいました人参のことね」

母「はい聞いたよ」

千「あれをあなた召上れな、人参という物は、なに其様そんなに飲みにくいものでは有りませんと、少し甘味がありました」

母「だつてお前、私は飲みたくつても、一箱が大金という其様そんななお薬が何うして戴かれますものか」

千「その薬をあなた召上るお気なら、私わたくしが才覚して上げますが……」

母「才覚たつてお前、家うちには売る物も何も有りやアしないもの」

千「私わたくしをあわたくしのう隣村の東山作左衛門という郷土の処へ、道具係の

奉公に遣つて下さいましな」

其の時母は皺枯れたる眉にいとゞ皺を寄せまして、

母「お前、飛んでもない事をいう、丹治お前も聞いて知ってるだろうが、作左衛門の家では道具係うちの奉公人を探していて、大層給金を呉れる、其の代りに何とかたからものいう宝物の皿を毀すと指を切ると云う話を聞いたが、本当かの」

丹「えゝ、それは本当でござえます、旧もとの公方くぼうさまから戴いた物で、家にも身にも換えられねえと云つて大事いえにしている宝だから、毀した者は指を切れという先祖さまの遺言状かきつけが伝わつて居るので、指を切られた奴が四五人あります」

母「おゝ怖いこと、其様そんな怖い処へ此この娘を奉公に遣やられますか

ね、とても遣られませんかよ、何うして怖おっかない、皿を毀した者の指を切るといふ御遺言ごゆいごんだか何だか知らんけれども、其の皿を毀したものゝ指を切るなんぞとは聞いても慄ぞつとするようだ、何うして、人の指を切ると云うような其様な非道の心では、平常ふだんも矢張り酷つばひどかろう、其様な処へ奉公がさせられますものか、瘦せても枯れても遠山龜右衛門むすめの娘じゃアないか、幾許零落おちぶれても、私は死んでも生おいさき先の長いお前が大切に私は最もう定命じようみょうより生延びている身体だから、私の病気が癒つたつて、お前が不具かたわになつて何うしましょう、詰らぬ事を云い出しましたよ、苦し紛れに悪い思案、何うでも私は遣りませんよ」

千「然そうではありましようけれども、なに気を附けたら其様な事

は有りますまい、私も宜くわたくし神信心かみしんをして丁寧しんに取扱えば、毀れるような事はありますまいと存じますからねお母さま、私は一生懸命になりまして奉公を仕し遂おせ、其の中うちあなたの御病気が御全快になれば、私が帰つて来て、御一緒に内職でもいたせば誠まことに好都合こうごうじゃアございせんか、何卒どうぞ遣つて下さいまし、ねえお母さま、あなた私の身をおいと厭いといなすつて、あなたに万もしも一の事でも有りますと、矢張やっぱり私が仕し様やまがないじゃア有りませんか」

母「はい、有難うだけれども遣れませんが、亡なくなつたお父とつさんのお位牌いはいに対して、私の病を癒いそうやすためにお前まへを其その様な恐おそろしい処ところへ奉公ほうこうに遣つて済いむものじゃアない、のう丹治たんぢ」

丹「へえ、あந்தの云う事も道理でござえます、これは遣れませ

んな」

千「だけでも爺や、お母さんの御病気の癒らないのを見すく知  
つて、安閑として居られる訳のものではないから、私は奉公に往  
きたとえ仮令粗相で皿を一枚毀した処が、小指一本切られたつて命にさ  
わるわけではなし、お母さまの御病気が癒った方がよ宜いわけじゃ  
アないか」

丹「うん、これは然そうだ、然う仰しやると無理じやアない、棄置  
けば死ぬと云うものを、あなたが何う考えても打うつ棄ちやつて置かれ  
ねえが、成程是れは奉公するも宜うござえましよう」

母「お前馬鹿な事ばかり云っている、私が此の娘こを其様な処へ遣  
られるか遣られないか考えて見なよ、指を切られたら肝心な内職



が出来ないじゃアないか、此の困る中で猶々なほく困ります、遣られ  
ませんよ」

丹「成程是れはやれませんな、何う考えても」

千「あらまア、あんな事を云つて、何方どっちへも同じような挨拶をし  
ては困るよ」

丹「へえ、是れは何方とも云えない、困つたねえ：じゃア斯うし  
ましよう、私わしがの媪ばあを何卒どうかお頼ん申します、私がお嬢さまの代り  
に奉公に参めえりまして、私わしが其の給金を取りますから、お薬を買つ  
て下せえまし」

千「女でなければいけない、男は暴々あらくしくて度々たびく毀すから女  
に限るといふ事は知れて居るじゃアないか」

丹「然<sup>そ</sup>うだね、男じやア毀すかも知れねえ、私等<sup>わしら</sup>は何うも荒つぽくつて、井鉢<sup>うちこわ</sup>を打毀したり、厚ぼつてえ摺鉢<sup>すりばち</sup>を落して破<sup>わ</sup>つた事もあるから、困つたものだアね」

千「お母さん、何卒<sup>どうぞ</sup>やつて下さいまし」

と幾<sup>いくたび</sup>度も繰返しての頼み、段々母を説附<sup>ときつ</sup>けまして丹治も道<sup>もつと</sup>理<sup>も</sup>に思つたから、

丹「そんならばお遣んなすつた方が宜かろう」

と云われて、一旦母も拒みましたが、娘は肯<sup>き</sup>かず、殊<sup>こと</sup>に丹治も俱<sup>とも</sup>々々<sup>／＼</sup>勧めますので、仕方がないと往生をしました。幸い他<sup>た</sup>に

手蔓<sup>てづる</sup>が有つたから、縁を求めて彼の東山作左衛門方へ奉公の約束をいたし、下男<sup>うけにん</sup>の丹治が受人<sup>うけにん</sup>になりました、お千代は先方へ三

ケ年三十兩の給金で住込む事になりましたのは五月の事で、母は心配でございませうが、致し方がないので、泣く／＼別れて、さて奉公に参つて見ると、器量は佳し、起居動作物の云いよう、一点も非の打ち処がないから、至極作左衛門の氣に入られました。

## 三

作左衛門はお千代の様子を見まして、是れならば手篤く道具を取扱つてくれるだろう、誠に落着いて、宜い、大切な物を扱うに真実で粗相がないから宜いと、大層作左衛門は目をかけて使いました。此の作左衛門の忤は長助と申して三十一歳になり、一

旦女房を貰いましたが、三年前ぜんに少し仔細有つて離別いたし、独ひとりみ  
身みで居ります所が、お千代は何うも器量きりやうが好よいので心しん底そこから  
惚とれぬきまして真実まことにやれこれ優とりしく取做なして、

長「あれを買つてお遣やんなさい、見苦しいから彼あの着物を取換えて、  
帯を買つてやったら宜よろからう」

などと勧めますと、作左衛門も一ひとり人子りつこの申すことですから、

其の通りにして、お千代くと親子共に可愛がられお千代は誠に  
仕合せで丁度七月のことで、暑い盛りに本ほん山さん寺じという寺てらに説法  
が有ありまして、親父おやじが聴ききに参まりました後あとで、奥おくの離りれた八畳の  
座敷ざしきへ酒さけ肴さかなを取り寄せ、親父の留守を幸さいい、鬼おにの居いないうち  
に洗濯せんたくで、長助ちやうすけが、

長「千代やく、千代」

と呼びますから、

千「はい若殿様、お呼び遊ばしましたか」

長「一寸ちよつと来い、く、今一いっぱい盃はいやろうと云うんだ、お父とつさんの

お帰りのない中うちに、今日はちとお帰りが遅くなるだろう、事に寄

ると年寄の喜きはちろう八郎の処へ廻ると仰しやったが村の年寄の処へ寄

れば話が長くなって、お帰りも遅くなるう、ま酌をして呉れ」

千「はい、お酌を致します」

長「手襷たすきを脱とんなさい、忙がしかろうが、何もお前は台だいどこ所を働

かんでも、一切道具ばかり取扱おつて居れば宜よいんだ」

千「あの大殿様がお留守でございますから宜いお道具は出しませ

んで、粗末と申しては済みませんが、皆此の様な物で宜しゅうございますか」

長「酌は美女たほ、食物くいものは器で、宜い器でないと肴が旨く喰えんが、酌はお前のような美しい顔を見ながら飲むと酒が旨いなア」

千「御冗談ばかり御意遊ばします」

長「酔わんと極りが悪いから酔うよ」

千「お酔い遊ばせ、ですが余り召上ると毒でございますよ」

長「まだ飲みもせん内から毒などと云っちゃア困るが、実にお前は堅いねえ」

千「はい、武骨者でいけません」

長「いや、お父さんがお前を感心しているよ、親孝行で、何を見

ても聞いても母の事ばかり云つて居るつて、併しかしお前のお母の病  
 気も追々全快になると云う事で宜よいの」

千「はい、御こな当た家さまのお蔭で人参を飲みましたせいか、段々宜  
 しくなりました、此の程病とこ褥を離れましたと丹治がまいつての話  
 でございますが、母が申しますに、其方そちのような行ゆきとぎ届きません  
 者を置いて下さるのみならず、お目を掛けて下さいまして、誠に  
 有難いことで、種いろく々戴き物をしたから宜しく申上げてくれと申  
 しました」

長「感心だな、お前は出が宜いいと云うが………千代く千代」  
 千「はい」

長「どうも何なんだね、お前は十九かえ」

千「はい」

長「ま一盃酌いで呉んな」

千「お酌を致しましょう」

長「半分残してはいかな、何うだ一盃飲まんか」

千「いえ、私は些とも飲めません、少し我慢して戴きますと、顔が青くなつて身体が震えます」

長「その震える処がちよいと宜しいて、私は酔いますよ、お前は色が白いばかりでなく、頬の辺眼の縁がぼうと紅いのう」

千「はい、少し逆上せて居りますから」

長「いや逆上ではない、平常から其の紅い処が何とも言われん」

千「御冗談ばかり……」



長「冗談じゃアない、全くだ、私は三年前に家内を離別したて、  
 どうも心掛けの善くない女で、面倒だから離縁をして見ると、独  
 身とりみで何かと不自由でならんが、お前は誠に氣立が宜しいのう」  
 千「いゝえ、誠に届きませんでいけません」

長「此の間私わしが……あの……お前笑つちやア困るが、少しばかり私  
 が斯う五いっくだり行ほどの手紙を、……認しためて、そつとお前の袂たもとへ入  
 れて置いたのを披ひらいて読んでくれたかね」

千「左様でございましたか、一向存じませんで」

長助は少し失望の体ていで、

長「左様でございますかなど、落着き払つていては困る、親に  
 知れては成らん、知つての通り親父は極堅ごくけんいので、あの手紙を書

くにも隠れて漸ようよう二行にぎようぐらい書くと、親父に呼ばれるから、筆を下に置いて又一行ひとくだり書き、終しまいの一行は庭の植うえ込みの中で書きました、蚊に喰われて弱ったね」

## 四

千「それはまあお気の毒さま」

長「なに全くだよ、親父に知れちやア大変だから、窃そつとお前の袂へ入れたが、見たろう〜」

千「いゝ私わたくしは気が付きませんでございました、何だか私の袂ほごに反古のようなものが入って居ましたが、私は何だか分りませんで、

丸めて何処かへ棄てましたよ」

長「棄てちやア困りますね、他人が見るといけませんな」

千「そんな事とは存じませんもの、貴方はお手紙で御用を仰付けられましたのでございますか」

長「仰付けられるなんて馬鹿に堅いね、だがね、千代く」

千「何でございます」

長「実はね私はお前に話をして、嫁に貰いたいと思うが何うだろ  
う」

千「御冗談ばかり御意遊ばします、私の母は他に子と申すがありませんから、他家へ嫁にまいる身の上ではございません、貴方は衆人に殿様と云われる立派なお身の上でお在遊ばすのに、私の

ようなはしたない者を貴方此様な不釣合で、釣合わぬは不縁の元ではございませんか、お家のおために成りません」

長「なに家の為めになつてもならんでも不釣合だつて、私は妻を定むるのに身分の隔てはない事で、唯お前の心掛けを看抜いて、此の人ならばと斯う思つたから、実はお前に心のたけを山々書いて贈つたのである、然も私は丹誠して千代尽しの文で書いて贈つたんだよ」

千「何でございますか私は存じませんもの」

長「存じませんで、私の丹誠したのを見て呉れなくっちゃア困りますなア、どうかお前の母に会つて、母諸共引取つても宜しいや」  
千「私の母は冥加至極有難いと申しましようけれども、貴方のお

父とつさま様が御得心ごちんの有る氣遣きづかいはありますまい、私わたしのようなはしたない者を御当家ごちんさまの嫁よめに遊あそばす氣遣きづかいはございませぬもの」

長ちやう「いえ、お前まへが全く然そう云いう心こころならば、私わたしは親父おやに話わをするよ、お前まへは大變親父おやの氣きに入いつてるよ、どうも沈おちつき着つきがあつて、器量きりやうと云いい、物ものの云いいよう、何なにや角かや彼あれは別べつだと云いつて居ゐるよ」

千ち「なに、其その様な事ことを仰おほしやるものですか」

長ちやう「なに全く然そう云いつてるよ、宜よいじやアないか、ね千代ちよく千代ちよ」

と雀すずめが出でたよううで、無理無態むりむたいにお千代ちよの手てを我膝わがひざへグツと引寄ひきよせ、脇わきの下したへ手てを掛かけよううとすると、振ふ払い。

千ち「何をなさいます、其その様な事ことを遊あそばしますと、私わたしは最たたくしうお酌しやくに

まいりませんよ」

長「酔った紛れに、少しは酒の席では冗談を云いながら飲まんと面白うないから、一寸ちよつとやったんだが、どうもお前は堅いね、千代く」

千「はい最うお酌を致しますまいと思います、最うお止し遊ばせ、お毒でございますよ」

長「千代く」

千「また始まりました」

長「親さえ得心ならば何も仔細はあるまい、何うだ」

千「そうではありますが、まア若殿様、私のわたくし思いますには、夫婦の縁と云うものはたとえ仮令親が得心でも、当人同志が得心でない事は

夫婦に成れまいかと思ひます」

長「それは然うさ、だがお前さえ得心なら宜よいが、いやなら否いやと云えば、私わしも諦めが附こうじやアないか」

千「私わたくしのような者を、私の口から何う斯うとは申されませんものを、余り恐入りました」

其の時お千代は身を背そむけまして、

千「何とも申上げられませんが、余り恐入りました」

長「恐入らんでも宜しいさ、お母ふくろさえ得心なら、母諸共此方こつちへ引取つて宜しい、もし窮屈いやで否いやならば、聊いさゝか田地でんじでも買ひ、新しん家やを建つて、お母おんなに下婢おんなの一人も附けるくらいの手当をして遣ろうじやアないか。此の家うちは皆私わしのもので、相続人の私だから何うにも

なるから、お前おうさえ応と云えば、お母に話をして安樂にして遣ろ  
うじやアないか、若もしお母は堅いから遠山の苗字を継ぐ者がない  
とでもいうなら、夫婦養子をしたつて相続人は出来るから、お前  
が此方こつちへ来ても仔細ないじやアないか」

千「それは誠に結構な事で」

長「結構なれば然そうしてくれ」

千「お嬉しゆうは存じますが」

長「さ、早くお父さまの帰らん内に応うんと云いな、酔った紛れにい  
う訳じやアない、真実の事だよ」

千「私わたくしは貴方に対して申上げられませんものを、御主人さまへ勿  
体なくつて……」



長「何も勿体ない事は有りませんから早く云いなさいよ」

千「恐入ります」

長「其そん様なはずに羞かしがらんでも宜しいよ」

千「貴方わたくし私わたしのような卑しい者の側へお寄り遊ばしちやアいけません、私が困ります、そうして酒臭くつて」

長「ね千代く千代」

千「それじゃア貴方、本当に私わたくしが思う心の丈たけを云いましょうか」

長「聞きましょう」

千「それじゃア申しますが、屹度きつと、…身分も顧りみず大それた奴だと御立腹では困ります」

長「腹などは立たんからお云いよ、大それたとは思いません、小しょう

それた位ぐらゐに思います、云つて下さい」

千「本当に貴方御立腹はございませんか」

長「立腹は致しません」

千「それなれば本当に申上げますが、わたくし私は貴方が忌いやなので……」

長「なに忌だ」

千「はい、わたくし私はどうも貴方が忌でございませぬ、御主人さまを忌だ

などと云つては済みませぬけれども、真底私は貴方が忌でござい

ませぬ、只御主人さままでいらつしやれば有難い若殿さまと思つて居

りますが、てがみ艶書をお贈り遊ばしたり、此の間から私にちよい／＼

御冗談を仰しやることもあつて、それから何うも私は貴方が忌に

なりました、どうも女房に成ろうという者の方で否いやでは逆とても添わ

れるものじゃアございませんから、素もとより無い御縁とお諦め遊ばして、他わきから立派なお嫁をお迎えなすつた方が宜しゆうございましょう、相当の御縁組でないと御相続の為になりませんから、確しかとお断り申しますよ」

長「誠にどうも……至極道理……」

と少しの間は額へ筋が出て、顔がんしよく色いろが變つて、唇をブル／＼

震わしながら、暫く長助が考えまして、

長「千代、至極道理もつともだ、最う千代／＼と続けては呼ばんよ、一ひ

言ことだよ、成程何うもえらい、賢女だ、成程どうも親孝心、誠に

正しいものだ、心掛けと云い器量と云い、余り氣に入つたから、

つい迷いを起して此こん様な事を云い掛けて、誠に羞はじ入つた、再び合

す顔はないけれども、真に思ったから云ったんだよ、併しお前に  
然う云われたから諦めますよ確と断念しましたが、おまえ此のこ  
とを世間へ云つてくれちやア困りますよ、私は親父に何様な目に  
遇うか知れない、堅い氣象の人だから」

千「私は世間へ申す処じゃア有りませんが、あなたの方で」

長「私は決して云わんよ、云やア自ら恥辱を流布するんだから云  
いませんが、あゝ……誠に愧入った、此の通り汗が出ます、面目  
次第もない、何卒堪忍して下さい」

千「恐入ります、是れから前々通り主家来、矢張千代くと重  
ねてお呼び遊ばしまして、お目をお掛け遊ばしまして……」  
長「そう云う事を云うだけに私は誠に困りますなア」

千「誠に恐入ります、大旦那さまのお帰り遊ばしません内に、お酒の道具を隠しましょうか」

長「あゝ仕舞っておくれ〜」

千「はい」

とそれ／＼道具を片付けましたが、是れから長助が憤おこつてお千代につれなく当るかと思ひました処、情つれなくも当りませんで、尚更宜く致しまして、彼あの衣類は汚い、九月の節句も近いから、これを拵あえて遣るが宜いと、手当が宜いので、お千代もあゝお諦めになつたか、有難い事だ、あんな事さえないと結構な旦那様であると一生懸命に奉公を致しますから、作左衛門の気にも入られて居りました。月日流るゝが如くで、いよ〜九月の節句と成

りました。桑野美作守の重役を七里先から呼ばんければなりません、九の字の付く客を二十九十八人招待を致し、重陽を祝する吉例で、作左衛門は彼の野菊白菊の皿を自慢で出して観せます。美作守の御勘定奉行九津見吉左衛門を初め九里平馬、戸村九くえもん、秋元九兵衛其の他御城下に加賀から九谷焼を開店した九谷正助、菊橋九郎左衛門、年寄役村方で九の字の附いた人を合せて十八人集めまして、結構な御馳走を致し、善い道具ばかり出して、頻りに自慢を致します事で、実に名器ばかりゆえ、客は頻りに誉めます。此の日道具係の千代は一生懸命に、何卒無事に役を仕遂せましますようにと神仏に祈誓を致して、皿の毀れんように気を付けましたから、麁相もなく、彼の皿だけは下つてまいり

ます。自分は蔵前の六畳の座敷に居つて、其処そこに膳棚道具棚が  
 ありますから、口くちわけ分わけをして一生懸命に油汗を流して、心を用い働  
 いて、無事に其の日のお客も済んで、翌日になりますと、作左衛  
 門が、

作「千代」

千「はい」

作「昨日きのうは大きに御苦労であつた、無事にお客も済んだから、今  
 日は道具あたらを検めなければならん」

千「はい、お番附のございますだけは大概片付けました」

作「うむ、皿は一応検めて仕舞わにやならん、何かと御苦労で、

嚙さぞ骨ほねが折れたろう」

千わたくし「私は一生懸命でございました」

作「然そうであつたらう、此の通り三重の箱になつてるが、是は中々得難い物だよ、何処どこへ往つたつて見られん、女で何も分るまいが、見て置くが宜よい」

千「はい、誠に結構なお道具を拝見して有難い事です」

作「一応検めて見よう」

と眼鏡をかけて段々改めて、

作「あゝ、先まず無事で安心を致した、是れは八年前ぜんに是れだけ毀したのを金粉ふんづくろ繕つくろいにして斯うやつてある、併しかし残余あとは瑕物きずものにしてはならんから、どうかちゃんと存ぞんして置きたい、是れだけ破わつた奴があつて、不憫にはあつたが、何うも許し難いから私わしは中



指を切ろうと思つたが、それも不憫だから皆みんな無名指くすりゆびを切つた」  
 千「怖い事でございます、私わたくしは此のお道具を扱いますとはらく  
 致します」

作「是れは無い皿だよ、野菊と云つて野菊の色のように紫がゝつ  
 てる処で此の名が有るのじゃ、種々いろく先祖からの書附もあるが、  
 先ず無事で私わしも安心した」

と正直な堅い人ゆえ、検めて道具棚へ載せて置きました。する  
 と長助が座敷の掛物を片付けて、道具棚の方へ廻つて参まいりまし  
 た。

長「お父とつさま」

作「残らず仕舞つたか」

長「お軸物は皆仕舞いました」

作「客は皆道具を誉めたらう」

長「大層誉めました、此の位の名幅めいふくを所持している者は、此の国にやア領主にも有るまいとの評判で、お客振りも甚ひどく宜しゅうございました」

作「皆良い道具が見たいから来るんだ、只呼んだつて来るものか、権式けんしきぶ振つて、併し土産も至極宜かつたな」

長「はい、お父様とっさま、あの皿を今一応お検めを願います、野菊と白菊とりようようとも両様共お検めを願います」

作「彼は先刻あれ さつき検めました」

長「お検めでございましたが、少し訝おかしい事が有りますと云う

は棚の脇に 蒟蒻糊こんにやくのりが板の上に溶いて有つて、粘つていますから、何だか案じられます、他の品でありませぬから、今一応検めましようかね、秋あき、お前たちは其方そちらへ往いきなさい、金造きんぞう、裏手の方を宜く掃除して置き、喜八きはち、此方こちらへ参らんようにして、最う大概蔵へ仕舞つたか、千代や」

千「はいくはい」

長「先刻さつきお父さんとつがお検めになつたそうだが、彼の皿あを此処こゝへ持つて来い」

千「はい、先刻さつきお検めになりました」

長「検めたが、一寸ちよつと気になるから今一応私わしが検めると云うは、祝いは千年だが、お父さまのない後のちは家の重宝じゆうほうで、此の品は私が

守護する大事な宝物たからものだから、私も一応検めます」

千「大旦那さまがお検めになりました、宜しい、少しも仔細ないと御意遊ばしましたのに、貴方何う云う事でお検めになります」

長「先程お父さまがお検めになつても、私は私わしで検めなければ気が済まん」

千「何う云う事で」

長「何う云う事なんてとぼけるな、千代てまえ汝は皿を割つたの」

五

お千代は呆れて急に言葉も出ませんでした、

千「何うもまあ思い掛けない事を仰しやいます私は割りました覚えはございません、ちやんと一々お検めになりました、後は柔かい布巾で拭きまして、一々彼の通り包みまして、大殿様へ御覽に入れました」

長「いや耄けるなそんなら如何の理由で棚に糊付板が有るのだ」

千「あれはお箱の蓋の棧が剥れましたから、米搗の權六殿へ

頼みまして、急拵えに竹篋を削って打つてくれましたの」

長「耄けるな、其様なことを云つたつて役には立たん、巧く瞞か

そうたつて、然うはいかんど、此方は確と存じておる、これ千代、

其の方が怪しいと認めが附いて居ればこそ検めなければならん

だ早く箱を持って来い」

と云われてお千代はハツとばかりに驚きましたが、何ゆえ長助が斯こん様なことを云うのか分りませんでした。彼の通あり検めたのを毀したと云うのは変だなと考えて、よう／＼思い当りましたのは、先せん達だつて愛想あいそ尽づかしを云った恨みが、今になって出て来たのではないか、何事も無ければ宜よいがと怖こわ々々にお千代が野菊白菊の入った箱を長助の眼の前へ差出しますと、作左衛門が最前検めて置いた皿の毀れる氣遣かいはない、忤こは何を云うのかと存じて居りますと、長助は顔色かおいろを変えて、

長「これ千代、それ道具棚にある糊付板を此こ処ゝへ持って来い……  
さ何う云う訳で此これ板を道具棚へ置いた」

千「はい、只今申上げます通り、あのお道具の箱の棧とが剥とれまし

たから、打附けて貰おうと存じますと、米搗の權六が己おれが附けて遣ろうと申して附けてくれましたので」

長「いゝや言訳をしたつて役には立たん、其の箱の紐をサツサと解け」

千「そうお急ぎなさいますと、また粗相をして毀すといけませんもの」

長「汝おのれが毀して置きながら、又其そん様なこと申す其の手はくわぬぞ、私わしが箱から出す、さ此これ処へ出せ」

千「あなた、お静かになすつて下さいまし、暴あらく々しく遊ばして毀れますと矢張やっぱり私わたくしの所為せいになります」

作「これこれ長助、手暴くせんが宜よい、腹立紛てまれに汝まが毀すとい

かんから、矢張り千代お前検めるが宜い」

千「はいく」

と是れから野菊の箱の紐を解いて蓋を取り、一枚く皿を出し  
まして長助の眼の前へ列ならべまして。

千「御覽遊ばせ、私が先刻わたくし さつき検めました通りきず瑾は有りやアしません」

長「黙れ、毀した事は先刻さつき私が能く見て置いたぞ、お父さま、迂う  
潤りしてはいけません、此者これは中々油断がなりません、さ、早く

致せ」

千「其様そんなに仰しやっただつて、慌てゝ不調法が有るといけません、  
他のお道具と違ひまして、此品これが一枚毀れますと私わたくしは不具かたわになり  
ますから」



長「不具になつたつて、受人うけにんを入れて奉公に来たんじやアないか、さ早く致せ」

千「早くは出来ません」

と申して検めに掛りましたが、急がれる程な尚おおじく致しますが、一生懸命に心の内に神かみほとけ仏を念じて粗相のないようにと元のように皿を箱に入れてしまい、是れから白菊の方の紐を解いて、漸々だん／＼三重箱迄開け、布帛きれを開いて皿を一枚ずつ取出し、検めては布帛に包み、ちゃんと脇へ丁寧ていねいに置き、

千「是で八枚で、九枚で十枚十一枚十二枚十三枚十四枚十五枚十六枚」

と漸々勘定をして十九枚と来ると、二十枚目がポカリと毀れて

居たから恟びつくり致しました。

千「おや……お皿が毀れて居ります」

長「それ見ろ、お父とつさま様御覽遊ばせ、此の通り未まだ粘りが有りま  
す此の糊くっつで附着くっつけて瞞ごまかそうとは太い奴では有りませんか」

千「いえ、先程大殿様がお検めになりました時には、決して毀れ  
ては居りません」

長「何う仕たつて此の通り毀れて居るじゃアないか」

千「先刻さつきは何とも無くつて、今毀れて居るのは何う云う訳でしよ  
う」

作「成程斯う云う事があるから油断は出来ない、これ千代わ毀りよ  
うも有ろうのに、ちよつと欠いたとか、罅ひびが入った位ならば、是

れ迄の精勤の廉を以て免すまいものでもないが、斯う大きく毀れては何うも免し難い、これ、何は居らんか、何や、何やでは分らん、おゝそれく辨藏、手前はな、千代の受人の丹治という者の処へ直すぐに行つてくれ、余り世間へぱつと知れん内に行つてくれ、千代が皿を毀したから証文通りに行うから、念のために届けると云つて、早く行つて来い」

辨「へえ」

と辨藏は飛んで行つて、此のことを氣の毒そうに話をすると、丹治は驚きまして、母の処へ駈込んでまいり。

丹「御新造さまア……」

母「おや丹治か、先刻は誠に御苦勞、お蔭で余程宜いよ」

丹「はつく、誠にはや何ともどうも飛んだ訳になりました」

母「ド、何うしたの」

丹「へえ、お嬢様が皿ア割ったそうで」

母「え……丹治皿を彼あれが……」

丹「へえ、只今彼家あちらの奉公人が参りまして、お千代どんが皿ア割

つただ、汝われ受人だから何なんぼ証文通りでも断りなしにやア扱えね

えから、ちよつくら届けるから、立合えうが宜いと云つて来ました、

私わしが考えますに、先方むこうはあゝ云う奴だから、詫わびたつても肯きくま

いと思つて、私が急いでお知らせ申しに来やしたが、お嬢さまが

彼家あそこへ住込む時、虫が知らせましたよ、門の所まで私送り出して

来たアから、貴方あんた皿ア割つちやアいけないよと云つたら、お嬢様

が余程薄いもんだそうだし、よつほど原土で拵えたもんだから割れないとは云えないから、それを云つてくれちやア困るよと仰しいましたが、何とまア情ねえ事になりましたな、なさけどうか詫をして見ようかと思ひます」

母「それだから私が云わない事じゃアない、彼の娘を不具者にしちやア濟まないから、私も一緒に連れてつておくれ」

丹「連れて行けたつて、あんた歩けますまい」

母「歩けない事もあるまい、一生懸命になつて行きますよ、何卒どうぞお願いだから私の手を曳いて連れてつておくれ」

丹「だがはア、是れから一里もある処で、なか／＼病揚句やみあげくで歩けるもんじやアねえ」

母「私は余り恠びつくりしたんで腰わしが脱ぬけましたよ」

丹「これはまあ仕様がねえ、私わしまで腰わしが脱ぬけそうだが、あんな腰が脱ぬけちやア駄目だ」

母「何卒どうぞお願いだから……一通り彼あれの心こゝろ術だてを話し、孝行のためこちらに御ご当家ちやうさまへ奉公ほうこうに来たと、次第しだいを話して、何処どこまでも私わたしがお詫わがをして指ゆびを切きられるのを遁のがれるようにしますから、丹治誠ぢやうじにお氣いきの毒どくだが、負おつておくれな」

丹「負おつてくれたつて、ちよつくら四五丁ぢやうぢやうの処ところなれば負おつて行つても宜えいが……よし／＼宜ようござえます、私わしも一生懸命いっせいけんめいだ」

と其そのの頃ころの事ことで人力車くわくろまはなし、また駕籠かごに乗のるような身みの上うへでもないから、丹治ぢやうぢが負おつてせつせと参まりました。此方こちらは最前さいぜんから

待ちに待つて居ります。

作「早速庭へ通せ」

という。百姓などが殿様御前などと敬い奉りますから、益々増長して縁近き所へ座布団を敷き、其の上に座して、刀掛に大小をかけ、凛々りんらしい様子で居ります。両人は庭へ引出され。

丹「へえ御免なせえまし、私わしは千代の受人丹治で、母も詫びことにまいりました」

作「うむ、其の方は千代の受人丹治と申すか」

丹「へえ、私わしは年来勤めました家来で、店たなうけ請致して居おる者でござえます」

作「うん、其それ処へ参つたのは」

母「母でございます」

と涙を拭きながら、

「娘が飛んだ不調法を致しまして御立腹の段は重々御尤さま  
でござりますが、何卒老体どうぞの私へお免じ下さいまして、御勘弁を  
願ひとう存じます」

作「いや、それはいかん、これはその先祖伝来の物で、添書そえがきも  
有つて先祖の遺言が此の皿に附おいて居るから、何うも致し方がな  
い、切りたくはないけれども御遺言には換かえられんから、止むを  
得ず指を切る、指を切つたつて命さわに障る訳もない、中程から切る  
のだから、何も不自由の事もなからう」

母「はい、でございますけれども、此の千代は親のために御当家



様へ御奉公にまいりましたので、と申すは、わたくし私が長なが煩わづらいで、  
 人参の入った薬を飲めば癒ると医者に申されましたが、長々の浪  
 人ゆえ貧に迫つて、中々人参などを買う手当はございませんのを、  
これ娘が案じまして、御当家のお道具係を勤めさえすれば三年で三拾  
 両下さるとは莫大の事ゆえ、それを戴わたしいて私を助けたいと申すの  
 を、わたくし私も止めましたけれども、これ此娘が強たつてと申して御当家さま  
 へ参りましたが、親一人子一人、他に頼りのないものでございま  
 す、今これ此娘を不具に致しましては、あす明日から内職を致すことが出  
 来ませんから、何卒御勘弁遊ばして、わたくし私はこれ此娘より他に力と思  
 うものがございせんから」

長「黙れ、幾回左様な事を云つたつて役に立たん、其のため

に前々奉公住みの折に証文を取り、三年に三拾金という給金を与えてある、斯の如く大金を出すのも当家の道具が大切だからだ、それを承知で証文へ判を押しして奉公に來たのじやアないか、それに粗相でゞもある事か、先祖より遺言状の添えてある大切の宝を打碎き、糊付にして毀さん振をして、箱の中に入れて置く心底が何うも憎いから、指を切るのが否なれば頬辺を切つて遣る」

母「何卒御勘弁を……」

と泣声にて、

「顔へ疵が付きましては婿取前の一人娘で、何う致す事も出来ません」

長「指を切つては内職が出来んと云うから面つらを切ろうと云うんだ、疵が出来たつて、後あとで膏藥を貼れば癒る、指より顔の方を切つてやろう」

と長助が小刀ちいさがたなをすらりと引抜いた時に、驚いて丹治が前へ

膝すざ行り出まして、

丹「何卒どうぞお待ちなすつて下せえまし」

長「何だ、退のけく」

丹「お前さまは飛んだお方だアよ」

長「何が飛んだ人だ」

丹「成程証文は致しやしたただけれども、人の頬ほ辺ぺたを切るてえなア無ねえ事です」

長「手前は何のために受人に成つて、印形いんぎようを捺ついた」

丹「印形だつて、是程やかまに厳ましかアねえと思つたから、印形を捺き

やした、ほんの掟おきてで、一寸ちよつと小指へ疵きずを付けるぐれえだアと思ひ

やしたが、指ぶつきを打切ぶられると此のちの後内職のちが出来ません、と云つて

無闇むぐみに頬ほ辺へなんて、どう云うはずみで鼻はなでも落おしたらそれこそ大

変へんだ、情なさけねえ事で、嬢ぢやうさんの代わりに私わしを切きつておくんなせえ」

長「いや手前てまへを切きる約束やくそくの証文しやうもんではない、白痴たわけた事を云うな、何

のための受人うじんだ」

丹「受人うじんだから私わしが切きられようというのだ」

長「黙もくれ、証文しやうもんの表うらに本人ほんじんに代わつて指ゆびを切きられようと云う文面ぶんめんは

ないぞ、さ顔を切きつて遣やる」

と丹治と母を突きつけ、既に庭下駄を穿はいて下おりにかゝるを、

母は是れを遮さへぎり止めようと致すを、千代が、

千「お母様つかさま、是れには種々いろく理由わけがありますんで、私わたくしが少し云

い過ぎた事が有りまして、斯こう云う事に成りまして済みませんが、

お諦め遊ばして下さいまし、さア指の方は内職に障さつて母を養う

事が出来ませんから顔の方を……」

長「うん、顔つらの方か、此方こつちの所望のぞみだ」

作「これく長助、顔を切るのは止せ」

長「なに宜しい」

作「それはいかん、それじゃア御先祖の御遺言状そむに背そむく、矢張指

を切れく、不憫ふびんにも思おもうが是れも致いたし方がない、従来切きりきた来きたつ

たものを今更仕方がない、併し長助、成なるたけ丈指を短かく切つてやれ」

長「さ切つてやるから、己おれの傍そばへ来て手を出せ」

千「はい何うぞ……」

母「いえわたくし私を切つて下さいまし、私は死んでも宜いい年でござります」

丹「旦那、私わしの指を五本切つて負けておくんなせえ」

長「控えろ」

と今千代の腕を取つて既に指を切りにかゝる所へ出て来た男は、土間で米を搗ついていましたした權六という、身たけの丈五尺五六寸もあつて、鼻の大きい、胸から脛すねへかけて熊毛くまげを生はやし、眼の大きな眉毛

の濃い、髯ひげの生えている大の男で、つかくくと出て来ました。

## 六

此の時權六は、作左衛門の前へ進み出まして、

權「はい少々御免下さいまし、權六申上げます」

長「なんだ權六」

權「へえ、実は此の皿を割りました者は私わしだね」

長「なに手前が割った……左様な白痴たわけたことを云わんで控えて居れ」

權「いや控えては居いられやせん、よく考えて見れば見る程、あゝ

悪い事をしたと私わしやア思いやした」

長「何を然そう思つた」

權「大殿様皿を割つたのは此の權六でがす」

作「え……其の方は何うして割つた」

權「へえ誠に不調法で」

作「不調法だつて、其の方は台所にばかり居て、夜は其の方の部屋へまいつて寝るのみで、蔵前の道具係の所などへ参る身の上でない其の方が何うして割つた」

權「先刻箱さつきの棧とが剥とれたから、どうか繕つくろつてくんろてえから、糊

をもつて私わしが繕つくろろうと思つて、皿の傍へ参めえつたのが事の始まりで

ござえます」



千「權六さん、お前さんが割ったなどと……」

權「えーい黙っている」

丹「誠に有難うござえます、私は此の千代さんの家の年来の家来筋で、丹治と云う者で、成程是れは此の人が割ったかも知れねえ、割りそうな顔付だ」

權「黙つて居なせえ、お前らの知つた事じゃアない、えゝ殿様、

誠に羞かしい事だが、此の千代が御当家へ奉公に参つた其の時から、私は千代に惚れたの惚れねえのと云うのじゃアねえ、寝ても

覺めても眼の前へちらつきやして、片時も忘れる暇もねえ、併し

奥を働く女で、台所へは滅多に出て来る事はありませんが、時々

台所へ出て来る時に千代の顔を見て、あゝ何うかしてと思ひ、幾

い

くたび  
度か文を贈つちやア口説いたただアね

長「黙れ、其の方がどうも其の姿や顔色にも愧じず、千代に惚れたなどと怪しからん奴だなア、乃で手前が割つたというも本当には出来んわ、馬鹿々々しい」

権「それは貴方、色恋の道は顔や姿のものじゃアねえ、年が違うのも、自分の醜い器量も忘れてしまつて、お千代へばかり念をかけて、眠ることも出来ず、毎晩夢にまで見るような訳で、是程私の方が思つて文を附けても、丸めて棄てられちやア口惜しかろうじゃアござえやんせんか」

長「なんだ……お父さまの前を愧じもせんて怪しからん事をいう奴だ」

と口には云えど、是れは長助がお千代を口説いても弾かれ、文を贈つても返事を遣さんで恥かしめられたのが口惜しいから、自分皿を毀したんであります。罪なきお千代に罪を負わせ、然うして他へ嫁に往く邪魔に成るようにお千代の顔へ疵を附けようとする悪策わるだくみを權六が其の通りの事を申しましたから、長助は變に思ひまして、

長「手前は全く千代に惚れたか」

權「え、惚れましたが、云う事を肯かねえから可愛さ余つて憎さが百倍、嫁に行く邪魔をして呉れようと、九月のお節句にはお道具が出るから、其の時皿を打毀うちこわして指を切り不具かたわにして生涯亭主の持てねえようにして遣やらうと、貴方あなたの前だが考えを起しまし

て、皿さらあらた 検めの時に箱の棧とが剥れたてえから、糊でもって貼つけてやる振をして、下の皿を一枚いちめえ毀して置いたから、先まず恋の意趣晴しをして嬉しいと思ひ、実は土間で腕を組んで悦んでいると、此の母かさまが飛んで来て、私わしが病苦を助けてえと危あぶねえ奉公と知りながら参つて、人参とかを飲まそうと親のために指を切られるのも覚悟で奉公に來たアから、代りに私わしを殺して下せえ、切つて下せえと子を思ふくろうお母の心も、親を助けてえというお千代の孝行も、聴けば聴く程、あゝ一わし実に私わしア汚ねえ根性であつた、何故こん此様な意地の悪い心になつたかと考えたアだね、私が是れを考えなければいぬちくしよう 狗畜生も同様でござえますよ、私わしア人間だアから考えました、はア一わり悪い事をしたと思ひやしたから、正直ぶんまに打明けて旦那

さまに話しして、私が千代に代って切られた方が宜いと覚悟をして此処へ出やした、さアお切んなせえ、首でも何でもお切んなせえまし」

長「妙な奴だなア、手前それは全くか」

權「へえ、私が毀しやした」

作「成程長助、此者が毀したかも知れん、懺悔をして自分から切られようという以上は、然うせんければ宜しくない、併し久しく奉公して居るから、平生の氣象も宜く知れて居るが、口もきかず、誠に面白い奴だと思つていた、殊に私に向つて時々異見がましい口答えをする事もあり、正直者だと思つて目を掛けていたが、他人の三層倍も働き、力も五人力とか、身体相応の大力を持

つていて役にも立つと思つていたに、顔形には愧はじず千代に恋慕を仕掛るとは何の事だ、うん権六」

権「はい誠に面目次第もない訳で、何卒私どうぞわしを………」

千「権六さんく、お前私へ恋慕を仕掛けた事もないのに、私を助けようと思つて然そう云つてお呉れのは嬉しいけれども、それじやア私が済みません」

権「えゝい、其様そんなことを云つたつて、今日誠実こんにもまことを照す世界に神さまが有るだから、まア私わしが言うことを聞け」

長「いや、お父さまは何と仰しやるか知らんが、どうも此の長助には未まだ腑に落ちない事がある権六手前てまえが毀したと云う何たしかぞ確たしかな証拠しやうこが有るか」

權「えゝ、証拠が有りやすから、其の証拠を御覧に入れやしよう」  
長「ふむ、見よう」

權「へえ只今……」

と云いながら、立って土間より五斗張ごとばりの白を持ってまいり、庭の飛石の上にならずしーりと両手で軽々と下おろしたは、恐ろしい力の男であります。

權「これが証拠でござえます」

と白菊の皿の入った箱を白の中へ入れました。

長「何を致すく」

權「なに造作ぞうさくア有りません」

と何時いつの間まに持って来たか、杵きねの大きいを出して振上げ、さ

くーりつと力に任せて箱諸共に打碎いたから、皿が微塵に碎けた時には、東山作左衛門は驚きました。其処そこに居りました者は皆顔を見合せ、呆気あっけに取られて物をも云わず、

一同「むむう……」

作左衛門は憤おこったの憤らないのでは有りません。突然いきなり刀掛に

掛けて置いた大刀を提ひっさげて顔の色を変え、

作「不埒至極の奴だ、汝おのれ気が違ったか、飛んだ奴だ、一枚毀して

さえ指一本切るというに、二十枚箱諸共に打碎うちくだくとは……よし、

さ己が首を斬るから覚悟をしろ」

と詰寄せました。権六は少しも憶する気色けしきもなく、縁側へどつ

さり腰をかけ、襟を広げて首を差し伸べ、



權「さ斬つて下せえ、だが一通り申上げねばなんねえ事があるから、是れだけ聞いて下せえ、逃げも隠れもしねえ、私わしやア米搗の權六でござえます、貴方あんた斬るのは造作もねえが、一言いちごん云つて死にてえことがある」

と申しました。

七

さて權六という米搗こめつきが、東山家に数代伝わるころの重じゅうほ宝う白菊の皿を箱ぐるみ搗つき摧くだきながら、自若じじやくとして居りますから、作左衛門は太ひどく憤おこりまして、顔の色は変り、唇をぶるく

顫ふるわし、疝癰かんぺきが高ぶつて物も云われん様子で、

作「これ權六、どうも怪けしからん奴だて手前は何か氣でも違つたか、狂氣致したに相違ない、此皿これは一枚こわ毀してさえも指一本を切るという大切な品を、二拾枚いちじ一時に碎くというのは実に怪しからん奴だ、さ何ういう心得か、御先祖の御遺言状おかきものに対しても棄置かれん、只今此の処に於いて其の方の首を斬るから左様心得ろ、權六を取とりにが遁がすな」

と烈はげしき下知いたしかたに致いたしかた方なく、家の下僕おとこたちがばら／＼と

權六の傍へ来て見ますと、權六は少しも驚く氣色もなく、縁側へどつさりと腰を掛けまして作左衛門の顔をしげ／＼と見て居りましたが、

權「旦那さま、貴方は実にお氣の毒さまでござえます」

作「なに……いよく、此奴は狂氣致して居る、手前氣の毒ということ存じて居るか、此の皿を二十枚砕くと云うのは……予て御先祖よりの御遺言状の事も少しは聞いているじゃアないか、仮令氣違でも此の儘には棄置かんぞ」

權「はい、私ア氣も違いません、素より貴方さまに斬られて死ぬ

覚悟で、承知して大事のお皿を悉皆打毀しました、もし旦那さま、

私ア生国は忍の行田の在で生れた者でありやすが、小さい時分

に両親が亡なつてしまひ、知る人に連れられて此の美作国

へ参つて、何処と云つて身も定まりやしねえで居ましたが、縁有

つて五年前当家へ奉公に参りまして、長え間お世話になり、高え

給金も戴きました、お側にいて見れば、誠にどうも旦那さまは衆人にも目をかけ行届きも能く、どうも結構な旦那さまだが、此の二十枚の皿が此処の家の害だ、いや腹アお立ちなさるな、私は逃匿れはしねえ、素より斬られる覚悟でした事だが、旦那さま、あんた此の皿はまア何で出来たものと思召します、私ア土塊で出来たものと考えます、それを粗相で毀したからとつて、此の大事な人間の指い切るの、足い切るのと云つて人を不具にするような御遺言状を遺したという御先祖さまが、如何にも馬鹿氣た訳だ」

作「黙れ、先祖の事を悪口申し、尚更棄置かんぞ」  
 権「いや棄置かねえでも構わねえ、素より斬られる覚悟だから、

併し私しかわしだつて斬られめえと思えば、あんた方親子二人が、りで斬ると云つても、指でも附けさせるもんじやアねえ、大でつけい膂ちから力が有るが、御こち当ら家へ米搗奉公をしていて、私ア何も知んねえ在郷ざいごもんで、何の弁別わきめえも有りやしねえが、村の神主さまのお説教を聴きに行くゆと、人は天あめが下の靈みたま物もので、万物の長だ、是れより尊とうといものは無い、有情物いきあるものの主宰つかさだてえから、先まず禁裏さまが出来ても、お政治をなさる公方様が出来ても、此の美作一国の御領主さまが出来やしても、勝山さまでも津山さまでも、皆人間が御政ごせい治いじを執とるのかと私は考かんえまげす、皿が政治を執とつたてえ話は昔から聞いた事がねえ、何どんんな器物ものでも人間が発明はつめいして拵こしらえたものだ、人間が有ればこそ沼ア埋めたり山ア掘崩したり、河へ橋を架けた

り、田地田畠を開墾するから、五※も実つて、貴方様も私も命い継いで、物を喰つて生きていられるだア、其の大事な人間が、粗相で皿ア毀したからつて、指を切つて不具にするという御先祖様の御遺言を守るだから、私ア貴方を悪くは思わねえ、物堅え人だが余り堅過ぎるだ、馬鹿つ正直というのだ、これ腹ア立つちやアいけねえ、どうせ一遍腹ア立つてしまつて、然うして私を打斬るが宜うがすが、それを貴方が守つてるから、此の村ばかりじやアない、近郷の者までが貴方の事を何と云う、あゝ東山は偉い豪士だが、家に伝わる大事な宝物だつて、それを打毀せば指い切るの足い切るのつて、人を不具にする非道な事をする、東山てえ奴は悪人だと人に謂わせるように、御先祖さま

が遺言状を遺したアだね、然うじゃアごぜえませんか、乃でどう  
 も私も奉公して居るから、人に主人の事を悪党だ非道だと謂われ、  
 ば余あんまり快くもごぜえません、御先祖さまの遺言が有るから、貴  
 方はそれを守り抜いて、証文を取つて奉公させると、中には又  
 喰うや喰わずで仕様がねえ、なに指ぐらい打切られたつて、高え  
 給金を取つて命つない継つなごう、なに指い切つたつてはア命には障らね  
 えからつて、得心して奉公に来て、つい粗相で皿ぶちこわを打毀すと、親  
 から貰つた大切でえじな身体に疵かたわうつけて、不具かたわになるものが有るでが  
 す、実にはア情なさけねえ訳だね、それも皆みんなな此の皿とがの科とがで、此の皿とがの  
 在ある中うちは末代までも止まねえ、此の皿とがさえ無ければ宜いいと私は考  
 えまして、疾とつから心しんべえ配べしていました、所で聞けば、お千代どん

は齡としもいかないのに母かさまが塩梅あんばいが悪いわりいって、良い薬を飲まねば癒ならない、どうか母さまを助けたい、仮令たとえ指を切られるまでも奉公して人參を買うだけの手当をしてえと、親子相談の上で証文を貼り、奉公に来た者を今指い切られる事になつて、誠にはア可愛そうにと思つたから、私が此の二十枚の皿を悉皆みんな打砕ぶつくだいたが、二十人に代つて私が一人死ねば、余あとの二十人は助かる、それに斯うやつて大切でえじな皿だつて打砕ぶちくだけば原もとの土塊つちっころだ、金だつて銀だつて只形かんげを拵たえて、此の世の中の手形同様とりやに取遣とりをするだけの物と考かんえます、金だつて銀だつて人間程たいせつ大切な物でなえから、お上かみでも人間を殺せば又其の人を殺す、それでも尚なお助けてえと思つた心があるので、何とやらさまの御法事と名を付けて助かる事もあ



りやす、首を打斬ぶつきる奴でも遠島で済ませると云うのも、詰り人間  
 が大切だから、お上でも然うして下さるのだ、それを無闇ぶちぎに打斬  
 るとは情ねえ話だ、あなたの御先祖さまは東山將軍義政さまから  
 戴いた、東山という大切な御苗字だという事は米を搗きながら蔭  
 で聞いて知って居ますが、あの東山は非道だ、土塊つちっころと人間と同じ  
 様に心得ていると云われたら、其の東山義政のお名前までも汚けがす  
 ような事になって、貴方あんたは済むめえかと考かんげえますが、何卒どうかして此  
 の風儀を止めさせてえと思つても、他に工夫が無ねえから、寧いわざわいろ禍  
 の根を絶とうと打碎ぶつくだいてしまっただ、私一人死んで二十人助かれ  
 ば本望でがす、私も若わえ時分には、心得違こころえちげえもエラ有りました  
 が、漸ようやく此の頃ほんざんじ本山寺さまへ行つて、お説法を聞いて、此の頃

少し心も直つて参めえりましたから、大勢の人に代つて私一人死にます、どうか其の代り、お千代さんを助けてやつて下せえまし、親孝行な此こん様な人は国の宝で土塊つちっころとは違います、さ私を斬つて下せえまし、親戚みより兄弟親も何も無ねえ身の上だから、別に心を置く事もありません、さ、斬つておくんなせえまし」

と沓くつぬぎいし脱石へピッタリ腰をかけ、領えりの毛を搔上げて合掌を組み、首を差伸ばしまして、口の中で、

權「南無阿弥陀仏くくくくくくくくくくくくくくくくくく」

斯かる殊しゆしよう勝しょうの体ていを見て、作左衛門は始めて夢の覚めたように、茫然として暫く考え、

作「いや權六許してくれ、どうも実に面目次第もない、能よく毀し

てくれた、あゝ辱かたじけない、真実な者じゃ、なアる程左様……これは先祖が斯様な事を書遺かきのこしておいたので、私の祖父わしじいより親父も守り、幾代となく守り来きたつていて、中指を切られた者が既に幾いくたり人有りつたか知れん、誠に何とも、ハヤ面目次第もない、權六其そ方が無ければ末世末代東山の家名は素もとより、其方の云う通り慈じしよ昭院殿ういん（東山義政公の法名）を汚す不忠不義になる所であつた、あゝ誠に辱かたじけない、許してくれ、權六此の通り……作左衛門両手を突いて詫るぞ、宜くマ思い切つて命を棄て、私の家名を汚さんよ、衆人ひとに代つて斬られようという其の志、実に此の上もない感服のことだ、あゝ恥入つた、実に我が先祖は白痴たわけだ、斯様な事を書遺すというは、許せ〜」

と縁先へ両手をついて詫びますと、傍に聞いて居りました悴の長助が、何と思つたかポロリと膝へ涙を落して、權六の傍へ這つてまいりました。

長「權六、あゝ一誠に面目次第もない、中々其方そなたを殺すどころじやアない、私が生きては居いられん、お千代親子の者へ対しても面目ないから、私が死にます」

と慌あわて、短刀を引き抜き自害をしようとするから、權六が驚いて止めました。

權六は長助の顔を視つめまして、

權「貴方あんた何をなさりやアす」

長「いや面目ないが、実は此の皿を毀したのはお父様とっさま、此の長助でございます」

作「なに……」

長「唯今此の權六に当付けられ、実に其の時は赤面致しましたけれども、誰たれも他に知る氣遣いは有るまいと思いましたが、実はお千代に恋慕を云いかけたを恥はじしめられた恋の意趣いし、お千代の顔に疵を付け、他たへ縁付えんづきの出来ぬようにと存じまして、家の宝を自分で毀し、其の罪を千代に塗付けようとした浅ましい心の迷い、それを權六が存じて居りながら、罪を自分の身に引受けて衆しゅうじ

人んを助けようという心底、実に感心致しました、それに引換えわたくし私の悪心面目もない事でございますから……」

作「暫く待て〜」

權「若旦那様、まゝお待ちなせえまし、貴方あんたが然そう仰しやつて下されば、權六は今首ぶつきを打斬られても名僧智識の引導より有難く受けます、何卒どうぞお願ねげえでござえますから私わしが首を……」

作「どう致して、手前は世の中の宝だ、まゝ此処これへ昇あがつてくれ」

と是れから無理やりに權六の手を把とつて、泥だらけの足のまゝ畳の上へ上げ、段々お千代母子おやこにも詫びまして、百両こころ（此の時ころ）だから大したもので）取り出して台に載せ、

作「何卒どうぞ此この事を世間へ言わんよう、内聞どうぞにしてくれ」

と云うと、母子とも堅いから金を受けません、それでは困ると云うと。

權「そんなら私が志しが有りますから、此のお金をお貰い申し、昨年から引続きまして、当御領地の勝山、津山、東山村の辺は一体に不作でござえまして、百姓も大分困っている様子でございませから、何うか施しを出したいものですが、それに此の皿のために指を切られたり、中には死んだ者も有りましたようから、どうか本山寺様で施餓鬼を致し、乞食に施行を出したいと思ひます」  
作「あゝ、それは感心な事で、入費の処は私も出そう」

と云うので、本山寺という寺へまいりまして、和尚さまに掛合  
いますと、方丈も大きに感心して、そんならばと、是れから大施

餓鬼せがきを挙げました。多分に施行も出しました事でございまして、  
 彼のか砕けた皿を後世のためにと云うので、皿山の麓方ねがたのこんもり  
 とした小高き処へ埋めてうず、標ししるを建て、これを小皿山こざらやまと名づけ  
 ました。此の皿山は人皇にんのう九十六代後醍醐天皇ごだいごてんのう、北條九代の執  
 権つけん相摸守高時さがみのかみたかときの為に、元弘げんこう二年三月隠岐国おきのくにへてき遣せら  
 れ給いし時、美作の国久米の皿山にて御製ぎよせいがありました「聞き  
 置きし久米の皿山越えゆかん道とはさらにおもひやはせむ」と太  
 平記に出てありますと、講談師の放牛舎ほうぎゆうしゃ桃林とうりんに聞きました  
 が、さて此の事が追々世間に知れて来ますと、他人ひとが尊とうとく思い、  
 尾に尾を付けて云い囃はやします。時に明和めいわの元年、勝山の御城主に  
 お成りなさいました桑野美作守さまのお城普請しろづしんがございまして、



人足を雇い、お作事奉行が出張り、本山寺へ入らつしやいまして  
 方々御見分が有ります。其の頃はお武家を大切にしましたもので、名  
 主年寄始め役人を鄭重ていちょうに待遇もてなし、御馳走などが沢山出ました。  
 話の序ついでに彼の皿塚の事をお聞きになりました、山川やまかわひろし廣という  
 方が感心なされて、

山「妙な奴もあるものだ、其の權六という者は何処どこに居る」

とお尋ねになりますと、名主が、

名「へえ、それは当時遠山と申す浪人の娘のお千代と云う者と夫  
 婦になりました、遠山の家名を相続して居ります、至つて醜男ぶおとこ  
 で、熊のような、毛だらけな男でございしますが、女房はそれはノ  
 美しくしい女で、權六は命の親なり、且其かつの気性に惚れて夫婦に

なりたいと美人から望まれ、即ち東山作左衛門が媒妁人で夫婦になり親子睦ましく暮して居ります、東山のつい地面内へ少しばかりの家を貰つて住んで、農業を致し、親子の者が東山のお蔭で今日では豊かに暮して居ります」

と聞いて廣は猶々床しく思い、会いたいと申すのを名主が、名「いえ中々一國もので、少しも人に媚る念がありませんから、今日直と申す訳には参りません」

というので、是非なく山川も一度お帰りになりました、美作守さまの御前に於て、自分が実地を踐んで、何処に何ういう事があり、此処に斯ういう事があつたとお物語を致し、彼の權六の事に及びますと、美作守さま殊の外御感心遊ばされて、左様な者な

ら一大事のお役に立とうから召抱えて宜かろうとの御意がござりましたので、山川は早速作左衛門へ係かゝつてまいりました。其の頃は御領主さまのお抱えと云つては有難がつたもので、作左衛門は直すぐに權六を呼びに遣つかわし、

作「是れは權六、来たかえ、さア此方こつちへ入はいんな」

權「はい、ちよつくら上あがるんだが、誠に御無沙汰ありました、私わしも何かと忙しくつてね」

作「此の間中お母つかさんが塩梅が悪いと云つたが、最もう快よいかね」  
 權「はい、此の時候の悪いので弱え者は駄目いだね、あなた何時いつもお達者で結構でがす」

作「扱さて權六、まア此の上もない悦えび事がある」

權「はい、私もお蔭で喰うにやア困らず、彼様心懸の宜い女を鼻にして、おまけに旦那様のお媒妁で本当は彼のお千代も忌だつたろうが、仕方なしに私の鼻に成っているだアね」

作「なに否どころではない、貴様の心底を看抜いての上だから、人は容貌より唯心じゃ、何しろ命を助けてくれた恩人だから、否応なしで」

權「併し夫婦に成つて見れば、仕方なしにでも私を大事にしますよ」

作「今此処で惚けんでも宜い兎に角夫婦仲が好ければ、それ程結構な事はない、時に權六段々善い事が重なるなア」

權「然うでございます」

作「知っているかい」

權「はい、あのくらい運の宜い男はねえてね、民右衛門さまでござ

いませう、無尽が当って直に村の年寄役を言付かつたつて」

作「いや左様じゃアない、お前だ」

權「え」

作「お前が倅しあわせだと云うは糸野美作守様からお抱えになります

よ、お召しだとよ」

權「へえ有難うござえます」

作「なにを」

權「まだ腹も空きませんが」

作「なに」

權「お飯めしを喰くわせるといふので」

作「アハ……お飯ではない、お召抱えだよ」

權「え、然そうでござえますか、藁の中へ包んで脊負しよつて歩くのかえ」

作「なにを云うんだ、勝山の御城主二万三千石の糸野美作守さまが小皿山の一件を御重役方から聞いて、貴様を是非召抱えると云うのだが、人足頭いが入るといふので、貴様なら地理も能よく弁わきまま居つて適當で有ろうといふのだ、初めは棒を持って見廻つて歩くのだが、江戸屋敷の侍じゃアいかないといふので、お召抱えになつると、今から直すに貴様は侍に成るんだよ」

權「は、そりやア真ま平びら御免だよ」

作「真平御免という訳にはいかん、是非」

權「是非だつて侍には成れませんよ、第一侍は字い知んねえば出来ますめえ、また劍術も知らなくつちやア出来ず、それに私やア馬が誠に嫌きえだ、稀たまには随分小荷駄こにだに乗のつかつて、草くたびれ臥休ふしめに一里や二里乗る事もあるが、それでせえ嫌えだ、矢張やっぱり自分で歩く方が宜いいだ、其の上いろはのいの字も書くことを知らねえ者さむれえが侍侍に成つても無駄だ」

作「それは皆先方むこうさまへ申し上げてある、山川廣様というお方に貴様の身の上を話して、学問もいたしません、劍術も心得ませんが、臂力ちからは有ります、人が綽名あだなして立たて白うすの權六と申し、両手で白を持って片附けますから、あれで力は知れますと云つてあるが、

其の山川廣と云うのはえらい方だ」

權「へえ、白酒屋かえ」

作「山川廣（口の中にて）山川白酒と間違えているな」

權「へえー其の方が得心で、糸野さまの御家来になるだね」

作「うん、下役したやくのお方だが、今度の事に就いては其の上役うわやくお

作事奉行が来て居ますよ、有難い事だのう」

權「有難い事は有難いけども、私わしやア無むい一いっ国こくな人間で、忌いやに

お侍さむれえへ上手つかを遣つたり、窮屈つわにおつ坐つわる事が出来ねえから、矢やっぱ

張りあぐら胡坐こざをかいて草臥くたびれ、ば寝転ねころび、腹はらが空へつたら胡坐こざを搔かいて、

塩引しよけの鮭しやけで茶漬ちやくを搔か込むのが旨うめえからね」

作「其様そんなことを云つては困る、是非承知して貰もらいたい」



權「兎に角母にも相談しましょう、お千代は否いやと云いますめえが、お母ふくろも有りますし、年い老とつているから、貴方あんたから安心いの往いくよ  
うに話さんじゃア承知をしません、だから其の前に私わしがお役人さ  
まにも会つて、是れだけの者だがそれで勤まる訳なら勤めますと  
お前さまも立会つて証人に成つて、三人鼎みつ足がなわで緩ゆつくら話しを  
した上にしましょう」

作「鼎足という事はありませんよ、宜しい、それではお母ふくろには私わし  
が話そうから、直すぐに呼んだら宜かろう」

とこれから母を呼んで段々話をしましたが、もと遠山龜右衛門  
という立派な侍の御新造に娘ゆえ大いに悦び、

母「お屋敷へお抱えに成るとは此の上ない結構な事で」

と早速承知を致しましたので、是れからお抱えに成りましたが、  
 私は頓わたくしと心得ませんが、棒を持って見廻つて歩き、大した高では  
 ございませぬ、十石三人扶持、御作事方賄まかない役と申し、少祿では  
 有りますが、段々それから昇進致す事になるので、僅わずかでも先まず高た  
 持かもちに成りました事で、毎日棒を持って歩きますが、一体勉強家  
 でございまして、少しも役目に怠りはございませぬ、誠に宜く働  
 き、人足へも手当をして、骨の折れる仕事は自分が手伝いを致し  
 て居りました。此の事が御重役 秋月喜一郎あきづつききいちろうというお方の耳に入  
 りどうか權六を江戸屋敷へ差出して、江戸詰の者に見せて、惰なまけ  
 者の見手本みてほんにしたいと窃ひそかに心配をいたして居ります。

## 九

桑野美作守さまの御舎弟に 紋之丞前次 もののじょうちかつぐ さまと云うが有りま  
 して、 当時 そのころ 美作守さまは御病身ゆえ御控えに成つて入らつしや  
 るが、 前殿 ぜんさまの御秘蔵の若様でありましたから、御次男でも中  
 々羽振りは宜うございませが、誠に武張つたお方ゆえ武芸に達し  
 ておられますので、馬を能く乗るとか、槍を能く使うとか云う者  
 があると、近付けてお側を放しません。所で件 くだんの權六の事がお耳  
 に入りますと、其の者を予が傍 そばへ置きたいとの御意ゆえ、お附の  
 衆から老臣へ申し立て、上 かみへも言 ごんじょう上になると、苦しゆうない  
 との御沙汰 ごさたで、至急に江戸詰を仰付けられたから、母もお千代も

悦びましたが、悦ぼんのは遠山權六でございます。窮屈いやで厭いやだと思いましたが、致し方がありませんから、江戸谷中やなかさんさき三崎しもやの下屋敷しきへ引移ります。只今は開けまして綺麗に成りましたが、其の頃梅を大層植込み、梅の御殿と申して新らしく御普請が出来て、誠にお立派な事でございます。前次様は權六が江戸着という事をお聞きになると、至急に会いたいから早々呼出せという御沙汰でございます。是れから物頭ものがしらがまいりまして、段々したばなし下話をいたし、權六は着慣れもいたさん麻上下あさがみしもを着て、紋附とは云え木綿もので、差さし付ずに任せお次まで罷まかり出いで控えて居ります。外とのむ村惣江らそうえと申すお附頭つきがしらお納戸役なんどやく川添富彌かわぞいとみや、山田金吾やまだきんごという者、其の外御小姓ほかが二人居ります。侍さむらい分ぶんの子で十三四歳ぐ

らいのが附いて居り、殿様はきつと固く鬢びんを引詰めて、芝居でいたす忠臣蔵の若狭之助わかさのすけのように眼つるが吊し上つて居るのは、疔癩かんしやくもち持もちというのではありません。髪を引詰めて結うからであります、誠に活潑な良い御気象の御舎弟さまで、

小姓「えゝ、お召によりまして權六お次まで控えさせました」

前「あゝ富彌、早速其の者を見たいな、ずっと連れてまいって予に見せてくれ、余程勇義なもので、重宝じゆうほうの皿いちじを一時に打碎いた気象は実に英雄じゃ、感服いたした早々此処これへ」

富「えゝ、田舎育ちの武骨者ゆえ、何とお言葉をおかけ遊ばしても御挨拶を申し上ぐる術すべも心得ません無作法者で、実に手前どもが会いましても、はつと思ひます事ばかりで、何分にも御前ごぜん体

へ罷まかり出いでましたら却かえつて御無礼の義を……」

前「いや苦しゆうない、無礼が有つても宜しい、早く会いたいから呼んでくれ、無礼講じや、呼べく」

富「はつくく權六く」

權「はい」

富「お召しだ」

權「はい、おめしと云うのは御飯おまんまを喰うのではない、呼ばれる

事だと此の頃覚ええました」

富「其そん様な事を云つてはいかん、極御疳癖ごくが強く入いらつしやる、其

の代り御意に入いれば仕合せだよ」

權「詰り気に入られるようにと思つてやる仕事は出来ましねえ」

富「其様なことを云つてはいかん、何でも物事を慇懃いんぎんに云わんければなりませんよ」

權「え、彼処あそこで隠元いんげん小角豆さくぎを喰うとえ」

富「丁寧に云わんければならんと云うのだ」

權「そりやア出来ねえ、此の儘にやらして下せえ」

富「此の儘、困りましたなア、上かみ下の肩しもが曲つてるから此方こつちへ

寄せたら宜かろう」

權「之れを寄せると又此方へ寄るだ、懐へこれを納いれると格好が宜いと、お千代が云いましたが、何にも入へいつては居ません」

富「此の頃は別して手へ毛が生えたようだな」

權「なに先せんから斯ういう手で、毛が一杯いっぺいだね、足から胸から、

私わしの胸の毛を見たら殿様ア魂たまげ消るだろう」

富「其様な大きな声をするな、是から縁側すくづたいにまいるのだ、間違えてはいかんよ、彼あれ処へ出ると直すぐにお目見え仰せ付けられるが、不ぶしつけ躰たに殿様のお顔を見ちやアなりませんよ」

權「えゝ」

富「いやさ、お顔を見てはなりませんよ、頭かしらを擡あげると仰しやつた時に始めて首を上げて、殿様のお顔をしげ／＼見るのだが、粗ぞんざいにしてはなりませんよ」

權「そんならば私わしを呼ばねえば宜いいんだ」

富「さ、私わしの尻くツツに尾付ついてまいるのだよ曲まつたら構かまわずに……然そう其方そつちをきよとく見て居ちやアいかん、あ痛い、何だつて私の



尻へ咬付くいついたんだ」

權「だってお前めえさん尻へ咬付くつつけつて」

富「困りますなア」

と小声にて小言を云いながら御前へ出ました。富彌は慇懃に両手を突き、一礼して、

富「へい、お召に依つて權六罷出まかりでました、お目見え仰付おんれいけられ、

權六身に取りまして此の上なく大悦たいえつかまつ仕り、有難く御礼おんれい申上げ奉ります」

殿「うん權六、もつと進めく」

と云いながら見ると、肩巾の広い、筋骨たくまの逞しい、色が真黒まつくろで、毛むくじやらでございませす。実に鍾馗しょうきさまか北海道のアイ

ノ人<sup>じん</sup>が出たような様子で有ります。前次公は見たばかりで大層御意に入りました。

殿「どうも骨格が違うの、是は妙だ、權六其の方は国で衆人の為<sup>たからもの</sup>めに宝物を打碎いた事を予も聞いておるが、感服だのう、頭<sup>かしら</sup>を擡<sup>あ</sup>げよ、面<sup>おもて</sup>を上げよ、これ權六、權六、如何<sup>いかゞ</sup>致した、何も申さん、返答をせんのだ」

富「はっ、これ御挨拶をく」

權「えゝ」

富「御挨拶だよ、お言葉を下<sup>くだ</sup>し置かれたから御挨拶を」

權「御挨拶だつて……」

と只きよとくして物が云えません。

殿「もつと前へ進め、遠くでは話が分らん、ずっと前へ来て、大声で遠慮なく云え、頭かしらを上げよ」

権「上げろたつて顔を見ちやアなんねえと云うから誠に困りますなア、何うか此の儘で前の方へ押出して貰もれいてえ」

小姓「此の儘押出せと、尋常なみの人間より大きいから一人の手際てぎわにはいかん、貴方あなたそら尻を押し給え」

権「さアもつと力を入れて押出すのだ」

殿「これく何を致す其様そんなことをせんでも宜しいよ、つかく歩いてまいれ、成程立派じやなア」

権「えゝ、まだ頭かしらを上げる事はなんねえか」

殿「富彌、余り厳やかましく云わんが宜いい、窮屈きよくにさせると却かえつて話

が出来ん、成程立派じゃなア、昔の勇士のようであるな」

權「へえー、なんですと」

殿「古いにしえの英雄加藤清正とも黒田長政とも云うべき人物じゃ、どうも顔が違うのう」

權「へえーどうも誠に違います」

富「誠に違いますなんて、自分の事を其様な事を云うもんじゃア有りませんよ」

殿「これ〜小声で然そうぐず〜云わんが宜よい」

權「衆人みんなが然さう云います、へえかゝあ鼻は誠に器量いが美いって」

富「これ〜家内の事はお尋ねがないから云わんでも宜よい」

權「だって話ついでの序だから云いました」

富「話の序という事がありますか」

殿「其の方生国は何処じや、美作ではないという事を聞いたが、左様か」

権「何でござえます」

殿「生国」

権「はてな……何ですか、あの勝山在にいる医者の木村章國でがすか」

殿「左様ではない、生れは何処だと申すのじや」

権「生れは忍の行田でござえますが、少せえ時分に両親が死んだね、それから仕様がなくなつて親戚頼りも無えもんでがすが、懇意な者が引張つてくれべえと、引張られて美作国へ参りまして、

十八年の長え間なが大くお世話さまでござえました」

富「これくお世話さまなんぞと云う事は有りませんよ」

權「だつてお世話になつたからよ」

殿「これ富彌控えて居れ、一々咎めるといかん、うん成程、武州の者で、長らく国許くにもとへ参つて居つたか、其の方は余程力は勝れて居るおそうじやの」

權「私わしが力は何の位ほどあるか自分でも分りませんよ、何なら相撲でも取りましようか」

富「これく上かみと相撲を取るなんて」

權「だつて、力が分らんと云うからさ」

殿「誠にうい奴だ、予が近くにいてくれ、予が側近くへ置け」

富「いえ、それは余り何で、此の通りの我雑ものを」

殿「苦しゆうない、誠に正直潔白で宜い、予が傍に居れ」

權「それは御免を願いてえもんで、私には出来ませんよ、へえ、

此様な窮屈な思いをするのは御免だと初手から断つたら、白酒屋さんの、えゝ……」

殿「山川廣か」

權「あの人よ」

富「あの人よと云う事が有るかえ、上のお言葉に背く事は出来ませんよ」

權「背くたって居られませんよ」

富「居られんという事は有りません、御無礼至極じゃアないか」

權「御無礼至極だつて居いられませんかよ」

殿「マ富彌控えて居れ、然う一々小言を申すな、面白い奴じゃ」

權「私わしア素米もとこめつき搗なんで何も知んねえ人間で、劍術も知んねえし、学

問もした事アねえから何うにも斯うにもお侍さむれえには成れねえ人間さ、

力はえらく有りますが、何でも召抱えてえと御領主さまが云うのを、無理に断れば親や女房に難儀が掛るといふから、そりやア困るが、これくで宜くばと己おらがいうと、それで宜いいから来いと云われ、それから参めえつただねお前めえさま…」

富彌ははらくくいたしまして、

富「お前めえさまといふことは有りませんよ、御前ごぜんさま様と云いなさい」

權「なに御前と云うのだえ、飯だの御膳だのつて何方どっちでも宜いいじ



やアないか」

殿「これ富彌止めるな、宜しいよ、お前まえも御前も同じことじやのう」

權「然うかね、其様な事は存じませんよ、それから私わしが此処こゝの家け来れになつただね、して見るとお前まえ様、私のためには大事でえじなお人で、私は家来けらいでござえますから、永らく居る内にはお互たがえに心こゝろ安立やすだてが出て来るだ」

富「これく心安立やすだてという事がありますか」

權「するとお大でえみよう名は誠に疳癩持だ」

富「これく」

殿「富彌又口を出すか、宜しい、控えよ、実に大名は疳癩持だ、

疔癩がある、それから」

權「殿様に我儘おこが起れば、私わしにも疔癩が有りますから、主人に間違つた事を云われると、ついそれから仲が悪くなります、時々逢うようにすれば、人は何となく懐かしいもので、あゝ会いたかつた、宜く来たと互たえに大騒ぎをやるが、毎めえ日傍にちにいると、私が殿様の疔癩をうん／＼と気に障らねえように聞いていると、私が胡麻摺になり、誑へつれえ諛えになつていけねえ、此処にいる人に偶たまには些ちつとぐれえ腹の立つ事があつても、主人だから仕方がねえと諦め、御前さまとか御飯おまんまとかいいう事になつて、実の所をいふと然ういふ人は横着者だね」

殿「成程左様じゃ、至極左様じゃ、正道せいどう潔白な事じゃ、これ權

六、以来予に悪いことが有つたら其の方諫言かんげんを致せ、是が君臣の道じや、宜しい、許すから居てくれ」

權「尊公あんたがそれせえ御承知なら居ります」

殿「早速の承知で過分に思う、併し其の方は劍道も心得ず、文字もんじも知らんで、予の側に居おるのは、何を以て君臣の道を立て奉公を致す心得じや」

權「他に心得はねえが、夜夜よるよなか中乱暴な奴が入へるとなりませんから、私わしやア寝ずに御殿の周囲まわりを内証ないしょうで見廻めぐっていますよ、もし狐でも出れば打殺ぶつころそうと思つてます」

殿「うん、じやが戦国の世になつて戦争の起つた時に、若もし味方の者が追々敗走して敵兵が旗はたもと下まで切込んでまいり、敵兵が予

に槍でも向けた時は何う致す」

權「然うさね、其<sup>そこ</sup>処が大切だ」

殿「さ何う致して予を助ける」

權「そりやア尊公<sup>あんた</sup>どうも此処に一つ」

と權六は胸をたゞき、

「忠義という刃物が有るから、劍術は知らねえでも義という鎧を着ているから、敵が槍で尊公に突掛<sup>つきか</sup>けて参<sup>めえ</sup>れば、私<sup>わし</sup>ア掌<sup>て</sup>で受けるだ、一本脇腹へ突込まして、敵を捻<sup>ひね</sup>り倒して打殺<sup>ぶちころ</sup>してやるだ、其の内に尊公を助けて逃がすだけの仕事よ」

殿「うん成程、立派な事だ、併<sup>しか</sup>し然<sup>うま</sup>う甘く口でいう通りに行くかな」

權「屹きつと度行ります、其処しゆうは主家来の情合だからね」

殿「うん面白い奴じゃ、然しからば敵が若し斯様に致したら何うする」  
とすつと立ち上つて、欄間に掛けて有りました九尺柄えのおおみ大身の  
槍を取つて、スツくと二三度しごいて、

「斯様に突き掛けたら何う致す」

と真に突いて蒐かつた時に權六が、

權「然うすれば斯う致します」

と少しも動かずに、ジリくと殿様の前へ進むという正直律義  
の人でございます。

桑野紋之丞前次と仰しやる方は、未だお部屋住では有りますが、  
 勇氣の優れた方で、活潑なり学問もあり、実に文武兼備と講釈師  
 なら誉る立派な殿様でございませすなれども、そこはお大名の疝癩  
 で、甚く逆らつて参ると、直に抜打に御家来の首がコロリなど、  
 いう事が有るもので、只今の華族さまは開けて在つしやいますか  
 ら、其様な野蛮な刃物三昧などはございませんが、前次様は御  
 勇氣のお方だけあつて、九尺柄の大身の槍をすつと繰出した時に、  
 権六は不意を打たれ、受くるものが有りませんから左の掌で、  
 権「むゝ」

と受けましたが剛い奴で、中指と無名指の間をすつと貫かれ

たが、其の掌で槍の柄を捕まえて、ぐツと全身の力で引きました。前次公は躑よろめいて前へ膝を突く処を、權六が血だらけの手で捕おさえ付け、

權「其の時は斯う捻り倒して敵を酷ひどえ目に遇あわして、尊公あんたを助けるより他はねえ、何うだ、敵も魂消たまげるか」

と大だいりき力でグツクと圧おすから前次公も堪たえかねまして、殿「權六ゆる宥せ、宥せ」

と云うは余程苦しかったと見えます。これを見るとお側に居りました川添富彌、山田金吾も驚きました。が、御側小姓の外村惣江が次の間に至り、一刀を執とつて立上り、

惣「棄置かれん奴」

とバラくくくと二人来<sup>きた</sup>つて權六へ組付こうとするを睨<sup>にら</sup>み付け、  
權「寄付くと打<sup>ぶつ</sup>殺すぞ」

惣「斬つてしまえ、無礼至極な奴だ、御前を何と心得る、如何<sup>いか</sup>に  
物を心得んとは申しながら、余りと申せば乱暴狼藉」

と立ちかゝるを、殿様は押されながら、

殿「いやなに惣江、手出しをする事は必ずならんぞ、權六放して  
くれ、あ痛い、放せ、予が悪かった、宥せく」

權「宥せと云つて敵じやア許せねえけれども、先<sup>ま</sup>ず仕方話だから  
許します、さ何うだね」

殿「ハツく」

と殿様は稍<sup>ようや</sup>く起上りましたが、血だらけでございます。是は權



六の血だらけの手で押付けられたから、顔から胸から血だらけで、これを見ると御家来が驚きまして、呆れて口が利けません。

殿「ハツく、至極道理だ」

權「道理だつて、私が何も手出し仕たじやアねえのに、押えるの斬るのと此処にいる人が云うなア分んねえ、咎も報いも無えものを殿様が手出しして、槍で突殺すと云うだから、敵が然うしたら斯うだと仕方話してお目に掛けたゞ、敵なら捻り殺すだが、仕方話で、ちよつくら此の位なものさ」

殿「至極正道潔白な奴じや、勇氣なものじや、何と申しても宜しい、予に悪い事があつたら一々諫言をしてくれ、今日より意見番じや、予が側を放さんぞ」

と有難い御意で、それからいよく医者を呼び、疵の手当を致して遣つかわせと、殿様も急に血だらけですからお召替になる。大騒ぎでござります。御褒美として其の時の槍を戴きましたから、是ばかりでも槍一筋の侍で、五十石に取立てられ、頭とうどり取り下したやく役やくという事に成りましたが、更へに諂つらいを致しませんが、堅い氣象ゆえ、毎夜人知れず刀を差し、棒を提そげて密そつと殿様のお居間の周まわりを三度ずつ不ね寝ずに廻まわるといふ忠実なる事は、他の者に真似は出来ません立派な行いでございます。又お供の時は駕籠に附ついてまいりません。

權「私わしア突張つっぱつたものを着て、お駕籠の側へ付ついてまいりても無駄でござえます、お側には劍術を知しつて立派なお役人が附ついて

いるだから、狼藉者がまいつても脇差を引抜いて防ぎましようが、私ア其の警衛けいえいの方々に狼藉者が斬付けるとなんねえから、若しも怪しい奴が来るといかねえから私ア他の人の振ふりで先へめえりましよう、袴はかまなどア穿はくのは廃よして貰もれえましよう、刀は差せと云わば仕方がねえから差しますが、私だけはお駕籠の先へぶらく往いきます」

と我儘を云うてなりません、左様な我儘なお供はござりませんから、權六も袴を付け、大小を差し、紺足袋こんたびふくぞうり福草履さきとでお前さきと驅もで見廻もつて歩きます、お中屋敷は小梅で、此処これへお出でのおりも、未だお部屋住ゆえ大したお供ではござりませんが、權六がお供をして上野の袴はかま腰こしを通りかゝりました時に、明和三年正

月も過ぎて二月になり、追々梅も咲きました頃ですから、人もち  
 らく出掛けます。只今權六が殿様のお供をして山下の浜田と申  
 す料理屋（今の山城屋）の前を通りかゝり、山の方かたの觀物小屋に  
 引張る者が出て居りますが、其方そちらへ顔も向けず四辺あたりに氣を附けて  
 まいると、向うから来ました男は、年頃二十七八にて、かつきり  
 と色の白い、眼のきよろしく大きい、鼻梁はなすじの通つた口元の締つ  
 た、眉毛の濃い好い男いいで、無地の羽織ちやくを着し、一本短い刀を差し、  
 紺足袋雪駄穿せつたばきでチャラくやうて参りました。不図ふと出会うと中  
 国もので、矢張素もと松平越後様の好い役柄よを勤めました松蔭大  
のしん之進の倅、同どう苗みょう大藏だいぞうというもので、浪々中互いに知つて  
 居りますから、

權「大藏さんく」

と呼びますから大藏は振向いて、

大「いや是れは誠に暫らく、一別已来……」

權「うっかり会ったって知んねえ、むお変りがなくなつて……此処で逢おうとは思いませんだったが、何うして出て来たえ」

と立止つて話をして居りますから、他の若侍が、

若「これく權六殿く」

權「えく」

若「お供先だから、余り知る人に会つたつて無闇に声などを掛けてはなりませんよ」

權「はい、だがね国者に逢つて懐かしいからね、少し先へ往つ

ておくんなせえ、直ぐに往くと殿様に然う申しておくんなせえ、  
まお前めえ達者で宜い、何処どこにいるだ」

大「お前も達者で何処おに居らるゝか、実に立派なりな事で、お抱えになつたことは聞いたが、立派な姿で、此の上もない事で、拙者に於ても悦ばしい」

權「ま悦んでくんろ、今じやア奉公大切に勤めているだが、お前めえさんは何処どこにいるだ」

大「拙者は根岸の日暮ひぐれヶ岡おかに居おる、あの芋坂いもざかを下りた処ところに」

權「私わしの処ところへは近ちかえから些ちつと遊びあそびに來なよ、其の内私うちも往くから」  
若「これこれゝ其様そのようなことを云つては成りません」

權「今日は大将だいしょうがいるから此処こゝで別わかれるとしよう、泣く子と地頭ぢちゆう

にやア勝かたれねえ」

と他の家来衆も心配して彼是云いますので、其の日は別れ、翌日大藏は權六の家うちへまいりましたから、權六悦びました。此の大藏はもと越後守様の御家来で、遠山龜右衛門とは同じ屋敷にいた者ゆえ、母もお千代も見知りの事なれば、

「お互いにはは思い掛けない、縁と云うものは妙だ、国を出たのは今年の秋で、貴方も国いでにお在いのないという事は人の噂で聞きました」

大「お前も御無事で、殊ことに御夫婦仲も宜し、結構で」

權「まあね、お母ふくろも誠に安心したし、殿様も臆おそへにしてくるだが、扶持たんとも沢山たんは要いらない、親子三人喰うだけ有れば宜いいてえに、

其様な事を云わずに取つて置くが宜いつて、種々いろくな物をくれるだ、貰わねえと悪いと云うから、仕方なしに貰うけれども、何でも山盛り呉れるだ、喰物くいものなどは切溜きりだめを持つてつて脊負しよつて来ねえばなんねえだ、誠にはア有難ありがてえ事になつて、勿体ねえが、他に恩返おんげえしの仕様がねえから、旦那様を大切でえじに思つて、不寝ねずに奉公する心得だが、貴方あんたは今の若さで遊んでいずに、何処かへ奉公でもしたら宜かろう」

大「拙者そも然そう思つてる、逆とても国へ往つたつていけんから、何処ぞへ取付こうと思ふが、御当家でお羽振の宜いいお方は何というお方だね」

權「私わしア其様な事は知んねえ、お国家老の福原ふくはらかずま數馬様、寺島てらじま



兵ひょうご 庫ぐら 様、お側御用 神原五郎治かんばんらごろうじ 様とかいう奴があるよ」

大「奴とは酷ひどいね」

權「それに此間こねえだちよつくら聞いたが、御当家には智仁勇の三人の

家来があるよ、渡邊わたなべ 織江おりえ さんという方は慈悲深い人だから是

が仁で、秋月喜一郎あきづききいちろう かな是はえら剛きつい人で勇よ、え、何とか云

いッけ……戸村主水とむらもんど とかいう人は智慧があると云いやした、此者これ

が羽振の宜いい処だ、其の人らの云う事は殿様も聴くだ、御家来に

失策しくじり が有つても、渡邊さんや秋月さんが取做とりなすと殿様も赦ゆるすだ、

秋月さんは槍奉行を勤めているが、成程つよ剛つよそうだ、身丈せいが高くつ

てよ」

と手真似をして物語る内、大藏てのひらは掌てのひらの底に目を附けました。

## 十一

大「そっかて足下掌を何うした、穴が開いているようだが」

權「これか、是は殿様が槍を突つ掛けて掌てで受けるか何うだと云うから、受けなくつてといふので、掌で受けたゞ」

大「むゝ、そうか、そして御家来の中うち仁は渡邊織江、勇は秋月、

智は戸村、成程斯ういふ事は珍らしいから書付けて往ゆきましょう」

と細かに書いて暇いとま乞こいを致し、帰る時に權六が門まで送り出

してまいりますと、お役所から帰る渡邊に出会いましたから、權六も挨拶する事ぐらいのことは心得て居りますから、丁寧ていねいに挨拶

する。渡邊も答礼して行過ぎるを見済して、

大「彼は」

權「彼あれが渡邊織江様よ、慈悲深い方で、家来に難儀いする者が有ると命懸で殿様に詫言をしてくれるだ、困るなら銭い持つて行けと助けてくれると云うだ、どうも彼あの人には敵かなわねえ」

大「成程寛仁かんじんたいど大度、見上げれば立派な人だね」

權「なにい、韓信かんしんが股ア潜くゞりだと」

大「いえ中々お立派なお方だ、最もう五十五六にもなろうか……拙者も近い所にいるから、また度々たびくお尋ね下さい、拙者またも亦お尋ね申します」

權「お前辛抱しなよ、お女郎買におつ溺ぼまつてはいかねえよ、国と

違つてお女郎が方々に在るから、随分身体を大事にしねば成んね

え」

大「誠に辱けない、左様なら」

と松蔭大藏は帰りました。其の後渡邊織江が同年の三月五日に一人の娘を連れて、喜六という老僕に供をさせて、飛鳥山へま

いりました。尤も花見ではない、初桜故余り人は出ません、

其の頃には海老屋、扇屋の他に宜い料理茶屋がありました、柏

屋というは可なり小綺麗にして居りました。織江殿は娘を連れて此の茶屋の二階へ上り、御酒は飲みませんから御飯を上つてい

ました。此の娘は年頃十八九になりました。色のくつきり白い、鼻筋の通つた、口元の可愛らしい、眼のきよろりとした……

と云うと大きな眼付で、少し眼に怖味こわみはありますが、是ももつと巾着きんちや切きりのような眼付では有りません、堅いお屋敷でございますから好よい服装なりは出来ません、小紋のvari裏ぐらいのことで、厚板の帯などを締めたもので、お父さまは小紋の野掛のがけ装束しょうぞくで、お供は看板を着て、真鍮しんちゆう巻まきの木刀を差して上端あがりばなに腰をかけ、お膳に酒が一合附いたのを有難く頂戴して居ります。二階の梯子段の下に三人車座になって御酒を飲んで居る侍は、其の頃流行はやつたたまつむぎたまつむぎの藍あいの小弁慶こべんけいの袖口がぼつ／＼といったのを着て、砂糖さとうのすけない切山椒きりざんしよで、焦茶色の一本独鈷いっほんどつこの帯を締め、木刀を差して居るものが有ります。火の燃え付きそうな髪あたまをして居るものも有り、大小を差した者も有り、大鬚おおたぶさの連中れんじゆうがそろ／

「花見に出る者もあるが、金がないので往ゆかれな残念に思  
 いまして、少しばかり散財さんざいを仕ようと、味噌吸物みそずいものに菜のひたし  
 物香こう物く沢山たくさんという酷い誂あつらえもので、グビーリぐべりくと大盃おおもので酒  
 を飲んで居ります。二階では渡邊織江が娘お竹と御飯ごぜんが済んで、  
 織「これく女中」

下婢「はい」

織「下に従者ともが居おるから小包を持って来いと云えば分るから、然そ  
 う云つてくれ」

下婢「はいかしこ畏まりました」

とんくくと階下したへ下りまして、

下婢「あの、お供さん、旦那があの小さい風呂敷包を持って二階

へ昇<sup>あが</sup>れと仰しやいましたよ」

喜「はい畏まりました」

と喜六と云う六十四才になる爺さんが、よぼくして片手に小包を提げ、正直な人ゆえ下足番が有るのに、傍<sup>わき</sup>に置いた主人の雪踏<sup>つた</sup>とお嬢様の雪踏と自分の福草履三足一緒に懐<sup>ふところ</sup>中へ入れたから、飴細工の狸見たようになって、梯子を上<sup>あが</sup>ろうとする時、微醉<sup>ほろよいきげ</sup>機嫌<sup>けん</sup>で少し身体が斜<sup>よこ</sup>になる途端に、懐の雪踏が這<sup>すべ</sup>って落<sup>おち</sup>ると、間の悪い時には悪いもので、彼<sup>か</sup>の喧嘩でも吹掛<sup>ふっか</sup>けて、此の勘定を保持せようと思つている悪浪<sup>わるろう</sup>人の一人が、手に持つていた吸物椀の中へ雪踏がぼちやりと入ったから驚いて顔を上げ、

甲「これ怪<sup>け</sup>しからん奴だ、やい下<sup>おり</sup>ろ、二階へ上<sup>あが</sup>る奴下<sup>おり</sup>ろ」

と云いながら喜六の裾を取つてぐいと引いたから、ド、トンと落ち、

喜「あ痛いやい……」

甲「不礼至極な奴だ、人が酒を飲んでゐる所へ、屎草履くそぞうりを投込むとは何の事だ」

と云いながら二つ三つみ喜六の頭を打つ喜六は頭を押えながら、

喜「あ痛い……誠に済みませんが、懐から落ちたゞから御勘弁ねげ願ねげえます」

甲「これ彼処あそこに下足を預る番人があつて、銘々下足を預けて上あがるのに、懐へ入れて上る奴があるものか、是には何か此の方に意趣遺恨があるに相違ない」



喜「いえ意趣も遺恨もある訳じやねえ、お前めえさま様には始めてお目に懸つて意趣遺恨のある理由わけがござえません、私わしは何なんにも知んねえ田舎漢いなかもで、年も取つてるし、御馳走の酒を戴き、酔払いになつたもんだから、身体が横になる機はずみに懐から雪踏が落ちただから、どうか御勘弁を」

と詫びましたが、浪人は肩を怒らせまして、

甲「勘弁まか罷りならん、能く考えて見ろ、人の吸物の中へ斯様に屎草履を投込んで、泥だらけにして、これを何うして喰うのだ」

喜「誠に御道理ごもつとも……併しかし屎草履と仰しやるが、米でも麦でも大た概いげえ土から出来ねえものはねえ、それには肥料こやしいしねえものは有

りますめえ、あ痛い、又打つたね」

甲「なに肥料こやしをしないものはないが、直接じかに肥料を喰くい物ものに打ぶかけて喰くう奴やつがあるか、怪けしからん理由わけの分わらん奴やつじゃアないか」

乙「これこれく其様そんな者に何を云いつたつて、痛いも痒かゆいも分わるものじゃアない、家来の不調法は主人の粗相こまだから、主人が此処こゝへ来て詫わるならば勘弁やして遣やらう、それまで其の小包こちらを此方こちらへ取上げて置おけ、なに娘むすめを連れて年としを老とっている奴やつだと、それく今いまも云いう通り家来の不調法は主人の不調法だから、主人が此処こゝへ来て、手前てまえに成なり代しろつて詫わるなれば勘弁やを仕つかまいものでもないが、それ迄ここを此方こちらへ預あづかる、一体家来の不調法を主人が詫わんという事は無い」

喜「詫わん事は無いたつて、私わしが不調法をして、且ま那樣やうを詫わんに出いし

ては済みません、それに包を取上げられてしまつては旦那様に申訳がないから、どうか堪忍しておくんなせえましな、私が不調法を為したんだから、二つも三つも打ぶちた叩たかれても黙つて居やすんだ、人間の頭には神様が附いて居ますぞ、其処そこを叩くてえ事はねえ」

甲「なに……」

と又打ぶつ。

喜「あ痛い、又打ぶつたな」

甲「なにを云う、其様な小理窟ばかり云つても仕様がねえ、もつと分る奴を出せ」

喜「あ痛い……だからま一つ堪忍しておくんなせえましよ」

甲「勘弁罷りならん」

喜「勘弁ならんて、此の包を取られ、ば私わしがしくじるだ」

甲「手前が不調法をしてしくじるのはあたりまえ当あた然りだ、手前が門前こ払いちになつたて己の知つた事かえ、さ此方こへ出ちさんか」

喜「あ……あれ……取つちまつた、其の包を取られちやア私わしが済まねえと云うに、あのまア慈悲知らずの野郎め」

甲「なに野郎だ……」

と尚なお事が大きくなつて、見ちやア居られませんかから茶屋の女中が、

下婢「鎌かまどんを遣やつておくれな」

鎌「なに斯ういう事は矢張り女やッぱが宜いいよ」

下婢「其様なことを云わずに往つておくれよ」

鎌「客種きやくだねが悪い筋だ、何かなんごたつこうとして居る機はずみだから、

どうも仕様がなない」

下婢おんなどもがそれへ参り、

下婢「ね、あなた方」

甲「何だ、何だ手前は」

下婢「貴方あなた申しお供さん、お気を付けなさらなさいといけませんよ、

貴方こちらね、此方は下足番の有るのを御存じないものですから、履はきも

物のを懐へ入れて梯子段を昇あがろうとした処を、つい酔っていらつ

しやるもんですから、不調法で落ちたのでしよう、実にお氣の毒

さま、何卒どうぞね、ますういうお花見時分で、お客さまが立込んで居

りますから、御機嫌を直していらつしやいよ、何ですよう、ちよ

いと貴方ア」

甲「なんだ不礼至極な奴め、愛敬が有るとか器量が好いとか云うならまだしも、手前の面を見ろい、手前じゃア分らんから分る人間を出せ」

下婢「誠にどうも、あのちよいと清次せいじどん」

清「そら、己の方へ来た」

下婢「取つても附けないよ、変な奴だよ」

清「女でも宜よいのに、仕様がないね」

と若い者が悪浪人わるろうにんの前へ来て、額へ手を当て、

若「えへゝゝ」

甲「変な奴が出て来た、手前は何だ」

若「今日は生憎主人が下町までまいって居りませんから、手前

は帳場に坐つてゐる番頭で、御立腹の処は重々御尤さまでござ

います、何分にもへえ、全体お前さんが逆らつては悪い、此

方で御立腹なさるのは御尤もで仕方がない謝まんない、えへ：

：誠に此の通り何も御存じないお方で相済みませんが：

甲「只相済まん」と云つて何う致すのだ」

若「どうか旦那さま」

甲「うん何だと、何が何うしたと、此腕を何う致すよ、只勘弁し

ろたつて、泥ぼつけにした物が喰えるかい」

清「左様なら旦那さま、斯様致しましょう、お料理を取換えまし

よう、ちよいとお芳どん、是をずっと下げて、何か乙な、ちよい

ときつぱりとしたお刺身と云つたようなもので、えへゝゝ」

甲「忌いやな奴だな、空そら笑わらいをしやアがつて」

清「ずっとお料理を取換え、お爛よの宜よい処を召上り、お心持を直してお帰りを願います」

それより他に致し方がないので、酒さけ肴さかなを出しまして、

清「是は手前の方の不調法から出来ました事でげすから、其のお代は戴きません、皆様へ御馳走の心得で」

乙「黙れ、不礼至極なことを云うな、御馳走なんて、汝てまえに酒肴しゅこうを振舞つて貰もらいたおこいから立腹致したと心得て居おるか、振舞つて貰もらいたおこい下心で怒おこつて居おる次第じゃアなえぞ」

清「いえその最はじまり初はじまりは上げて置いて、あとで代を戴きます」



甲「汝では分らんもつと分る者を遣せ」

二階では織江殿も心配して居りますところへ、喜六が泣きながら昇つてまいりました。

十二

喜六は力無げに二階へ上つてまいり、

喜「はい御免下せえまし」

織「おゝ喜六か、是へ来いゝ」

喜「はい、誠に何ともはア申訳のねえ事をしました、悪い奴にお  
包を奪られて」

織「困つたものじゃアないか、何故なぜ草履を懐へ入れて二階へ上つたのだよ、草履を懐へ入れて上へ昇あがるなどという事があるかえ」

喜「はい、田舎者で何も心得ませんから」

織「何も心得んとて、先方で立腹するところは尤もっともじゃアないか、喰物くいものの中へ泥草履を投入れゝば、誰だつて立腹致すのはあたりま当

然えのことじゃ、それから何う致した」

喜「へえ、三人ながら意地の悪い奴が揃つてゝ、家来の不調法は主人の不調法だから、余所目よそめに見て二階に居ることはねえ、此処これへまいり、成り代つて詫をしたら堪忍してくれと云いまして、お包を取上げましたから、渡すめえと確しつかり押えると、あんた傍に居た奴が私わしの頭を叩いて、無理やりに引奪ひったくられましたから、

大切な物でも入へつて居おろうかと心配して居ります」

織「何も入つて居らん空風からぶろしき呂敷ではあるが、不調法をして詫をせ  
ずに置く訳にもいかん、手前の事から己が出ると、拙者は彘野美  
作守家来渡邊織江と申す者でござると、斯う姓名を明かさなければ  
ばならん、己の名前は兎も角も御主人の名を汚けがす事になつちやア  
誠に濟まん訳じゃアないか、手前は長く奉公しても山出しの習しぐせ慣  
が脱ぬけん男だ、誠に困つたもんだの」

喜「へえ、誠に困りました、然そうして私わしが頭ア五つくらしました」  
織「打うたれながら勘定などをする奴が有りますか」

喜「余くやしゆり口惜くやしゆうございます、中まんなか央なにいた奴の叩くのが一番痛う  
いござえました」

織「誠に困るの」

竹「お父さまとつ、斯う致しましょうか、却かえつて先方が食酔たべよつて居りますところへ貴方が入らつしやいますより、私わたくしは女をのことで取上げもいたすまいから、私が出て見ましょうか」

織「いや、己がいなければ宜よいが、己がいて其の方を出しては宜しくない」

竹「いゝえ、喜六わたくしと私わたしと二人で此処こゝへまいりました積りで、誠に不調法を致しましたと一言申したら宜かろうと存じます、のう喜六」

喜「はい、お嬢様が出れば屹度きつと勘弁みんします、皆みなな助平すけへいそうなものばかりで」

織「こら、其様なことを云うから物の間違になるんだ」

竹「じゃア二人の積りで宜いかえ、私は手前を連れてお寺参りに来た積りで」

喜「どうか何分にも願います」

とお竹の後に附いて悄悄々と二階を下りる。此方は益々哮り立つて、

甲「さア何時までべんくと棄置くのだ、二階へ折助が昇つた限り下りて来んが、さ、これを何う致すのだ」

と申して居るところへお竹がまいり、しとやかに、

竹「御免遊ばしませ」

甲「へえお出でなさい、何方さまで」

竹「只今は家来共が不調法をいたして申訳もない事で、何も存じ  
ません田舎者ゆえ、盗とられるとわるいと存じまして、草履を懐へ  
入れて居おつて、つい不調法をいたし、御立腹をかけて何とも恐入  
りませぬ、少し遅く成りましたから早く帰りませんと両親が案じま  
すから、何卒御勘弁遊ばしまして、それは詰らん包ではございま  
すが、これに成り代りまして私わたくしからお詫を致します事で」

甲「どうも是は恐入りましたね、是はどうも御自身にお出いでは恐  
入りましたね、誠にどうもお麗うるわしい事でありますな、へへへ、  
なに腹の立つ訳ではないが、ちよつと三人で花見という訳でもな  
く、ふらりと洗せん湯とうの帰り掛けに一口やっておる処で、へへへ」  
竹「家来どもが不調法をいたし、嘸さぞ御立腹ではございましょうが

……」

甲「いや貴方のおいでまでの事はないが、お出で下されば千万有  
 難いことで、何とも恐入りました、へへ、ま一盃召上れ」

と眼を細くしてお竹を見詰めて居りますから、一人が気をもみ、  
 乙「何だえ、仕方がないな、貴公ぐらい女を見ると惚い人間はな  
 いよ、女を見ると勘弁なり難い事でも直にでれくと許してしま  
 う、それも宜いが、後の勘定を何うする、勘定をよ、前に親娘連  
 れで昇つた立派な侍が二階に居るじやアないか、然るを女を詫に  
 よこすてえ次第があるかえ、其の廉を押ししたら宜かろう、勘定を  
 何うするよ」

甲「うん成程、気が付かんだったが、前に昇っていたか、至極ど

うも御尤もだから然う致そうじやアないか」

丙「何だか分らんことを云つてる、兎に角御主人がお詫に来たから、それで宜いじやアないか、斯様な人ざかしい処で兎や斯う云えば貴公の恥お嬢様の辱になるから、甚だ見苦しいが拙宅へお招ぎ申して、一口差上げ、につこり笑つてお別れにしたら宜かろう」

甲「これは至極宜しい、宅は手狭だが、是なる者は拙者の朋友で、可なり宅も広いから、ちよつと一献飲直してお別れと致しませう」

と柔しい真白な手を真黒な穢い手で引張つたから、喜六は驚き、喜「なにをする、お嬢様の手を引張つて此の助平野郎」

甲「なに、此ん畜生」



と又騒動が大きくなりましたから、流石さすがの渡邊も弱つて何うする事も出来ません。打棄うちちやつて密そつと逃げるなどというは武家の法にないから、困却を致して居りました。すると次の間に居りました客が出て参りました。黒の羽織あいみじんに藍微塵あいみじんの小袖きを着大小を差し、料理の入つた折を提げて来まして、

浪人「え、卒爾そつじながら手前は此の隣りんせき席せきに食事を致して、只今帰ろうと存じて居ると、何か御家来の少しの不調法かどを廉かどに取りまして、暴々あらくしき事を申掛け、御迷惑の御様子、実は彼処あれにて聞きかねて居りましたが、如何にも相手が悪いから、お嬢様をお連れ遊ばして嘸さぞかし御迷惑でござろうとお察し申します、入らざる事と思召おぼしめすかしらんが、尊公の代りに手前が出ましたら如何いかゞで」

織「これは何ともはや、折角の思召ではござるが、先方では柄のない所へ柄を上げて申掛けを致すのだから、貴殿へ御迷惑が掛つては相済まん折角の御親切ではござるが、平にお捨置きを願いたい」

浪人「いえく、手前は無禄無住の者で、浪々の身の上、決して御心配には及びません、御主名を明すのを甚く御心配の御様子、誠に御無礼な事を申すようでござるが、お嬢様を手前の妹の積りにして、手前は不加減で二階に寝ていたとして詫入れ、ば宜しい」

織「何ともそれでは恐入ります事で、併し御迷惑だ……」  
浪「その御心配には及びませんから手前にお任せなされ」

と提げ<sup>ひっさ</sup>刀で下へ下<sup>おり</sup>ると、三人の悪浪人<sup>わるろうにん</sup>はいよく<sup>たけ</sup>哮り立つて、吸物椀を投付けなど乱暴をして居ります所へ、

浪人「御免を……」

甲「何だ」

浪人「手前家来が不調法をいたしましたして、妹がお詫に出ました由<sup>よし</sup>怪<sup>け</sup>しからん事で、女の身でお詫をいたし、却<sup>かえ</sup>つて御立腹を増すばかり、手前少々腹痛が致しまして、横になつて居ります内に、妹が罷<sup>まか</sup>り出て重々恐入りますが、何卒御勘弁<sup>なにとぞ</sup>を願います」

甲「むゝ、尊公は先刻<sup>さつき</sup>此の方の吸物椀の中へ雪踏を投込んだ奴の御主人かえ」

浪「左様家来の粗相は主人が届かんゆえで有りますから、手前成

り代つてお詫を致します、どうか御勘弁を願います、此かくの如く両手てを突ついてお詫を……」

甲「此こいつ奴やつかえく」

乙「此これ者ものじゃアなえよ、其そいつ奴やつは前さきに昇あがつていた奴だ、もつと年としを老とつてる奴だ、此こいつ奴やつは彼あの娘むすめへ諂おべつか諛かたがに入いつて来きたんだ、其そん様さまな

奴やつをなじらなくつちやア仕し様さまがねえ、え、始めて御意得ごいます、御

尊名そんめいを承うわりたいね……手前てまへは谷山たにやま藤十郎とうじゅうろうと申まをす至いたつて武

骨ほねなのんだくれで、御家来ごけらいの不調法ふてうぽうにもせよ、主人しゅじんが成代なりしろつて詫わをいたせば勘弁かんべんいたさんでもないが、斯かくの如ごとく泥どろだらけになつた物ものが喰くえますかよ、此この汁じゆが吸すえるかえ」

と半分残なつていた吸物すく椀わんを打掛ぶっかけましたから、すつと味噌汁みそじゆが

流れました。流石さすが温和の仁も忽ちたちま疝癰が高ぶりましたが、じつと耐え、

浪「どうか御勘弁を願います、それゆえ身不肖ながら主人たる手前が成代つてお詫をいたすので、幾重にも此の通り……手を突く」  
 甲「手を突いたつて不礼を働いた家来を此方こつちへ申し受けよう、然そうして此方の存じ寄にいたそう」

浪「それは貴方御無理と申すもの、何も心得ん山出しの老人ゆえ、相手になすつた処がお恥辱になればとて誉れにもなりますまい、斬つたところが狗いぬを斬るも同様、御勘弁下さる訳には相成りませんか」

乙「ならんければ何ういたした」

浪「ならんければ致し方がない」

甲「斯う致そう、当家こゝろでも迷惑をいたそうから、表へ出て、広々した飛鳥山の上にて果はたしあ合あいに及ぼう」

浪「何も果合あいをする程の無礼を致した訳ではござらん」

甲「無いたつて食くいもの物の中へ泥草履を投込んで置きながら」

浪「手前は此の通り病身とてで逆もお相手が出来ません」

甲「出来んなら尚宜しい、さ出ろ、病身結構だ、広々した飛鳥山へ出て華々しく果合あいをしなせえ、最もう了簡まか罷りならん、篋べらぼう棒ぼうめ」

と侍の面部へ唾はきかを吐掛けました。

斯うなると幾ら柔和でも腹が立ちます、唾を吐き掛けられた時には物も云わず半手拭はんでぬぐいを出して顔を拭く内に、眼がきりりと吊し上りました。相手の三人は酔っているから気が付きませんが、傍の人は直氣じきが附きまして、

○「安さん出掛けよう、斯んな処で酒を呑んでも身になりませんよ、彼の位妹あが出て謝あつて、御主人が塩梅あんばいの悪いのひとに出て来て詫わびているのに、酷ひどい事をするじゃアないか、汁を打掛ぶつかけたばかりで誰でも大概怒おこつちまう、我慢してえるが今に始まるよ、怪我でも仕ねえ中うちに出掛けよう、他に逃げ処がないから往いこうく」

△「折おりを然そう云いつたつけが間に合あわねえから、此この玉子焼たまごやきに鱈さわらの照焼てりやきは紙かみを敷敷いて、手拭てぬぐいに包くみ、猪口ちよこを二つばかり瞞ごまかして往ゆこ  
う」

と皆逃にげ支度じたくをいたします。此方こちらの浪人なみのりは屹度身きつとを構かまえまして、浪なみのり「いよく御勘弁相あいな成なりんとあれば止とむを得えざる事ことで、表うらへ出でてお相手あひまになろう」

とずいと提ひげ刀つがで立たつと、他ほかの者ものが之これを見て。

○「泥棒どろぼうツ」

△「人殺ひところもしいく」

と自分が斬きられる訳わけではないが、遽あわて、逃に出すから、煙草盆たばこを蹴散けかす、土瓶つひを踏ふ毀こわすものがあり、料理代りょうりだいを払はって往ゆく者は



一人もありません、中に素早い者は料理番へ駈込んで鱈を三本担ぎ出す奴があります。彼の三人は真赤な顔をして、

甲「さ来い」

浪「然らばお相手は致しますが、宜くお心を静めて御覧じろ、さして御立腹のあるべき程の粗相でもないに、果合いに及んでは双方の恥辱になるが宜しいか」

乙「えゝ、やれく」

と何うしても肯きません、酒の上で気が立つて居ります、一人が握拳を振つて打掛るを早くも身をかわし、

浪「えい」

と逆に捻倒した手練を見ると、余の二人がばらくくと逃

げました。前に倒れた奴が口惜くやしいから又起上つて組附あてみいて来る処を、拳こぶしを固めて脇腹の三枚目（芝居でいたす当身をくわせるので）余り食つたつて旨いものでは有りません。

甲「うゝーん」

と倒れた、詰らんものを食つたので、見物の弥次馬が、

△「其方そつちへ二人逃げた、威張つた野郎の癖さに容さまア見やアがれ、殴れ〜」

と何だか知りもしないのに無茶苦茶に草履草鞋ぞうりわらじを投付ける。

織「これ喜六、よくお礼を申せ」

喜「へえ、誠に有難ありがたえことで、初はじまりは心配して居りました、若もし貴方に怪我でもあらば仕様がねえから飛出そうと思つてやした

が、此の通りおつ死ぬまで威張りアがつて野郎」

二つ三つ打つを押止め、

浪「いや打つたつて致し方がありません罪も報いもない此奴を殺しても仕様がないから、御家来憚りだが彼方で手桶を借り水を汲んで来て下さい」

喜「はい畏まりました」

彼の侍は其処に倒れた浪人の双方の脇の下へ手を入れ、  
脇へ一活入れる。

甲「あつ……」

と息を吹反す処へ水を打掛ける。

甲「あつ……」

浪「其そん様な弱い事じゃアいけません、果合はなはいをなさるなら立上つて尋常に華々しく」

甲「いえく誠まことに恐入りました、酔よに乗はなはじ甚はなはだ詰はなはらん事を申して、お気に障さわつたら幾重いくじゆうにもお詫わびを致します、どうか御勘弁ごかんべんを願ねがひます」

喜「今度は詫わるか、詫わるといふなら堪忍かんにんしてやるが、弱よわえ奴やつだな、己おらような年としい老とつた弱よわえもんだと馬鹿ばかにして、三さんつも四しつも殴うりアがつて、斯ごとう云いう且かつ那なに捉つかまると魂たまげ消けてやアがる、我身わがみを捻つねつて他人ひとの痛いたさが分わるだらう、初はつまりの二ふたつは我慢まんまんが出来できなかつたぞ、己おらも殴うるから然そう思おもえ」

と握拳こっしんを固かめてこんくと続つけて二ふたつ打うつ。

甲「誠に先程は御無礼で」

と這々ほうくの体ていで逃げて行くと、弥次馬おつかに追掛おつかけられて又打たれる、意気地いくじのない事。

織「どうか一寸旧ちよつともとの席へ、まアく何卒どうぞ…」

浪「いえ、些ちつと取急ちつぎますから」

織「でもござろうが」

と無理もとに旧もとの茶屋へ連戻り、上座じょうざへ直し、慇懃いんぎんに両手を突

き、

織「斯かようの中ゆえ拙者せつの姓名等も申上げず、恐入おそりましたが、

拙者せつは糸野美作くめのみまさか守家来渡邊織江くまのと申す者、今日こんにち仏参ぶつさんの帰途かえりみち、

是なる娘が飛鳥山の花を見たいと申すので連れまいり、図らず貴

殿の御助力ごじよりきを得て無事に相納まり、何ともお礼の申上げようも

ござりません、併しかしどうも起倒流きとうりゅうのお腕前お立派な事で感服い

たしました、いずれ由よしあるお方と心得ます、御尊名をどうか」

浪てまい「手前は名もなき浪人でございます、いえ恐入ります、左様で

ございますか、実は拙者は松蔭大藏と申して、根岸の日暮が岡の

脇おの、乞食坂を下りまして左へ折れた処に、見る蔭もない茅屋ぼうおく

に佗住居わびずまいを致して居ります、此の後ごとも幾久しく……」

織「左様で、あゝ惜しいお方さまで、只今のお身の上は」

大「誠に恥入りました儀でござるが、浪人の生計たつき致し方なく売ばいば

トを致して居ります」

織「売トを……易を……成程惜しい事で」

喜「お前さまは売うト者ないしやか、どうもえらいもんだね、売ばいト者ぼくしやだから負けるか負けねえかを占みて置いて掛るから大丈夫だ、誠に有難うござえました」

織「何いれ御尊宅へお礼に出ます」

と宿しゆくしよ所 姓名を書付けて別れて帰ったのが縁となり、渡邊織

江方へ松蔭大藏が入いりこ込み、遂に糸野美作守様へ取入つて、どうか侍に成りたい念があつて企たくんで致した罫にかゝり、渡邊織江の大難に成ります所のお話でございます。此の松蔭大藏と申す者は前に述べました通り、従前美作国津山の御城主松平越後様の家来で、宜よい役柄を勤めた人の子でありますが、浪人して図らず江戸表へ出てまいりましたが、彼かの權六とも馴染の事でございますゆえ、

權六方へも再三訪れ、權六もまた大藏方へまいりまして、大藏は織江を存じておりますから喧嘩の仲裁なへ入りました事でございませぬ。屋敷へ帰つても物堅い渡邊織江ですから早く礼に往ゆかんければ気が済みませんので、お竹と喜六を伴つれ、結構な進物たずさを携たえまして日暮ヶ岡へまいつて見ると、売ばいトの看板が出て居りますから、

織「あこ此家れだ、喜六一寸ちよつと其の玄関口で訪れて、松蔭大藏様というのは此方こなたかと云つて伺つてみる」

喜「はいかしこ畏まりました、え、お頼み申しますく」

大「ドーレ有ゆうすけ助何方か取次があるぜ」

有「はい畏りました」



つかく〜と出て来ました男は、少し小こ狭いなせな男でござい  
 ます。子持こもち縞じまの布子ぬのこを着て、無地小倉の帯を締め、千住の河原の  
 煙草入を提げ、不粹ぶすいの打こしら扮えのようだが、もと江戸子だから何ど処つ  
 か気が利いて居ります。

有「え、おいでなさえまし、何でござえます」

喜「え、松蔭大藏様と仰しやるは此方こちさまで」

有「え、松蔭は手前でござえますが、何か当とう用ようか身の上を御覽

なさるなれば丁度今余り人も居ねえ処で宜しゅうござえます、ま、

お上あがんなせえまし」

喜「いや、然そうじゃアござえませんが、旦那さまア此方こちさまですと」

織「あい、御免くださいれ」

と立派な侍が入つて来ましたから、有助も少し容かたちを正して、

有「へえ、おいでなせえまし」

織「え、拙者は糸野美作守家来渡邊織江と申す者、え、早々お礼に罷まかり出いずべきでござつたが、主しゅ用よう繁多つに就つき存つじながら大きにお礼が延引いたしました、稍ようく今日番退よんぎの歸かへりに罷まかり出いました儀で、先生御在宅なれば目通りを致しとうござる」

有「はい畏りました……え、先生」

大「何だ」

有「何なんだか飛鳥山でお前さんがお助けなすつた糸野美作守の御家来の渡邊織江とかいう人がお嬢ぢやうさんを連れて礼に来ましたよ」  
大「左様か直すくに茶の良いのを入れて 苳たば盆こぼん、に火を埋いけて、宜よ

いか己が出迎うから……いや是はく〜どうか見苦しい処へ何とも恐入りました、どうか直にお通りを……」

織こんにち「今日は宜く御在宅で」

大「宜うこそ……是れはお嬢様も御一緒に、此の通りの手狭てせまで何とも恥入りましたことで、さ何卒なにとぞお通りを……」

織「え、御家来誠に恐入りましたが、一寸ちよつとお台を……何でも宜しい、いえく〜其様そんな大きな物でなくとも宜しい、これく〜其の包の大きな方を此処これへ」

と風呂敷ひらを開きまして、中から取出したは白羽しろはぶたえ二重一匹に金子が十両と云つては、其の頃では大した進物で、これを大藏の前へ差出しました。

## 十四

尚も織江は慇懃いんぎんに、

織「先ず御機嫌宜しゆう、えゝ過日は凶らずも飛鳥山で何とも御迷惑をかけ、彼の折あおりはあゝいう場所でござつて、碌々お礼も申上げることが出来んで、屋敷へ帰つても此娘これが又どうか早うお礼に出たいと申しまして、実に容易ならん御恩で、実に辱かたじけない事で、彼の折は主名を明すことも出来ず、怖い事も恐ろしい事もござらんが、女おんな連なづれゆえ大きに心配いたし居りました、実に其の折は意外の御迷惑をかけまして誠に相済みません事で」

大「いえ、何う致しまして、再度お礼では却つて恐入ります、  
 殊ことに御親子お揃いで斯様な処へおいでは何とも痛いた入りましたご  
 ざる」

織「え、此品これは（と盆へ載せた品を前へ出し）何ぞと存じました  
 が、御案内の通りで、下屋敷しもやしきからはまでまいる間には何か調え  
 ます処もなく、殊ばんひに番退けから間まを見て抜けて参りましたことで、  
 広小路へでも出たら何ぞ有りますが、是は誠にほんの到来物  
 で、粗末ではござるが、どうか御受納下さらば……」

大「いや是は恐入ったことで……斯様な御心配を戴く理由わけもなし、  
 お辞ことばのお礼で十分、どうか品物の所は御免ごうむを蒙りとう、思召おぼしめしだけ  
 頂戴致す」

織「いえ、それは貴方の御気象、誠に御無礼な次第ではあるけれども、ほんのお礼のしるしまでゞございますから、どうかお受け下さるように……甚だ何でござるが御意に適った色にでもお染めなすつて、お召し下されば有難いことで、甚だ御無礼ではござるが……」

大「何ともどうも恐入りました訳でござる然らば折角の思召ゆえ此の羽二重だけは頂戴致しますが、只今の身の上では斯様な結構な品を購るわけには逆もまいりません、併し此のお肴料とお記しの包は戴く訳にはまいりません」

織「左様でもござろうが、貴方が何でございますなら御奉公人にもお遣わしなすつて下さるように」

大「それは誠に恐入ります、嬢さま誠に何とも……」

竹「いえ親共と早くお礼に上あがりたいと申し暮し、私わたくしも種々いろく心な

らず居りましたが、何分にも番がせわしく、それ故大きに遅れま

した、彼の節あは何ともお礼の申そうようもございません、喜六や

お前ちよつと一寸此方へ出て、宜くお礼を」

喜「はい旦那さま、彼の折おりは何ともはアお礼の云う様ようもござえま

せん、私わしなんざアこれもう六十四になりますから、何もこれ彼奴あ

等つらぶちころに打殺されても命の惜おしいわけはなし、只私の不調法から旦那様

の御名義ばかりじゃアねえ、お屋敷のお名前まで出るような事が

あつちやア済まねえと覚悟を極めて、私一人打殺ぶつころされたら事が

済もうと思つてる所へ、旦那様が出て何ともはアお礼もうしの申ようは

ありません、見掛けは綺麗な優しげな、力も何もねえようなお前様が、大の野郎を打殺しただから、お侍は異つたものだと噂をして居りました」

大「然そう云われては却かえつて困る、これは御奉公人で」

喜「はい私わしア何なんでござえます、お嬢さまが五才いつ、の時から御奉公を

して居り、長ながえ間これ十五年もお付き申していますからお馴染なじみで

がす、彼あの時お酒が一口出たもんだから、お供だで少し加減をす

れば宜よかったが、急いで飲やつつけたで、えら腹が空へつたから、二

合出たのを皆みな酌飲くんのんじまい、酔よばらいになつて、つい身体が横

になつたところから不調法をして、旦那様に御迷惑をかけました

が、先生さまのお蔭さまで助かりましたは、何ともお礼の申上げ



ようはござえません」

織「え、今日は直すぐにお暇いとまを」

大「何はなくとも折角ごじゆうらいの御入来もと、素より斯様な茅屋ぼうおくなれば別

に差さしあげ上さかなるようなお下物さかなもありませんが、一寸詰ちよつとらん支度を申

し付けて置きましたから、一口上つてお帰りを」

織「いや思召おぼしめしかたじは辱しけないが、今日こんにちは少々急ぎますから、併しかし貴方

様はお品格せんだつといい、先せん達だつて三人を相手になすつたお腕前は余程

武芸の道もお心懸け、御熟練と御無礼ながら存じました、どうか

承わりますれば新規お抱えに相成つた權六と申す者と前々から知

るお間柄ごしやうこくということを一寸屋敷で聞きましたやはりが、御生国は矢張

美作で」

大「はい、手前は津山の越後守家来で、父は松蔭大之進と申して、聊いさゝか高も取りました者でござるが、父に少し届かん所がありました、お暇いとまになりました、暫しばらくの間黒戸くろとの方へまいって居り又は權六の居りました村方にも居りました、それゆえに彼あれとは知る仲でございます」

織「実にどうも貴方は惜おしいことで、大概忠臣二君に事つかえずと云う堅い御氣象であらつしやるから、立派な処から抱えられても、再びしゅう主は持たんというところの御決心でござるか」

大「いえ、二君に仕つかえんなどと申すは立派な武士の申すことで、どうか斯うやつて店たな借かりを致して、売ばい卜者ぼくしゃで生涯くちはて朽果るも心外なことで、仮令たとえ何様どんな下役小祿でも主しゅう取りをして家名を立てた

い心懸こころがけもござりますが、これという知己しるべもなく、手蔓等てづるとうも  
 ないことで、先達せんだつて權六に会いまして、これ／＼だと承わり、  
 お前は羨うらやましい事で、遠山の苗字を継いでもと米搗こめつきをしていた身  
 の上の者が大禄たいろくを取るようになったも、全くお前の心懸こころがけが  
 良いので自然に左様な事になったので、拙者などは早く親に別れ  
 るくらいな不幸の生れゆえ、とても然そういう身の上には成れんが、  
 何様どんな処でも宜しいから再び武家になりたい、口が有つたら世話  
 をしてくれんかと權六にも頼んで置きましたくらいで、何どの様な  
 小禄の旗はたもと下でも宜しいが、お手蔓があるならば、どうか御推挙  
 を願いたい、此の儀は權六にも頼んで置おきましたが、御重役の尊公  
 定めしお交際つきあいもお広いことゝ心得ますから」

織「承知致しました、えゝ宜しい、いや実に昔は何か貞女両夫に見えずまみの教訓を守つて居りましたが、却かえつてそれでは御先祖へ対しても不孝にも相成ること、拙者主人美作守みまさかは小祿でござるけれども、拙者これから屋敷へ立歸つて主人へも話をいたしましょう、貴方の御器量は拙者は宜く承知しておるが、家老共は未まだ知らんことゆえ、始めから貴方が越後様においでの際のよう到大祿という訳にはまいりません、小祿でも宜しくば心配をして御推挙いたしましょう」

大「どうもそれは辱かたじけない事で」

と是から互に酒を飲合つて、快く其の日は別れましたが、妙な物で、助けられた恩が有るゆえ、織江が種々いろく周旋いたしたとこ

ろから、丁度十日目に松蔭大藏もとの許へお召めし状じょうが到来致しまし  
たことで、大藏ひら披ひらいて見ると。

御面談もうしたき申度儀有之候これありそうろう間明みよう十一日朝五つ時当屋敷へ  
御入来ごじゅうらい有之候様美作守申付候此段得御意候以上よみまさかのかみ  
ぎよいをえ

美作守内

三月十日

寺島兵庫

松蔭大藏殿

という文面ふまこで、文箱ふまこに入つて参りましたから、当人の悦びは一  
通りでございませぬ、先ず請書うけしよをいたし、是から急に支度にかゝ  
り、小清潔こぎよつぱりした紋付の着物が無ければなりません、紋が少しちが異

つていても宜い、昌平しょうへいに描かせても直じきに出来るだろうが、今日一日のことだからと有助を駈けさせて買いに遣つかわし、大小は素もとより用意たしなみがありますから之を佩さして、翌朝よくあさの五つ時に虎の門のお上屋敷かみやしきへまいりますと、御門番には予かねて其の筋から通知がしてありますから、大藏を中の口へ通し中の口から書院へ通しました。

## 十五

御書院の正面には家老寺嶋兵庫、お留守居渡邊織江其の外お目附列座で新規お抱えのことを言渡し、拾俵五人扶持くだを下し置かるゝ

旨のお書付を渡されました。其のお書付には高拾俵五人扶持と筆太に書いて、宛名は隅の方へ小さく記してござります。織江から来る十五日御登城の節お通り掛けお目見え仰付けらるゝ旨、且上屋敷に於てお長家を下し置かるゝ旨をも併せて達しましたので、大藏は有難きよしのお受をして拝領の長家へ下りました。織江が飛鳥山で世話になった恩返しので、御不自由だろうからは是もお持ちなさい、彼もお持ちなさいと種々な品物を送ってくれたので、大藏は有難く心得て居りました。其の中十五日がまいると、朝五つ時の御登城で、其の日大藏は麻上下でお廊下に控えていと、聴てごそりくと申す麻上下と足の音がいたす、平伏をする、というのでお目見えというから読んで字の如く目で見るのか

と存じますと、足音を聞くばかり、寧ろお足音拝聴と申す方が適当であるかと存じます。併ししか当時そのころでは是すら容易に出来ませんことで、先ずとゞこお滞りなくお目見えも済み、是から重役の宅を廻勤かいきんいたすことで、是等これらは総て渡邊織江の指図でございしますが、羽振の宜よい渡邊織江の引力でございしますから、自おのずから人の用いも宜しゆうございしますが、新参のことで、谷中のお下屋敷しもやしきづめ詰を申付けられました。始はじめりはお屋敷外そとを槍持六尺棒持を連れて見廻らんければなりません、槍持は仲間ちゅうげんべや部屋から出ます、棒持の方は足輕部屋から出でて、磔石いしの処をとんく〜とんく〜敲たいて歩あるく、余り宜いい役ではありません、芝居で演じましても上等役者は致しません所の役で、それでも拾俵たかもちの高持たかもちになりました。所が大藏如才



ない人で、品格があつて弁舌愛敬がありまして、一寸ちよつという一ひとこ言ことに人を感じさせるのが得意でございませうから、家中かちゆう一般いぱんの

評判が宜しく、

甲「流石さすがは渡邊うじ氏みたての見立みだてだ、あれは拾俵うじでは安い、百石がものはあるよ」

乙「いゝえ何なんでげす、家老なんや用人なんよりは中々腕前なんが良いそうだが、全体あれ彼あを家老あにしたら宜よろかろう」

などと種々いろくなことを云います。大藏もとは素もとより気が利きいて居ゐりますから、雨でも降るとか雪でも降ります時には、部屋むへ来きまします

大「一いっぱい盃はい飲のむが宜よい、今日こんにちは雪が降ふつて寒ひやいから巡おまわり検けんは私わし一い

人で廻ろう、なに槍持ばかりで宜しい、此の雪では誰も通るまいから咎める者も無かろう、私一人で宜しい、これで一盃飲んでくれ」

と金かねびらを切りまして、誠に手当が届くから、寄ると触ると大

藏の評判で、

甲「野のがみ上イ」

乙「えゝ」

甲「今度新規お抱えになつた松蔭様はえらいお方だね」

乙「彼あれは別だね 一寸ちよつと来ても寒かろう、一盃飲んだら宜かろうと、

仮たとえ令二百でも三百でも錢を投出して目鼻の明く処は、どうも苦勞した人は違ふな、一体御当家様よりは立派な大名の御家来で立派

なお方が貧乏して困って苦勞した人だから、物が届いている、感  
 心な事だ、夜は寒いから止せくと御自分ばかりで見廻りをして  
 勤めに怠りはない、それから見ると此方等は寝たがってばかりい  
 て扱て仕様がないの」

甲「本当にどうも……お、噂をすれば影とやらで、おいでなすつ  
 た」

と 仲間 共ちゅうげんどもは大藏を見まして、

「え、どうもお寒うございます」

大「あ、大きに御苦勞だが、又廻りの刻限が来たから往つてもら  
 わなければならん、昼間お客きやくらい来まで又た遺失物おとしものでもあるとい  
 かんから、仁助にすけわし私わしが一人で見廻ろう、雪がちらちらと来たようだ

から」

仁「成程降つて来ましたね」

大「よほど降つて来たな、提ちようちん灯も別に要いるまい、廻りさえす

れば宜よいのだ、私わしは新役だからこれが務つとめで、貴様達は私に連れ

られる身の上だ、殊ことに一人や二人狼藉者が出ても取つて押えるだ

けの力はある、といつて何も誇るわけではないが、此の雪の降る

に、連れて往いかれるのも迷惑だろうから」

仁「面目次第もありませんが、此方等こちとらは狼藉者でも出ると、真まっさ

先きに逃出し、悪くすると石へ蹴きつまずいて膝ひざア毀こわすたちであり

ますよ、恐入りますな」

大「御家中ごかちゆうで万事に心こころづき附のある方は渡邊殿と秋月殿である、

寒かろうから寒さ凌しのぎに酒を用いたら宜かろうと云つて、御酒ごしゆを下すつたが、斯様な結構な酒はお下屋敷にはないから、此の通り徳利とくりを提げて来た、一升ばかり分けてやろう別に下物さかなはないから、此錢これで何ぞ嗜すきな物を買つて、夜蕎麦売よそばうりが来たら窓から買え」

仁「恐れ入りましたな、何ともお礼の申そうようはございません、毎いっもお噂ばかり申しております実まに余り十分過ぎまして……」

大「雪ゆきが甚ひどく降るので手前達も難儀だろう、私わし一人で宜しい提灯と赤合羽を貸せ〜」

と竹の饅頭笠かぶを被り、提灯を提げ、一人で窃ひそかに廻りましたが却かえつてどか〜多勢おおぜいで廻ると盗賊は逃げますが、窃ひそかに廻ると盗賊も油断して居りますから、却かえつて取押えることがあります。

無提灯でのそく一人で歩くのは結句用心になります。或日お客  
 来で御殿の方は混雑致しています時、大藏が長局ながつぼねの堀の外を  
 一人で窺かに廻つてまいりますと、沢山ではありませんが、ちら  
 くくと雪が顔へ当り、なか／＼寒うござります、雪も降止みそう  
 で、風がフツと吹込む途端、提灯の火が消えましたから、

大「あゝ困つたもの」

と後あとへ退さがると、長局の板堀の外に立つて居る人があります。無  
 地の頭巾ずきんを目深まぶかに被りまして、堀に身を寄せて、小長い刀を一本  
 差し、小刀しょうとうは付けているかいなか判然はつきり分りませんが、鞘の光  
 りが見えます。

大「はてな」

と大藏は後あとへ退さがつて様子を見ていました。すると三尺ひらきぐの開口ちがギーと開あき、内から出て来ました女はお小姓姿、文金ぶんきんの高たか髻まげ、模様は確しかと分りませんが、華美はでな振袖で、大和錦やまとにしきの帯を締め、はこせこと云うものを帯へ挟んで居ります。器量はも判つつきり然つ分りませんが、只色の真ま白つしろいだけは分ります。大藏は心うちの中で、ヤア女が出たな、お客来の時分に芸人を呼ぶと、毎いも下屋敷のお女中方が附いて来るが、是は上屋敷の女中かしらん、はてな何うして出たろう、此の掟の厳しいのに、今日こんにちのお客来で御蔵おくらから道具だしを出入れするお掃除番が、粗忽そこつで此の締りを開けて置いたかしらん、何にしろ怪けしからん事だと、段々側へ来て見ますと、堀へい外そとに今の男が立って居りますからハ、ア、さてはお側近く勤

むる侍と奥を勤めるお女中と密通をいたして居るのではないかと存じましたから、後へ退つて息を屏して、密と見て居りますと、彼の女は四辺あたりをきよろ／＼見廻しまして声を潜め、

女「春部はるべさま、春部さま」

春「シツ／＼、声を出してはなりません」

と制しました。

十六

お小姓姿の美しい者が眼に涙を浮うかめまして、

女「貴方あなたまア私わたしから幾許いくらお文ふみを上げまして一度もお返辞へんじのない



のはあんまりだと存じます、貴方はもう亀井戸かめいどの事をお忘れ遊ばしたか、私はそればかり存じて居りますけれども、掟おきてが厳しいのでお目通りを致すことも出来ませんでした、今晚は宜よい間まにお目に懸かれました」

春「他ひとに知れてはならんが、今夜は雪が降つて来たので、廻りの者も自然役目を怠つて、余りちよん／＼叩いて廻らんようだが、先刻さつきちよいと合図をしたから、ひよつと出て来ようと存じてまいたが、此の事が伯父に知れた日にア実に困るから、他ひとに知れんようにして私わしも会いたいと思うから、来年三月宿やど下さりの折がに、又例の亀井戸の巴屋ともえやで緩ゆるくり話を致しましょう」

女「宿下やどさがりの時と仰しやっても、本当に七夕様のようでございます

ね、一年に一度しきやアお目通りが出来ないのかと思いますと、此の頃では貴方の夢ばかり見て居りますよ、私は思わたくしいの儘なことを書いて置きましたから、これを篤とつくり見て下されば分りましよう、私の身にかゝる事がございますからお持ち遊ばせ」

と渡す途端うしろに後だしぬけから突然に大声で、

大「火の廻り」

という。二人は恟びつくり致しまして、後あとへ退のき、女は慌あわて、開き戸を締めて奥へ行ゆく。彼の春部かという若侍も同じく慌て、お馬場口の方へ遁にげて行く。大藏は密そつと後あとへ廻まわつて、三尺の開戸ひらきどを見ますと、慌て、締めずにまいったから、戸がばたく、煽あおるが、外から締りは附けられませんから石を支かつて置きました、  
独ひとりごと言ことに、

大「困ったな、女が手紙を出したようだが、男の方で取ろうという処を、己が大きな声で吠鳴どなったから、驚いたものか文を落して行つた、これは宜よい物が手に入つた」

と懐へ入れて詰所へ帰り、是から同役と交代になります。

大「此の手紙をいつぞは用に立てよう」

と待ちに待つて居りました。彼の春部かというものは、お小姓頭を勤め十五石三人扶持を領し、秋月の甥おいで、梅三郎うめさぶろうという者でございます。お目附の甥びなんだけに羽振が宜しく、お父さまとつは平馬へいまという。梅三郎は評判の美男びなんで、婀娜あだな、ひんなりとした、芝居でいたせば家橘かきつか上のぼりの菊の助でも致しそうな好男いゝおとこで、丁度其の月の二十八日、春部梅三郎は非番のことだから、用達ようたしかた旁／＼

々、というので、根津の下屋敷を出まして、上野の広小路で買物をいたし、今山下の袴はかまごし腰うしろの方へ掛ろうとする後から、松蔭大藏が声をかけ

大「もしく春部さまく」

梅「あい、これは大藏殿かえ」

大「へえ、今日こんにちは好よいお天気になりました、お非番でげすか」

梅「あゝ幸い非番ゆえ浅草へでもまいろうかと思う」

大「へえ私わたくしも今日こんにちは非番で、ま別に知しる己べもありませんし、未まだ当

地の様子も不慣ふなれでございますから、道を覚えて置かなければなり

ません、切せめて小梅のお中屋敷へまいる道だけでも覚えようと存

じて、浅草から小梅の方へまいろうと存じまして、実は頼たのみ合あわ

せてまいりました」

梅「然そうかえ、三さん作さくはお前の相あい役やくだね」

大「へえ左様でござります、え、春部さま、貴方少々伺伺いたい儀むきよくがござりますが、決してお手間は取らせませんから、あの無極むきよく

庵あん（有名の蕎麦店そばや）まで、えへ貴方少々御馳走に差上げるとい

うは甚はなはだ御無礼な儀でござりますが、一ちよつと寸伺伺いたい儀がござり

ますから、お急ぎでなければ無極の二階までおいでを願います」

梅「別に急ぎも致さんが、何か馳走をされては困ります、お前はだいぶ大分下役の者へ馳走をして振舞うという噂があるが余り新役中にはで華美な事をせんが宜よいと伯父も心配しています」

大「へえ、毎度秋月さま渡邊さまのお引立に困よりまして、不肖の

私わたくしが身に余る重役を仰付けられ、誠に有難いことで決してお手間  
は取らせませんから」

梅「いや又にいたそう」

大「どうか甚だ御無礼ごむれいでございませすが何卒願どうぞいます、少々お屋敷  
の御家風の事に就ついて伺いたい儀がございませす」

梅「左様か」

と素もとより温厚の人でございませすから、強たつてと云うので、是か  
ら無極の二階へ通りました。追々 詔あつらえもの物の肴が出てまいりまし  
たから、

大「女中今少しお話し申す事があるから、誰も此処こゝへ参らんよう  
にしてくれ、用があれば手を拍うつて呼ぶから」

女中「はい、左様なれば此処を閉めましょうか」

大「いや、それは宜しい……え、お急ぎの処をお引留め申して何とも恐入りました」

梅「あい何だえ、私わしに聞きたい事というのは」

大「え、外でもござりませんが、お屋敷の御家風に就て伺いたい儀がござる、それと申すも拙者は何事も御家風を心得ふません不慣なれの身の上にて、斯様な役やくむき向を仰付けられ、身に余りて辱かたじけない事と存じながら、慾には限りのないもので、何どの様にも拙者身体が続くだけは御奉公致します了簡なれども、上役のお引立が無ければとて逆しんざんも新参者などは出世が出来ません、渡邊殿は別段御鼻はなを下さいます、貴方の伯父御さまの秋月さまは未だ染しみ々々

お言葉を戴きました事もないゆえ、大藏疾とうより心懸けて居ります  
 が、手蔓はなし、よんどころ 扨こんなく今日迄打過ぎましたが、春部様からお声  
 が、とりなしりを願ひ、秋月様へお目通りを願ひまして、お上かみへ宜しくお  
 執成を願ひますれば拙者も慾ばかりではござらん、先祖へ対し  
 て此の上ない孝道かと存じますで、どうぞ伯父上へ貴方様から宜  
 しく御推挙を願ひたい」

梅「いや、それはお前無理だ、よく考えて見なさいお前は何か腕  
 前が善よいと文道ぶんどうにも達して居るとか、又品格といい応対とい  
 い、立派な侍の胤たねだけあつて流石さすがだと家中の評も宜しいが、何ぞ  
 功がなければ出世は出来ん、其の功と云うは他ひとに勝すぐれた事がある  
 とか、あるい或は屋敷に狼藉でも忍しのび入いった時に取押えたとか何かなけ



れば迎とてもいかんが、如何に伯父甥の間柄でも、伯父に頼んで無理にあゝしてくれ、斯うしてくれと云つては依怙えこの沙汰になつて、それでは伯父も濟まん訳だから、然そういう事で私わしを此処これへ呼び寄せて、お前が馳走をして引ひきたて立を願うと云つて、酒などを飲ましてくれちや誠に困る、斯様な事が伯父に知れると叱られますから御免……」

と云い棄てゝ立上る袖を押えて、

大「暫くお待ちを……此の身の出世ばかりでなく、斯かく申す大藏も聊いさゝかお屋敷へ対して功がござる、それゆえ強しいて願いますわけ」

梅「功が有れば宜しい、何ういう功だ」

大「愚昧ぐまいの者にて何事も分りませんが、お屋敷の御家風は何ういう事でござろうか、罪の軽けい重じゆうを心得ませんが、先ず御家中内に罪あるものがござります時に、重き罪を軽く計らう方が宜しいか、罪は罪だから其の悪事だけの罪に罰するが宜しいか、私心得わたくしのために承知をして置きとうござる」

梅「それは罪を犯したる者の次第にも因よりましようけれども、上かみたる者は下したの者の罪は減じ得られるだけ軽くして、命を助けなければならん」

大「それは然そうあるべき事で、若もし貴方の御家来が貴方に対して不忠な事を致しまして、手討に致すべき奴を手討にせんければならん時、手討に致した方が宜しいか、但しお助けなすつて門前払

いにいたし、永ながのお暇いとまを出された方がお宜しいか」

梅「其その様な事は云わんでも知れて居る、斬る程の罪を犯し、斬るべきところを助け、永の暇と云つて聊いさか手当をいたして暇つかを遣わす、是が主しゆうじゆう従の情というもので、云うに云われん処が有るのじゃ」

## 十七

大藏は感心した風ふうをして聞きおわ了り、

大「成程甚だ恐入りますが、殿様も誠に御仁ごじんじ慈厚く、また御重役方も皆真しんに智仁ちじんのお方々だという事を承わつて居りますが、拙者

はな、お屋敷内ないに罪あるもので、既にお手討にもなるべき者を助けました事が一ひとかど廉れんございます、此の廉を以てお執とりなし成せいを願います」

梅「むゝ、何ういう理由わけで、人は誰だね」

大「えゝ疾とつより此の密書が拙者の手に入つて居りますが、余人よじんに見せては相成らんと、貴方の御心中を看破みやぶつて申し上げます、どうか罪に陥らんようにお取計いを願ひとうござる」

梅「何だ、密書と云えば容易ならん事だ」

と手に取つて見て驚きましたも道理で、いつぞや若江から自分へ贈つた艶書であるから、かつと赤面致しましたが、色の白い人があか赧かくなつたので、そりアどうも牡丹ぼたんへ電灯を映かけたように、ど

うも美しい好い男で、暫く下を向いて何も云えませんが。大藏少し膝を進ませまして、

大「是は私の功かと存じます、此の功によつてお引立を願ひとう存じます、只出世を致したいばかりではないが、拙者前に津山に於て親父は二百四十石領りました、松蔭大之進の家に生れた侍の胤、唯今ではお目見得已上と申しても、お通り掛けお目見えで、拙者方では尊顔を見上ぐる事も出来ませんから、折々お側へ罷出でお目通りをし尊顔を見覚えるように相成りたいで」

梅「いや伯父に宜く然う云いませう、秋月に宜く云えば心配有りません、屹度伯父に話をします、貴公の心掛けを誠に感心したから」

大「それは千万かたじ辱けない、其のお言葉は決して反故ほごには相成りま  
すまい」

梅「武士に二言はありません」

大「へえ辱けない」

春部梅三郎は真つ赤に成つて、彼かの文を懐に入れ其の儘表へ駈  
出すを送り出し、広小路の方ゆへ行く後うしろすがた姿を見送つて、にやり

と苦笑いをしたは、松蔭大藏という奴とりな、余程横着者でございます。  
扱さて其の歳の暮に春部梅三郎が何ういう執成しを致しましたか、伯

父秋月へ話し込むと、秋月が渡邊織江の処へまいりまして相談致  
すと、素もとより推挙致したのは渡邊でございしますが、自分は飛鳥山  
で大藏に恩になつて居りますから、片かたびいき鼻びいき屑いになるようかえで却つて

当人のためにならんからと云つて、扣ひかえ目にして居りますと、秋  
 月の引立で御前ごぜん体へ執成とりなしを致しましたから、急に其の暮松蔭  
 大藏は五十石取になり、御近習ごきんじゆうお小納戸兼勤を仰付けられまし  
 た。御部屋住おへやずみの前次様のお附き元締兼勤を仰付けられました。此  
 の前次様は前申ぜんし述べました通り、武張つたお方で武芸に達した  
 者を手許に置きたいというので、御当主へお願い立たててお貰い受け  
 になりましたので、お上かみやしき邸と違つてお長家ながやも広いのを頂戴致  
 す事になり、重役の氣受けも宜しく、男よくが好つて程が善いいから老  
 女や中老までも誉ほめそやし、

○「本当にえらいお人で、手も能よく書く、力も強く、他ひとは否いやに諂つら  
 うなどと申すが、然そうでない、真実愛敬のある人で、私わたくしが此の間

会った時にこれく云つて、彼は誠の侍でどうも忠義一途いちずの人であります」

と勤務が堅いから忽ち評判たちまが高くなりました。乃そこで有助という、

根岸にいた時分に使つた者を下男に致しまして、新規に林藏りんぞうと

いう男を置きました。これは屋敷奉公に慣れた者を若党に致しま

したので、また男ばかりでは不自由だから、何ぞ手許てもとづかい使かや勝かつて

手許もとを働く者がなければなりませんから、方々へ周旋を頼んで

置きますと、渡邊織江の家来船ふながみちゆうすけ上忠助という者の妹お菊きくとい

うて、もと駒込こまごめ片町かたまちに居り、当時本郷ほんごう春木町はるきちようにいる木具きぐ

屋岩吉やいわきちの娘がありました。今年十八で器量はよし柔和ではあり、

恩人織江の口入くちいれでありますから、早速其の者を召抱えて使いま



した。大藏は物事が行<sup>ゆきとじ</sup>届き、優しくつて言葉の内に愛敬があつて、家来の麿<sup>そろう</sup>相などは知つても咎<sup>とが</sup>めませんから、家来になつた者は誠に幸いで、屋敷中の評判が段々高くなつて来ました。折しも殿様が御病気で、次第に重くなりました。只今で申しますと心臓病とでも申しますか、どうも宜しくない事がございます。只今ならば空気の好<sup>よ</sup>い処とか、樹木の沢山あります処を御覧なすつたら宜かろうといふので、大磯とか箱根とかへお出<sup>い</sup>でが出来ますが、其の頃では然<sup>そ</sup>うはまいりません。然<sup>しか</sup>るに奥様は松<sup>まつ</sup>平<sup>たいらい</sup>和<sup>みのかみ</sup>泉<sup>のみ</sup>守<sup>の</sup>さまからお輿<sup>こし</sup>入れになりましたが、四<sup>ぜん</sup>五<sup>ぜん</sup>年前にお逝<sup>かくれ</sup>去<sup>れ</sup>になり、其<sup>まえ</sup>の前<sup>まえ</sup>から居<sup>やま</sup>りましたのはお秋<sup>あき</sup>といふ側<sup>め</sup>室<sup>かけ</sup>で、これは駒<sup>はく</sup>込<sup>さん</sup>白<sup>さん</sup>山<sup>さん</sup>に住<sup>やま</sup>む山<sup>さん</sup>路<sup>じ</sup>宗<sup>そう</sup>庵<sup>あん</sup>と申す町医の娘を奥方から勧めて進ぜられたので、

其の頃諸侯の側室めかけは奥様から進ぜらるゝ事でございますが、今は  
 然そういう事はないことで、旦那様が妾を抱えようと仰しやると、  
 少しつんと遊ばしまして、私わたくしは箱根へ湯治に往ゆきますとか何とか  
 仰しやいます但其の頃は固いもので、奥様の方から無理に勧めて  
 置いたお秋様が挙げもうました若様が、お三歳みつという時に奥様がお逝か  
 去くれになりましたから、お秋様はお上かみ通どりおと成り、お秋の方と  
 いう。側室めかけが出世をいたしますと、お上通かみりおと成り、方名かたなが附き  
 ます。よく殿方が腹は借物かりものだ良い胤たねを下おろす、只胤を取るためだ  
 と軍鶏しやもじやア有るまいし、胤を取るといふ事はありません造化ぞうか機き  
 論ろんを拜見しても解つて居りますが、お秋の方は羽振が宜しいから、  
 御家来の内二派うちふたはに分れ、若様の方を鼻ひ負いきいたすものと、御舎弟前

次様を鼻<sup>はな</sup>買いたす者とが出来て、お屋敷に騒動の起ることは本にもあれば義太夫にも作つて有ります。前次様は通称を紋之丞さまと仰せられ、武張つた方で、少しも色気などは無く、疝<sup>かん</sup>癰<sup>ぺき</sup>が起るとつか／＼と物を仰しやいます。お秋の方も時としては甚<sup>ひど</sup>く何か云われる事があり、御家来衆も苛<sup>ひど</sup>く云われるところから、甲「紋之丞様を御相続としては御勇氣に過ぎて実に困る、あの疝癰<sup>とて</sup>では逆も治らん、勇ばかりで治まるわけのものではない、殿様は御病身なれば、万一お逝去<sup>かくれ</sup>になつたらお秋殿のお胤の若様を御相続とすればお屋敷は安泰な事である」

とこそ／＼若様附の御家来は相談をいたすとは悪いことでございますが、紋之丞様を無い者に仕ようという、ない者というのは

殺してしまふと云うので、昔はよく毒薬を盛るといふ事がありました。随分お大名にありました話で、只今なればモルヒネなどという劇剤もありますが、其の時分には何か鳩ちんどく毒とか、或は舶来あるいのよせき石ぐらいのところはげが、毒の劇しいところかです。彼の松蔭大藏は智慧が有つて、一家中の羽振が宜くつて、物の決断は良よし、彼を抱込めば宜よいと寺島兵庫と申す重役が、松蔭大藏を抱込むと、松蔭は得たりと請合つて、

大「十分事を仕し遂おせました時には、どうか拙者にこれのぞみの望のぞみがございますが、お叶かなえ下さいますか」

寺「委細承知致した、然しからば血判を」

大「宜しい」

と是から血を出し、我<sup>わが</sup>姓名の下へ捺<sup>お</sup>すとは痛い事<sup>ひどい</sup>をしたもので、  
 ちよいと切つて、えゝと捺<sup>や</sup>るので、忌<sup>いや</sup>な事<sup>こと</sup>であります。只今は血  
 を見る事をお嫌いなさるが、其の頃は動<sup>や</sup>ともすれば血判<sup>とて</sup>だの、逆<sup>とて</sup>  
 も立<sup>たち</sup>行<sup>ゆき</sup>が出来<sup>き</sup>らんから切腹致すの、武士道が相立たん自殺致すな  
 どと申したもので、寺島松蔭<sup>ら</sup>等の反逆も悉<sup>すつ</sup>皆<sup>ぱり</sup>下<sup>した</sup>組<sup>ぐみ</sup>の相談が出来  
 て、明和の四年に相成りました。其の年の秋までに謀策<sup>たくみ</sup>を仕<sup>し</sup>遂<sup>お</sup>せ  
 るのに一番むずかしいものは、浮舟<sup>うきふね</sup>という老女で年は五十四で、  
 男<sup>おとこ</sup> 優<sup>まさ</sup>りの尋常<sup>ひとく</sup>ならんものが属<sup>つ</sup>いて居ります。此者<sup>これ</sup>を手に入れ  
 んければなりません。此者と物堅い渡邊織江の兩人を何うかして  
 手に入れんけりやアならんが、これゝと渡邊に打明けていう訳  
 にはいかずと、云<sup>す</sup>えば直<sup>すぐ</sup>に殺されるか、刺違えて死<sup>し</sup>兼<sup>かね</sup>ぬ忠義<sup>む</sup>無<sup>む</sup>

類るいの極頑ごくかたくな固おやしな老爺おやじでございますから、これを亡ないものにせんけりアなりません。

## 十八

老女も中々の才物ではございますが、女だけに遂に大藏の弁舌とぎつに説附とぎつけられました。此の説附とぎつけました事は猥褻わいせつに渉わたりますから、唯説附とぎつけたと致して置おきましよう。扱さて此の一味の者がいよゝ毒殺という事に決しまして、毒薬調合の工夫は有るまいかと考えて居りますと御案内の通り明和の三年は関東洪水でございまして、四年には山陽道に大水が出て、二年洪水が続ぎ、何処どことなく

湿気ますので、季候が不順のところから、流行感冒はやりかぜインフルエン  
 ザと申すような悪い病が流行はやつて、人が大層死にましたところが、  
 お扣ひかえの前次様も矢張流行感冒かに罹かられました処、段々重くなるの  
 で、お医者方が種々いろく心配して居りますが、勇氣のお方ゆえ我慢  
 をなすつて押しておいでのでいけません、風邪を押し損おしそこなつたら  
 仕方がない、九段坂を昇ろうとする荷車見たように後あとへも前さきへも  
 往ゆけません。とうとう藤本の寄席へ材木を押込むような事が出来  
 ます。こゝで大藏がお秋の方の実父山路宗庵は町医でこそあれ、  
 古方家こほうかの上手でありますから、手に手を尽して山路をお抱えにな  
 すつたら如何いかゞと申す評議になりますと、秋月は忠義な人でござい  
 ますから、それは怪けしからん事、他から医を入れる事は容易なら

ん事にて、お薬を一々毒味をして差上げる故に、医は従来のお医  
 者か然も無くば匙でも願うが宜いと申して承知致しませんから、  
 如何致したら宜かろうと思つていました。すると九月十日に、駒  
 込白山前に小金屋源兵衛といふ飴屋があります、若様のお小さい  
 時分お咳が出ますと水飴を上げ、又はお風邪でこんくお咳が出  
 ると水飴を上ります。こゝで神原五郎治と神原四郎治兄弟の  
 者と大藏と三人打寄り、額を集め鼎足で談を致しました時に、  
 人を遠ざけ、立聞きを致さんように襖障子を開広げて、向うか  
 ら来る人の見えるようにして、飴屋の亭主を呼出しました。  
 源「え、今日お召によつて取敢ず罷り出ました、御殿へ出ます  
 心得でありましたが、御当家さまへ出ました」



大「いや、御殿では却かえつて話が出来ん、其の方例いづもの係り役人に  
遇あつても、必らず当家へ来たことを云わんように」

源「へえ、畏かしこまりました、此の度は悪たびい疫やまいが流行はやり、殿様には続ついてお加減がお悪いとか申すことを承うけりましたが、如何いかゞで」

大「うん、どうもお咳せきが出てならん」

源「へえ、へい、それははや何とも御心配な儀で……今日召めしましたのは何ういう事ですか、何うか飴あめの御用向でも仰おほ付けられますのでございますか」

大「神原氏うじ貴公きこうから発はつ言ごんされたら宜よろしゅうござろう」

神「いや拙せつ者は斯ごとういう事を云い出すは甚はなだいかん、どうか貴公から願ねがひたい、斯ごとう云う事は松蔭氏しょういんに限かぎるね」

大「拙者は誠に困る、えゝ源兵衛、其の方は御当家へ長らく出入でいりをするが、御当家さまを大切に心得ますかえ」

源「へえ決して粗略には心得ません、大切に心得て居ります」

大「ム、ウ、御当家のためを深く其の方が思うなら、江戸表の御家老さま、又此の神原五郎治さま、渡邊さま、此の四郎治さま、

拙者は新役の事ではあるが此の事に就つてはお家のためじゃからと云うので、種いろく々御相談があつた、始めは拙者にも分りません所があつたが、だんく重役衆の意見を承わつて成程と合が点てんがゆき、是はお家のためという事を承知いたしましたのだ」

源「へえ、どうも然そういう事は町人などは何も弁わえきのありません事でございます、へえ何ういう事が御当家さまのお為になりま

すので」

大「他でもないが上かみが長らく御不例でな、お医者も種いろく々手を尽されたが、遠からずと云う程の御重症である」

源「へえ何でげすか、余程お悪いらく在いつしやいますんで」

大「大きな声をしては云えんが、来月中旬なかばまでは保つまいと医者い者が申すのじゃ」

源「へえ、どうもそれはおいとしい事で、お目通りは致しません  
が、誠に手前も長らく親の代からお出入りを致しまして居ります  
から、誠に残念な事で」

大「うむ、就つては上かみがお逝去かくれになれば、貴様も知つての通り奥方  
もお逝去で、御ご順じゆんにまいれば若様をというのだが、まだ御幼年、

取つてお四歳よっつである、余りお稚ちいさ過ぎる、併しかしお胤たねだから御家督御相続も仔細かっはないが、此の事に就て其の方に頼む事があるのだ、お家のため且かつ容易ならん事であるから、必ず他言をせん、何どの様な事でもお家のためには御意ぎよいを背そむきますまい、という決心を承知せん中うちは話も出来ん、此の事に就いては御家老を始め、こゝにござる神原氏我々に至るまで皆血判がしてある、其の方も何ういう事があつても他言はせん、御意に背くまいという確しかとした証拠に、是へ血判をいたせ」

源「へえ血判と申しますは何ういたしますので」

大「血で判をするから血判だ」

源「えゝ、それは御免ごうむを蒙ります、中々町人に腹などが切れるも

のではありません」

大「いや、腹を切つてくれるというのではない」

源「でも私は見た事がございませぬ、早野勘平が血判をいたす時、  
臓腑を引出しましたが、あれは中々町人には」

大「いや、腹を切る血判ではない、爪の間をちよいと切つて、

血が染んだのを手前の姓名の下へ捺すだけで、痛くも痒くもない」

源「へえ何うかしてさ、くれや何かを剥くと血が染みますことが

……ちよいと捺せば宜しいので、私は驚きました、勘平の血判か

と思ひまして、然ういう事がお家のおために成れば何の様な事

もいたします」

大「手前は小金屋と申すが、苗字は何と申す」

源「へえ、矢張小金と申します」

と云うを神原四郎治が筆を執りて、料紙へ小金源兵衛と記し、

大「さア、これへ血判をするのだ、血判をした以上は御家老さま  
始め此の方等ほうらと其の方とは親類の間柄じやのう」

源「へえ恐入ります、誠に有難いことで」

大「のう、何事も打解けた話でなければならん、其の代り事成就  
なせば向後御出入頭こうごおでいりがしらに取立てお扶持も下さる、就てはあゝい

処へ置きたくないから、広小路あたりへ五間々口ごけんまぐちぐらいの立派な

店を出し、奉公人を多人数たにんず使つて、立派な飴屋になるよう、御家

老職に願つて、金子きんすは多分おに下りよう、千両までは受合つて宜し

い」

源「へえ……有難いことで、夢のようでございますな、お家のためと申しても、私風情わたくしが何のお役にも立ちませんが、それでは恐入ります、いえ何様どんな事でも致します、へえ手や指ぐらいは幾許いくら切つても薬さえ附ければ直じきに癒なおりますから宜しゅうございます、なんの指ぐらいを切りますのは」

とちよいと其の頃千両からの金子かねを貰つて、立派な飴屋になるというので嬉しいから、指の先を切つて血判をいたし、

源「何ういう御用で」

大「さ、こゝに薬がある」

源「へえくくく」

大「貴様は、水飴を煮るのは余程手間のかゝったものかのう」

源「いえ、それは商売ですから直じきに出来ますことで」

大「どうか職人の手に掛けず、貴様一人かみで上の召上るものだから練ねれようか」

源「いえ何ういたしましたして、年を老とつた職人などは攪かきまわ廻しながら水みず涕つぽなを垂たらすことでもありますから、決して左様なことは致さしません、私わたくしが如何いかようにも工夫をいたします」

大「それでは此の薬を練込むことは出来るか」

源「へえ是は何なんのお薬で」

大「最早血判致したから、何も遠慮をいたすには及ばんが、一大事で、お控えの前次様は御疝癪やが強く、動やもすれば御家来をお手討よとりになさるような事が度々たびある、斯様な方がお世取よとりに成れば、



お家の大害だいがいを惹出ひきいだすであろう、然しかる処幸い前次様は御病氣、  
殊ことにお咳が出るから、水飴の中へ此の毒薬を入れて毒殺をするの  
で」

源「え……それは御免を蒙こうむります」

大「何なんだ、御免を蒙るとは……」

源「何だつて、お忍びで王子へ入らつしやる時にお立寄がありません、何かは存して、お十三の頃からお目通りを致しました前次様を、何かは存じませんが、私わたくしの手からお毒を差上げますことは逆とても出来ません」  
というと、神原四郎治がキリ、と眦まなじりを吊し上げて膝を進めました。

## 十九

神原「これ源兵衛、手前は何のために血判をいたした、容易ならんことだぞ、お家のためで、紋之丞様が御家督に成れば必らずお家の害になることを存じているから、一家中の者が心配して、此の通り役柄をいたす侍が頼むのに、今となつて否いやだなどと申しても、一大事を聞かせた上は手討にいたすから覚悟いたせ」

源「ど、何卒御免を……お手討だけは御勘弁を……」

大「勘弁まか罷りならん、神原殿がお頼みによつて、其の方に申聞もうしきけた、だが今になつて違背いはいされては此の儘に差置さしおけんから、只今手討に致す」

源「へえ大変な事で、私は斯様な事とは存じませんでした、大変な事になりましたな、一体水飴は私の処では致しませんへえ不得手なんで」

大「其様な事を申してもいかん」

源「へえ宜しゅうございます」

と斬られるくらいならと思つて、不承く承知致しました。

大「一時遁れに請合つて、若し此の事を御舎弟の方々へ内通でもいたすと、貴様の宅へ踏込んで必ず打斬るぞ」

源「へえく御念の入った事で、是がお薬でございませうか、へえ宜しゅうございます」

と宅へ歸つて彼の毒薬を水飴の中へ入れて煉つて見たが、思う

ようにいけません、どうしても粉が浮きます、綺麗な処へよせき石の粉が浮いて居りますので、

源「幾ら煉ねってもいけません」

と此の事を松蔭大藏に申しますから、大藏もどうしたら宜かろうと云うので、大藏の家うちへ山路という医者を呼び飴屋と三人打寄つて相談をいたしますと、山路の申すには、是は斑はんみよう猫ねこという毒を煮込んだら知れない、併しかし是は私わしのような町医の手には入はいりません、なにより効験きくめの強いのは和蘭陀おらんだでカンタリスという脊中せなかに縞のある虫で、是は豆の葉に得て居るが、田舎でエゾ虫と申し、斑猫のことで、効験きくめが強いのは煎じ詰めるのがよかろうと申しましたので、なる程それが宜かろうと相談が一決いたし、飴屋の源

兵衛と医者の山路を玄関まで送り出そうとする時、衝立ついたての蔭かげに立  
 つていましたのは召使の菊という女中で、これは松蔭が平生へいせい目  
 を掛けて、行々ゆくゆくは貴様の力になって遣わし、親父も年を老とつて  
 いるから、何時いつまでも箱屋（芸妓げいしやの箱屋じゃありません、木  
 具屋と申して指物さしものを致します）をさせて置きたくない、貴様に  
 はこれ／＼手当をして遣やらうという真実に絆ほどされて、表向ではな  
 いが、内々ない／＼大藏に身を任して居ります。是は本当に惚れた訳で  
 もなし、金づくでもなし、変な義理になつたので、大藏も好男いとおとこ  
 子こであります。此の菊は至つて堅い性質ゆえ、常々神原や山  
 路が来ては何か大藏と話をしては帰るのを、案じられたものだと  
 苦にしていたのが顔に出ます。今大藏が衝立の蔭に菊のいたのを

認めて恟り致したが、さあらぬ体にて、

大「源兵衛、少し待ちな」

と連戻つて、庭口から飴屋を送り出そうとすると、林藏という若党が同じく立つて聞いていましたので、再び驚いたが、仕方がないと思ひ、飴屋を帰してしまつたが、大藏は腹の中で菊は船上忠助の妹だから、此の事を渡邊に内通をされてはならん、船上は古く渡邊に仕えた家来で、彼奴の妹だから、こりやア油断がならん、なれども林藏は愚者だから、林藏から先へ当つて調べてみよう。と是から支度を仕替えて、羽織大小で彼の林藏という若党を連れ、買物に出ると云つて屋敷を立出で、根津の或る料理茶屋へ昇りましたが、其の頃は主家来のけじめが正しく、中々若党

が旦那さまの側などへはまいられませぬのを、大藏は己おれの側へ来いと呼び附けました。

大「林藏、大きに御苦勞く」

林「へえ、何か御用で」

大「いや独酌ひとりで飲んでもうまくないから、貴様と打解けて話をしようと思つて」

林「恐入りましたでございます、何ともはや御同席では……」

大「いや、席へだを隔てゝは酒が旨くない」

林「こゝでは却かえつて気が詰りますから、階下したで戴きとう存じます」

大「いや、酒を飲んだり遊ぶ時には主しゆうも家来も共々にせんければいかん、己の苦勞する時には手前にも共々に苦勞して貰う、これ

を主従苦樂を俱ともにするというのだ」

林「へえ、恐入ります、手前などは誠に仕合せで、御当家さまへ上あがりまして、旦那さまは誠に何から何までお慈悲深く、何どん様な不調法が有りまして、お小言も仰おっしやらず、斯ういう旦那さまは又とは有りません、手前が仕しあ合せで、此の間も吉村さまの仁ね介もお羨うらやましがっていましたが、私わたくしのような不ほよ行届とどの者を目みえ懸けて下さり何ともはや恐入りやす」

大「いや、然そうでない、貴様ア感心な事には正直律義なり、誠に主しゆう思しいだのう」

林「いえ、旦那様が目みえ懸けて下せえますから、お互に思えば思わろゝで、そりやア尊あん公あ当た然りの事ことて」



大「いや／＼然うでない、一体貴様の氣象を感服している、これ女中、下物を此処へ、又後で酌をして貰うが、早く家来共の膳を持つて来んければならん」

と林藏の前へも同じような御馳走が出ました。

大「のう林藏、是迄しみ／＼話も出来んであつたが、今日は差向いで緩くり飲もう、まア一盃酌いでやろう」

林「へえ恐入りました、誠ね有難い事で、旦那さまのお酌で恐入ります」

大「今日は遠慮せずによれよ」

林「へえ恐入りました、ヒエ／＼溢れます／＼……有難い事で、

お左様なれば頂戴いたします、折角の事だから誠にはや有難

い事で」

大「今日は宜いいよ、打解けて飲んでくれ、何かの事に遠慮はあつちやアいかん、心の儘に飲めよ」

林「ヒエく、有難い事で」

大「さ己ひとつあいが一盃いっばい合あをする」

とグーと一盃いっばい飲み、又向うへ差し、林藏を酔わせないと話が

出来ません。尤もつとおろかも愚だまだから欺だますには造作もない、お菊は船上忠助

の妹ゆえ、渡邊織江へ内通を致しはせんかと、松蔭大藏も実に心

配な事あざむでございますから、林藏から先へ欺あざむく趣向でござります。

林藏は段々宜よい心持に酔よつて来こましたので仮名違ことばいの言語で喋り

ます。

大「遠慮なしに沢山飲れ」

林「ヒエ有難い事で、大層酩酊致しやした」

大「いや／＼まだ酩酊という程飲みやアせん、貴様は国にも余り親戚頼りのないという事を聞いたが、全く左様かえ」

林「ヒエ一人従弟がありやすが、是は死んでしまエたか、生きて  
いるか分きやた／＼なので、今迄何とも音ずれのない処を見ると、  
死んでもうたかと思ひやす、ぜつ 実にはや樹けから落ちた何とか同様  
で、心細い身の上でがす」

大「左様か、何うだ別に国に帰りたくもないかえ、御府内へ住すまつ  
て生涯果てたいという志なら、また其の様に目を懸けてやるかの  
う」

林「ヒエ実じつに国くにというたところで、今いまになつて歸りましたところが、親戚めよりもなし、別びつに何う仕ようという目途みあてもないものですから願ねがわくば此こゝの繁盛さかる御府内ごほうちでまア生涯こちはて朽果くたれば、甘え物おまを喰たべ、  
おもしろ面白おもしろえ物を見て暮くしますだけ人ねんげん間の徳とくだと思えやす、実ぜつに且かつ  
 那なさまア御当地ごちちで朽果くたてたい心こゝろは充えつぱい分ぶんあります」  
 大「それは宜よろしい、それじゃア何うだえ己みよりは親戚めより頼たのり兄弟けいも何も  
 無い、誠まことに心細こまい身の上みの上だが、まア幸さいい重役じゆうやくの引立ひきたを以もつて、不相ふさ  
 応おとな大禄だいりくを取とるようになつて、誠まことに辱かたじけないが、人は出世しゅっしをして  
 歓樂きわの極きままる時は憂うれいの端緒いとぐちで、何か間違まごひのあつた時には、  
 それ／＼力ちからになる者がなければならぬ、己おのれが増長ぞうちやうをして何か  
 心得こころえ違ちがひのあつた時には異見いけんを云いつてくれる者が無なければならぬ、

乃そこで中々家来という者は主従の隔てがあつて、どうも主人の意こころに背いて意見をする勇氣のないものだが、貴様は何でもずか／＼云つてくれる所の氣象を看み抜ぬいているから、己は貴様と親類になりたいと思うが、何うだ」

林「ヒエ／＼恐おそれ入ります、勿体至極も……」

大「いや、然そうでない、只しゆう家来で居ちやアいかん、己は百石頂戴致す身の上だから、己が生家さとになつて貴様を一人前の侍に取立つてやろう、仮令たとえ当家の内でなくとも、他たの藩中あるいでも或は御家人はたもと旗下はたもとのような処へでも養子に遣やつて、一ひと廉かどの武士に成れば、貴様も己に向つて前々まえ／＼御高恩を得たから申上ぐるが、それはお宜しくない、斯うなすつたら宜かろうと云えるような武士に取立つ

て、多分の持参は附けられんが、相当の支度をしてやるが、何うだ侍になる気はないか」

林「いや、是はどうも勿体ない事でござえます、是はどうもはや、私わしの様な者は逆とてもはや武士ぼしには成れません」

大「そりやア何ういう訳か」

林「第でい一いち 剣術きんじゅつを知りませんから武士ぼしにはなれましねえ」

大「剣術けんじゅつを知らんでも、文字を心得んでも立派な身分に成れば、

それだけの家来を使って、それだけの者に手紙を書かせなどしたら、何も仔細はなからう」

林「でござえますが、武士ぼしは窮屈ではありませんか、実ぜつは私わしは町人になって商いをして見たいので」

大「町人になりたい、それは造作もない、二三百両もかければ立派に店が出せるだろう」

林「なに、其様そんなには要えりませんよ、三拾両ひとつもとで一資本で、三拾両も有れば立派に店が出せますからな」

大「それは造作ない事じゃ、手前が一軒の主人になって、己が時々往つて、林藏いっばい一盃飲ませろよ、雨が降つて来たから傘ア貸せよと我儘を云いたい訳ではないが、年来使つた家来が出世をして、其の者から僅かな物でも馳走になるは嬉しいものだ、甘うまく喰たべられるものだ」

林「誠に有難い事で」

大「ま、もう一盃飲めく」

林「ヒエ大層嬉しいお話で、大分酔だいぶえいました、へえ頂戴いたしま  
す、これははや有難いことで……」

大「そこでな、どうも手前と己は主家来の間柄だから別に遠慮は  
ないが、心懸けの悪い女房でも持たれて、忌いやな顔でもされると己  
も往ゆきにくくなる、然そうすると遂ついには主しゅう従じゆうの隔へてが出来、不  
和なかになるから、女房の良いのを貴様に持たせたいのう」

林「へえ、女房の良いのは少ねえものでござえます、あの通り立  
派なお方様でござえますが、森山様でも秋月様でも、お品格とい  
い御器量といい、悪い事はねえが、私わしら目下めしたの者がめえりますと  
つんとして馬鹿にする訳もありやしねえが、届かねえ、お茶も下  
さらんで」



大「それだから云うのだ、此の間から打明けて云おうと思つていたが、家うちにいる菊きくな」

林「ヒエ」

大「彼あれは手前も知つてゐるだろうが、内ない々く己おれが手を附けて、妾同様にして置く者だ」

林「えへ、えへ、それは旦那さま了、私わしも知らん振でいやすけれども、実じつは心得こころえてます」

大「そうだろう、彼あれはそれ渡邊わたなべの家うちに勤こめてゐる船上いもとの妹いもで、己おれとは年も違つてゐるから、とても己おれの御新造ごしんぞうにする訳わけにはいかん、不器量ふきりょうでも同役どうやくの娘むすめを貰もらわなければならん、就つては彼あの菊きくを手前てまえの女房にやぼうに遣やらうと思おもうが、氣きに入いりませませんかえ、随分ずいぶん器量きりょうも好よ

く、心こころだて立たも至極宜しく、髪も結い、裁縫しごも能くするよ」

林「ヒエ……冗談ばかり仰しやいますな、旦那さまアおからかいなすつちやア困ります、お菊けくさんなら好えいの好えくないのつて、から理窟は有りましたねえ、彼様あんな優しげなこつぽりとした方は少なえもんでござえますな」

大「あはゝゝ、何だえ、こつぽりと云うのは」

林「頬の処や手や何かの処がこつぽりとして、尻なぞはちまくとしてなあ」

大「ちま〜くというのは小さいのか」

林「ヒエ誠にいらいお方さまでござえますよ」

大「手前が嫌いなれば仕方がない、気に入ったら手前の女房に遣

りたいのう」

林「ひへ、御冗談ばかりかし」

大「冗談ではない、菊が手前を誉めてほめているよ」

林「尤も旦那様のお声が、りりで、林藏に世帯を持たせるが、女

房がなくって不自由だから往ってやれと仰しやって下さればなア

……」

大「己が云やア否というのに極っている何故ならば衾を俱にする

妾だから、義理にも彼様な人は厭でございませと云わなければな

らん、是は当然だ、手前の処へ幾ら往きたいと思つても然うい

に極って居るわ」

## 二十

林藏はにこくいたしまして、

林「成程むう」

大「だから、手前さえ宜いと極れば、直接に掛合つて見ろい、菊に」

林「是は云えませんが、間が悪うてとてもはや冗談は云えませんが、然うして中々ちまくとしてえて、堅え気性でござえますから、冗談は云えましねえよ、旦那様がお留主の時などは、とつともう苦え顔をして居なせえまして、うっかり冗談も云えませんか」

大「云えない事があるものか、じゃア云える工夫をしてやろう、

こゝで余つた着を折へ詰めて先へ帰れ、己は神原の小屋に用があるから、手前先へ帰つて、旦那さまは神原さまのお小屋で御酒が始まつて、私だけ先へ帰りました、これはお土産でございますと云つて、折を出して、菊と二人で一盃飲めと旦那さまが仰しやつたから、一盃頂戴と斯う云え」

林「成程どうも：併しお菊さんは私二人で差向いでは酒を飲まねえと思ひやすよ」

大「それは飲むまい、私は酒を飲まんからお部屋へ往つて飲めというだろうから、もし然う云つたら、旦那様が此処で飲めと仰しやつたのを戴きませんでは、折角のお志を無にするようなものだから、私は頂戴いたしますと云つて、茶の間の菊がいる側の戸棚

の下の方を開けると、酒の道具が入っているから、出して小さな  
 徳利とくりへ酒を入れて爛を付け、戸棚に種いろく々な食物たべものがある、からすみ又は  
 雲丹うにのようなものもあるから、悉皆みんな出さずんと飲んで、菊  
 が止めても肯きくな、然うして無理に菊に合あいをしてくれろと云えば、  
 仮令たとえ否いやでも一盃たいぐらいは合あをするだろう、飲んだら手前酔まぎった紛  
 れに、私わしは身を固める事がある、私わしは近日の内商人あきんどに成るが、  
 独身ひとりみでは不自由だから、女房になつてくれるかと手か何か押え  
 て見ろ」

林「ひえへ、是はどうも面白おもしろえ、やりたいようだが、何分間  
 が悪うて側よりつへ寄附かれませんか」

大「寄附けようが寄附けまいが、菊が何と云うとも構ったことは

ない、己は四つの廻りを合図に、庭口から窃そつと忍び込んで、裏手に待つているから、四つの廻りの拍子木を聞いたら、構わず菊のくびつたま首玉へかじり付け、己が突然だしぬけにがらりと障子を開けて、不義ぶぎ者見附けた、不義ふぎをいたした者は手討に致さねばならぬのが御家法だ、さ兩人ふたりとも手討にいたす」

林「いや、それは御免を……」

大「いやさ本当に斬るのじやアない、斬るべき奴だが、今迄真実に事つかえてくれたから、内聞ないぶんにして遣つかわし、表向にすれば面倒だによつて、永ながの暇いとまを遣つかわす、また菊もそれ程までに思っているなら、町人になれ、侍になることはならんと三十両の他に二十両菊に手当をして、頭かざりの飾身の廻り残やらず遣つかる」

林「成程、有難い、どうも是ははや……併しかしそれでもいけません

よ、お菊けくさんが貴方飛んでもない事を仰しやる、何うしても林藏

と私わたくしと不義をした覚えはありません、神かけてありません、夫婦

に成れと仰しやつても私は否えやでござえます、斯こんな忌えやな人の女房

にはなりませんと云切いいきつたら何う致します」

大「然そうは云わせん、深夜に及んで男なん女によ差向いで居おれば、不義

でないと云わせん強たつて強情を張れば表向にいたすが何うだ、そ

れとも内聞に致せば命は助けて遣るといえば、命が欲しいから女

房になりますと云うだろう」

林「成程、これは恐おそれえ入りましたな、成程承知しなければ斬つて

しまうか、命いのちが惜しいから、そんなればか、どうも是は面白い」



大「これく浮れて手を叩くな、下から下婢が来る」

林「ヒエ有難い事で、成程やります」

大「宜いか、其の積りでいろ」

林「ヒエ、そろく帰りましょうか」

大「そんなに急なくつても宜い」

林「ヒエ有難い事で」

とはからそこく致して、余つた下物を折に入れて、松蔭大藏は神原の小屋へ参り、此方は宜い心持に折を吊さげて自分の部屋へ帰つてまいりまして、にこくしながら、

林「えゝい、人間は何処で何う運が来るか分らねえもんだな、畜生彼方へ往け、己が折を下げてるもんだから跡を尾いて来やア

がる、もこ彼方へ往いけ、もこくあはゝゝゝ尻尾しりつぽを振つて来やアがる」

下男「いや林藏れんぞう何処えへ往く、なに旦那と一えつしよ緒に、然そうかえ、一え盃つぺい飲つたなア」

林「然うよ」

下男「それははや、左様なら」

林「あはゝゝゝ何えなかつべえだか田舎漢ちやつのいう事は些とも解らねえものだなア、えゝお菊さん只今帰りました」

菊「おや、お帰りかえ、大層お遅いからお案じ申したが、旦那さまは」

林「旦那さまは神原様のお小屋で御酒ごしゆが始まつて、手前は先へ帰

れと云いましたから、私<sup>わし</sup>だけ帰つてめえりました」

菊「大きに御苦勞よ」

林「え、此のお折の中のお肴は旦那様が手前に遣る、菊も不斷骨を折つてるから、菊<sup>けく</sup>と二人で茶の間で一<sup>いっぱい</sup>盃飲めよと云うて、此のお肴を下<sup>くだ</sup>せえました、どうか此<sup>こゝ</sup>処で旦那さまが毎<sup>いっ</sup>も召上る御酒を戴<sup>えたゞ</sup>きてえもんで」

菊「神原さまのお小屋で御酒が始まつたら、またお帰りは遅かるうねえ」

林「え、どうもそれは子<sup>こゝ</sup>刻<sup>のつ</sup>になりますか丑<sup>やつ</sup>刻<sup>のつ</sup>になりますか、様子が分らねえと斯ういう訳で、へえ」

菊「其の折のお肴はお前に上げるから、部屋へ持<sup>も</sup>て往つて、お酒

も適<sup>よ</sup>い程出して緩<sup>ゆる</sup>くりおたべ」

林「ヒエ……それが然<sup>そ</sup>うでねえ訳なので」

菊「何をえ」

林「旦那さまの云うにア、手前は茶の間で酒を飲んだ事はあるめえ、料理茶屋で飲ませるのは当<sup>あたり</sup>然<sup>めえ</sup>の話だが、茶の間で飲ませるのは別段の馳<sup>わ</sup>走<sup>け</sup>じや、へえ有難い事でござえますと、斯<sup>ま</sup>う礼を云つたような理由<sup>わけ</sup>で」

菊「如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>に旦那さまが然<sup>そ</sup>う仰<sup>お</sup>しやつても、お前がそれを真<sup>ま</sup>に受<sup>う</sup>けて、お茶の間でお酒を戴<sup>か</sup>いては悪いよ、私は悪いことは云わないからお部屋でお飲<sup>た</sup>べよ」

林「然<sup>そ</sup>うでござえますか、お前<sup>めえ</sup>さん此<sup>こ</sup>処<sup>ゝ</sup>で飲<sup>の</sup>まねえと折<sup>し</sup>角<sup>かく</sup>の旦那

那のお心を無にするようなものだ、此の戸棚に何か有りやしよう、お膳や徳利も……」

菊「お前、そんな物を出してはいけないよ」

林「こゝにからすみおにと雲丹があるだ」

菊「何だよ、其様そんなものを出してはいけないよ、あらまア困るよ、お鉄瓶へお爛徳利を入れてはいけないよ」

林「心配しんぺいしねえでも宜ええ、大丈夫だよ、少し理由わけがあるだ、お菊さん、ま一盃えっぺい飲めなせえ、お前まえ今日は平日いつもより別段おつこに美しいように思われるだね」

菊「何だよ、詰らんお世辞なんぞを云つて、早くお部屋へ往つて寝ておくれ、お願いだから、跡を片付けて置かなければならない

から」

林「ま一盃えっぺい飲めなアよ」

菊「私は飲みたくはないよ」

林「じゃア酌さくだけして下せえ」

菊「お酌しやくかえ、私にかえ、困るねえ、それじゃア一盃いっばいぎ切りだよ、

さ……」

林「へえ有ありがて難え是れは……ひえ頂戴えた致しやす……有難え、まア

まるで夢見たような話だという事さ、お菊けくさん本当にお前さん、

私が此こゝ処へ奉公に來た時から、真ほんに思つて居るよ」

菊「其そん様なことを云わずに早く彼方あつちへお出いでよ」

林「然そう邪魔にせなえでも宜ええが、是でちやんと縁えんづく附は極けまつて

いるからね、知らずくして縁は異な物味な物といって、ちやんと極きまっているからね」

菊「何が縁なんだよ」

林「何でも宜えい、本当ね私わしが此方こつちやへ奉公に來た時始めてお前めえさんのお姿を見て、あゝ美おつこしい女中衆しゆだと思えました、斯ういう美おつこしい人は何家どけえ嫁付かたづいて往ゆくか、何ういう人を亭主に持ちおると思つてる内に、旦那さまのお妻さまだと聞きやしたから、抛よんどころねえと諦あきらめてるようなものゝ、寐ねても覺さめてもお前まえさんの事を忘れたことアないよ」

菊「冗談をお云いでない、忌いやらしい、彼方あつちへ往つてお寢よ」

林「往いきアしない、亥刻よつまでは往えかないよ」

菊「困るよ、其様なそんなに何時いつまでもいちやア、後生だからよ、明日あした  
又旨い物を上げるから」

林「何うしてお前さんの喰欠こいけを半分喰こうて見てえと思つてゝも、  
喰欠こいけを残した事がねえから、密そつと台所だいどころにお膳ぜんが洗わずにある  
時は、洗つた振りをして甜なめて、拭ぬいてしまつて置くだよ」

菊「穢きたないね、私ア嫌だよ」

林「それからね、何うかしてお前さんの肌を見てえと思つても見  
る事が出来ねえ、すると先達せんだつて前町まえまちの風呂屋ほろばが休みで、行水  
を浴つかつた事がありましたろう、此の時ばかり白い肌が見られると  
思つてると、悉皆戸すつかりで囲のぞつて覗く事が出来ねえ、何うかしてと思  
つてると、節穴すづりが有つたから覗くと、意地えじの悪い穴よ、斜はすに上の



方へ向いて、戸に大きな釘が出ていて頬辺を搔裂きイした」

菊「オホ、オホ、忌だよ」

林「其の時使った糠を貯つて置きたいと思つて糠袋をあけて、ちやんと天日にかけて、乾かして紙袋に入れて貯つておいて、炊立の飯の上へかけて喰うだ」

菊「忌だよ、穢い」

林「それから浴つた湯を飲もうと思つたが、飲切れなくなつて、どうも勿体ねえと思つたが、半分程飲めねえ、三日目から腹ア下した」

菊「冗談を云うにも程がある、彼方へお出でよ、忌らしい」

林「お菊さん、もう亥刻かな」

菊「もう直じきに亥刻だよ」

林「亥刻ならそろそろ始めねえばなんねえ」

とだんくお菊の側へ摺すり寄りしました。

## 二十一

其の時お菊は驚おどいて容かたちを正し、

菊「何をする」

と云いながら、側あに在りました烟管きせるにて林藏の頭を打ぶちました。

林「あゝ痛いてえ、何なんで打ぶつた、呆あれて物が云われねえ」

菊「早くお前の部屋へおいで何なんほ私が年いが往いかないと云つて、余あんま

り人を馬鹿にして、さ、出て行っておくれよ、本当に呆れてしま  
うよ」

林「出て往くも往かねえも要らねえ、否なら否で訳は分つてる、  
えきなりあたま  
突然頭部にやして、本当に呆れてしまふ、何だつて打つたよ」

菊「打たなくてさ、旦那様のお留守に冗談も程がある、よく考え  
て御覧、私は旦那さまに別段御鼻屑になることも知つていながら、  
気違じみた真似をして、直に出て往つておくれ、お前のような薄  
すぎたな

穢い者の女房に誰がなるものか」

林「薄穢けりアそれで宜えよ、本当に呆れて物が云われねえ、忌  
なら何も無理に女房になれとは云わねえ、私の身代が立派になれ  
ば、お前さんよりもつと立派な女房を貰うから、否なら否で分つ

てるのに、突然<sup>いきなり</sup>烟管で殴<sup>にや</sup>すてえことがあるか、頭<sup>けず</sup>へ傷が附いた

ぞ」

菊「打<sup>ぶ</sup>つたつて 当<sup>あたりまえ</sup> 然<sup>だ</sup>、さつさと部屋へおいで、旦那さまが

お帰りになつたら申上げるから」

林「旦那様がお帰りになりア此方<sup>こつち</sup>で云うて暇<sup>ひま</sup>ア出させるぞ」

菊「おや、何で私が……」

林「何も屎<sup>こそ</sup>も要<sup>え</sup>らねえ、さつさと暇<sup>ひま</sup>ア出させるように私<sup>わし</sup>が云うか

ら、然<sup>そ</sup>う思つて居るが宜<sup>え</sup>え」

と云い放つて立上る袖を捕<sup>とら</sup>えて引止め、

菊「何ういう理<sup>わけ</sup>由<sup>ゆ</sup>で、まお待<sup>まち</sup>よ」

林「何<sup>たもと</sup>だね袂<sup>たもと</sup>を押えて何うするだ」

菊「私が何でお暇いとまが出るんだえ、お暇いとまが出るといえば其の理由わけを聞きましよう」

林「エ、イ、聞けくも聞けかねえも要えらねえ、放はなさねえかよ、これ放はなさねえかてえにあれ着物けものが裂ひけてしまうじゃアねえか、裂ひけるよ、放はなさねえか、放はなしやがれ」

と林藏はプツプと腹を立てて庭の方へ出る途端に、チヨンく、  
チヨンく、

○「四ツでござアい」

と云う廻りの声を合あいに、松蔭大藏は裏手の花壇の方から密そつと拔ぬき足をいたし、此方こちらへまいるに出会あいました。

大「林藏じゃアねえか」

林「おや旦那様」

大「林藏出て来ちやアいかんなア」

林「いかんたつて私わしには居えられませんよ、旦那様、頭けずへ疵でが出来けました、こんなにやに殴にやして何うにも斯うにも、其そん様な薄穢えなかもい 田舎えなかも者のは否えやだよつて、突いきなり然え烟管で殴にやしました」

大「ウフ、、、菊が……菊が立腹して、ウフ、、、打うつたか、それで手前腹を立て、出て来たのか」

林「ヒエ左様でござえます」

大「ウム至極もつと尤もだ、少しの間己が呼ぶまで来るな、併しかし菊もまだ年がいかないから、死んでも否いやだと一ひとたび度断るは女子おなごの情だ、ま部屋に往つて寝ている」

林「部屋へ往つても寝られませんか」

大「ま、兎も角彼方へ往けく、悪いようにはしないから」

林「ヒエ左様なら御機嫌宜しゆう」

と林藏が己の部屋へ往く後、姿を見送つて、

大「えゝゝい」

と大藏は態と酔つた真似をして、雪駄をチャラく鳴らして、

井筒の謡を唄いながら玄関へかゝる。お菊は其の足音を存じてい

ますから、直に駈出して両手を突き、

菊「お帰り遊ばせ」

大「あい、あゝゝどうも誠に酔つた」

菊「大層お帰りがお遅うございますから、また神原様でお引留

で、御迷惑を遊ばしていらつしやることゝ存じて、先程からお歸りをお待ち申して居りました」

大「いや、どうも無理に酒を強<sup>しい</sup>られ、神原も中々の酒家<sup>のみか</sup>で、飲まんと<sup>き</sup>いうのを肯かずに勧めるには実に困つたが、飯も喫<sup>た</sup>べずに歸つて来たが、嘸<sup>さぞ</sup>待遠であつたらう」

菊「さ、此方<sup>こちら</sup>へ入らしつてお召換<sup>めしかえ</sup>を遊ばしまし」

大「あい、衣類<sup>きもの</sup>を着替ようかの」

菊「はい」

とお菊は直<sup>すぐ</sup>に乱<sup>みだればこ</sup>箱の中に入つて居ります黄八丈の袷<sup>あわせこそで</sup>小袖を出して着換させる、褥<sup>しとね</sup>が出る、烟草盆<sup>しとね</sup>が出来ます。松蔭大藏は自分の居間へ坐りました。



菊「御酒ごしゆは召上つていらつしやいましたろうが、御飯ごはんを召上りま  
すか」

大「いや勧めの酒はの幾許いくら飲んでも甘くないので、宅へ帰ると矢  
張また飲みたくなる、一寸ちよつと一盃いっぱい爛つけんか」

菊「はい、お湯も沸いて居りますし、支度もして置きました」

大「じゃア此処これへ持つて来てくれ」

菊「はい畏まりました」

と勝手を存じていますから、嗜たしなみの物を並べて膳ぜん立だてをいたし、  
大藏の前へ盃はい盤ばんが出ました。お菊は側へまいりまして酌をいた  
す。大藏は盃さかを執とつて飲んでお菊に差す。お菊は合あいに半分ぐら  
いずつ忌いやでも飲まなければなりません。

大「はあー……お菊先程林藏が先へ歸つたろう」

菊「はい、何だかも大層飲酔たべよつてまいりまして、大変な機嫌でございしましたが、も漸ようやく欺だまして部屋へ遣やりましたが、彼あれには余り酒を遣つかわされますといいけませんから、加減をしてお遣つかわし下さいまし」

大「ウム左様か、何か肴の土産を持つて参つたか」

菊「はい、種いろく々頂戴致しましたが、私わたくしは宜よいからお前持つて往ゆくが宜い、折角下すつたのだからと申して皆彼あれに遣つかわしました」

大「あゝ然そうか、あゝー好よい心持だ、何処どこで酒を飲むより宅へ歸つて氣儘に座を崩して、菊の酌で一盃飲むのが一番旨いのう」

菊「貴方また其様そんな御容子の好よいことばかり御意遊わたくしばします、私わたくしのような此様こんなはしたない者がお酌をしては、御酒ごしゆもお旨くなか

ろうかと存じます」

大「いや／＼どうも実に旨い、はア……だかの、菊、酔つて云うのではないが表<sup>おもてむき</sup>向、ま手前は小間使<sup>こまづかい</sup>の奉公に來た時から、器量と云い、物の云い様裾<sup>よすそ</sup>捌<sup>さば</sup>き、他<sup>ほか</sup>々の奉公人と違ひ、自然に備わる品<sup>ひん</sup>というものは別だ、実に物堅い屋敷にいながら、仮令<sup>たとひ</sup>己が昇進して、身に余る大祿を頂戴するようなことになれば、尚更慎まねばならん、所がどうも慎み難く、己が酔つた紛れに無理を頼んだ時は、手前は否<sup>いや</sup>であつたらう、否<sup>いや</sup>だらうけれども性<sup>せい</sup>來<sup>らい</sup>伶俐<sup>りごう</sup>の生れ付ゆえ、否だと云つたらば奉公も出来難<sup>できにく</sup>い、辛く当られるだらうと云うので、ま手前も否<sup>いや</sup>々ながら己の云うことを聞いてくれた処は、夫<sup>そ</sup>りア己も嬉しゆう思<sup>い</sup>うて居<sup>い</sup>るぞよ」

菊「貴方また其様な事を御意遊ばしまして、あのお話だけは……」

大「いゝえさ誰にも聞かする話ではない、表向でないから、もう一つ役替でも致したら、内々は若竹の方でも己が手前に手を付けた事も知っているが、己が若竹へ恩を着せた事が有るから、彼も承知して居り、織江の方でも知って居ながら聊かでも申した事はない、手前と己だけの話だが手前は嘸厭だろうと思つて可愛相だ」

菊「あなた、何ぞと云うと其様な厭味なことばかり御意遊ばします、これが貴方身を切られる程厭で其様なことが出来ますものはございません」

大「だが手前は己に物を隠すの」

菊「なに私わたくしは何も隠した事はございません」

大「いんにや隠す、物を隠すというのも畢ひつき竟よう主しゅう従じゅうという

隔へだてがあつて、己は旦那様と云われる身分だから、手前の方でも

己を主人と思えば、輕けい卒そつの取扱いも出来ず、斯う云つたら悪か

ろうかと己に物を隠す処が見えると云うのは、船上忠平は手前の

兄だ、それが渡邊織江うちの家に奉公をしている、其そこ処こに云うに云わ

れん処こがあるう」

菊「何を御意遊ばすんだか私わたくしには少しも分りません、是迄私は何

でも貴方にお隠し申した事はございません」

大「そんなら己から頼みがある、併しかし笑つてくれるな、己が斯かく

まで手前に迷つたと云うのは眞実惚れたからじゃ、己も新役でお

抱かゝになつて間のない身の上で、内ないし妾しょうを手許てもとへ置いては同役の聞きこえもあるから、慎しんまなければならんのだが、其の慎しんみが出来んという程惚せつれた切せつなる情じょうを話わすのだが、己おのれは何も御新造ごしんぞのある身の上でないから、行ゆく々くは話をして表向手前うらむかへを女房にようぼうにしたいと思つている」

菊「どうも誠にお嬉しゅうございます」

大「なに嬉うれしくはあるまい……なに……真まに手前てまへ嬉うれしいと思おもうなら、己おのれに起請きしやうを書いてくれ」

菊「貴方あなた、御冗談ごじだんばかり御意遊ごいあそばします、起請きしやうなんてえ物ものを私わたくしは書かいた事はことございせんから、何なにう書かくものか存ぞんじません」

大「いやさ己おのれの気休きやすめと思おもつて書かいてくれ、否いやでもあろうが其それ

を持っておれば、菊は斯ういう心である、すえ末々まで己のものと安心をするような姿で、それが情だの、迷ったの、笑ってくれるな」

菊「いゝえ、笑うどころではございませんが、起請などはお止し遊ばせ」

大「ウゝム書けんと言うのか、それじゃア手前の心が疑われるの」

菊「だって私わたくしは何もお隠し申すことはありませんし、起請などを書かんでも……」

大「いや反古ほごになつても心嬉しいから書いてくれ、すざりばこ硯箱すざりばこをこ

れへ……それ書いてくれ、文面は教えてやる……書かんというと手前の心が疑うたぐられる、何か手前の心に隠している事が有ろう、然そ

うでなければ早く書いてくれ」

菊「はい……」

とお菊は最前大藏が飴屋の亭主を呼んで、神原四郎治との密談を立たちぎ聞をしたが、其の事ことでこれを書かせるのだな、今こゝで書かなければ尚疑われる、兄の勤めている主人方へお屋敷の一大事を内通をする事も出来ん、先方の心の休まるように書いた方が宜かろうと、羞はかしはそうに筆を執りまして、大藏が教ゆる通りの文面をすらく書いてやりました。

大「まア待て、待てく、名を書くのに松蔭と書かれちやア主人のようだ、何処までも恋の情でいかんければならん、矢張ぷつぷつに大藏殿と書け」



菊「貴方のお名を……」

大「ま書けく、字配りは此処こゝから書け」

と指を差された処へ筆を当て、ちやんと書いた後のち、自分の名を羞かしそうにきくと書き終り、

菊「あの、起請は神に誓いまして書きますもので、血か何か附けますのですか」

大「なに血は宜しい、手前の自筆なれば別に疑うところもない、あゝ有難い」

おおしいたぐ 押お戴ぐいて巻納まきおさめもう一いっ盃ぱい。と酒を飲みながら如何いかなることをか工たくむらん、続けて三さん盃ぱいばかり飲みました。

大「あゝ酔った」

菊「大層お色に出ました」

大「殺して居た酒が一時に出ましたが、あの花壇の菊は余程咲いたかの」

菊「余程咲きました、咲乱れて居ります」

大「一寸見たいもんだの」

菊「じゃアお雪洞を点けましょう」

大「然うしてくれ」

菊「お路地のお草履は此処にあります、飛石へお躓き遊ばすと

危うございますよ」

大「お、宜い〜〜」

と躓けながらぶらり〜行くのを、危いからお菊も後から雪洞

を提げて外の方へ出ると花壇があります。此の裏手はずつと崖になつて、下ると谷中くだ新幡しんぼんずい随院いんの墓場こちちら此方はお馬場口になつて居りますから、人の往来ゆきは有りません。

大「菊々」

菊「はい」

大「其処そこへ雪洞を置けよ」

菊「はい置きます」

大「灯火あかりがあつては間が悪いのう」

菊「何を御意あそばします」

大「これ菊、少ししゃが蹲んでくれ」

菊「はい」

左の手を出して……お母が二歳三歳の子供を愛するようにお菊の肩の処へ手をかけて、お菊の顔を視詰めて居りますから、

菊「あなた、何を遊ばしますの、私は間が悪うございますもの……」

大藏は四辺を見て油断を見透し、片足挙げてポーンと雪洞を蹴上げましたから転がって、灯火の消えるのを合図にお菊の胸倉を捉つて懐に匿し持つたる合口を抜く手も見せず、喉笛へプツリと力に任せて突込む。

菊「キヤー」

と叫びながら合口の柄を右の手で押え片手で大藏の左の手を押えに掛りまするのを、力に任せて捻倒し、乗掛つて、

大「ウゝー」

と抉こじつたから、

菊「ウーン」

パタリとそれなり息は絶えてしまい、大藏は血のりだらけになりま  
した手をお菊の衣類きもので拭きながら、密そつと庭伝いに来まして、三尺  
の締しまりのある所を開けて、密つと廻つて林藏という若党のいる部屋  
へまいりました。

二十二

大「林藏や、林藏寝たか林藏……」

林「誰だえ」

大「己だ、一寸ちよつと開けてくれ」

林「誰だ」

大「己だ、開けてくれ、己だ」

林「いやー旦那さまア」

大「これく」

林「何うして此こ様な処へ」

大「静かにく」

林「ど何ういう事で」

大「静かに……」

林「はい、只今開けます、灯火あかりが消えて居りますから、只今……

先刻さつきから種々いろく考えて居て一寸ちよつとも眠ねられません、へえ開けます」  
がらくく。

林「先刻の事が気になつて眠ねむられませんよ」

大「一緒に来いく」

林「ひえく」

大「手前の手許てもとに小短い脇差で少し切れるのがあるか」

林「ひえ、ござえます」

大「それを差して来い、静かにく」

と是れから林藏の手を引いて、足音のしないように花壇もとの許もとまで連れて来まして、

大「これ」

林「ひえく」

大「菊は此の通りにして仕舞った」

林「おゝ……これは……どうもお菊さん」

大「これさ、しツく……主人の言葉を背く奴だから捨置き難い、

どうか始終は林藏と添わしてやりたいから、段々話をして肯入

れんから、已むを得ず斯の通り致した」

林「ひえゝ、したがまア、殺すと云うはえれえことになりました、

可愛相な事をしましたな」

大「いや可愛相てえ事はない、手前は菊の肩を持って未練がある

の」

林「未練めれんはありませんが」



大「なアに未練みれんがある」

と云いながら、やつと突いきなり然林藏の胸倉とらを捉えますから、

林「何をなさいます」

と云う所を、押倒しぎま林藏が差して居ました小脇差を引抜いて咽のどぶえ笛つぎとおへプツーリ突つぎとお通す。

林「ウワー」

と悶もが搔く所を乗掛つて、

大「ウ、ーン」

と突つぎつらぬ貫くく、林藏は苦くる紛しまぎれに柄つかもと元へ手を掛けたなり、

林「ウ、ーン」

と息が止りました。是から大藏は伸上つて庭外そとを見ましたが人

も来ない様子ゆえ、

大「しめた」

と大藏は跡へ歸つて硯箱を取出して手紙を認め、是から菊が書いた起請文を取出して、大藏とある大の字の中央へ（一）《ぼう》（を）通して跳ね、右方へ木の字を加えて、大藏を林藏と改書して、血をべつとりと塗附けて之を懐中し、又々庭へ出て、お菊の懐中を探して見たが、別に掛守もない、帯止を解いて見ますと中に守が入つて居ますから、其の中へ右の起請を納れ、元の様に致して置き、夜が明けると直に之を頭へ届けました。又た有と云う男に手紙を持たせて、本郷春木町三丁目の指物屋岩吉方へ遣わしましたが、中々大騷で、其の内に検使が到来致し

まして、段々死人を検めますと、自ら死んだように、あいくち 七首を握り詰めたなりで死んで居ります。林藏も刀の柄元を握詰め喉を貫ついて居おりますから、如何どういう事かと調べになると、大藏の申もうしたて立たに、平素つねから訝おかしいように思つて居りましたが、予かねて密通を致し居り、痴情のやる方なく情死を致したのかも知れん、何か証拠が有ろうと云うので、懐ふところ中から守まもり袋ぶくろを取出して見ると、起請文が有りましたから、大藏は小膝を礎はたと打うちまして、大「訝あやしいと存じて、咎とがめた時に、露顕したと心得情死を致しましたと見ゆる、不憫ふびんな事を致した、なに死なんでも宜よいものを、彼あれまでに目を懸けて使あつたものを」

など、真まことしやかに陳のべて、検使の方は済みましたが、今年五

十八になります、指物屋の岩吉が飛んでまいり、船上忠平という二十三になる若党も、織江方から飛んでまいりました。

大「これく此処へ通せ、老爺此処へ入れ」

岩「はい、急にお使でございましたから飛んで参りました、どうも飛んだことで」

大「誠に何ともはやお気の毒な事で、斯ういう始末じゃ」

岩「はい、どうも此の度の事ばかりは何ういう事だか私には一向

訳が分りません、貴方様へ御奉公に上げましてから、旦那様が

お目をかけて下さり、斯ういう着物を、やれ斯ういう帯をと拵え

て戴き、其の上お小遣いまで下さり、それから櫛簪から足の爪先

まで貴方が御心配下さるてえますから、彼様な結構な旦那さまを

しくじつちやアならんよ、己は職人の我が雑者ざつもので、人の前で碌に口もきかれない人間だが、行ゆく々お前を宜いい処かたへ嫁かたづ付けてやると仰しやつたというから、私はそれを樂たのんで居りましたが、何ういうわけで林藏殿と悪い事をするたのと云うは……のう忠平、一つ屋敷にいるから手前は他の仲ちゆうげん間しゆう衆の噂でも聞いていそなものだつたのう」

忠「噂にも聞いた事がございません、そんなれば林藏という男が美男びなんという訳でもなし、彼の通ありの醜ぶおとこ男子、それと斯ういう訳になろうとは合点がまいりません、お父とつさん、ねえ少ちいさいうちから妹は其そん様な了簡りょうかんの女ではないのです、何か是には深い訳があるだろうと思ひます」

と互に顔を見合せましたが、親父の岩吉には尚お理由が分りませんから、

岩「訳だつて私にはどうも分らん、林藏さんと斯ういう事になろう筈がないと申すは、旦那さま、此の間菊へ一寸お暇を下さいました時に、宅へまいりましたから、早く帰んなよ、然うしない

と旦那様に済まねえよ、親元に何時までもぐずぐずして居てはならないと申したら、お父さん、私はと何か云い難い事がある様子で、ぐずぐずして居ましたが、何方もいらつしやいませんからお話を致しますが、お父さん、私は浮気じゃアないが、私のような者でも旦那様が別段お目をかけて下さいますよと云いますから、お前を奉公人の内で一番目をかけて下さるのか、然うじゃアない

よ、別段に目をかけて下さるの、何ういう事だと聞きましたら、私ア旦那さまのお手が附いたけれども、此の事が知れては旦那様のお身の上に障さわるから、お前一人得心で居てくれろと申しますから手前は冥加至極な奴だ、彼あ様な好よい男の殿様のお手が附いて：道理でお屋敷へ上ある時から、やれこれ目を掛けて下さると思つた、併しかし他ほかの奉公人の妬そみを受けやアしないかと申しましたが、結構な事だ有難いことだと実は悦んで安心していました、菊も悦んで親へ吹聴致すくらいで、何うして林藏さんと……」

大「こらく大きな声をしては困りますな、併し岩や恋は思案の外ほかという諺けぶりもあつて、是ばかりは解りませんよ、そんならば宅うちにいて気振けぶりでも有りそうなものだったが、少しも気振を見せない、

もつとゆう  
 尤も主家来だから気を詰るところもあり、同じ朋輩同志人目を忍  
 んで密あいびき会たのしをする方が又楽みと見えて、林藏という者が来た時か  
 ら、菊が彼かれに優しくいたす様子、林藏の方でもお菊さんくわくと親  
 む工合ぐあいだから、結構な事だと思つて居たが、起請まで取とり交かわして  
 心中を仕ようとは思いません、実に憎い奴とは思ひながら、誠に  
 不憫な事をして、お前の心になつて見れば、立腹する廉かどはない、  
 お前には誠に気の毒で、忠平どんも未だ年とし若わかではあるし、他に  
 兄弟もなく、嘸さぞと察する、斯うして一つ屋敷内やしきうちに居るから、恥  
 入ることだろうと思う、実に気の毒だが、斯この道ばかりは別だか  
 らのう」

忠「へえ、（泣声にて）お父とつさん何なんたる事になりましたろう、私わたくし



は旦那様の処へ奉公をして居りましても、他の足輕や仲間共に対して誠に顔向けが出来ません、一人の妹が此様な不始末を致し、御当家様へ申訳がありません」

大「いや、仕方がないから、屍体のところは直に引取ってくれるように」

岩「へえ畏りました」

と岩吉も忠平も本当らしいから、仕方がない、お菊の屍骸を引取つて、木具屋の岩吉方から野辺の送りをいたしました。九月十三夜に、渡邊織江は小梅の御中屋敷にて、お客来がござりまして、お召によつて出張いたし、お饗応をいたしましたので、余程夜も更けましたが、お客の帰った跡の取片付けを下役に申付けまし

て、自分は御前を下り、小梅のお屋敷をしますと、浅草寺の亥刻の鐘が聞えます。全体此の日は船上忠平も供をして参つておつたところが、急に渡邊の宅から手紙で、嬢様が少しお癩気だと申してまいりました。嬢様の御病気を看病致すには、慣れたものが居らんければ不都合ゆえ、織江が忠平に其の手紙を見せまして、先へ忠平を帰しましたから、米藏という老僕に提灯を持たして小梅の御中屋敷を立出で、吾妻橋を渡つて田原町から東本願寺へ突当つて右に曲り、それから裏手へまいり、反圃の海禅寺の前を通りまして山崎町へ出まして、上野の山内を抜け、谷中門へ出て、直ぐ左へ曲つて是から只今角に石屋のあります処から又後へ少し戻つて、細い横町を入ると、谷中の瑞

林寺りんじという法華寺ほっけでらがあります、今三浦の屋敷へ程近い処まで来ると、突然だしぬけに飛出した怪しげなる奴が、米藏の持った提灯をばつさり切つて落す。

米「あつ」

と驚く、

織「何者だ、うぬ、狼藉ろうぜき……」

と後あとへ退さがるところを藪蔭からプツッリ繰出した槍先にて、渡邊ひばらの肋を深く突く

織「ム、ーン」

と倒れて起上ろうとする所を、早く大刀の柄つかに手をかけると見えましたが、抜打ぬきうちに織江の肩先深く切付けたから堪りません。

織「ウゝーム」

と残念ながら大刀の柄へ手を掛けたまゝ息は絶えました。

二十三

渡邊織江が殺されましたのは、夜のよ子刻こゝのつ少々前で、丁度同じ時刻に彼のか春部梅三郎が若江というお小姓の手を引ひいて屋敷を駈落致しました。昔は不義はお家の御法度ごはつとなどと云つてお手打になるような事がございました。そんならと申して殿様がお堅いかと思いますと、殿様の方にはお召使が幾いくたり人もあつて、何か月に六ろくさ齋いずつ交かわる／＼お勤めがあるなどというごんさい権妻を置散おきちらかし

て居ながら、家来が不義を致しますと手打にいたさんければならんとは、ちと無理なお話でございますが、其の時分の君臣の権けんし識きは大たいして違ちがつて居おりましたもので、若江が懐妊したようだといことうから、何うしても事露頭を致します、殊ことには春部梅三郎の父が御舎弟様から拝領いたしました小柄こづかを紛ふんじつ失致しじつしました。これも表向に届けては喧やかましい事でありませぬ、此方こなたも心配致している処へ、若江が懐妊したから連れて逃げて下さいという、そんなら……、と是から兩人共身支度をして、小包を抱え、若氣の至りとは云いながら、高たかも家も捨て、春部梅三郎は二十三歳で、其の時分の二十三は当今のお方のように智慧分別も進んでは居りませぬから、落着く先の目途あてもなく、お馬場口から曲つて来ると崖の

縁ふちに柵さく矢来やらいが有りまして、此方こちらは幡随院ばんずいの崖がきになつて居りまして、此方こゝに細流ながれがあります。此処こゝを川端かわばたと申します。お寺が幾らも並んで居ります。清元の浄瑠璃じやうるりに、あの川端かわばたへ祖師そしさんへなどと申す文句ぶんぐのござりませぬのは、此の川端かわばたにある祖師堂そしだうで、此の境内きんには俳優岩井家代々の墓かぶがございます。夜よに入いつては別に往ゆ来きもない処ところで、人目ひとめにかゝる氣遣きぢいはないからと申すので、是から合図あひづをして藪蔭くさやへ潜くぐり込み、

若「春部さま」

梅「あい、私は誠まことに心配しんぱいで」

若「私も一生懸命いっせけんめいに信心しんじんをいたしまして、貴方あなたと御一緒ごいっしょに此の外このほかへ出てしまえば、何様どんな事ことでも宜よろしゆうございますけれども、お

屋敷にいる内に私が捕りますと、貴方のお身に及ぶと存じて、本  
 当に私は心配いたしました。宜く入らして下さいました」

梅「まだ廻りの来る刻限には些と早い、さ、これを下りると川端  
 である、柵が古くなっているから、直に折れるよ、裾をもつと端  
 折らにやアいかん、危いよ」

若「はい、畏りました、貴方宜しゅうございますか」

梅「私は大丈夫だ、此方へお出でなさい」

とはから二人ともになだれの崖縁を下りにかゝると、手拭で  
 すつぽり顔を包み、紺の看板に真鍮巻の木刀を差した仲間  
 体の男が、手に何か持つて立つて居る様子、其所へ又一人顔を  
 包んだ侍が出て来る。若江春部の両人は忍ぶ身の上ゆえ、怖い恐

ろしいも忘れて檜ひのきうえごみの植込ひとむらの一叢茂る藪の中へ身を縮め、息をこらして匿かくれて居りますと、顔を包んだ侍が大小を落おとし差さにいたして、尻からげに草履ぞうりを穿はいたなり、つかくくと参り、

大「これ有助」

有「へえ、これを彼かの人に上げてくれと仰しやるので、へいしく首尾は十分でございましたな」

大「うん、手前は之を持って、予かねての通り道どうかん灌山やまへ往いくのだ」  
有「へい宜しゆうございます、文箱ふばこで」

大「うん、取落さんように致せ、此の柵ぬを脱ぬけて川を渡るのだ、水の中へ落してはならんぞ」

有「へえく大丈夫で」



大「仕損ずるといけんよ」

有「宜しゆうございます」

と低声こっせえでいうから判然はつきりは分りませんが、怪しい奴と思つて居

ります内に、彼の侍はすつと何れいずへか往つてしまいました。チヨ

ンチヨンくくく。

廻「丑刻やつでございます」

と云う廻りの声にて、先の仲間体の男は驚き慌て、柵くすを潜つて

出る。春部は浮気をして情婦おんなを連れ逃げる身の上ではありますが、

一体忠義の人でございますから、屋敷内に怪しい奴が忍び込むは

盗賊か何だか分りませんから、

梅「曲くせもの者待て」

と云いながら領上えりがみを捕とらえる。曲者は無理に振払おうとする機はずみに文箱ふばこの太い紐に手をかけ、此方こなたは取ろうとする、彼の者かは取られまいとする、引合はずみにぶつりと封じは切れて、文箱ふたの蓋ふたもろともに落たる密書、曲者はこれを取られてはならんと一生懸命に取返しにかゝる、遣やるまいと争う機やみに、何ういう拍子か手紙ななかばの半を引裂ひっさいて、ずんと力ちからあし足を踏むと、男はころ／＼とーんと幡随院の崖がけべり縁へ転がり落ちました。其の時耳近く。廻や「八つでございます」

と云う廻りの声に驚ひきさき引裂いた手紙を懐中して、春部梅三郎は若江の手を取つて柵を押分け、身体を横にいたし、漸ようようの事こで此こ処ゝを出て、川を渡り、一生懸命にとつと、団子坂だんござかの方へ逃げて、

それから白山はくさんどお通りへ出まして、駕籠かごを雇い板橋いたばしへ一泊して、翌日しゅつたつ出立を致そうと思ひますと、秋あきさめ雨がおおぶり大降に降り出してまいって、出立をいたす事が出来ませんから、仕方なしに正午ひる過ぎすぎまで待つて居りまして、午飯ひるはんを食たべると忽たちまちに空が晴れて来ましたから、

梅「どうか此宿こゝを出る所だけは駕籠に仕よう」

と駕籠で大宮までまいりますと、もう人に顔を見られても氣遣いはないと、駕籠をよして互に手を引合い、漸々だんく大宮の宿しゆくを離れて、桶川おけがわを通り過ぎ、鴻こうの巢すの手前の左は桑島で、右手の方は杉山の林になつて居ります処までまいりました。御案内の通り大宮から鴻の巢までの道程みちのりは六里ばかりでございます。此処こゝまで

来ると若江は蹲しゃがんだまゝ立ちません。

梅「何うした、足を痛めたのか」

若「いえ痛めやア致しません、只一体に痛くなりました、一体に草臥くたびれたので、股ももがすくんで些ちつとも歩けません」

梅「歩けないと云われては誠に困るね、急いで往いかんければなりません」

若「も往ゆけません、漸ようよう此処まで我慢して歩いて来ましたので、わたくしんな私は此様に歩いた事はないものですから、最もう何うしても往いけません」

梅「往いけませんたつて：誠に子供のよふなことを云っているから困りますな、是から私わしの家来うちの家へでも往いくならまだしも、お前

の親の許もとへ往つて、詫言わびごとをして、暫しばらうく置いて貰もらわなければなりません、それだのにお前まへが其そこ処で草臥くたれたと云つて屈かんで、氣樂きらくな事を云つて居る場合にはありません」

若わたくし「私も実に心配ですが、どうも歩けませんもの、もう少しお駕籠をお雇こい遊あそばすと宜よろしゆうございましたのに」

梅「其その様なことを云つたつて、今時分こゝらに駕籠はありませんですよ、それでも装なりはずつかり変えても、頭あたま髪かみの風ふうが悪いから、頭巾を被つても自然と知れます、誠に困りました」

若「困るたつて、どうも歩けませんもの」

梅「歩けんと云つて、そうして居ては……」

若「少し負おぶつて下さいませんか」

梅「何うして私も草臥わしれています」

先の方へぽくく行く人が、後うしろを振ふりかえ反かえつて見るようだが、暗いので分らん。

梅「えゝもし……其そこ処こにおいでのお方」

男「はつ……あゝ恟びつくりした、はあゝえら魂たまげ消たやした、あゝ怖おっかね

え……何かぽくく黒くろえ物が居いると思おもつたが、こけえらは能よむしなく貉たぬの出る処ところだから」

若「あれまア、忌いやな、怖おそいこと……」

男「まだ誰か居いるかの……」

梅「いえ決して心配な者ではありません、拙おろ者は旅りょの者でござるが、足弱あしよわづれ連づれで難儀致あやまして居おるので、駕籠かごを雇よりたいと存ぞんずるが、

此の辺に駕籠はありますまいか、然うして鴻の巢まではまだ何の位ありませう、それに其方は御近辺のお方か、但し御道中のお人か」

男「私は鴻の巢まで帰るものでござえますが、駕籠を雇つて後へ帰つても、十四五丁入らねえばなんねえが、最う少し往けば鴻の巢だ、五丁半べえの処だアから、同伴でも殖えて、まあね少しは紛れるだ、私も怖ねえと思つて、年い老つてるが臆病でありやすから、追剥でも出るか、狸でも出たら何うしべえかと考えく来たから、実に魂消たね、飛上つたね、いまだにどうく胸が鳴つてるだ……見れば大小を差しているようだ、お侍さんだな、どうか一緒に連れて歩いてくだせえ、私も鴻の巢まで参るもので」

梅「それは幸いな事で、然らば御同伴ごどうはんを願いたい」

男「えゝゝこゝで飯まんまア喰う訳にはまいりやせん、お飯を喰えつて」

梅「いえ、御同道ごどうどうをしたいので」

男「アハ、ハ、ハ、一緒に行くという事か、じゃア、御一緒にめえり  
ますべえ……草臥れて歩けねえというのは此の姉ねえさんかね、それ

は困つたんべえ、江戸者ちゆう者は歩きつけねえから旅へ出ると  
意気地いくじはねえ、私わしも宿屋にいますが、時々客人まめが肉刺工踏出して、  
吹ふき売がらに糊のり付つけ板いたを持って来こうてえから、毎いっでも糊板いっを持って行

くだが、足の皮がやつこいだからね、お待ちなせえ、私わしア独り歩  
くと怖えから、提灯つちあんを点つけねえで此の通り吊ぶらさげているだ。同伴つれ  
が殖えたから点つけやすべえ」



梅「お提灯は拙者が持ちましよう」

男「私わしア此処こゝに懐中附木かいちゆうつけぎを持つてる、江戸見物に行った時に山下で買ったぐが、赤い長太郎ちやうたろうだま玉たまが彼あれと一緒に買っただが、附木だつて紙きつ切きだよ、火絮ほくちがあるから造作もねえ、松の蔭はいへ入らねえじゃア風がえら来るから」

と幾度もかちくやつたが付きません。

男「これは中々点かねえもんだね、燧いしが丸くなってしまつて、それに火絮やつとが湿つてるだから……漸やつとの事で点いただ、これでこの紙の附木こしれに付けるだ、それ能く点くべい、えら硫黄臭いが、硫黄で拵こしれえた紙だに見える、南風でも北風でも消えねえつて自慢して売おせるだ、点けてしまつたあとは、手で押おせえて置けば何日いつでも御重ごちよう

ほう  
宝だつて」

梅「じゃア拙者が持ちましよう、誠にお提灯は幸いの事で、さ我慢して、五町ばかりだと云うから」

若「はい、有難う存じます」

男「お草臥れかね、えへへへ、顔を其方そつちへ向けねえでも宜よい」

若江は頭巾を被つて居りますから田舎者の方では分りませんが、若江の方で見ると、旧来我家わがやに勤めてせいぞういる清藏せいぞうという者ゆえ、嬉しさの余り草臥れも忘れて前へすすり出まして、

若「あれまア清爺せいじいや」

清「へえ……誰だ……誰だ」

若「誰だつてまア本当に、頭巾を被っているから分るまいけれど

も私だよ」

と云いながらお高祖頭巾こそぞきんをとるを見て、

清「こりやア何とまア魂消たね、何うして……やアこれ阿魔ア：  
……」

梅「何だ阿魔とは怪けしからん、知る人かえ」

若「はい、私わたくしの処こゝの親父おんぢやうの存ぞん生しょう中ちゆうから奉公して居ります老じ僕いやですが、こゝで逢あいましたのは誠まことに幸さいいな事ことで」

清「ま、どうして来たただアね、宿やど下さがりの時にア私わしは高崎まで行いつて、留守で逢あわなかつたが、大おほくなつたね、今年で十八だつて、今日も汝われが噂わづらアしてえた処こゝだ、見違みちがえるようになって、何とはア立派な姿だアな、何うして来た、宿下りか」

若「いゝえ、私はまたお前に叱られる事が出来たのだけれども、お母つかさま様に詫言わびごとをして、どうか此のお方と一緒に宅うちへ置いて戴くようにしておくれな」

清「此のお方様てえのは」

と梅三郎を見まして、

「此のお方様が……貴方は岡田さまか」

梅「えゝ拙者は春部梅三郎と申す者で、以後別懇べっこんに願います」

清「へえ、余り固く云つちやア己がに分りやせん、ま何ういう訳で、あゝ是は失策しくじりでもして出て、貴方あんたが随ついて参ったか」

梅「いや別に上かみへ対して失策しくじりもござらんが、兩人とも心得違いをいたし、昨夜屋敷を駈落かいたしました」

清「え屋敷を出たア…」

若「此のお方様もお屋敷に居られず、私も矢張居られない理由になつたが、お母さんは物堅い御気性だから、屹度置かないと仰しやるだろうが、此のお方も、何処へも行き所のないお方で、後生だから何日までも宅に居られるようにしておくな」

清「むゝう……此の人と汝がと二人ながら屋敷に居られねえ事を出来して仕様がなく、駈落をして来たな」

若「あゝ」

清「あ……それじゃア何か二人ともいまア不義アして居ただアな、いゝや隠さねえでも宜い、不義アしたつて宜い、宜いゝゝ能くした、大かくなるもんだアな、此間まで頭ア蝶々見たように結

つて、まさきやわら 梶の嫩なつこい葉はでこしらピイいくを拵こしらえて吹ふいてたのが、此こ様んな  
でか大おとこくなつて、綺おとこ麗こな情こ夫んを連つれて突つ走つつて来こたか、自こ分んの年い  
と老しんつたのは分しんんねえが、汝われがえか大えかくなつたで知しれらあ、心しん配べせね  
 えでも宜えい、お母ふくろさまが置おくも置おかねえもねえ、何なんうしても男おとこと  
 女めはわるさあするわけのものだ、心しん配べせねえでも宜えい、どうせ  
むこようし智ち養よう子しをせねえばなんねえ、われが死しんだと父とさまの達と者つの時と分つ  
なしみかの馴な染じで、己おが脊せ中ちゆうで眠ねたり、脊せ中ちゆうで小は便り垂たれたりした娘  
こ子こが、大でかくなつたゞが、お前まへさんもまんざら忌いやならば此こ様んな処  
ふつばまで手てを引ひ張ちつて逃にげてめえるきづけの氣き遣いえもねえが、宿しゆく屋ゐのむこ婿こになつ  
くそぞうりたら何なんうだ、屎くそ草ぞう履りを直ちさねえでも宜えいから」  
 梅「それは有あ難なんい事ことで、何なんのよう様ような事ことでもいたしますが、拙せつ者しやくは屋

敷育ちで頓とんと知己しるべもござらず、前まえ町まちに出入町人はございますが、  
 前町の町人どもの方かたへも参られず、他人ひとの娘むすめを唆そゝかしたとお腹立  
 もございませうが、お手前様から宜しくお詫わがびを願ねがひたい、若も  
 し寺へまいるような子供でもあれば、四書五経ぐらいは教えまし  
 ても好よし、何うしても困る時には御厄介ごやくけいにならんよう、人家ひとの門かど  
 に立ち、謡うたいを唄うたい、聊いさゝかの合ごうり力よくを受けましても自分の喰たべるだ  
 けの事は致いたす心得こころえ」  
 清「其その様な事ことをしねえでも宜ええ、見つともねえ、聳こぶになつてお母はは  
 の厄介やくけいになりたくねえたつて、歌うたア唄うたつて表あらわえ歩いて合あ力りきでえ物  
 を売うつて歩いて、飴屋あめや見たみたような事はさせたくねえ、あの頭あたまの上  
 へ籠かごか何なにか乗のりて売うつて歩くあるのだらう」

梅「いえ、左様な訳ではございません」

清「然うで無えにしても其様な事は仕ねえが宜い、そろく参り  
ましよう、提灯を持っておくんなせえ、先へ立つて」

若「お前ね、私は嬉しいと思つたら草臥れが脱けたから宜いよ」  
清「まあぶつされよ」

若「宜いよ」

清「宜いたつて大くなつていやらしく成つたもんだから、間ア悪  
がつて……早く負つされよ、少さえうちは大概私が負つたんだ、

情夫おとこが居るもんだから見えして、われが友達の奥田おくだの兼野郎かねなア

立派わけな若え衆しゅうになつたよ、汝われがと同年おねえどしだが、此の頃じやア肥  
手桶いたごも新しいんでなけりや担かつぎやアがんねえ、其様そんなに世話ア焼か



さずぶつに負ぶつされよ」

二十四

鴻の巢の宿屋では女主人おんなあるじが清藏の歸りの遅いのを心配いたして、

母「あの清藏はまだ歸けえりませんか……何うしたか長ながえ、他の者を使いによれば、今までにやア歸かえるだに……こら、清藏が歸けえつたようじゃアねえか、歸けえつたら直すぐに此処こゝへ来こうといえ」

清「へえ、只今往つて参めえりました……もし、此の人は何とか云つ  
け、名は……」

若「春部さま」

清「うん春部梅か成程……梅さん、そこな客座敷は六畳しかないが、客のえらある時にやア此処へも入れるだが常にア誰も来ねえから、其処そこに入つて居な、一旦詫わびをしねえ内は仕方がねえから……へえ往つて参りました」

母「余あんまり長えじやアねえか」

清「長えつて先方むこうで引留めるだ、まア一盃いっばい飲んで往けと云つて、どうか船の利かないところを、お前めえの馬に積んで二三けえ帰り廻してくれと云つていたが、薪まきは百把ひゃつばに二十二三把安やすいよ」

主「それは宜よかつけな」

清「何よ、それ何なんに逢いやした、それ……」

母「誰だ」

清「誰だつて大<sup>えか</sup>くなつて見違<sup>みちげ</sup>えたね、屋敷姿は又別だね、此<sup>こゝ</sup>処<sup>と</sup>を斯<sup>あんばい</sup>ういう塩梅に曲<sup>ま</sup>げて、馬糞<sup>まぐそうけ</sup>受<sup>ま</sup>見たように此<sup>こゝ</sup>処<sup>と</sup>にぺらく下<sup>あたま</sup>げて来<sup>あ</sup>た<sup>ま</sup>つ<sup>ま</sup>けね、今日<sup>けふ</sup>の髪<sup>かみ</sup>ア違<sup>ちが</sup>つて、着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>も何<sup>なに</sup>だか知<sup>し</sup>んねえ物<sup>もの</sup>を着<sup>き</sup>て来<sup>き</sup>たんだ、年<sup>とし</sup>い十八<sup>じゅうはち</sup>じやア形<sup>なり</sup>い大<sup>で</sup>えな、それ娘<sup>むすめ</sup>のおわかよ、父<sup>とつ</sup>さまに似<sup>に</sup>てえ<sup>え</sup>るだ」

母「あれまア何<sup>ど</sup>処<sup>け</sup>え」

清「六<sup>む</sup>畳<sup>じやう</sup>に居<sup>い</sup>るだ」

母「あれまア早<sup>はや</sup>くそう云<sup>い</sup>え<sup>え</sup>ば宜<sup>え</sup>い<sup>い</sup>じやアねえか」

清「遅<sup>おそ</sup>く屋敷<sup>やしき</sup>を出<sup>で</sup>たゞよ」

母「何<sup>なに</sup>か塩梅<sup>しんばい</sup>でも悪<sup>わる</sup>くて下<sup>さが</sup>つて来<sup>き</sup>たんじやアあ<sup>あ</sup>んめえか、それと

も朋輩なかま同士揉めでも出来たか、宿やど下りか」

清「それがね、お屋敷内うちでね、一つ所で働く若え侍わっはさむれえがあつて、好え

え男よ、其方そつちを掃いてくんろ、私わし拭くべえていった様な事から

手が触り足が触りして、ふと私通くつついたんだ、だんく聞けば腹ア

大でかくなつて赤児ねこが出来てみれば、奉公は出来ねえ、そんならばと

つて男を誘い出して、済みませんから老僕じいや詫言をしてくんろつ

てよ、どうかまアね、本當えに好えいお侍さむれえだよ」

母「むゝう……じゃア何か情夫いろおとこを連れやアがつて駈落いして来た

か」

清「うん突走つっぱしつて来ただ」

母「それから汝何処われどこへ入れた」

清「何処だつて別に入れ処がねえから、新家の六畳の方へ入れて飯まんま喰くわして置いただ」

母「馬鹿野郎、呆れた奴だよ、何故宅うちへ引入れた、何故敷居を跨またがしたよ、屋敷奉公をしていながら、不義わるさアして走つて来るような心得違こころえちがえな奴は、此処こゝから勝手次第に何処どこへでも往ゆくが宜ええと小言を云つて、何故追出してやらねえ、敷居を跨がして内へ入れる事はねえよ」

清「それは然そう云つたつて仕様がねえ、どうせ年頃の者に固くべえ云つたつていかねえ、お前めえだつて此処こゝえ縁付いて来るのに見合から仕て、婚礼したじやアねえ、彼あれを知つてるのは私わしばかりだ、十七の時だね、十夜じゅうやの帰りがけにそれ芋ずいき 畠はたけに二人立つてた

ろう」

母「止せ……汝<sup>われ</sup>まで其<sup>そんな</sup>様<sup>な</sup>ことをいうから娘<sup>あま</sup>がいう事を肯<sup>き</sup>かねえ、宜<sup>かんげ</sup>く考<sup>かんげ</sup>えて見<sup>み</sup>ろよ、熊<sup>くま</sup>ヶ谷<sup>い</sup>石<sup>い</sup>原<sup>しはら</sup>の倅<sup>うち</sup>を家<sup>うち</sup>へよばる都合<sup>ごうご</sup>になつて居<sup>い</sup>るじやアねえか、親<sup>おとこ</sup>父<sup>ちち</sup>のいた時から決<sup>か</sup>つて居<sup>い</sup>るわけじやアねえか、それが今<sup>いま</sup>情<sup>おとこ</sup>夫<sup>ちち</sup>を連<sup>つ</sup>れて逃<sup>に</sup>げて来<sup>き</sup>やアがつて、親<sup>おとこ</sup>が得<sup>か</sup>心<sup>かく</sup>で匿<sup>かく</sup>まつて置<sup>お</sup>いたら、石<sup>い</sup>原<sup>しはら</sup>の舎<sup>しや</sup>弟<sup>てい</sup>や親<sup>おとこ</sup>達<sup>たち</sup>に濟<sup>き</sup>むかよ」

清「お、違<sup>ちが</sup>えねえ、是<sup>こゝ</sup>は濟<sup>き</sup>まねえ」

母「濟<sup>き</sup>まねえだつて、汝<sup>われ</sup>は何<sup>なに</sup>もかも知<sup>し</sup>つていながら、彼<sup>あ</sup>の娘<sup>あま</sup>を連<sup>つ</sup>れて来<sup>き</sup>て、足<sup>あし</sup>踏<sup>ふ</sup>みをさ<sup>さ</sup>せて濟<sup>き</sup>むかよ、只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>追<sup>お</sup>出<sup>だ</sup>してしめえ、汝<sup>われ</sup>ア幾<sup>いくつ</sup>歳<sup>さい</sup>になる、頭<sup>あたま</sup>ア禿<sup>はげ</sup>らかしてよ、女<sup>むすめ</sup>親<sup>おとこ</sup>だけ<sup>だけ</sup>に子<sup>こ</sup>に甘<sup>あま</sup>く、義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>を考<sup>かんが</sup>えねえで入<sup>い</sup>れたと、石<sup>い</sup>原<sup>しはら</sup>へ聞<sup>き</sup>こえて濟<sup>き</sup>むか、汝<sup>われ</sup>も一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に出<sup>い</sup>て

往け<sup>ゆ</sup>」

清「私が色事をしやアしめえし、出される訳はねえ、実ア私も家<sup>うち</sup>へ入れめえとは考えたけれども、お侍<sup>さむれえ</sup>さんが如何<sup>いか</sup>にも優しげな人で、色が白いたつて彼<sup>あんな</sup>様のはねえ、私ア白<sup>しろ</sup>つ子<sup>こ</sup>かと思えやした、一体お侍<sup>さむれえ</sup>なんてえ者は田舎へ来れば、こら百姓……なんて威張るだが、私のような者に手を下げて、心得<sup>こころえちげ</sup>違えをして屋敷を出ました、他に知つて居る者もねえ、母<sup>か</sup>さまア腹も立とうが、厄<sup>やつけえ</sup>介<sup>ご</sup>にはなりません、稼<sup>うりよく</sup>ぎがあります、何だつけ、え、歌ア唄つて合<sup>ご</sup>てやつて下せえな」

母「だめだよ、さっさと追出せよ」

清「そう怒おこつたつて仕様がねえ、出せば往いき所どこがねえが、娘あまつこ子  
 が情夫おとこに己おらア家うちへ来こうつて連れて来たものを追出おんだすような事にな  
 れば、誠に義理も悪い、他いに行どこき所はねえ、仕様がねえから男女ふたり  
 で身みい投なげておつ死ちんでしまおうとか、林の中へ入いつて首くでも縊く  
 るべえというような、途方かんげもねえ考かんげえを起おこして、とんでもねえ間ま  
 違ちがえが出来るかも知んねえ、追出おんだせなら追出おんだしもするが、ひよつ  
 とお前めえらの娘めえが身みい投なげてても、首くを縊くつても私わしを怨うらんではなんね  
 えよ、只たつた今おんだ追出おんだすから……」

母「まあ、ちよつくら待まちてよ」

清「なに……」

母「己おらを連れてつて若わに逢あわせろよ」



清「逢わねえでも宜かんべえ」

母「宜いよ、己ア只追出す心はねえから、彼奴に逢つて頭の二つ

三つ殴返して、小鬢でもむしやぐつて、云うだけの事を云つて

出すから、連れてつて逢わせろよ」

清「それは宜くねえ、少せえ子供じやアねえし、十七八にもなつ

たものゝ横ぞつぽを打殴つたりしねえで、それより出すは造作

もねえ」

母「まア待てよ：打叩きは兎も角も、娘は憎くて置かれねえ奴だ

が、附いて来たお侍さんに義理があるから、己が会つて、云うだ

けの事を云つて聞かした其の上で、其の人へ義理だ、娘には草

鞋銭の少しもくれべえ」

清「うむ、それは沢山たんとや遣るが宜ええ、新家にいるだよ」

と清藏が先へ駈出してまいり、

清「今此処こけへお母ふくろが来るよ」

若「お母つかさんが怒おこつて何とか仰しやつたかえ」

清「怒るたつて怒らねえたつて訳が分らねえ、彼あ様なはア堅かえ義

理を立てる人はねえ、此の前彌次郎やじろうが家の鶏とりを喜八きはちが縊しめたつけ、

あの時お母ふくろが義理が立たねえつて其の通りの鶏を買つて来こねえば

なんねえと、幾ら探しても、あゝいう毛がねえで困つたよ、あゝ

いう気象だから、お前めえさまも其の積りで、田舎者が分らねえ事を

いうと思つて、肝きもを焦いらしちやアいけねえよ、腹立紛れに何を云う

か知んねえ、来たゝ、さ此方こつちへお母」

母「あゝ薄暗い座敷だな、行灯あんどんを持って来な……お若く、此方こちへ出ろよ、此処こけへ出ろ、最もう少し出てよ」

お若は間が悪いから、畳へびつたり手を突いて顔を上げ得ません。附いて来た侍は何様どんな人だか。と横目でじろりと見ながら、自分の方より段々前へ進み出まして

母「お若、今清藏に聞きましたぞ、魂消たまげしましたぞ、汝われは情夫おとこを連れて此処こけへ走つて来たではねえか、何ともはア云い様のねえ親不孝なア奴だ、これ屋敷奉公に出すは何のためだよ、斯ういう田舎にては行儀作法も覚えられねえ、なれども鴻の巣では家柄の岡本の娘だアから屋敷奉公に上げ、行儀作法も覚えさせたらで、金をかけて奉公に遣つたのに、良い事えは覚えねえで不義わるさアして、此処こけへ

走つて来ると云うは何たる心得違えなア親不孝の阿魔だか、呆れ果てた、最う汝の根性を見限つて勘当してくるから、何処へでも出て往け、石原の舎弟に合わす顔が無え、彼が汝の婿だ、去年宿下りに来た時、石原へ連れて往くのに、先方は田舎育ちの人ゆえ、汝が屋敷奉公をして立派な姿で往くが、先方が木綿ものでいても見下げな、汝が亭主になる人だよと、何度も云つて聞かせ、お父様が約束して固く極めた処を承知していながら、情夫を連れて参つちやア石原へ済まねえ事を知つていながら来るとは、何ともはア魂消てしまった、汝より他に子はねえけれども、義理という二字があつて何うしても汝を宅へ置く事は出来ねえ、見限つて勘当をするから何処へでも出て往くが宜い、汝は此のお方様

に見棄てられて乞食になるとも、首い縊くつて死ぬとも、身を投げるとも汝が心がらで、自業自得だ、子のない昔と諦めますから」  
と両眼には一杯涙を浮うかめて泣いて居りました。

## 二十五

母は心の中うちでは不憫でならんが、義理にからんで是非もなく、  
故わざと声をあらゝげまして、

母「これ若、もう物を云わずさっさと出て往け」  
と云いながら梅三郎に向いまして、

「お前様には始めてお目にかゝりましたが、お立派なお侍さんが

斯こんな汚きたねえ処へお出でなすつたくれえだから、どうか此こゝの娘あまを可  
 愛がつて下せえまし、折角此こゝ処まで連れて逃げて来たものを、若  
 い内には有りうちの事だ、田舎かたぎ氣質とは云いながら、頑かたくな固ばな婆  
 アだ、何の勘弁したつて宜ええにとお前様には思うか知んねえけれ  
 ども、只今申します通り義理があつて、どうも此の娘うぢを宅へ置か  
 れません只たつた今追出します、名主へも届け、九きゆう離うり断きつて勘当し  
 ます、往ゆき処どこもなし、親戚みより頼りもねえ奴でござえますから、見棄  
 てずに女房にして下せえまし、貴方あんたが見棄てゝも私わしやア恨みとも  
 思いませんが、どうかお頼み申します、何や清藏、あのお若を屋  
 敷奉公させて家へ帰らば、柔やけえ物も着られめえと思つて、紬つむぎ  
 縞しまの手織ておりがえらく出来ている、あんな物が家に残つてると後あとで

見て肝きもが焦いれて快よくねえから、帯くまじょうがいも櫛くまじょうがい笄くまじょうがいのようなものまで悉みんな皆ない要いらねえから汝われえ一風ひとふるしき呂敷ひんまとに引ひんまと纏まとめて、表うつつへ打うち棄ちつちまえ」

清「打棄よらねえでも宜よかんべい、のう腹はらア立たとうけれども打棄よつたつて仕様しやうがねえ」

母「チヨツ、分わらねえ奴やつだな、石原いしはらの親おや達たちへ対たいしても此これ娘むすめがに何なに一つ着きせる事ことア出来できねえ、そんならと云いつて家うちに置おけば快よくねえ、憎にくい親おや不ふ孝こうなア娘あまの着物きものを見るみるのは忌いやだから、打棄うちちまえと云いうだ」

清「打棄よらずに取とつて置おいたら宜よかんべい」

母「雨あめも降ふりそうになつて居ゐるから、合羽あひうに傘かさに下駄くだでも何なにでも、汝われが心こころで附つけて、此これ娘むすめがに遣やることは出来できねえ、憎にくくつて、併しかし

家うちに置くことが出来ねえから打棄れというのだ、雨が降りそうになつて居るから」

清「うーむ然そうか、打棄るべえ、箆たんす笥ごと打棄つても宜えい、どつちり打棄るだから、誰でも拾つて往ゆくが宜い、はアーどうも義理という二字は仕様のねえものだ」

と立ちにかゝるを引止めて、

梅「ま暫しばらく……清藏じやうざうどんとやら暫くお待ち下さい、只今親御おやごの仰

せられるところ、重々じやうじやう御尤ごもつともの次第で、御尊父ごぞんしやう御存生の時分か

らお約束の許いいなすけ嫁よめの亭主ていしゆあることを存ぜず、無理に拙者が若江

を連れてまいりましたは、あなたに対しては何とも相済みません、

若江わかつは亡なくられた親御の恩命おんめいに背そむき、不孝ふけうの上うわぬりの不孝ふけうの上塗うわぬりをせ



んければならず、拙者は何処へも行き所はないが、男一人の身上だから、何処の山の中へまいりましても喰うだけの事は出来ま  
す、お前は此処に止まつて聳を取り、家名相続をせんければなら  
んから、拙者一人で往きます」

清「ま、お待ちなせえ……そんな義理立てして無闇に往つたつて  
いけねえ、二人で出て来たものが、一人置いてお前さんが往つた  
ら娘も快くねえ訳だア、宜く相談して往くが宜い、今草鞋錢をく  
れると云うから待てよ、えゝぐずく云つちやア分らねえ、判  
然云えよ、泣きながらでなく……彼の人ばかり追返しちやア  
義理が済むめえ、色事だつて親の方にも義理があるから追返す位  
なら首でも縊るか、身い投げておつ死ぬというだ」

母「篋棒……死ぬなんて威し言を云つたら、母親が魂消て置くべいかと思つて、死ぬなんてえだ、死ぬと云つた奴には迄死んだ例はねえ、さ只た今死ぬ、己は義理さえ立てば宜い、汝より他に子はねえが、死ぬなんて逆らやアがつて、死ぬなら死ぬ、さ此処に庖丁があるから」

清「止せよ、困つたなあ……うむ何うした〜」

若江は身の過りでございますから、一言もないが、心底可愛い梅三郎と別れる気がない、女の狭い心から差込んでまいる癩気に閉じられ、

若「ウ、ーン」

と仰向けさまに反返る。清藏は驚いて抱き起しまして、

清「お前さま帰るなんて云わねえが宜い、さゝ冷たくなつて、齒を咬しばつておつ死んだ、お前様が余り小言を云うからだ……ア痛え、己の頭へ石頭を打附けて」

と若江を抱え起しながら、

清「お若や……」

母「少しぐらい小言を云われて絶息するような根性で、何故斯んな訳になつたんだかなア、痛え……此方へ顔を出すなよ」

清「お前だつて邪魔だよ、何か薬でもあるか、なに、お前さま持つてる……むゝう是は巻いてあつて仕様がねえ、何だ印籠か……可笑しなものだな、お前さん此の薬を娘の口ん中へ押つぺし込んで……半分嚙んで飲ませろよ、なに間が悪い……横着野郎め」

梅三郎は間が悪そうに薬くを含んで飲ませますと、若江ようやは漸ようくうゝんと気が付きました。

清「気が付いたか」

母「しつかりしろ」

清「大丈夫でえじようぶだ、あゝ、魂消た余あんまり小言を云わねえが宜ええよ、義

理立をして見すゝ子を殺すようなことが出来る、もう其そん様に心

配しねえが宜えよ」

若「あの爺じいや、私は斯こんなわるさをしたから、お母つかさまの御立腹

は重々ごもつとも御道理だが、春部さまを一人でお歸し申しては濟まない

から、私も一緒に此のお方と出して下さるように、またほとぼりが冷めて、石原の方の片が附いたら、お母さまの処へお詫をする

時節もあろうから、一旦御勘当の身となつて、一度は私も出して下さるように願つておくれよ」

清「困つたね、往<sup>ゆきどころ</sup>処のねえ人を、お若<sup>うち</sup>が家まで誘い出して来て置かないと云うなら、彼<sup>あ</sup>の人を何うかしてやらなければなんねえ、時節を待つて詫<sup>わびごと</sup>言をするてえが、何うする」

母「汝<sup>われ</sup>と違つてお義理堅<sup>ぎりがて</sup>え殿さまで、往<sup>ゆ</sup>く処<sup>ところ</sup>のねえ者を一人で出て往<sup>い</sup>くと仰しやるは、己がへの義理で仰しやるだ、憎くて置かれねえ奴だが、此の旦那さまも斯<sup>こん</sup>なにお義理堅<sup>ぎりがて</sup>えから、此の旦那様に免じて当分家<sup>うち</sup>へ置いてくれるから、此<sup>こゝ</sup>処に隠れているが宜<sup>え</sup>い」

清「そんなれば早く然<sup>そ</sup>う云えば宜<sup>い</sup>いに、後<sup>あと</sup>でそんな事を云うだから駄目だ、石原の子息<sup>むすこ</sup>がぐずぐずして居て困る事ができたら、私<sup>わし</sup>

が殴殺<sup>ぶつころ</sup>しても構わねえ」

と是から二人は此の六畳の座敷へ足を止める事になりますと、お屋敷の方は打つて變つて、渡邊織江は非業に死し翌日になつて其の旨を届けると、直ぐさま検視も下り、遂に屍骸<sup>しがい</sup>を引取つて野辺の送<sup>ないしよ</sup>りも内証<sup>ないしよ</sup>にて済ませ、是から悪人穿鑿<sup>せんさく</sup>になり、渡邊織江の長男渡邊祖五郎<sup>そごろう</sup>が伝記に移ります。

二十六

さて其の頃はお屋敷は堅いもので、当主が他人<sup>ひと</sup>に殺された時には、不憫<sup>ふびん</sup>だから高<sup>たか</sup>を増してやろうという訳にはまいりません、不<sup>ふ</sup>

つゝか 東だとか不覚悟だとか申して、お暇いとまになります。彼の渡邊織江が切害せつがいされましたのは、明和の四年亥歳いととし九月十三夜やに、谷中瑞林寺の門前で非業な死を遂げました、屍骸を引取つて、浅草の田たじまさんじまさん誓願寺せいがんじへ内葬を致しました。其の時検使に立ちました役島山 誓願寺へ内葬を致しました。人の評議にも、誰が殺したか、織江も手者てしやだから容易な者に討たれる訳はないが、企たくんでした事か、どうも様子が分らん。死屍しがいの傍わきに落ちてありましたのは、春部梅三郎がお小姓若江と密通をいたし、若江から梅三郎へ贈りました文と、小柄こづかが落ちてありました。が、春部梅三郎は人を殺すような性質の者ではない、是も変な訳、何ういう訳で斯様かような文が落ちてあつたか頓と手掛りもなく、詰り分らず仕舞でござりました。織江には姉あねむすめ娘のお竹と祖五

郎という今年十七になるせがれ倅があつて、家督人かどくにんでございます。此こ者がれ愁しゆうしやう 傷しやう いたしまして、昼は流石さすがに人もまいりますが、夜分よぶんは訪とう者もござりませんから、位牌に向つて泣いてばかり居りますと、同どうげつ 月二十五日の日に、お上屋敷からお呼出しでありますから、祖五郎は早速あさがみしも 麻上下で役所へ出ますと、家老寺島兵庫差さ しそえ 添その役人も控えて居り、祖五郎は恐入つて平伏して居りますと、寺島「祖五郎も少し進みますように」

祖「へえ」

寺島「此たびの度は織江儀不束の至りである」

祖「はっ」

寺島「仰せ渡されをそれ……」



差添のお役人が懐から仰せ渡され書を取出して読上げます。

一其の方父織江儀御用に付き小梅中屋敷へ罷り越し帰宅の途  
 中何者とも不知切害被致候段不覚悟の至りに被思召無  
 余儀永の御暇差出候上は向後江戸お屋敷は不  
 申御領分迄立廻り申さざる旨被仰出候事

家老名判

祖五郎は

「はつ」

と頭を下げましたが、心の中では、父は殺され、其の上に又此  
 のお屋敷をお暇になることかと思ひますと、年が往きませんから、  
 只畳へ額を摺付けまして、残念の余り耐えかねて男泣きにはら／

／＼と涙なみだを落す。御家老は膝を進めて言葉を和らげ、

寺「マ、役目は是だけじゃが、祖五郎如何いかにもお気の毒なことで、

お母かさまには確か早く別れたから、大概織江殿の手一つで育てら

れた、其の父が何者かに討たれ剩あまつさえ急にお暇になつて見れば、差さ

向何処しむきどこと云つて落着く先に困ろうとお察し申すが、まゝ又其の

中うちに御帰参の叶かなう時節もあろうから、余りきなく思つては宜し

くない、心を大きく持つて父の仇あだを報い、本意ほんいを遂げれば、其の

廉かどによつて再び帰参を取計らう時節もあろう、急せいては事を仕損

ずるといふ語を守らんければいかん、年来御懇意にもいたした間、

お屋敷近い処にもいまいが、遠く離れた処にいても御不自由な事

があつたら、内ない々々で書面をおよこしなさい」

祖「せんばん千万有難う存じます……志摩殿、こうごろう幸五郎殿御苦勞さままで」  
 志摩「誠にどうも此の度は何とも申そうようもない次第で、実に  
 え、御尊父さまには一ひと方かたならぬ御懇命ごこんめいを受けました、志摩な  
 どは誠にあゝいうお方様がと存じましたくらいで、へえどうか又  
 何ぞ御用に立つ事がありましたら御遠慮なく……此処こゝは役所の事  
 ですから、小屋へ帰りまして仰せ聞けられますように」  
 祖「せんばん千万有難う」

と仕方なく、祖五郎は我小屋へ立帰つて、急に諸道具を売払  
 い、奉公人に暇いとまを出して、弥々いよく此処こゝを立退たちかんければなりません。  
 何処どこと云つて便たよつて往ゆく目途あてもございませんが、彼かの若江かどか  
 ら春部の処へ送つた文が残つていて、春部は家出をした廉かどはある

が、春部が父を殺す道理はない、はて分らん事で……確か梅三郎の乳母と云う者は信州の善光寺にいるという事を聞いたが、梅三郎に逢つたら少しは手掛りになる事もあるうと考えまして、前々勤めていた喜六という山出し男は、信州上田の在で、中の条村なかじよにいるというから、それを訪ねてまいろうと心を決しまして、忠平という名の如く忠実な若党を呼びまして、

祖「忠平手前は些ちっとも寝ないのう、ちよいと寝なよ」

忠「いえ眠くも何ともございません」

祖「姉あねさま様と昨夜ゆうべのう種々いろくお話をしたが、屋敷に長くいる訳に

もいかんから、此の通り諸道具を引払ってしまった、併しかし又再び帰る時節もあるうからと思ひ、大切な品は極ごく別懇べんにいたす出入町

人の家へ預けて置いたが、姉様と俱ともに喜六たよを使たつて信州へ立越たちこえ  
 る積りだ、手前も長く奉公してくれたが、親父も彼のあ通り追々老と  
 る年だし、菊はあゝ云う訳になつたし、手前だけは別の事だから、  
 こりやア何の足しにもなるまいが、お父さまの御ご不断召だんめしだ、聊いさゝか  
 心ばかりの品、受けて下さい、是まで段々手前にも宜く勤めて貰  
 い、お父さまが亡ない後のちも種々骨を折おつてくれ、私わしは年が往ゆかんの  
 に、姉様は何事もお心得がないから何うして宜いいかと誠に心配し  
 ていたが、万事手前が取仕切かつてしてくれ、誠かたじけに辱はずない、此品これは  
 ほんの志ばかりだ……また時が来て屋敷へ帰かえることもあつたら、  
 相変からず屋敷へ来て貰もらいたい、此品これだけを納めて下さい」  
 忠「へえ誠に有難ありがたう……」

竹「手前どうぞ岩吉にも会いたいけれども、立つ時はこつそりと立ちたいと思うから、よく親父にそう云っておくれよ」

と云われて、忠平は祖五郎とお竹の顔を視詰めて居りました。

忠平は思い込んだ容子ようすで、

忠「へえ……お嬢さまわたくし、私だけはどうかお供仰付け下さいますよ

うに願いたいもので、まア斯うやって私も五ヶ年御奉公をいたし

て居ります、成程親父は老る年とですが、まだ中々達者でございま

す、旦那様には別段に私も御鬘肩を戴きましたから、忠平だけは

お供をいたし、御道中と申しても若旦那様もお年若、又お嬢様だ

つて旅慣れんでいらつしやいますから、私がお供をしてまいりま

せんと、誠にお案じ申します、宅うちで案じて居りますくらいなら、

却かえつてお供にまいった方が宜しいので、どうかお供を」

竹「それは私も手前に供をして貰えば安心だけでも、親父も得心しましいし、また跡でも困るだろう」

忠「いえ困ると申しても職人も居りますから、何うぞ斯うぞ致して居ります、なまじ親父に会いますと又右とや左かく申しますから、立た前ちまえに手紙で委くわしく云つてやります、どうか私わたくしだけはお邪魔もお供を」

竹「誠に手前の心掛感心なことで……私も往いつて貰いたいというは、祖五郎も此の通りまだ年は往ゆかず……併しかしそれも気の毒で」  
 忠「何う致しまして、私わたくしの方から願つても、此の度たびは是非お供を致そうと存じて居おるので、どうか願います」

竹「そんなら岩吉を呼んで、宜く相談ずくの上にしましよう」

忠「いえ相談を致しますと、訳の分らんことを申してとても相談にはなりません、それより立つ前に書面を一本出して、ずつとお供をしまいつても宜しゅうございます、心配ございません」

そんならばと申すので、是から段々旅支度をして、いよく翌日立つという前まえ晩ばんに、忠平が親父の許もとへ手紙を遣やりました。親父の岩吉は碌に読めませんから、他人ひとに読んで貰もらいましたが、驚いて渡邊の小屋へ飛んでまいりました。

岩「お頼ん申します」

忠「どうれ……おやお出でかえ」

岩「うん……手紙が来たから直すぐに来た」



忠「ま此方へお出で」

岩「手前何かお嬢様方のお供をして信州とかへ行くてえが飛んだ話だ、え飛んだ話じゃアねえか、そんなら其の様にちやんと己に斯ういう訳でお供を仕なければならぬがと、宜く己に得心させてから行くが宜い、ふいと黙つて立つちまつては大変だと思つたから、遅くなりましてもと御門番へ断つて来たんだ、え、おい」

忠「お供してまいらなければならんだよ、お嬢様は脾弱いお体、若旦那さまは未だお年がいかないから、信州までお送り申さなければなりません、お屋敷へ帰る時節があれば結構だが、容易に御帰参は叶うまいと思うが、長々留守になりますから、お前さんも身をお厭いなすつて御大切に」

岩「其そん様なことを云つたつて仕様がな、己は他に子供はない、お菊と手てめえ前ばかりだ、ところが菊は彼あんな訳になつちまつて、己おらアもう五十八だよ」

忠「それは知つてます」

岩「知つてるたつて、己おれを置いて何どこ処かへ行つてしまふと云うじやアねえか、前の金太きんたの野郎でも達者でいれば宜いいが、己も此の頃じやア眼が悪くなつて、思うように難かしい物は指せなくなつて居るから困る」

忠「困るつて、是非お供をしなくつちやアなりません」

岩「成らねえたつて己を何うする」

忠「私いが行つて来るうち、お前は年を老とつたつて丈夫な身体だか

ら死ぬ氣遣いはありません」

岩「其そん様な事を云つたつて人は老ろう少しょう不定ふじょうだ、それも近ちけえ処こで

はなし、信州とか何とか五十里も百里もある処へ行くのだ、人間  
てえものは明日あすも知れねえ、其の己を置いて行くように宜よく相談  
してから行け、手紙一本投込んで黙つて行つちまつては親不孝じ  
やアねえか」

忠「それは重々私が悪うございましたが、相談をして又お前に止  
めたり何かされると困るから……これは武家奉公をすればあたりま  
然えのことで」

岩「なに、武家奉公をすればあたりま当え然えだと、旦那さまが教えたの

か」

忠「お教えがなくなつても 当あたりまえ 然だよ」

岩「然そういうことを手前てまえは云うけれども、親父を棄て、田舎へ一緒に行けと若旦那やお嬢様は仰しやる訳はあるめえ」

忠「それは送れとは仰しやらんのさ、若旦那様や嬢様の仰しやるには、老とる年の親父もあるから、跡に残つた方が宜かろう、と云つて下すつたが、多分にお手当も戴き、形見分けも頂戴ことし、殊ことに五ケ年も奉公した御主人様が零落おちぶれて出るのを見棄て、は居いられませんか、何処どこまでもお供をして、俱ともに苦勞をするのが主従の間だから、悪く思つて下さるな」

と説とき付けました。

段々訳を聞いても岩吉はまだ腑に落ちないので、

岩「主従はそれで宜かろうが、己を何うする」

忠「屋敷奉公をすりやア斯ういう場合にはお供をするが、あたりまえ当然

さ、お前さんには濟まないが忠義と孝行と両方は出来ません、忠まった孝全からずというは此の事さ」

岩吉にはまだ言葉の意味が分りませんから、怪訝げげんな顔をして、

岩「何なんだア、忌いやに理窟を云やアがつて、手前てめえ近ちえ処けじやアなし、

えおう五十里も百里もある処へ行くものを、まったからずつて待たずに居いられるか」

忠「然<sup>そ</sup>うじゃアありません、忠義をすれば孝行が出来ないという事です」

岩「それは親に孝行主人に忠義をしろてえ事は己も知っている、講釈や何かで聞いたよ」

忠「それですから孝行と忠義と両方は出来ませんよ」

岩「出来ねえつて……骨を折つてやんなよ」

忠「うふふ、骨を折つてやれと云つたつて出来ませんよ」

岩「手前<sup>てめえ</sup>は生意氣に変なことを云つて人を困らせるが、己は他に

子供が無し、手前たった一人だ、年を老<sup>と</sup>つた親父を置いて一緒に  
行けと旦那様が仰しやりアしめえし、跡へ残れ、可愛相だからと  
仰しやるのに、手前の了簡で己を棄て、行く気になつたんだ、親

不孝な野郎め」

忠「なに親不孝ではありませんがね、私は御当家様へ奉公に来て、  
一文不通いちもんふつうの木具屋の忤せがれが、今では何うやら斯うやら手紙の一本  
も書け、十露盤そろばんも覚え、少しは剣術も覚えたのは、皆大旦那のお  
蔭こんにち、今日の場合にのぞんで年のいかない若旦那様やお嬢様のお供  
をして行かないと、忠義の道が立ちませんよ」

岩「それは分っているよ」

忠「分っているなら遣やつて下さいな」

岩「分つてはいるが、己を何うするよ」

忠「其様そんな分らないことを云つては困りますな、何うするたつて

私が帰るまで待つて下さい」

岩「待てねえ、己<sup>おれ</sup>ア待てねえ（さめ／＼と泣きながら）婆さんが死んでから己ア職人の事で、思うように育てることが出来ねえからってんで、御当家様へ願ったんだ、それは御恩にはなつたけれども、旦那様が何も手前<sup>てめえ</sup>を連れてって下さる事アねえ、何う考<sup>かんげ</sup>えても」

忠「分らん事をいうね、自分の御恩になつた御主人様が斯ういう訳になつたからだよ」

岩「何ういう訳に」

忠「他人<sup>ひと</sup>に殺されてお暇<sup>いとま</sup>になつたんだよ」

岩「お暇……てえのは……お屋敷を出るんだろう」

忠「然<sup>そ</sup>うさ」



岩「出て……」

忠「分らんね、零落おちぶれてしまふんだよ、御浪人になるんだよ、そ

れだから私が従ついて行かなければならない、仮令たとえ私が御免ごうむを蒙ま

と云つてもお前まへが己おれが若わかければお供ともをして行ゆくところだが、手前てめえ何

処こまでもお供申ごせんして御先途ごせんを見届みとけなければならんと云いうのが当あ

然たりまえ 然たな話わだ、其そののくくらいな覚悟かくごが無なければ、頭あたまで武家奉公ぶけほうこうをさ

せんければ宜いいや、然そうじやアありませんか、お前まへさんは屹度野きつとや

暮ぼに止とめるに違ちがひないと思おもつたから、手紙てがみを上げたんだ、分わりま

せんかえ」

岩「むゝ……分わつた、むゝう成程侍さむらいてえものは其様そのんなものか……

だから最初てんで武家奉公ぶけほうこうは止とまそうと思おもつた」

祖「忠平、親父が来たのじやアないか」

忠「へい、親父がまいりました」

祖「おやく／＼宜くおいでだ、岩吉はい入んな」

岩「御免なせえまし、誠にお力落しさまで……今度急に悴を連れてお出でなさる事になったんで、まゝ是はどうも武家奉公をすればあたりまえ当然わたくしのことで、へえ私も五十八で」

祖「貴様も老る年とで親父も困ろうから跡へ残っているが宜よいと云つても、彼あれが真実まことに何処までも随ついて行つてくれるという、その志を止められもせず、貴様には誠に氣の毒でね」

岩「どうも是もまア武家奉公で、へゝゝ私わたくしは五十八でげす」

忠「お父とつさん、一つ事ばかり云つてゝ困るね其そん様な事を云うもの

ではない、明日<sup>あした</sup>お立だからお餞<sup>はなむけ</sup>別をしなければなりませんよ」

岩「え」

忠「お餞<sup>はなむけ</sup>別をしなさいよ」

岩「なんだ……お花……は供<sup>あ</sup>げて来たよ」

忠「分らないよ、お餞<sup>せんべつ</sup>別」

岩「え……煎餅<sup>せんべい</sup>を……なんだ」

忠「旅へ入らつしやるお土産<sup>みやげ</sup>をよ」

岩「うんく……何<sup>なん</sup>ぞ上げましょう、烟草盆<sup>あつら</sup>の誂<sup>あつら</sup>えがありますか

ら彼品<sup>あれ</sup>を」

忠「其<sup>そん</sup>様な大きなものはいけない」

岩「じゃア火鉢を一つ」

忠「いけないよ」

岩「それでは何か途中で喰あがる金米糖こんべいとうでも上げましょう、じゃア

明日私あしたわしが板橋までお送り申しませう」

祖「そんな事をしないで宜しい、忙がしい身体だから構わずに」  
 岩「へえ、悴どうぞを何卒何分お頼み申します、へゝゝ誠にわしもう私は五  
 十八でござえます」

と一つ事ばかり云つて、人の善よい、理由わけの分りません人だから  
 仕方がない。翌よくあさ朝板橋まで送る。下役の銘めい々も多勢おおぜいぞろ／

と渡邊織江の世話になつた者が、祖五郎お竹を送り立派な侍も  
 愛別離苦あいべつりくで別れを惜おしんで、互に袖を絞えんきりえのきり、縁切えんきりえのき榎えんの手前から  
 別れて岩吉は帰りました。祖五郎お竹等は先ず信州上田の在中

の条村という処へ尋ねて行かんければなりません。こゝで話二つに分れまして、彼の春部梅三郎は、奥の六畳の座敷に小匿れをいたして居り、お屋敷の方へは若江病気に就て急にお暇を戴きたいという願を出し、老女の計いで事なく若江はお暇の事になりました。たは御慈悲でござります。さて此の若江の家へ宗桂という極感の悪い旅按摩がまいりまして、私は中年で眼が潰れ、誠に難渋いたしますから、どうぞ、御当家様はお客さまが多いことゆえ、療治をさせて戴きたいと頼みますと、慈悲深い母だから、母「療治は下手だが、家にいたら追々得意も殖えるだろう、清藏丹誠をしてやれ」

清「へえ」

と清藏も根が情深い男だから丹誠をしてやります所から、療治は下手だが、廉やすいのを売物うりものに客へ頼んで療治をさせるような事になりました。其の歳の十一月二十二日の晩に、母が娘のお若を連れまして、少々用事があつて本庄ほんじょう宿じゆくまで参りました。春部梅三郎は件くだんの隠家かくれがに一人で寝て居り、行灯あんどうを側へ引寄せて、いつぞや邸やしきを出る時に引裂ひきさいた文ふみは、何事が書いてあつたか、事に取紛れて碌々ろくろく読まなかつたが、と取出して慰なぐさみ半分に繰くり披ひらき、なにくとりにく「予かねて申合せ候一儀大半成就致し候え共、絹と木綿の綾は取とりにく悪わるき物ゆえ今晚の内に引裂ひきさき、其の代りに此の文を取落おきし置候おきえば、此の花は忽たちまち散ちり果はて可もうすくじく申その茎もとは其つ許ぼみさまへ蕾つぼみのまゝ、差さし送おく候り」はて：分らん：「差送候間御安意ごあんい之の為ため申上候、好こ

うぶんぼく

文木は遠からず枯れ秋の芽出しに相成候事、殊に安心仕り候、

余は拝面之上そう／＼、いじよう々、已上、別して申上候は」：という所から

破れて分らんが、これは何の手紙だろう、少しも訳が分らん……  
 どうも此の程から重役の者の内、殊に神原五郎治、四郎治のふたりの  
 者は、どうも心良からん奴だ、御舎弟様のお為にもならん事が  
 毎度ある、伯父秋月は容易に油断をしないから、神原の方へ引込  
 まれるような事もあるまいが、何の文だろう、何者の手しゆせき跡だか  
 頓と分らん、はてな。と何う考えても分りませんから、又巻納め  
 て紙入の間へ挟んで寝ましたが、寝付かれません。其の内に離れ  
 て居りますけれども、とまりゆうど宿泊人のいびき躰がぐうぐう、だいぶ往来も大分静か  
 になりますと、ボンボーン、ばら／＼とのき簷へ当るのはみぞれ霽でも

降つて来たように寒くなり、襟元から風が入りますので、仰臥あおむけに寝て居りますと、廊下をみしり／＼ぬきあし拔足をして来る者があります。廊下伝いになつては居るが、締りが附いていて、別に人の来られないようになって居りますから、

梅「誰が来たろう、清藏ではあるまいか、何だろう」

と態わざと睡ねむつた振で、ぐう／＼と空そらいびき 躰たをかいて居りますと、

廊下の障子を密そつと音のしないように開けて這はいこ込む者を梅三郎が細目ひらを開いて見ますと、面部を深く包んで、尻しりツ端折ぼしよりを致しまして、廊下を這つて来て、だん／＼あんどう行灯もとの許へ近づき、下からふつと灯あかりを消しました。漸だん々探り寄つて春部あおむが仰臥あおむけざまに寝ている鼻の上へ斯う手を当て、寝息を伺いました。



梅「す……はてな……何だろうか知ら、気味の悪い奴だ、どうして賊が入ったか、盗るものもない訳だが……己を殺しにでも来た奴か知らん」

とそこは若いけれども武家のことだから頓と油断はしません。眼を細目に開いて様子を見て居りますと、布団の間に挟んであつた梅三郎の紙入を取出し、中から引出した一封の破れた手紙を透して、披げて見て押戴き懐中へ入れて、仕すましたり……と行きにかゝる裾を、梅三郎うゝんと押えました。

姿は優しゆうございますが、柔術やわらに達した梅三郎に押えられたから堪たまりません。

曲者「御免なさい」

梅「黙れ……賊だな、さ何処どつから忍び込んだ」

曲者「何卒どうぞ御免なすつて」

梅「相成らん……何だ逃げようとして」

と逆に手を取つて押おさえ付け。

梅「怪しい奴だ、清藏どん、泥坊が入りました。清藏どんく聞えんか、困つたものだ、清藏どん」

少し離れた処に寝て居りました清藏が此の声を聞付け、

清「あい、はアー……あいく……何だとえ、泥坊が入へいつたとえ

あれま何うもはア油断のなんねえ、庭伝えに入へったか、何なんにしろ  
 暗くつて仕様がねえ、店の方へ往いつて灯あかりを点けて来るから、逃し  
 てはなんねえ」

梅「何だ此奴こいつ……動かすものか、これ……灯を早く持つて来んか  
 え」

清藏は店から雪洞ほんぼりを点けて参り。

清「泥坊は何処どこにく〜」

梅「清藏どん、取押えた、なか〜勝手を知つた奴と見えて、廊  
 下伝いに入つた、力のある奴だが、柔術やわらの手で押えたら動けん、  
 今暴れそうにしたからうんと一当ひとあてあてたから縛つて下さい」

清「よし、此奴こいつ細こつこい紐じやア駄目だ、なに麻繩ほそびきが宜いいい」

とぐるく巻に縛つてしまいました。

曲者「何卒御免なすつて……実は何でございます、へえ全く貧の盗みでございますから、何卒御免なすつて」

清「貧の盗みなんてえ横着野郎め」

此の中下女などが泥坊と聞いて裸蠟燭などを持つてまいり

ました。

清「これもつと此方へ灯を出せ、あゝ熱いな、頭の上へ裸蠟燭を出す奴があるかえ、行灯を其方へ片附ちめえ、此の野郎頬被りいしやアがつて、何処から入った」

と手拭をとつて曲者の顔を見て驚き、

清「おや、此の按摩ア……汝は先月から己ア家へ来て、俄盲

で感が悪くって療治が出来ねえと云うから、可愛相だと思つて己  
 ア家へ置いてやった宗桂だ、よく見りやアそらめくら虚盲で眼が明いて  
 るだ、此の狸按摩うぬ汝、よく人を盲だつて欺だましアがった、感が悪く  
 つて泥坊が出来るかえ、此の磔はつつけめえ」

と二つばかり続けて撲ぶちました。

曲「御免なさい、誠にどうも番頭ばんづつさん、実ア盲じやアごぜえませ  
 ん、けれども旅で災難に遭いまして、後あとへは帰れず、先へも行いか  
 れず、仕様が有りませんから、実は喰くい方かたに困つて此方こちらはお客が  
 多いから、按摩になつてと思ひまして入つたんでございますが、  
 漸だん々く銭が無くなつちまいましたから、江戸へ帰つても借金はあ  
 り、と云つて故郷こきようぼう忘がたじ難く、何うかして歸りてえが、借金方の

附くようにと思ひまして、ついふらくと出来心で、へえ、沢山たんと金え盗とるといふ了簡じゃアござえません、貧の盗みでございますから、お見遁みのがしを願ひます」

清「此の野郎……此奴こいつのいふ事ア迂濶うっかり本當にア出来ねえ、嘘を吐く奴は泥坊のはじまり、最もう泥坊に成つてゐるだ此の野郎」

曲「どうか御免なすつて」

梅「いや、手前は貧の盗みと云わせん事がある、貧の盗みなれば何故なぜ紙入れの中の金入れか銭入れを持って行ゆかぬ、何で其の方は書付ばかり盗んだ」

曲「え……これはその何なんでございます、あゝ慌あわてましたから、貧の盗みで一途いちずにその私わたくしは、へえ慌あわてまして」

梅「黙れ、手前はどうも見たような奴だ、此奴を確り縛って置き、殴つ挫いても其の訳を白状させなければならん、さ何ういう理由で此の文を盗った、手前は屋敷奉公をした奴だろう、谷中の屋敷にいた時分、どうも見掛けたような顔だ……手前は三崎の屋敷にいた事があつたらうな」

曲「いえ……どう致しまして、私は麻布十番の者でござえます、古河に伯父がござえまして、道具屋に奉公して居りましたが、ついで道楽だもんでげすから、お母が死ぬとぐれ出し、伯父の金え持逃げをしたのが始まりで、信州小室の在に友達が行つて居りますから無心を云おうと思ひまして参つたのでござえますが、途中で災難に遭い、金子を……」

梅「いや／＼幾ら手前が陳じても、書付を取るといふは何か仔細があるに相違ない、清藏どん打つて御覧、云わなければ了簡がある、真実に貧の盗みなれば金を取らなければならん、書付を取るといふはどうも理由が分らんから、責めなければならん」

清「さ云えよ、云わねえと痛えめをさせるぞ、誰か太つけえ棒を持つて来い、角のそれ六角に削つた棒があつたつけ、なに長え：切つて来う……うむ宜し……さ野郎、これで打つが何うだ」

と続け打ちに打ちますと、曲者は泣声を致しまして、

曲「御免なすつて、貧の盗みで」

清「貧の盗みなんて生虚ア吐きやアがつて、家へ来た時に汝何と云つた、少せえ時に親父が死んで、お母の手にかゝっている内



に、眼が潰れたって、言うことが皆みんなな出たらめばかりだ、此の野郎（打つ）」

曲「あ痛いたくく痛いとうござえやす、どうか御勘弁を：悪い事はふつり止やめますから」

清「止やめるたつて止めねえたつて、何で手紙を盗んだ（又打つ）」

曲「あ痛うござえやす、何う云う訳だつて、全く覚えねえが無なんでござえやす、只慌わっして、私わがが……」

梅「黙れ、何処までも云わんといえば殺してしまふぞ、此方こつちが先程から此の手紙が分らんと、幾度も読んで考えていたところだ、これは何か隠かくし文ぶんで、お屋敷の大事と思えば棄置かれん、五分試ごぶだめしにしても云わせるから左様心得ろ……」

と

「脇差を取つて来る間逃げるとならんから」

清「なに縛つてあるから大丈夫だよ」

梅「五分だめしにするが何うだ、云わんければ斯うだ」

とすつと曲者の眼の先へ短刀みじかいのを突付ける。

曲「あゝ危あぶうのござえやす、鼻の先へ刀を突付けちやア……どうぞ御勘弁を」

梅「これ、手前が幾ら隠してもいかん事がある、手前は谷中三崎の屋敷で松蔭の宅に居た奴であらうな」

曲「へえ」

梅「もういいけん、此書これは松蔭から何者へ送るところの手紙か、又

他<sup>わき</sup>から送<sup>お</sup>つた手紙か、手前は心得て居るか」

曲「へえ」

梅「いやさ、云わんければ手前は<sup>なぶ</sup>戮<sup>ごころ</sup>り殺しにしても云わせなければならん、其の代り云いさえすれば小<sup>こづかい</sup>遣の少しぐらいは持たして免<sup>ゆる</sup>してやる」

清「そうだ、早く正直に云つて、小遣を貰え、云わなければ殺されるぞ、さ云えてえば（又<sup>う</sup>打つ）」

曲「あゝ痛うござえます、あ危<sup>あぶ</sup>うございます、鼻の先へ……えゝ仕方がないから申上げますが、実はなんでござえます、私<sup>わたくし</sup>が主人に頼まれて他<sup>ほか</sup>へ持つていく手紙でござえます」

梅「むゝ何<sup>どこ</sup>処へ持つて行く」

曲「へえ先方は分りませんけれども持つて行くので」

梅「これ〱先方の分らんとということがあるか、何処へ……なに、先方が分つている、種々な事を云い居るの、先方が分つてれば云え」

曲「へえ、その何でござえます、王子の在にお察があるので、その庵室見たような所の側の、些とばかりの地面へ家を建て、

楽に暮していた風流の隠居さんが有りまして、王子の在へ行つて聞きやア直に分るてえますから、実は其処は池の端仲町の光

明堂という筆屋の隠居所だそうで、其家においてなさる方へ

上げれば宜いと云付かつて、私が状箱を持つてお馬場口から出ようとする、今考えれば旦那様で、貴方に捕まったので、状箱を

奪られちやアならんと思ひやして一生懸命に引張る途端、落ちた手紙を取ろうとする、奪られちやア大變と争う機みに引裂かれたから、屋敷へ帰ることも出来ず、貴方の跡を尾けて此方へ入った限り影も形も見えず、だんく聞けば、あのお小姓のお家だとの事ですから、俄盲だと云つて入り込んだのも只其の手紙せえ持つて行けば宜いんで、是を落すと私が殺されたかも知れねえんで」

梅「うん、わかつた、いや大略分りました」

清「大略つてお前さんの心に大概分つたかえ」

梅「少し屋敷に心当りの者もある、此の書面は其の方の主人松蔭が書いたのか」

曲「いえ……誰が書いたか存じませんが、大切に持って行けよ、落したり失したりする事があると斬つちまうと云われて恟りしたなくんで、其の代り首尾好く持つて行けば、金を二十両貫う約束で」梅「むゝう……清藏どん、今に夜が明けてから一詮議ひとせんぎしましようから、冷飯ひやめしでも喰わして物置へ棒縛りにして入れて置いて下さい」

## 二十九

清藏は曲者を引立てひったてまして、

清「これ野郎立たねえか、今冷飯喰わしてやる、棒縛り程楽なも

のはねえぞ」

と是から到頭棒縛りにして物置へ入れて置きました。翌日梅三郎は曲者から取返した書面を出して見ると、再び今一つの裂端きれはしも一緒になっていたので、これ幸いと曲者の持っていた書面と継つぎあわ

合せて見まして、

梅なかだちはや「中田千早様へ常磐ときわよりと……常磐の二字は松蔭かくしなの匿名なに相違ないが、千早と云うが分らん、彼あの下男を縛ってお上屋敷へ連れて往ゆこう、それにしても八州の手に掛け、縛って連れて行ゆかなければならん」

と是から物置へまいり、曲者を曳出ひきだそうと思ひますと、何時いつかなわぬけ縄脱なわぬけをして、彼かの曲者は逐電致してしまいました。そこで八州

の手を頼み、てわけ手分をいたして調べましたが、何うしても知れませ  
 ん、なかくな奴でございます。さて明和の五年のお話で……此  
 の年は余り良い年ではないと見えまして、三月十四日かに大阪會根そね  
 崎ざきしんち新地の大火で、山城は洪水でございました。続いて鳥羽辺が  
 五月朔ついたち日からの大洪水であつた、などという事で、其の年の六  
 月十一日にはお竹橋たけばしへ雷らいが落ちて火事が出ました、などと云う  
 余り良い事はございませぬ。二月五日いつか、桑野のお下屋敷では午うま  
つり祭よみやの宵祭で大層賑にぎやかでございます。なれども御舎弟様御不例に  
 就つきましたして、小梅のお中屋敷にいらしつて、お下屋敷はひっそり  
 致して居りますが、例年の事で、大して賑かな祭と申す方ではな  
 いが、ちらく町人どもがお庭拜見にまいります。松蔭大藏の家



来有助は姿を変え、谷中あたりの職人体ていこしらに扮え、印半纏しるしばんてんを着  
 まして、日の暮くれ々々に屋敷へ入いりこ込んで、灯火あかりの点つかん前にお稲  
 荷そ様の傍そばに設けた囃子屋台はやしやたいの下に隠れている内に、段々日が暮れ  
 ましたから、町の者は亥刻よつになると屋敷内へ入れんように致しま  
 す。灯火あかりも忽たちまち消ちしまして静しずかになりました。是こゝから人の引ひ込こむ  
 までと有助は身を潜かめて居ゐりますと、上野の丑刻やつの鐘かねがボーンノ  
 へと聞える、そつと脱出ぬけだして四辺あたりを見廻すと、仲ちゆう間げん衆しゆうの歩  
 いている様子も無いから、

有「占しめた」

と呟つぶやきながらお馬場口へかゝつて、裏手へ廻り、勝手は宜く存  
 じている有助、主人松蔭大藏方へ忍び込んで、縁側の方へ廻つて

来ると、烟草盆を烟管きせるでぽんくくと叩く音。

有「占めた」

と云うので有助が雨戸の所を指先でとんくとんとんと叩きま  
すと、大藏が、

大「今開けるぞ、誰も居らんから心配せんでも宜よい、有助今開け  
るぞ」

と云われて有助は驚きました。

有「去年の九月屋敷を出てしまい、それつきり帰らない此の有助  
が戸を叩いた計ばかりで、有助とは実に旦那は智慧者ちえしやだなア…これだ  
から悪い事も善い事も出来るんだ」

松蔭大藏は寐衣姿ねまきすがたで縁側へまいり、音をさせんように雨戸を

開け、雪洞ぼんぼりを差出して透すかし見まして、

大「此方こつちへ入れ」

有「へえ、旦那様其の中うちは、面も被かぶらずのめく上あがられた義理じやアござえませんが、何うにも斯うにも仕方なしに又お屋敷けえへ帰つてまいりました、誠に面目次第もありません」

大「さ、誰も居らんから此方へ入れく」

有「へえく」

大「構わず入れ」

有「へえ、足が泥ぼつけえで」

大「手拭をやろう、さ、これで拭け」

有「此こん様な綺麗な手拭で足を拭いては勿体ねえようで……さて私わたくし

も、ぬつと歸けえられた義理じゃアござえませんが、歸けえらずにも居おれませんかから、一通りお話をして、貴方に斬られるとも追出されるとも、何うでも御了簡に任せようと、斯う思いやして歸つてま  
いりましたので」

大「彼あれき限りで音沙汰が無いから、何うしたかと実は心配致して  
いた、手前は彼のあ手紙を何者かに奪とられたな」

有「へえ、春部に奪られたので、春部の彼あいつ奴が若江という小姓と  
不いたずら義をして逃げたんで、其の逃げる時にお馬場口から柵さく矢来  
の隙間の中の広い処から、身体を横にして私わたくしが出ようと思ひます  
途端でつくわに出で会わして、実にどうも困りました」

大「手紙を何うした奪られたか」

有「それがお前さん、鼻を摘つままれるのも知れねえ深更よふけで、突いきなり然  
状箱へ手を掛けやアがツたから、奪さらられちやアならねえと思いや  
して、引張ると紐が切れて、手紙てがみが落おこちる、とうとう半分引裂ひっさ  
かれたから、だんく春部の跡を尾ついて行くと、鴻の巢の宿屋へ  
入りやしたから、感が悪い俄盲あやふツてんで、按摩あんまに化けて宿屋に入い  
込りこみ一度は旨く春部の持つていた手紙の裂きを奪とったが、まんまと  
遣やり損そこなつて、物置へ棒縛ぼうばくりにして投込まれた、所よで漸ようく繩脱なわぬけ  
えして逃にがてしました、近辺きんぺんにも居いられやせんから、久ひさしく下しもふ  
総さの方へ隠かくれていやしたが、春部はるべにあれを奪さらられて何なにう致いたすこ  
とも出来やせんので、へえ」

大「いや、それは宜よろしい、心配致しんぱいすな、手前は己おのれの家来けらいというこ

とを知るまい」

有「ところが知ってますく、濟まねえけれどもお前さん、ギラくするやつを引ひっこ抜わっしいて私の鼻わっし先へ突付け云わねえけりやア五分だめしにしちまう、松蔭の家来だろう、三崎の屋敷に居たろう、顔を知ってるぞ、さア何うだと責められて、つい左様でござえますと申しやした」

大「なにそれは云つても宜いい、彼の晩あには実あア神原も酷ひどい目に遭つた、何事も是程の事になったら幾しくじりらも失策まるツキはある、丸切りしくじつて、此の屋敷を出てしまったところが、有助貴様も己と根岸に佗わびずまい住居まいをしていた時を思えば、元々じやアないか」  
有「それは然そうでござえます」

大「彼<sup>あすこ</sup>処に浪人している時分一つ鍋で軍鶏<sup>しやも</sup>を突き合つていたんだからのう」

有「旦那のように然う小言を云わずにおくんなさるだけ、一倍面<sup>め</sup>目<sup>んぼく</sup>無うござえます」

大「だによつて行<sup>や</sup>る処までやれ、今までの失<sup>しく</sup>策<sup>じり</sup>も許し、何もかも許してやる、それに手前<sup>こゝ</sup>此処に居ては都合が悪い、就<sup>つ</sup>ては金子<sup>かね</sup>が二十両有るからこれをやろう」

有「へえ、是は有難うござえます」

大「其の代り少し頼みがある、手前小梅のお中屋敷へ忍び込んで、お居間<sup>ぢか</sup>近く踏込み……いや是は手前にア出来ん、夜詰<sup>よづめ</sup>の者も多いが、何かに付けて邪魔になる奴は、彼<sup>あ</sup>の遠山權六だ、彼<sup>あれ</sup>がどうも

邪魔になるて」

有「へえー、あの国にいて米搗こめつきをしてえた、滅法界めっぼうかいに力のあ

る……」

大「うん、彼奴あいつが終夜廻よどおしるといので、何うも邪魔だ」

有「へえー」

大「彼あれを手前殺して、ふいと家出をしてしまえ、何処どこへでも宜よい

から身を隠してくれ」

有「彼あれは殺せやせん、それはお前さん御無理で、からどうも彼あの

くれえ無法に力のある奴たんとア沢山たん有りません、植木屋が十人もよつ

て動かせねえ石を、ころ／＼動かします、天狗見たような奴で、

それじゃアお前さん私わっしを見殺しにするようなもので」



大「いや、通常たぶじやア敵かなわない、欺だますに手なしだ、あゝいう剛ごうり  
 力きな奴は智慧の足りないもので、それに一体彼奴あいつは俠客きやうかく氣ぎが  
 有つてのう、人を助けることが好きだ、手前何うかして田圃たんぼ伝た  
 いに行つて、田圃の中へ入らなければならんが、彼所あそこにも柵さくがあ  
 るから、其の柵矢来の裏手から入つて、藪やぶの中にうんく呻うなつて  
 いろ」

有「私わっしがですかえ」

大「うん、藪の中に泥だらけになつて呻うなつていろ」

有「へえ」

大「すると忍び廻りで權六がやつて来て何だと咎とがめるから、構かまわ  
 ずうんく呻うなれ」

有「氣味の悪い、そいつア御免を蒙りやす、お金は欲しいが、彼奴の側へ無闇に行くのは危険です、汝は何だと押え付けられ、えゝと打たれりやア一打で死にやすから」

大「そこが欺すに手なしだ、私は去年の九月松蔭を暇になりまして、行き所がございませぬ、何うかして詫にまいりたいが中々主人は一旦言出すと肯きませぬ、あなたはお国からのお馴染だそうでございませぬが、貴方が詫言をして下すつたら否とは云いますまいから、何分お頼み申しますと、斯う手前泣付け」

有「然うすりやア殺しませんか」

大「うん、只手前が悪い事をしたと云つて、うん／＼呻っている、何うして此処へ来たと聞いたたら、実はお下屋敷の方へ参られませ

んから、此方こちらへ参つたのでございます、旅で種々いろく難行苦行をして、川を涉りわた雪に遇い、雲みぞれに遭い風くしげずに梳り、実に難儀を致しましたのが身体へ当つて、疝せん癩しやくが起り、少しも歩けませんからお助け下さいましと云え、すると彼奴あいつは正直だから本当に思つて自分の家うちへ連れて行つて、粥ぐらいは喰わしてくるから、大きに有難う、お蔭さまで助かりましたと云うと、彼奴あいつが屹度きつと己の処へ詫に来る、もし詫あれに来たら、彼は使わん、怪けしからん奴だ、これくくの奴だと手前の悪作あくざもくざ妄作を云つてびつたり断る」

有「へえ、それは詰つまらねえ話で、其様そのんな奴なら打殺ぶつころしてしまうつてんで…」

大「いやく大丈夫だ、まア聞け、とてもいかんくという中うちに、

段々あじわ味いを付けて手前の善い所を云うんだ」

有「成程」

大「正直の人間……とも云えないが、働くことは宜く働き、口も八丁手も八丁ぐらいな事は云う、手前を殺さないように、そんなら己の家うちへ置くと云ったら幸い、若し世話が出来ん出て行けと云ったら仕方が有りませんと泣くくく出れば、小遣いの一分や二分はくれる、それを貰って出てしまった所が元々じやアないか、もし又首尾好く権六の方へ手前を置いてくれたら、深更よふけに権六の寝間へ踏込んで権六を殺してくれ、また其の前にも己の処へ詫びに来る時にも、隙すきが有ったら、藪に倒れて、歩けない、担かついでやろうとか手を引いてやろうとか云った時にも隙があつたら、懐から

合口あいくちを出して殺やっちまえ、首尾好く仕遂しおせれば、神原に話を  
手前を士分さむらいに取立て、やろう、首尾好く殺して、ポンと逃げて  
しまえ、十分に事成つた時には手前を呼戻して三百石のものは有  
るのう。手前が三百石の侍になれる事だが、どうか工夫をして行  
つて見ろ、もし己のいう事を胡乱うろんと思うなら、書附をやつて置い  
ても宜しい、お互に一つ鍋の飯を食い、爛徳利が一本限りいっぽんぎで茶  
碗酒を半分ずつ飲んだ事もある仲だ、しくじらせる事も出来ずよ、  
旨く行ゆけば此の上なしだ、出来損ねたところが元々じやアないか」  
有「成程……行やつて見ましようが、彼の野郎あを殺やるのには何か刃  
物が無ければいけませんな」

大「待てよ、人の目に立たん証拠にならん手前の持ちそうな短刀

がある、さ、これをやろう、見掛は悪くつても中々切れる、関せきの兼かねよし吉だ、やりそくなつてはいかんぞ」

有「へえ宜しゅうござえます」

大「闇の晩が宜よいの」

有「闇の晩、へえく」

大「小遣をやるから手前今晚うちの中屋敷を出てしまえ」

有「へえ」

と金と短刀を受取つて、お馬場口から出て行ゆきました。

きて二の午うまも済みまして、二月の末になりまして、大きに暖氣  
 に相成りました。御舎弟紋之丞様は大した御病氣ではないが、如  
 何かにも癩たかが昂たかぶつて居ります。夜詰よづめの御家来も多勢おおぜい附いて居り  
 ます、其の中には悪い家来が、間まが宜よくば毒殺をしようか、或あるいは  
 縁の下から忍び込んで、殺してしまう目論見もくろみがあると知つて、忠  
 義な御家来の注意で、お畳の中へ銅板あかがねいたを入れて置く事があり  
 ます。是は將軍様のお居間には能よくあることで、これは間違いの  
 無いようにというのと、今一つは湿しつけて宜しくないから、二重に  
 遊あそばした方が宜しいと二重畳にして御寝ぎよしんなる事になる。屏風を  
 建廻たてまわして、武張つたお方ゆえ近臣に勇ましい話をさせ昔たいこの太  
 閤うとか、又眞田さなだは斯う云う計略はかりごとを致しました、楠くすのきは斯うだ

というようなお話をすると、少しは紛れておいでゞございます。

悪い奴が多いから、庭前にわさきの忍び廻りは遠山權六で、雨が降つて

も風が吹いても、嵐でも巡廻みまわるのでございます。天氣の好い時に

も草鞋わらじを穿はいて、お馬場口や藪の中を歩きます。袴はかまの裾すそを端折はしよつ

て脊割羽織せわりを着おりちやく、短かいのを差して手頃の棒を持つて無提灯むぢょうちん

で、だんく御花壇の方から廻りまして、畠はたけ岸ぎしの方へついて

参りますと、森の一叢ひとむらある一方かたは業平竹なりひらだけが一杯生えて居りま

す処で、

男「ウーン、ウーン」

と呻うなる声がしますから、權六は怪しんで透すかして見て、

權「何なんだ……呻うなつてるのは誰だ」



男「へえ、御免下さい、どうかお助けなすつて下さいまし」

權「誰だ……暗い藪の中で……」

男「へえ、せんしやく疝癩せんしやくが起りまして歩くことが出来ません者で……」

權「誰だ……誰だ」

男「へえ、あなたは遠山様でございますか」

權「何うして己を……われ汝は屋敷の者か」

男「へえ、お屋敷の者でござえます」

權「誰だ、はつきり判然はつきり分らん、待てく」

と懐から手丸てまるぢようちん提灯ていとうちんを取出し、懐中附木かいちゆうつけぎへ火を移して、

蠟燭へ火を点ともして前へ差出し、

權「誰だ」

男「誠に暫く、御機嫌宜しゅう……だん／＼御出世でお目出度うござえます」

權「誰だ」

有「え、お下屋敷の松蔭大藏様の所に奉公して居りました、有  
助と申す中ちゆうげん間でござえます」

權「ウン然そうか、碌に会った事もない、それとも一度か二度会つた事があるかも知れんが、忘れた、それにしても何うしたんだ」  
有「へえ、あなたは委くわしい事を御存じありますめえが、去年の九月少し不首尾な事がありました、家うちへは置かねえとつて追出され、中々詫言をしても肯きかねえと存じまして、友達を頼つて田舎へめえりましたところが、間の悪い時にはいけねえもんで、其の友達

が災難で牢へ行くことになり、留守居をしながら家内を種々世話をしやりましたが、借金もある家ですから漸々行立たなくなつて、居候どころじゃアござえせんから、出てくれろと云われるのは道理と思つて出ましたが、他に親類身寄りありませんから、詫言をして歸りてえと思ひましても、主人は彼の氣象だから、詫びたところが置く氣遣いは有りません、種々考えましたが、あなたは確か美作のお国からのお馴染でいらつしやいますな」

權「然うよ」

有「あなたに詫言をして戴こうと斯う思ひやして、旅から考えて参りましたところが、中々入れませんで、此の田の中をずぶく入つて此処へ這込みやしたが、久しく喰わずにいたんで腹が空い

て堪りたまません、雪に当たったり雨に遭つたりしたのが打つて出て、  
疝癩たまりが起つて、つい呻りました、何分にも恐入りますが何うか主  
人に詫言をお願い申します」

權「むう、余程悪い事をしたな、免ゆるすめえ、困つたなア、なに物  
を喰わねえ」

有「へえ、実は昨日きのうの正午ひるから喰いません」

權「じゃア、ま肯きくか肯かねえか分らんけれど、話しても見よう  
し、お飯まんまは喰わしてやろう」

有「有難うござえます」

權「屋敷へつかく無沙汰むさたに入つて呻つたりしないで、門から入  
れば宜いいに……何しろ然そう泥だらけじゃ仕方かねえから小屋へ

来い」

有「有難うござえます」

權「さ行け」

有「貴方ね、疝癩で腰が攣<sup>つ</sup>って歩けません」

權「困った奴だ、何うかして歩け、此の棒を杖<sup>つ</sup>け」

有「へえ、有難うござえます」

權「それ確<sup>しつ</sup>かりしろ」

有「へえ」

權「提灯を持って」

有「へえ」

と提灯の光ですかし見ると、去年見たよりも尚<sup>な</sup>お肥<sup>ふと</sup>りまして立

派になり、肩幅が張つて、何うも凛々しい男で、怖いから、

有「へえ参ります」

權「さ行け」

有「旦那さま、誠に恐入りますが、片方に杖を突いても、此方の腰が何分起ちませんから、左の手をお持ちなすつて」

權「世話アやかす奴だな、それ捉まれ」

と右の手を出して、

有「へえ有難う」

とひよろ／＼躡けながら肩へ捉まる。

權「確かにしろい」

有「へえ」

と云いながら懐よりすらりと短刀を抜いて權六の肋あばらを目懸けて  
プツーンと突掛けると、早くも身を躲かわして、

權「此の野郎」

と其の手を押えました。手首を押えられて有助は身体が痺しびれて  
動けません力のある人はひどいもので。併しかし直すぐに役所へ引いて行ゆ  
かずに、權六が自分の宅たくへ引いて来たは、何か深い了簡あつての  
ことゝ見えます。此のお話は暫しばらく措おきまして、是から信濃しなの國くにの  
上田うじだ在中ちゆうの条に居ります、渡邊祖五郎と姉の娘お竹で、お竹は大た  
病いびようで、田舎へ来ては勝手が変り、何かにつけて心配勝ち、左さ  
なきだに病身のお竹、遂に癩の病を引出しました。大した病気で  
はないが、キヤキヤと始終痛みます。祖五郎も心配致しています

所へ手紙が届きました。披ひらいて見ますと、神原四郎治からの書状

でございます。渡邊祖五郎殿という表書うわがき、只今のように二日目

に来るなどという訳にはまいりません。飛脚屋へ出しても十日とおかは二

十日つかぐらいずつかゝります。読よみ下して見ると、

一簡奉啓上候余寒未難去候得共益々御壯健恐きよう

悦至極えつしごくに奉存候然者当屋敷御上始め重役の銘々少し

も異状無之御安意可被下候就ては昨年九月只今思だし出

候ても誠に御氣の毒に心得候御尊父を切せつが害致し候者は春部梅

三郎と若江とこれひそくにて目下鴻ノ巢の宿屋に潜ひそみ居る由確か

に聞込み候間早々彼かの者を討果うちはたされ候えば親の仇あだを討たれ候

廉かどを以て御帰参相叶あいかない候様共に尽じんり力可仕候右の



者早々御取押え有つておんとりおき可然候云々しかるべくそろしかく

と読よみ了り、飛立つ程の悦び、年若でありますから忠平や姉とも相談して出立する事になりましたが、姉は病気で立つことが出来ません。

祖「もし逃げられてはならん、あなたは後あとから続いて、私一人わたくしひとりでまいります」

と忠平にも姉の事を呉くれ々々頼んで、鴻の巣を指して出立致しました。五日目に鴻の巣の岡本に着きました。一人旅ではございませんが、お武家のことだから宿屋でも大切にして、床の間のある座敷へ通しました。段々様子を見たが、手掛りもありません、宿屋の下婢おんなに聞いたが頓と分りません、

祖「はてな……こゝに隠れていると云うが、まさか人出入の多い座敷に隠れている氣遣いはあるまい、此処こゝにいるに相違ない」と便所へ行つて様子を見廻したが、更に訳が分りません。

## 三十一

渡邊祖五郎は頻りに様子を探りますが、少しも分りません、夜よ半なかに客が寝静ねしずまつてから廊下で小用こようを達たしながら唯見とますと、垣根の向うに小家こやが一軒ありました。

祖「はてな……一つ庭のようだが」と折戸おりどを開けて、

祖「彼の家に隠れて居りはしないか」

と手水場の上草履を履いて庭へ下り、開戸を開け、折戸の  
 許へ佇んで様子を見ますと、本を讀んでいる声が聞える。何処か  
 もとたぐず  
 ら手を出して掛金を外すのか、但し栓張を取つて宜いか訳が分  
 りません、脊伸びをして上から搜つて見ると、門があるようだが、  
 手が届きません。やがて庭石を他から持つてまいりまして、手を  
 伸べて門を右の方へ寄せて、ぐいと開けて中へ入り、まるで泥坊  
 の始末でございます。縁側から密と覗いて見ますと、障子に人  
 の影が映つて居ります。

祖「はてな、此方にいるのは女のような声柄がいたす」

と密と障子の腰へ手をかけて細目に明けて、横手から覗いて見

ますると、見違える氣遣いはない春部梅三郎なれば、

祖「あゝ有難い、神かみほとけ 仏のお引合せで、はか 凶らず親の仇かたきめぐに廻り逢

った」

と心得ましたから、飛上つて障子を引開け、中へ踏込んで身構えに及び、あら 声を暴らげ、

祖「実父の仇覚悟かたきをしろ」

と叫びましたが、梅三郎の方では祖五郎が来ようとは思いませんから驚きました。

梅「いやこれはく思ひ掛ない……かよう 斯様な処でお目にかゝり面目

次第もない、まア何ういう事でこつち此方へ」

祖なんじ「汝も立派な武士さむらいだから逃にげ隠れはいたすまい、なん 何の遺恨あつ

て父織江を殺害せつがいして屋敷を出た、殊ことに当家の娘と不義をいたせしは確かに証拠あつて知る、汝の許もとへ若江から送つた艶書が其の場に取り落してあつたが、よもや汝は人を殺すような人間でないと心得て居つたる処、屋敷から通知によつて、確かに汝が父織江を討つて立退たちのいたる事を承知致した、斯かくなる上は逃隠れはいたすまいから、届ける処へ届けて尋常に勝負を致せ」

と詰つめかけました。

梅「御尤ごもつともでござる、まあくお心を静められよ、決して拙者逃隠れはいたしません、何も拙者が織江殿に意趣遺恨のある理由わけもなし、何で殺害せつがいをいたしましたしうか、其の辺の処をお考え下さい、何者が左様な事を申したか、実に貴方へお目にかゝるのは面

目次第もない心得違ひ、此<sup>こゝ</sup>処へ逃げてまいりまして、当家の世話になつて居ります程の身<sup>みのうえ</sup>上の宜しくない拙者ゆゑ、何と仰せられても、斯様な事もいたすであらうと、さ人をも殺すかと思<sup>おぼしめ</sup>召しましうが、何者が……」

祖「エーイ黙れ、確か<sup>たしか</sup>の証拠あつて知る事だ、天命<sup>の</sup>れ難い、さ直<sup>すぐ</sup>にまいれ」

梅「と何ういう事の……」

祖「何ういう事も何も無い、父の屍骸<sup>しがいかたわら</sup>の傍に汝の艶書<sup>てがみ</sup>を遺<sup>おと</sup>してあつたのが、汝の天命である」

梅「左様なれば拙者打明けて恥を申上げなければ成りませんが、お笑い下さるな、小姓若江と若氣の至りとは申しながら、二人と

もに家出を致しましたは、昨年よの九月十一日の夜で、あゝ濟まん  
 事、旧来御恩を受けながら其のお屋敷を出るとは、誠に不忠不義  
 のことゝ存じたなれども、御拝領の品を失い、殊ことに若江も妊娠い  
 たし奉公が出来んと申すので、心得違ひの至りではあるが、拙者  
 若江を連出し、当家へまいって隠れて居りましたなれども、不義  
いたずら淫奔をして主家しゆかを立退たちくくらの不埒ふらちもの者では有りますけれど  
 も、お屋敷に対しては忠義を尽したい心得、拙者がお屋敷を逃去にげさ  
 る時に……手いに入りました一封の密書、それを御覧に入れますか  
 ら、少々お控えを願います、決して逃隠れは致しません、拙者も  
やっかいびと厄介人のこと、当家を騒がしては母が心配いたしますから、何ど  
うぞ卒お静かに此の密書を……如何いかにも若江から拙者へ遣つかわしました

ところの文を其の場所に落して置き、此の梅三郎に其の罪を負わする企みの密書、織江殿を殺害いたした者はお屋敷内他にある考えであります」

祖「ム、一証拠とあらば見せろ」

梅「御覧下さい」

と例の手紙を出して祖五郎に渡しました。祖五郎はこれを受取り、披いて見ましたところ、頓と文意が分りませんから、祖五郎は威丈高になつて、

祖「黙れ、何だ斯様のものを以て何の云訳になる、これは何たることだ、綾が取悪いとか絹を破るとか、或は綿を何うとかするど些とも分らん」



梅「いえ、拙者にも匿名書かくしづみで其の意味が更に分りませんが、拙者の判断いたします所では、お屋敷の一大事と心得ます」  
 祖「それは何ういう訳」

梅「左様、絹木綿は綾あやどり操にくきものゆえ、今晚うちの中に引裂くと  
 いう事は、御尊父様のお名を匿かくしたのかと心得ます、渡邊織江の  
 織おりというところの縁によつて、斯かよう様な事を認かいたのでも有りまし  
 ようか、此の花と申すは拙者を差した事で、今を春辺はるべと咲くや此  
 の花、という古歌に引掛ひっかけて、梅三郎の名を匿かくしたので、拙者の  
 文を其処そこへ取落して置けば、春部に罪を負わして後のちは、若江に心  
 を懸ける者がお屋敷内うちにあると見えます、それを青茎あおじくの蕾つぼみの儘  
 貴殿もとの許へ送るといふのは若江を取持とりもちいたす約束をいたした事

か、好文木こうぶんぼくとは若殿様を指した言葉ではないかと存じますと申すは、お下屋敷を梅の御殿と申しますからの事で、梅の異名いみようを好文木と申せば、若殿紋之丞様の事ではないかと存じます、お秋の方のお腹の菊之助様をお世嗣よとりに仕ようと申す計策たくみではないかと存ずる、其の際此の密書ふみを中ば引裂ひつさいて逃げましたところの松蔭大藏げにんの下人有助と申す者が、此の密書を奪とられてはと先頃按摩に姿を窺やつし、当家へ入込みいりこみ、一夜拙者あるよの寢室ねまへ忍び込み、此の密書を盗まんと致しましたところを取押えて棒縛りになし翌朝よくあさ取調ぶる所存にて、物置へ打込んで置きましたら、いつか縄脱なわぬけをして逃去にげりましたから、確しかと調べようもござらんが、常磐ときわというのは全く松蔭の匿名かくしなで大藏の家来有助が頼まれて尾久おうご在ざいへ持つ

てまいるとまでは調べました、またそれに千早殿したうと認めてあるのは、頓と分りませんが、多分神原の事ではござらんかと拙者考えます、お屋敷の内に斯様な悪人があつて御舎弟紋之丞様うしなを亡うい、  
めかけばら 妾 腹 の菊之助様を世に出そうという企たくみと知つては棄置すておかれん事、是は拙者の考えで容易に他人ひとに話すべき事ではござらんが、御再考下さるよう……拙者は決して逃隠れはいたしません、お互に年来御高恩を蒙こうむつた主家しゅかの大事、証拠にもならんような事なれども、お国家老へ是からまいつて相談をして見とう存じます、是は貴方一人でも拙者一人でもならんから、兩人でまいり、御城代へお話をして御意見を伺おうと存じますが如何いかでござる」

と段々云われると、予かねて神原や松蔭はお妾腹めかけばらづつき附で、どうも

心こころがけ懸げが善よくない奴と、父も頻しきりに心配いたしていたが、成程  
 然そうかも知れぬ、それでは棄置かれんと、それから二人が手紙を  
 志かたす方へ送りました。祖五郎は又信州上田在中の条にいる姉もとの許  
 へも手紙を送る。一度お国くに表おもてへ行つて来るとのみ認しため、別段  
 細かい事は書きません。さて兩人は美作の国を指して発ほつ足そくいた  
 しました。此方こちらは入いり違ちがつて祖五郎の跡を追掛おいかけて、姉のお竹が  
 忠平を連れてまいるという、行ゆき違ちがいに相成り、お竹が大だい難なんに  
 出合いまするお話に移ります。

祖五郎は前席ぜんせきに述べました通り、春部梅三郎を親の敵かたきと思ひ  
 詰めた疑いが晴れたのみならず、悪者わるものの密書の意味で、略ほぼお  
 家を押領おうりようするものが有るに相違ないと分り、私の遺恨わたくしどころ  
 でない、実に主家の大事しゅうかだから、早くお国表へまいろうと云うの  
 で、急に二人梅三郎ふたりと共にお国へ出立いたしましたが、其の時姉  
 のお竹の方へは、これ〜で梅三郎は全く父を殺害せつがいいたしたも  
 のではない、お屋敷の一大事があつて、細かい事は申上げられん  
 が、一度お国表へまいり、家老に面会して、どうかお家の安堵うちに  
 なるようと、梅三郎も同道してお国表へ出立致しますが、事さえ  
 極きまれば遠からず帰宅いたします、それまで落着いて中の条に待っ  
 ていて下さい、必らずお案じ下さらぬようにとの手紙がまいりま

した。なれどもお竹は案じられる事で、

竹「何卒どうぞして弟おとに会いたい、年齒としはもいかなない事であるから、また

梅三郎あざむに欺あざむかれて、途中で不慮の事でも有つてはならん」

と種々いろく心配いたしても、病中でございますから立つことも出

来ず、忠平に介抱されまして、段々と月日が経たつばかり、其の内

に病氣も全快いたしましたのちが其の後国表から一度便りがござりま

して、秋までには帰る事になるから、落着いて居てくれという文

面ではありますが、其の内に六月も過ぎて七月になりました時に、

身体も達者になり、こんな山の中に居たくもない、江戸へ帰つて

出入町でいり人の世話に成りたい、忠平の親父も案じているであろうか

ら、岩吉の処へ行つて厄介になりたいと、常々喜六という家来に

云つて居りました。然るに此の喜六が亡くなつた跡は、親戚ばかりで、別に恩を被せた人ではないから、氣詰りで中の条にも居られませんので、忠平と相談して中の条を出立し、追分沓掛輕井沢碓氷の峠も漸く越して、松枝の宿に泊りました、其の頃お大名のお着きがございますと、いゝ宿屋は充満でございます。お大名がお一方もお泊りが有りますと、小さい宿屋まで塞がるようなことで、お竹は甲州屋という小さい宿屋へ泊りまして、  
あくるあさ 翌朝立とうと思ひますと、大雨で立つことも出来ず、其の内追々山水が出たので、道も悪し、板鼻の渡船も止り、其の他何処の渡船も止つたらうと云われ、仕方がなしに足を止めて居ります内に、心配致すのはいかんもので、船上忠平が風を引いたと云

って寝たのが始りで、終ついに病が重くなりまして、どつと寝るよう  
 な事になりました。お医者と云つても良いのはございませぬ、開ひら  
 けん時分の事で、此しの宿ゆくでは第一等の医者だというのを宿やどの主人あるじ  
 が頼んでくれましたが、まるで虚空蔵こくうぞうさま様の化物ばけもの見たようなお  
 医者さまで、脉みやくを診とつて薬と云つても、漢家かんかの事だから、草をむ  
 したような誠まことに効能きぐめの薄いようなものを吞うちませる中に、終ついに息  
 も絶え／＼になり、八月上旬はじめには声も噎しゃがれて思うように口も利  
 けんようになりました。親おやの仇あだでも討うとうという志のお竹であり  
 ますから、家来にも甚はなはだ慈悲のあることで、

竹「あの忠平や」

忠「はい」



竹「お薬の二番が出来たから、お前我慢して嫌でもお服たべ、確しつかりして居ておくれでないと困るよ」

忠「有難う存じますが、お嬢様わたくし私の病気も此の度たびは死病と自分も諦めました、とても御丹誠の甲斐はございませんから、どうぞもお薬も服のまして下さいますな、もう二三日ちの内にむずかしいかと思ひます」

竹「お前そんなことを云っておくれじゃア私が困るじゃアないか、祖五郎はお国ゆへ行き、喜六は死に、お前より他に頼みに思う者はなし、一人ひとりではお屋敷へ帰ることも出来ず、江戸へ行つてもお屋敷ぢか近い処へ落着けない身の上になつて、お前を私は家来とは思わない、伯父とも親とも力に思う其のお前に死なれ、私一人こ此こ処こに

残つてはお前何うする事も出来ませんよ」

忠「有難う……勿体ないお言葉でございます、僅か御奉公致しまして、何程の勤めも致しませんのに、家来の私を親とも伯父とも思うという其のお言葉は、唯今日目を眠りまして冥土へ参るにも好い土産でございます、併し以前とちがって御零落なすつて、今斯う云うお身の上におなり遊ばしたかと存じますと、私は貴方のお身の上が案じられます、どうぞ私の亡い後は、他に入つしやる所もございません故、昨夜貴方が御看病疲れで能く眠つていらつしやる内に、私が認いて置きました手紙が此処にございます、親父は無筆でございますから、仮名で細かに書いて置きましたから、あなたが江戸へ入らつしやいまして、春木町の私の家へ行つて、

親父にお会いなさいましたら、親父が貴方だけの事はどうかまア  
年は老<sup>と</sup>つても達者な奴でございますから、お力になろうと存じま  
す、此処から私が死ぬと云う手紙を出しますと、驚いて飛んで来  
ると云うような奴ゆえ、却<sup>かえ</sup>つて親父に知らせない方が宜<sup>よ</sup>いと存じ  
ますから、何卒<sup>どうぞ</sup>お嬢さん、はッはッ、私が死にましたら此処の寺  
へ投込みになすつて道中も物<sup>ぶつ</sup>騒<sup>そう</sup>でございますから、お気をお付  
けなすつて、あなたは江戸へ入<sup>いら</sup>つしやいまして親父の岩吉にお頼  
みなすつて下さいまし」

竹「あい、それやア承知をしましたが、もし其<sup>そん</sup>様なことでもある  
と私はまア何うしたら宜かろう、お前が死んでは何うする事も出  
来ませんよ、何うか癒<sup>なお</sup>るようにね、病は気だというから、忠平<sup>しつ</sup>確

かりしておくれよ」

忠「いえ何うも此度はむずかしゆうございます」

とはが主従しゅうじゅうの別れと思ひましたからお竹の手を執とつて、

忠「長らく御恩になりました」

と見上げる眼なみだに涙を溜ためて居りますから、耐こらえかねてお竹も、

竹「わア」

と枕元へ泣伏しました。此の家の息子が誠に親切に時々諸ほう／＼

方へ往いつちやア、旨い物と云つて田舎の事だから碌な物もあり

ませんが、喰物くいものを見附けて来ては病人に遣やります。宿屋の親父

は五平ごへいと云つて、年五十九で、江戸を喰詰くいづつめ、甲州あたりへ行つ

て放蕩ばかをやつた人間でございます。悴せがれは此の地で生立おいたつた者ゆえ

質朴なところがあります。

悴「父さま、今帰ったよ」

五「何処へ行ってた」

悴「なに医者 of 処へ薬を取りに行つて聞いたが、医者殿が彼の病人はむずかしいと云つただ」

五「困つたのう、二人旅だから泊めたけれども、男の方は亭主だか何だか分らねえが、彼がお前死んでしまえば、跡へ残るのは彼の小娘だ、長え間これ泊めて置いたから、病人の中へ宿賃の催促もされねえから、仕方なしに遠慮していたけど、医者様の礼から宿賃や何かまで、彼の男が亡くなつてしまつた日にやア、誠に困る、身ぐるみ脱だつて、碌な荷物も無えようだから、宿賃

の出所でどこがあるめえと思つて、誠に心配しんぱえだ、とんだ厄介者に泊られて、死なれちやア困るなア」

悴「それに就ついて父ちやんに相談打ぶとうと思つていたが、私わしだつて今年二

十五いっに成るで、何日いつまで早四郎はやしろう独身ひとりで居ては宜くねえ何様どんな者で

も破鍋われなべに綴とじ蓋ぶたというから、早く女房を持てと友達ともだちが云つてく

れるだ、乃そこで女房を貰おうと思つたが、媒なこうど灼やくが入つて他家ほかから娘あ

子まっこを貰うというと、事が臆おっくう劫きやくになつていかねえから、段々話

い聞けば、あの男が死んでしまうと、私わしは年が行かないで頼る処

もない身の上だ、浪人者で誠に心細いだと云つちやア、彼のあ娘子

が泣くだね」

五「浪人者だと…うん」

早「どうせ何処どつから貰うのも同じ事だから、彼の男あがおつ死ちんだら、彼の娘を私わしの女房に貰もれえてえだ、裸じやアあろうけれども、他人ひとだの頼みの世話がねえので、直すぐにずるくべつたりに嫁つ子きに来ようかと思う、彼あれを貰つてくんねえか父ちやん」  
 五「馬鹿野郎、だから仕様がねえと云うのだ、これ、父ちやんはな、江戸の深川で生れて、腹はらい一杯悪い事をして喰詰くいめつちまい、甲州へ行つて、何うやら斯うやら金が出る様になつたが、詰り悪い足が有つたんで、此処こゝへ逃げて来た時に、縁があつて手前てめえの死んだ母おふくろ親と夫婦になつて、手前と云う子も出来て、甲州屋というま看板を掛けて半旅はんはたご籠木賃きちんやど宿同様な事をして、何うやら斯うやら暮している事は皆みんななも知つている、手前は此方こつちで生立おいたつて何

も世間の事は知らねえが、家うちに財産かねは無くとも、旅籠りゆうろうという看板  
 で是だけの構えをしているから、それ程貧乏だと思ふ人はねえ何ど  
 処ところから嫁を貰つてもたんす 箆ひとつの一個や長持ひとさおのひとさお一棹ひとさおぐらい附属くついて来  
 る、器量の悪いのを貰えば田でんじ地じぐらい持つて来るのはあたりまえ 当あ然たりだ、  
 面つらがのつぱりくつぱりして居るつたつて、あんな素性わけも分らねえ  
 者を無闇むいに引張ひっぱり込んでしまつて何うするだ、医者様の薬礼やくれいまで  
 己しよが負しよわなければなんねえ」  
 早「それは然そうよ、それは然うだけれど、他家ほかから嫁よめ子っこを貰もらや  
 ア田地あが附ついて来る、金が附ついて来るたつて、ま宅うちへ呼よばつて、  
 後あとで己おれが氣きに適あらねえば仕様しやうがねえ訳だ、だから己おれが氣きに適あつた  
 のを貰もらやア家うちも治ちまつて行くと、夫婦ふうふ仲なせえ宜よくば宜いいじやアね



えか、貰つてくんろよ」

五「何を馬鹿アいう手前てめえが近頃種々いろくな物を買つて詰らねえ無駄むだ錢ぜにを使うと思つた、あんな者が貰えるか」

早「何もそんなに腹ア立てねえでも宜いい相談打ぶつた」

五「相談だつて手前てめえは二十四五にも成りやアがつて、ぶらく遊あすんでて、親の脛すねばかり咬かじつていやアがる、親の脛を咬つている内は親の自由だ、手前の勝手に氣に適いつた女が貰えるか」

早「何ぞという脛咬るく〜てえが、父ちやんの脛ばかりは咬つていねえ、是でもお客がえら有れば種々いろんな手伝をして、洗足すすぎ持つてこ、草鞋わらじを脱がして、汚きたえ物を手に受けて、湯わかう沸して脊中せきちゆうを流してやつたり、皆家みんなちの為と思つてしているだ、脛咬りだく〜てえのは

止よしてくんろえ」

五「え、い喧やかましいやい」

と流石さすがに鶴ひとこえの一声で早四郎も黙つてしまいました。此の甲州

屋には始終きま極つた奉公人と申す者は居りません、其の晩の都合によつて、客が多ければ村の婆さんだの、宿しゆくはず外れの女などを雇います。七十ばかりになる腰の曲つた婆さんが

婆「はい、御免なせえまし」

五「おい婆さん大きに御苦労よ、お前まえ又晩に来てくんろよ、客の泊りも無いが、又晩には遊あそんで居るだらうから、まあなよ」

婆「はい、あの只今あすこね彼処ふたりづれのそれ二人連の病人の処とこへめえりました」

五「おゝ、お前めえが行いつてくれねえと、先方むこうでも困こるんだ」

婆「それが年のいかない娘あまつこ子一人で看病するだから、病人は男だし、手ちようず水ずに行くたつて大騒おほさわぎで、誠に可愛かわい想そうでがんですが、只たつた今いまおつ死ちにましたよ」

五「え、死んだと……困こつたなアそれ見ろ、だから云いわねえ事ことじやアねえ、何ど様な様よう子こだ」

婆「何ど様な何なんにも娘あまつこ子こが声こゑをあけて泣ないてるだよ、あんた余あんなり泣なきなすつて身体からだへ障さわるとなんねえから、泣なかねえが宜ようがんですよ、諦あきらめねえば仕し様がねえと云いうと、私わしは彼あれに死しなれると、年としもいかないで往ゆく処ところも無なえ、誠に心細こまうがんです、あゝ何なんうすべいと泣なくだね、誠に氣きの毒どくな訳わけで」

五「はアー困ったもんだな」

早「私わしえ、ちよつくら行つて来よう」

五「なに手前てめえは行かなくつても宜えい」

早「行かなくつても宜えいたつて、悔くやみぐらいに行つたつて宜よかんべい」

五「えゝい、何ぞというあと彼の娘とこの処ばかへ計ゆり行きたがりやアがる、勝手にしろ」

と大おおかすでございましたから早四郎は頬ほを膨ふくらせて起たつて行ゆく。  
五平は直たゞちにお竹の座敷へ参りまして。

五「はい、御免下せえ」

と破れ障子を開けて縁側から声を掛けます。

竹「此方へお入んなさいまし、おやく／＼宿の御亭主さん」

五「はい、只今婆アから承わりまして、誠に恟りいたしましたがお連さまは御丹誠甲斐もない事で、お死去になりましたと申す事で」

竹「有難う、長い間種々お世話になりました、殊に御子息が朝

晩見舞つておくれで、親切にして下さるから何ぞお礼をしたいと

思つて居ります、病人も誠に真実なお方だと悦んで居りました、

私も丹誠が届くならばと思いましたが、定まる命数でございま

する、只今亡くなりまして、誠に不憫な事を致しました」

五「いやどうも、嘸お力落しでございましょう、誠にお気の毒な

事でございます、時に、あゝそれでもって伺いますが、お死去

なすつた此の死骸は、江戸へおいでなさるにしても、信州へお送りになるにしても、死骸を脊負しよつて行く訳にもいかなから此の村へ葬るより他に仕方はございますまいが、火葬にでもなすつて、骨を持って入らっしゃいますか、其の辺の処を伺つて置きたいもので」

竹「はい、何処どこと云つて知己しんぱもございませんから、どうか火葬にして此の村へ葬り、骨こつだけを持ってまいりとう存じますが、御覽の通り是からは私わたくし一人でございますから、何かと世話のないように髪の毛だけでも江戸の親元へ参れば宜しゆうございますから、殊ことに当人は火葬でも土葬でも宜よいと遺言をして死去なくなりましたから、どうぞ御近ごきんじよ処のお寺へお葬り下さるように願いたいもので」

五「左様でございますか、お泊り掛かけのお方で、何処どこの何なんという確しつかりとした何か証しょうがないと、お寺も中々やかま厳しくつて請取りうけとませんが、私わたくしどもの親類えんるいか縁類えんるいの人が此方こつちへ来て、死んだような話にして、どうか頼んで見ましょう」

と此の話の中うちにいつか悴うしろの早四郎が後へまいました、

早「なに然そうしねえでも宜えい、此の裏手の洪願寺こうがんじさまの和尚様は心安くするから頼んで上げよう、まことに手軽な和尚様で、中々道楽坊主だよ、以前もとは叩ちやんぎり鉦やを叩いて飴を売つてた道楽者さ、銭が無ければ宜えい、たゞ埋めて遣やんべえなど、いう捌さばけた坊様だ、其の代りお経なんどは読めねえ様子だが、銭ぜにかね金の少しぐれえ入いるような事があつて困るなら、沢山はねえが些ちつとべいなら己が出

して遣るべえ」

五「何だ、これ、お客様に失礼な、お前まえがお客様に金を出して上げるとは何だ、そんな馬鹿な事をいうな」

早「父ちやんは何ぞというよと小言をいうが、無ければ出してくれべえと云うだから宜よかつぺえじゃアねえか」

五「其そん様な事ア何うでも宜いいから、早く洪願寺へ行つて願つて来い」

是から息子がお寺へ行つて和尚に頼みました。早速得心でございますから、急に人を頼んで、早四郎も手伝つて穴を掘り、真実にくれく働いて居ります。丁度其の晩の事でございませうが、宿屋あるじの主人が、



五「へえ娘さん<sup>ねえ</sup>、えゝ今晚の内にお葬りになりますように」

竹「はい、少し早いようでございますが、何分宜しゆう……多分に手のかゝりませんように」

五「宜しゆうございます、其の積りに致しました、何も多勢<sup>おおぜい</sup>和尚様方を頼むじやアなし、お手軽になすつた方が、御道中ゆえ宜しゆうございますよう」

と親切らしく主人<sup>あるじ</sup>が其の晩<sup>うち</sup>の中に、自分も随<sup>つ</sup>いて行つて野辺送り<sup>を</sup>を致してしまいました。

其の晩に脱出<sup>ぬけだ</sup>して、彼の早四郎という宿屋の倅が、馬子<sup>まご</sup>の久藏<sup>きゆうざう</sup>と<sup>ぞう</sup>いう者の処へ訪ねて参り、

早「おい、トンくくくく久藏眠<sup>ねぶ</sup>ったかな、トンくくく眠<sup>ねぶ</sup>ったかえ。トンくくくく」

余りひどく表を敲<sup>たた</sup>くから、側の馬小屋に繋<sup>つな</sup>いでありました馬が驚いて、ヒーン、バタくくくと羽目を蹴<sup>け</sup>る。

早「あれまア、馬めえ暴れやアがる、久藏眠<sup>ねぶ</sup>ったかえ……あれまア締りのねえ戸だ、叩<sup>たた</sup>いてるより開<sup>ひ</sup>けて入<sup>い</sup>る方が宜<sup>え</sup>い、酔<sup>よ</sup>ばれえになつて仰<sup>あおむ</sup>向<sup>む</sup>にぶつくり反<sup>かえ</sup>つて寝<sup>ね</sup>つていやアがる、おくく顔<sup>かほ</sup>に虻<sup>あぶ</sup>が附<sup>く</sup>着<sup>つ</sup>いて居るのに痛くねえか、起<sup>お</sup>ろくく」

久「あはー……眠<sup>ねぶ</sup>つたいに、まどうもアハー（あくび）むにやノ

「く、や、こりやア甲州屋の早四郎か、大層遅く来たなあ」

早「うん、少し相談打ちに来たアだから目え覚せや」

久「今日は沓掛まで行って峠越して、帰りに友達に逢つて、坂本の宿はずれで一盃やつて、よっぱれえになつて帰つて来たが、馬の下湯を浴わねえで転轍えつて寝ちまつた、眠たくつてなんねえ、何だつて今時分出掛けて来た」

早「ま、眼え覚せや、覚せてえに」

久「アハー」

早「大え欠伸いするなあ」

久「何だ」

早「他のことでもねえが、此間汝がに話をしたが、己ア家の客人

が病氣になつて、娘あまつこ子こが一人附ついているだ、好いい女子おなごよ」

久「話わい聞きいたつつけ、好えい女子おなごで、汝われがねらつつてるつつて、それが何なうしただ」

早「その連つれの病人びやうじんが死しんだだ」

久「フーム氣きの毒どくだのう」

早「就つては彼あの娘あまを己おらの嫁よめに貰もらえてえと思おもつて、段々手てなずけた処ところが、当あた人もまんざらでも無なえようで、謎めいをかけるだ、此この病人びやうじんが死しんでしままえば、行ゆきどころ 処ところもねえ心こころ細こまい身みの上うへでござざいますと

云いうから、親父おやに話わをした処ところが、親父おやは慾張よくばりつつてるから其そん様さまな者ものを貰もらつて何なうすると、頓とんと相手あひまになんねえから、汝われが己おらア親父おやに会あつて話わを打ぶつて、彼あの娘あまを貰もらうようようにしちやアくんめえか」

久「然そうさなア、どうもこれはお前めいん処とこの父さまという人は中々  
 道楽をぶつて、他人ひとのいう事ア肯きかねえ人だよ、此この前めい荷えい馬ばへ  
 打積ぶつんで、お前めいん処とこの居み先せきで話をしていると、父さまが入はり口ぐち  
 へ駄荷だにい置いて氣の利かねえ馬むま方かただつて、突つ転ころばして打ぶつ転ころ  
 ばされたが、中々強い人で、話わいしたところが父さまの氣に入いら  
 ねえば駄目だよ、アハー」

早「欠伸うい止せよ……これは少しだかの、汝われえ何ぞ買かつて来るだ  
 が、夜更よふけで何にもねえから、此こ錢れで一盃いっぺい飲いんでくんろ」  
 久「氣きの毒どくだのう、こんなに差さし吊つるべたのを一本いっぽんくれたか、氣きの  
 毒どくだな、こんなに心配しんぱいされちやア済すまねえ、此こ間ねえだあの馬ば十じゅうに聞き  
 いたゞが、どうも全ぜん体てい父ちちさまが宜よろくねえ、息子こゝろが今いまこれ壯さかんで、

丁度嫁を娶つて宜い時分だに、男振も好し何処からでも嫁は来る  
 だが、何故嫁を娶つてくれねえかと、父さまを悪く云つて、お前  
 の方を皆な誉めている、男が好いから女の方から来るだろう」

早「来るだろうつて……どうも……親父が相談ぶたねえから駄目  
 だ」

久「相談ぶたねえからつて、お前は男が好いから娘を引張込  
 で、優しげに話をして、色事になつちまえ、色事になつて何処か  
 へ突走れ……己の家へ逃げて来う、其の上で己が行つて、父さ  
 まに会つてよ、お前も氣に入るめえが、若え同志で斯ういう訳に  
 なつて、女子を連れて己の家へ来て見れば、家も治らねえ訳で、  
 是も前の世に定まつた縁だと思つて、余り喧ましく云わねえで、

己なこうどが媒あ灼れをするから、彼よめを媳つこ子こにして遣やつてくんろえ、家に置くのが否いやだなら、別に世しよ帯たいを持もたしても宜えいじやアねえかという話わになれば、仕方がねえと親父も諦あきらめべえ、色事いろになれや」

早「成なれたつて……成なる手が、りがねえ」

久「女まに何とか云いつて見ろ」

早「間まが悪わるくつて云いえねえ、客人きやくだから、それに真ま面目まへな人ひとだ、己おらが座敷ざしきへ入いると起た上あつて、誠まことに長ながく厄介やくわいになつて、お前まへには分わけて世話せわになつて、はア氣きの毒どくだなんて、中々さむらえお侍さむらえさんの娘むすめだけおつかねに怖おそえように、凜りん々々しい人ひとだよ」

久「口くちで云いい難にくければ文ふみを書いてやれ、文ふみをよ、袂たもとの中なかへ放はなり込こむとか、枕まくらの間まへ挟はさむとかして置おけい、娘あまつこ子こが読よんで見みて、宿しゆく

屋の息子さんが然そういう心なれば嬉しいじやアないか、どうせ行ゆ廻きどこがないから、彼あの人と夫婦になりてえと、先方さきで望んでいたら何うする」

早「何だか知んねえが、それはむずかしそうだ」

久「そんな事を云わずにやってみろ」

早「ところが私わしは文ふみい書けいた事がねえから、汝われ書いてくんろ、汝は鎮守様の地じぐち口あんど行灯どうを拵こしえたが巧うめえよ、それ何とかいう地口が有あつたつけ、そうく、案山子かゝしのところところに何か居いるのよ」

久「然そうよ、己おらがやつたつけ、何か己おれえ……然そうさ通常たゞの文をやつても、これ面白くねえから、何か尽づくし文もんでやりてえもんだなア」  
早「尽し文てえのは」



久「尽しもんでえのは、ま花の時なれば花尽しよ、それから山  
 尽しだとか、獸類けだものづく尽しだとかいう尽しもんで贈りてえなア」

早「それア宜いな、何ういう塩梅あんべいに」

久「今時だから何だえ虫尽しか何かでやれば宜いな」

早「一つ拵こしれえてくんろよ」

久「紙があるけえ」

早「紙は持っている」

久「其処そこに帳面を付ける矢立の巨えでけのがあるから、茶でも打つ垂ぶたら

して書けよ、まだ茶ア汲んで上げねえが、其処そこに茶碗があるから

勝手に汲んで飲めよ、虫尽しだな、その女子おなごが此の文ふみを見て、あゝ

斯ういう文句こしらを拵こしらえる人かえ、それじゃアと惚れるように書かね

えばなんねえな」

早「だから何ういう塩梅だ」  
あんべい

久「ま其処へ一つ覚と書け」  
おぼえ

早「覚……おかしいな」

久「おかしい事があるものか、覚えさせるのだから、一つ虫尽し

にて書記し※よ」  
かきしるまいらせそろ

早「一虫尽しにて書記し※」  
ひとつ かきしる

久「え、女子の綺麗な所を見せなくちやアなんねえ……綺麗な虫

は……ア玉虫が宜い、女の美しいのを女郎屋などでは好い玉だて

えから、玉虫のようなお前様をひと目見るより、いなご、ばった

ではないが、飛つかえるほどに思い候と書け」  
とび そうろう

早「成程いなご、ばったではないが、飛つかえるように思そい候ろ」

久「親父やかまの厳かましいところを入れてえな、親父はガチャ／＼虫にてやかましく、と」

早「成程……やかましく」

久「お前の傍そばに芋虫のごろ／＼してはいらねえが、えゝ……  
みのむし 箕虫きむしを着き草鞋虫わらじむしを穿はき、と」

早「何の事だえ」

久「汝われが野らへ行く時にア、箕わらじを着たり草鞋わらじを穿いたりするだか  
 ら」

早「成程……草鞋虫を穿はきい」

久「かまぎつちよを腰に差し、野らへ出てもお前様の事は片時忘

れるしま蛇もなく」

早「成程……しま蛇もなく」

久「えゝ、お前様の姿が赤蜻蛉あかとんぼの眼の先へちらくいたし候そろ」

早「何ういう訳だ」

久「蜻蛉とんぼの出る時分に野良のらへ出て見ろ、赤蜻蛉あかとんぼが彼方あつちへ往いつ

たり此方こつちへ往いつたり、目まぐらしくつて歩けねえからよ」

早「成程……ちらくいたし候そろ」

久「えゝと、待てよ……お前と夫婦みようとになるなれば、私わしは表で馬む

追まおい虫、お前は内で機織はたおりむし虫よ」

早「成程……私わしは馬うまを曳ひいて、女子おなごが機を織るだな」

久「えゝゝ：股へ蛭ひるの吸付いたと同様お前の側を離れ申さず候そろ、と  
情じょうあい合あいだから書けよ」

早「成程……お前の側を離れ申さず候そろか、成程情合だね」

久「えゝゝ、虻蚊あぶ馬蠅むまばえ屁放虫へつぷりむし」

早「虻蚊馬蠅屁放虫」

久「取着かれたら因果、晚げえ私わしを松虫なら」

早「……晚げえ私わしを松虫なら」

久「藪蚊やぶかのように寢床まで飛んでめえり」

早「藪蚊のように寢床まで飛んでめえり」

久「直すぐさま様思いのうおつ晴ばらし候そろ、巴あおだいし蛇しようの長文句蠅はい々々※」

早「成程是こりやア宜えいなア」

久「是これじゃア屹きつ度女子おなごがお前めえに惚おぼれるだ、これを知れねえように袂たもとの中ちゆうへでも投ほうり込こむだよ」

と云われ、早四郎は馬鹿な奴ですから、右の手紙を書いて貰つて宅うちへ歸り、そつとお竹の袂たもとへ投なげ込んで置おきましたが、開ひけて見みたつて色いろ文ぶみと思おもう氣き遣つかいはない。翌よく朝あさになりますと宿屋あの主あ人が、

五「お早うございます」

竹「はい、昨夜は段々有難う」

五「え、段々お疲れさま………続ついてお淋さみしい事ことでございませう」

竹「有難う」

五「え、お嬢さん、誠まことに一いつ国こくな事を申ますようですが、私わたくしは一

体斯ういう正直な性うまれつき質で、私どもはこれ本陣だとか脇本陣だとか名の有る宿屋ではございませんで、ほんの木賃宿の毛の生えた半旅籠同様で、あなた方が泊ったところが、さしてお荷物も無し、お連の男衆は御亭主かお兄あにいさま様か存じませんが、お死去かくれになつてあなた一人残り、一人旅は極げんやか厳ましゆうございまして、え、横よこかわ川の関所の所ところも貴方はお手形が有りましよう、越えて入らつしやいましたから、私どもでも安心はして居りますが、何しろ御病氣の中だから、毎朝宿賃を頂戴いたす筈ですが、それも御遠慮申して、医者いしやの薬礼お買物の立替え、何や彼かやの御勘定ごかんじようが余程溜たまつて居ります、それも長旅の事で、無いと仰しやれば仕方が無いから、へえと云うだけの事で、宿屋も一晚泊れば安いもので、

長く泊れば此んな高いものはありません、就ては一国なことを申すようですが、泊つて入らつしやるよりお立ちになつた方がお徳だろうし、私も其の方が仕合せで、どうか一先ず立つて戴きたいもので」

竹「はい、私はさっぱり何事も家来どもに任して置きました内に病氣附きましたので、つい宿賃も差上げることを失念致した理由でもございませんが、病人にかまけて大きに遅うなりました、さぞかし御心配で、胡乱うろんの者と思召すかは知りませんが、宿賃ぐらいな金子は有るかも知れませんが、直じきに出立いたしますから、早々御勘定ごかんじょうをして下さい、何どの位あれば宜よいか取つて下さいまし」

とお屋敷育ちでかなりの高を取りました人のお嬢さんで、宿屋



の亭主風情ふうせいに見くびられたと思つての腹立ちか、懐中からずる／＼と納戸縮緬なんどちりめんの少し汚れた胴巻を取出し、汚れた紙に包んだ塊かたまりを見ると、おおよそ七八十両も有りはしないかと思ふくらいな大きさだから、五平は驚きました。泊つた時の身装みなりも余り好よくないし、さして、着換きがえの着物もないようでありました、是れは忠平が、年のいかなない娘を連れて歩くのだから、目立たんように態わざと汚れた衣類に致しまして、旅たび※れの姿で、町人体ていにして泊り込みましたので、五平は案外ですから驚きました。

竹「どうか此の位あれば大概払いは出来ようかと思ひますが、書付を持つて来て下さい」

と云われたので、流石さすがの五平も少し氣の毒になりましたが、

五「はいく、え、お嬢さま、誠に私わたくしはどうも申訳のない事をいたしました、あなた御立腹でございましょうが、あなたを私が見くびった訳でもなんでもない、実はその貴方かにお費りかのかゝらんように種々いろくと心配致しまして、馬子や舁夫かごかきを雇いましても宿屋の方で値切つて、なるたけ廉やすくいたさせるのが宿屋の亭主の当あたりまえ然おぼしめでへえ見下げたと思召しては恐入ります、只今御勘定を致します、はいくどうぞ御免なすつて」

と帳場へまいりまして、

五「あゝ大層金子かねを持っている、彼あれは何者か知らん」

と暫しばらくくお竹の身の上を考えて居りましたが、別に考えも附きません。医者いしやの薬札から旅籠料、何や彼かやを残からず書付にいたして

持つて来ましたが、一ヶ月居ったところで僅かな事でございます。お竹は例の胴巻から金を出して勘定をいたし、そこへ手廻りを取片付け、明日は早く立とうと昇夫や何かを頼んで置きました。其の晩にそつと例の早四郎が忍んで来まして、

早「お客さん……お客さん……眠ったかね、お客さん眠ったかね」

竹「はい、何方」

早「へえ私でがすよ」

竹「おやく御子息さん、さ此方へ……まだ眠りはいたしません  
が、蚊帳の中へ入りましたよ」

早「え、嘸まア力に思う人がおつ死んで、あんたは淋しかろうと  
思つてね、私も誠に案じられて心配してえますよ」

竹「段々お前さんのお世話になつて、何ぞお礼がしたいと思つてもお礼をする事も出来ません」

早「先刻親父が処え貴方が金え包んで種々厄介になつてるからつて、別に私が方へも金をくれたが、そんなに心配しねえでも宜え、何も金が貰いてえつて世話アしたんでねえから」

竹「それはお前の御親切は存じて居ります誠には有難う」

早「あのー昨夜ねえ、私が貴方の袂の中へ打投り込んだものを貴方披いて見たかねえ」

竹「何を：お前さんが：」

早「あんたの袂の中へ書えたものを私が投り込んだ事があるだ」

竹「何様な書いたもの」

早「何様どんなたつて、丹誠して心のたけを書いただが、あんたの袂に書いたものが有つたんべい」

竹「私は少しも知らないので、何か無駄書むだがきの流行唄はやりうたかと思ひましたから、丸めて打棄うつちやつてしまいました」

早「あれ駄目だね、流行唄じゃアねえ、尽づくしもんだよ、艶書いろぶみだよ、丸めて打棄つては仕様がねえ、人が種々いろく丹誠したのによ」と大きに失望をいたして驚ふさいでいます。

### 三十四

お竹は漸々ようくに其の様子を察して、可笑おかしゆうは思ひましたが、

また気の毒でもありませんからにっこり笑つて、

竹「それは誠にお気の毒な事をしましたね」

早「お気の毒つたつて、まア困つたな、どうも私わしはな……実アな、

まアあんた貴方も斯うやつてひとり独身で跡へ残つて淋さびしかろうと思ひ私ひも独

とりみ身なぶでいるもんだから、友達が汝われえ早く女房を貰つたら宜よかろう

なんてつてなぶ黻なぶられるだ、それに就ついては彼あの優やさ気しげなお嬢さんは、

身寄頼りもねえ人だから、病人が死おちなば己おちがの女房に貰いてえと

友達しやべに喋しやべつただ、馬ばじゆう十じゆうてえ奴と久藏くざうてえ奴が、ぽつくと此れ

を方々ほう／＼へ触れたんだから、忽たちまち宿しゆく中じゆうへ広ひろまつただね」

竹「そんな事お前いいたさん云い立てたをしておくれじゃア誠まことに困こまります」

早「困るわしたつて私わしもしたくねえが、冗談冗談を云つたのが広ひろまつたの

だから、今じやア是非ともお前めえさんを私の女房にしねえば、世間へ対てえして顔向が出来ねえから、友達に話をしたら、親父が厳やかましくつて仕様がねえけんども、貴方あんたと己おれと怪おかしな仲になつちまえば、友達が何うでも話をして、親父に得心のうさせる、どうせ親父は年い老とつてるから先へおつ死ちんでしまふ、然そうすれば此うちの家は皆己のもんだ、貴方が私の女房に成つてくれゝば、誠に嬉しいだが、今夜同志に此の座敷で眠ねぶつても宜よかんべえ」

竹「怪けしからん事をお云いだね、お前はま私を何だとお思いだ、優しいことを云つていれれば好いい気になつて、お前私こゝが此こゝ処へ泊つていれば、家うちの客じやアないか、其の客に対して宿屋の忤そが然そんな無礼なことを云つて済みますか、浪人して今は見る影もない尾お

羽打枯はうちからした身の上でも、お前たちのようなはしたない下郎げろうを亭

主に持つような身の上ではありません、無礼なことをお云いでな

い、彼方あつちへ行きなさい」

早「魂消たまげたね……下郎え……此の狸たぬき女あまめ……そんだら宜ええ、

そうお前の方で云やア是まで親父の眼顔めかおを忍んで銭を使って、お

前めえの死んだ仏の事を丹誠つくした、また尽つくしものを書いて貰しうにも四

百ひやくと五百の銭を持つてつて書いて貰しったわけだ、それを下郎だ、

身分が違わうと云えば、私わしも是までになつて、あんたに其んなこと

を云われ、ば友達へ顔向いが出来ねえから、意気張いきはりずくになりやア

敵同志かたきだ、可愛かたきさ余あつて憎にくさが百倍、お前の歸けえりを待まち伏ふせして、

跡あとを追おかけて鉄砲てつぽうで打殺ぶつす氣こころになつた時には、とても仕様がねえ、



然そうなつたら是までの命だと諦めてくんろ」

竹「あらまア、そんな事を云つて困るじゃアないか、敵同志だの鉄砲で打うつのと云つて」

早「私わしは下郎さ、お前まえはお侍さむらいの娘むすめだろう、併しかし然そう口くちぎ穢たなく云われ、ば、私わしだつて快くねえから、遺恨に思つてお前めえを鉄砲で打ぶ殺ころす心になつたら何うするだえ」

竹「困るね、だけでも私はお前に身を任せる事は何うしても出来ない身分だもの」

早「出来ないたつて、病人が死んでしまえば便りのない者で困るというから、家うちへ置くべいと思つて、人に話をしたのが始まりだよ、どうも話が出来ねえば出来ねえで宜えいから覚悟をしろ、親父

が嚴やかましくつて家にいたつて駄目だから、やるだけの事をやっちまう、棒ぼう鼻ばなあたりへ待伏せて鉄砲で打ぶつてしまうから然そう思いなせえ」

竹「まあお待ちなさい」

と止めましたのは、此こ様な馬鹿な奴に遇あつては仕様がな、鉄砲で打うちかねない奴なれど、斯かる下郎に身を任せる事は勿論出来ず、併しかし世に馬鹿程怖い者はありませんから、是は欺だますに若しくはない、今の中うちは心を宥なだめて、ほとぼりの脱ぬけた時分に立とうと心を決しました。

竹「あの斯うしておくれな私のようなものをそれ程思つてくれて、誠に嬉しいけれども、考えても御覽、たとえ家来でも、あゝやつ

て死去なくなつてまだ七日も経たたん内に、仏へ対して其んな事の出来るものでもないじゃアないか」

早「うん、それは然そうだね、七日の間は陰服いんぷくと云つて田舎などではえら巖やかましくつて、蜻蛉一つ鳥一つ捕ることが出来ねえ訳だから、然ういう事がある」

竹「だからさ七日でも済めば、親御も得心のうえでお話になるまいものでもないから、今夜だけの処は帰つておくれ」

早「然そうお前まえが得心なれば帰る、田舎の女子おなごのように直すぐ挨拶をする訳には往いくめえが、お前のように否いやだというから腹ア立っただい、そんなら七日が済んで、七日の晩げえに来るから、其の積りで得心して下さいよ」

とにこくくして、自分一人承知して帰つてしまいました。斯様かような始末ですからお竹は翌朝よくあさ立つことが出来ません、既に頼んで置いた昇かごかき夫も何も断つて、荷物も他所わきへ隠してしまいました。主人の五平は、

五「お早うございます、お嬢さま、えゝ只今洪願寺の和尚様が前をお通りになりましたから、今日お立ちになると申しましたら、和尚様の言いなさるには、それは情なさけない事だ、遠い国へ来て、御兄弟だか御親類だか知らないが、死人を葬り放ばなしにしてお立ちなさるのは情ない、せめて七日の速夜たいやでも済ましてお立ちになったら宜よかろうに、余りと云えば情ない、それでは仏も浮うかまれまいとおっしゃるから、私わしも気になってまいりました、長くいらつしや

つたお客様だ、何は無くとも精進物で御膳でもこしらえ、へへへ、宅へ働きにまいりますうち 媼ばう達あたちへお飯まんまア喰わして、和尚様を呼んで、お経でも上げてお寺参りめえでもして、それから貴方あなた七日を済まして立つて下されば、私も誠まことに快こころようございます、また貴方様も仏様のおためにもなりましようから、どうか七日を済ましてお立ちを」

竹「成程わたくし私も其の辺は少しも心付きませんでした、大きに左様で、それじゃア御厄ついで介序に七日まで置いて下さいますか」

というので七日の間泊ることになりました。他に用は無ないから、毎日洪願寺へまいり、夜は回向えんこうをしては寝ます。宵よいの中に早四郎が来て種々いろくなことをいう。忌いやだが仕方がないから欺だまかしては帰

してしまふ。七日までくと云い延べている中に早く六日経ちました。丁度六日目に美濃の南泉寺なんせんじの末寺まつじで、谷中の随ずい心おうざん山南泉寺の徒弟で、名を宗達そうたつと申し、十六才の時に京都の東福寺とうふくじへまいり、修業をして段々行脚あんぎやをして、美濃路あたり辺へ廻つて歸つて来たので、まだ年は三十四五にて色白にして大柄で、眉毛のふつさりよと濃い、鼻筋の通りました品の好よい、鼠無地に麻の衣を着、鼠ずだの頭陀ずだを掛け、白の甲掛こうがけ脚半きやはん、網代あじろの深い三度笠を手に提あげ、小さな鋼鉄くろがねの如意を持ちまして隣座敷へ泊つた和尚様が、お湯に入り、夕飯ゆうはんを喰たべて夜よに入いりますと、禅宗坊主だからちやんと勤めだけの看經かんきんを致し、それから平へい生せい信心をいたす神さまを拜まんでいる。何と思つたかお竹は襖ふすまを開けて、

竹「御免なさいまし」

僧「はい、何方どなたじや」

竹「私わたくしはお相宿あいやどになりました、直じき隣に居りますが、あなた様は最前つぎお著の御様子で」

僧「はい、お隣座敷へ泊つてな、坊主は経を誦よむのが役で、お喧やかましいことですが、夜更よふけまで誦みはいたしません、貴方さつきも先刻から御回向をしていらつしたな」

竹「私わたくしは長らく泊つて居りますが、供の者が死去なくなりました、此の宿しゆくはす外れのお寺へ葬りました、今日こんにちは丁度七日の速夜に当ります、幸いお泊り合せの御出家様をお見掛け申して御回向を願いたく存じます」

僧「はいく、いやくそれはお気の毒な話ですな、うんく成程此の宿屋に泊つて居る中、うちわずろ煩うてお供さんが：おうくそれはお心細いことで、此の村方へ御送葬ごそうくになりましたかえ、それは御看経ごかんきんをいたしましょう、お頼みはなくとも知ればいたす訳で、どこ何処へ参りますか」

竹「はい、こゝに机がありましたて、戒名もございます」

僧「あゝ成程左様ならば」

と是から衣を着換え、袈裟けさを掛けて隣座敷へまいり、机の前へ直りますと、新しい位牌があります、白木の小さいので戒名が書いてあります。

僧「あゝ、是ですか、えゝ、むう八月廿四日かにお死去かくれになつたな、



うむ、お気の毒な事で南無阿弥陀仏々々々々々々、宜しい、え、え、  
お線香は私が別に好いのを持って居りますから、これを薫きまし  
よう」

と頭陀ずたの中から結構な香を取出し、火入ひいれの中へ入れまして、是  
から香を薫き始め、禅宗の和尚様の事だから、懇ねんごろに御回向があり  
まして、

僧「え、お戒名は如何さま好いお戒名で、う、光岸浄達信  
士んし」

竹「え、是は只心ばかりで、お懇ねんごろの御回向を戴きまして、ほん  
のお布施で」

僧「いや多分に貴方、旅の事だから布施物を出さんでも宜しい、

それやア一文ずつ貰つて歩く旅僧たびそうですから、一文でも二文でも御回向をいたすのはあたりまえ当然で、併ししか布施のない経は功德にならんと云うから、これは戴きます、左様ならば私はわし旅疲れゆえ直すぐに寝ます、ま御免なさい」

と立ちかけるを留とめて、

竹「あなた少々お願いがございます」

僧「はい、なんじやな」

と又坐すわる。お竹はもじくして居りましたが、応やがて、

竹「おつな事を申上げるようでございますが、当家の忤わたくしが私わたしを女あなどと侮あなどりまして、每晚私の寢床へまいって、怪けしからん事を申しかけまして、若もし云うことを肯きかなければ殺してしまふの、鉄砲で

打つのと申します、馬鹿な奴と存じますから、私も好よい加減に致して、七日でも済んだら心に従うと云い延べて置きました、今晩が丁度七日の逮夜で、明みようあき朝早く此の宿やどを立とうと存じますから、屹度きつと今晚きつとまいって兎や角申し、又理不尽な事を致すまいものでもあるまいと存じます、誠に困りますが、幸い隣へお相宿になりましたから、事に寄ると私が貴方の方へ逃込んでまいりますかも知れません、其の時には何卒どうぞお助け遊ばして下さるようにな僧「いや、それは怪けしからん、それは飛んだ事じゃ私わしにお知らせなさい、押えて宿の主人あるじを呼んで談じます、然そういう事はない、自分の家うちの客人あなどに対して、女旅あなどと侮り、恋慕れんぼを仕掛けるとは以もつての外ほかの事じゃ、実に馬鹿程怖い者はない、宜しいく、来たらお

知らせなさい」

竹「何卒願います」

と少し憤いきどおつた気味で受合いましたから、大きにお竹も力に思つ

て、床を展とつて臥ふせりました、和尚さまは枕まくらに就くと其の儘旅疲れ

と見え、ぐうぐうと高たかい 軒びき で正体なく寝てしまいました。お竹

は軒の音が耳に附いて、どうも眠ねられません、夜半よなかに密そつと起きて

便所ようばへまいり、三尺の開ひらきを開けて手を洗いながら庭を見ると、

生垣いけがきになつてゐる外は片方かたは畠はらで片方かたは一杯の草原くさはらで、村

の人が通るほんの百姓道でございませう。秋のことだから尾花萩女おばなはぎお

郎花みなえしのような草花が咲き、露が一杯に下りて居ります。秋の景

色は誠に淋しいもので、裏手は碓氷の根方ねがたでございませうから小山こやま

続きになつて居ります。所々ちら／＼と農家の灯火あかりが見えま  
 す、追々戸を締めて眠た処ねもある様子。お竹が心の中うちで。向うに  
 幽かすかに見えるあの森は洪願寺様であるが、彼処あそこへ葬り放しで此処こゝ  
 を立つのは不本意とは存じながら、長く泊つていれば、宿屋の悴  
 が来て無理無体に恋慕を云い掛けられるのも忌いやな事であると、庭  
 の処から洪願寺の森を見ますと、生垣の外にぬうと立つている人  
 があります。男か女か分りませんが、頻しきりと手を出してお出いで  
 をしてお竹を招く様子、腰を屈かめて辞儀をいたし、また立上つて  
 手招ぎをいたします。

竹「はてな、私を手招ぎをして呼ぶ人はない訳だが……男の様子  
 だな、事によつたら敵かたきの手係りが知れて、人に知れんように弟おとが

忍んで私に会いに来たことか、それとも屋敷から内々ないくたより音信でもあつた事か」

と思わず褻つまを取りまして、其処そこに有合せた庭草履を穿はいて彼の生垣の処へ出て見ると、十間ばかり先の草原くさばらに立つて居りまして、頻りと招く様子ゆえお竹は、はてな……と怪しみながら又跡を慕つてまいりますと、又男あとが後さがへ退つて手招きをするので、思わず知らずお竹は畠はたけ続きに洪願寺の墓場まで参りますと、新墓しんぼかには光岸浄達信士そとばという卒塔婆しきみが立つて櫛あがが上つて、茶碗に手向たむけの水がありますから、あゝ私やア何うして此処こゝまで来たことか、私の事を案じて忠平が迷つて私を救い出すことか、ひよつとしたら私が気を落している所へ附込んで、狐狸きつねが化ばかすのではないか、もし

化されて此様な処へ来やアしないかと、茫然として墓場へ立止つて居りました。

三十五

此方は例の早四郎が待ちに待った今宵と、人の寝静るを窺うてお竹の座敷へやって参り、

早「眠ったかね、お客さん眠ったかえ……居ねえか……約束だから来ただ、の中へ入つても宜いかえ入るよ、入つても宜いかえ」

と理不尽にを捲つて中へ入り。

早「眠ねぶつたか……あれやア居ねえわ、何ど処けえ行つただな、私わしが来  
 る事を知つてゐるから逃げたか、それとも小便垂れえ行つたかな、  
 ア小便垂れえ行つたんだ、逃げたつて女一人で淋しい道中は出来  
 ねえからな、私わしア此の床の中へ入つて頭から搔けえ巻まきを被かぶつて、ウ  
 フ、屈つくなんですと、女子おなごは知んねえからこけえ来る、中へお入ひえ  
 んなさいましと云つたところで、男が先へ入ひえつていりやア間まを悪  
 がつて入ひえれめえから、小ちっさくなつてると、誰たれもいねえと思つてす  
 つと入ひえつて来ると、己おらアこゝにいたよつて手を押つかめえて引入れる  
 と、お前めえ来ねえかと思つたよ、なに己おらア本ほん当とうに是こゝまで苦く勞らうをしたゞ  
 もの、だから中なえ入ひえるが宜えい、入ひえつても宜えいかえと引張ひっぱ込こめば、  
 其の心があつても未まだ年としい行かないから間まを悪わるがるだ、屹きつ度と然そう



だ、こりやア息い屏こらして眠ねぶつた真似えしてくれべえ」

と止せば宜いいのに早四郎はお竹の寢床の中で息を屏こらして居りました。暫しばらく経たつと密そつと拔ぬき足あしをして廊下をみしり／＼と来る者があります。古うちい家うちだから何どなに密もんと歩いても足音が聞えます、早四郎は床の内うちで来たなと思つていますと、密と障子を開け、スウー。早四郎は障子を開けたなと思つていますと、ぷつり／＼と、吊つりつてありましたかやの吊手つりてを切落し、寝ている上へフワリと乗つたようだから、

早「何だこれははてな」

と考かえて居いりますと、片方かたつぽでは片手かたてで探さぐり、此こ処こら辺あたりが喉のど笛ぶえと思おう処こを探さぐり当あたて、懐なつから取出と出したさかてぎらつく刃物やいばを、逆手さかてに

取つて、ウ、ーンと上から力に任せて頸窩骨へ突込んだ。

早「あゝ」

と悲鳴を上げるのを、ウ、ーンとえぐりました。苦しいから足を

ばたく、やる拍子に襖が外れたので、和尚が眼を覚して、

僧「はゝ、夜這よばいが来たな」

と思いましたが、起きて来て見ると、灯火あかりが消えている。

僧「困つたな」

と慌あわてゝ手探りに枕元にある小さな鋼鉄くろがねの如意にょいを取つて透すかし

て見ると、判然はつきりは分りませんが、頬被ほつかぶりをした奴が上へ乗のしかゝ

っている様子。

僧「泥坊」

と声をかける大喝だいかついつせい一声、ピーンと曲者の肝きもへ響きます。

曲者「あつ」

と云つて逃げにかゝる所へ如意で打つてかゝつたから堪たまらんと存じまして、刃物で切つてかゝるのを、胆たんの据すわつた坊さんだから少しも驚かず、刃物の光が眼の先へ見えたから引外ひっぱすし、如意で刃物を打落し、猿臂えんぴを延のばして逆に押おさえ付け、片膝を曲者の脊中へ乗掛のっかけ、

僧「やい太い奴だ、これ苟かりそめにも旅籠はたごしを取れば客だぞ、其の客へ対して恋慕を仕掛けるのみならず、刃物などを以て脅して情慾を遂とげんとは不埒至極の奴だ、これ宿屋の亭主は居らんか、灯火あかりを早く……」

という処へ歸つて来ましたのはお竹で。

竹「おや何で」

僧「む、お怪我はないか」

竹「はい、わたくし私は怪我はございませんが、何でございます」

僧「恋慕を仕掛けた宿屋の忤が、刃物を持つて来て貴方に迫り、

わつという声に驚いて眼をさまして来ました、早く灯火あかりを……廊

下へ出れば手水場ちようずばに灯火がある」

という中うちに雇婆やといばあさんが火を点とほして来ましたから、見ると大

の男が乗掛のツかつて床が血みどりになつて居ります。

僧「此奴被こいつかぶり物を脱とれ」

と被かつている手拭を取ると、早四郎ではありませんで、此処こゝの

あるじ、ごましおまじ  
主人、胡麻塩交りのぶつつり切ったような鬘まげの髪はげさき先の散ちらばった  
天窗あたまで、お竹の無事な姿を見て、えゝと驚いてしかみ面つらをして居  
ります。

僧「お前は此の宿屋の亭主か」

五「はい」

竹「何うしてお前は刃物を持って私の部屋へ来て此こ様な事をおし  
だか」

五「はいく」

とお竹に向つて、

五「あ：貴方はお達者でいらつしやいますか、そうして此の床の  
中には誰がいますの」

と布団を引剥ひっぱいで見ますと、今年二十五になります現在おのれ己の实子早四郎が俯うつぶし伏になり、血のりに染つて息が絶えているのを見ますと、五平は驚いたの何なんのではありません、真まっさお蒼さおになつて、

五「あゝ是は忤わしでございます、私の忤わしが何うして此の床の中に居りましたらう」

僧「何うして居たもないものだ、お前が殺して置きながら、お前はまア此これ者どが何ようの様な悪い事をしたか知らんが、本当の子か、仮た令とえ義理の子でも無闇に殺して済む理わけ由けではない、何ういう理由じや」

五「はい、お嬢さま、あなたは今晚こゝにお休みはございませんですか」

竹「私はこゝに寝ていたのだが、不<sup>ふ</sup>凶<sup>と</sup>起きて洪願寺様へ墓参りに行つて、今歸つて来ましたので」

五「何うして悴<sup>こ</sup>が此<sup>こゝ</sup>処へ参つて居りましたらう」

僧「いや、お前の悴<sup>こ</sup>は此<sup>こゝ</sup>の娘<sup>ねえ</sup>さんの所<sup>とこ</sup>へ毎晩来て怪<sup>け</sup>しからんことを云掛け、云う事を肯<sup>きか</sup>んければ、鉄砲で打つので、刃物で斬るのを云うので、娘さんも誠<sup>まこと</sup>に困<sup>わ</sup>つて私<sup>わし</sup>へお頼みじや、娘さんが墓参りに行つた後<sup>あと</sup>へお前の子息<sup>むすこ</sup>が来て、床の中に入<sup>い</sup>つて居るとも知らずお前が殺したのじや」

五「へえ、あゝ、お嬢さま真<sup>ま</sup>平<sup>つひら</sup>御免なすつて下さいまし、実は悪い事は出来ないもんでございます、忽<sup>たちま</sup>ちの中<sup>うち</sup>に悪事<sup>あくじ</sup>が我<sup>わが</sup>子<sup>こ</sup>に報<sup>う</sup>いました、斯<sup>てきめ</sup>う靦<sup>めん</sup>面<sup>めん</sup>に罰<sup>ばち</sup>の当るといふのは実に恐ろしい事で

ございます、私わたくしは他に子供はございませぬ、此こ様の田舎育ちの野郎でも、唯たつ一粒者ひとつぶものでございます、人間は馬鹿でございますが、私の死し水みづを取る奴ゆえ、母ははが亡なくなりましてから私の丹誠たんじやうで是までにした唯一人の悴せがれを殺すというのは、皆みんな私の心の迷い、強慾きやうよく非道ひだうの罰でございます」

僧「土台呆れた話じゃが、何ういう訳でお前は我子を殺した」

五「はい、申上げにくい事でございますが、此の甲州屋も二十年前までは可なりな宿屋でございました処わたくしが、私わたくしは年を老とりまして、酒さけや博奕ばくちが好きでございまして、身代みしろを遂に痛め、此者これの母も苦勞して亡りました、斯うやって表を張はつては居りますが、実は苦しい身代でございます、ところが此のお嬢様おぢやうさまが先達せんだつて宿賃しゆくぢんを



お払いなさる時に、懐から出した胴巻には、金が七八十両あろうと見た時は、にきび面炮の出る程欲しくなりました、あゝ此の金があつたら又一ひとやまおこ山興して取附く事もあろうかと存じまして、無理に七日までお泊め申しましたが、いよくみよう愈々明日お立ちと聞きましたゆえ、思い切つて今晚密そつと此のお嬢様を殺して金を奪とろうと企たくみました、死骸は田圃いんぼ伝えに背負しよいだ出して、墓場へ人知れず埋めてしまえば、誰にも知れる氣遣きづかいないと存じまして、忍んで参りました、道ならぬ事をいたした悪事は、たちま忽ち報い、一人の悴を殺しますとは此の上もない業ごうざら曝しで、実に悪い事は出来ないと知りました、わたくし私も最もう五十九でございます、お嬢さま何とも申し訳がございませんから、私は死んでしまい、貴方に申訳をいたします」

と云切るが早いか、出刃庖丁を取つて我が咽のどに突立てんとするから、

僧「あゝ暫く待ちなさい、まア待ちなさい、お前がこれ死んだからつて言訳が立つじやアなし、命を棄てたつて何の足しにもなりやアせん、嬢さんの御迷惑にこそなれ、宜よいか先非せんびを悔い、あゝ悪い事をした、唯たつた一人の子を殺したお前の心の苦しみというものは一通りならん事じや、是も皆罰みなばちだ、一念の迷いから我子を殺し、其の心の苦しみを受け、一旦の懺悔ざんげによつて其の罪は消えている、見なさいお嬢様の一命は助かり、お前の子はお嬢様の身代りになつたんじや、誠に氣の毒なは此の息子さん、嬢さん何事も此の息子さんに免じてお前さんも堪かんべん弁なさい、何日いつまでも仇あだに

思つていと却かえつてお前さんの死んだ御家来さんの為にもならん、  
 宜いいか、又御亭主は客に対して無礼をしたとか、道楽をして棄すてお  
 置かれん、親に苦勞をかけて堪たまらんから殺しましたと云つて尋常  
 に八州へ名告なのつて出なさい、なれども一人の子を私わたくしに殺すのは悪  
 い事じゃから髪かみの毛を切つて役所へ持つて行ゆけば、是には何か能よ  
 くく々の訳があつて殺したという廉かどで、お前さんに甚ひどく難儀もかゝ  
 るまいと思う、然そうして出家を遂とげ、息子さんの為に四国西国を  
 遍歴して、其の罪つみほろぼ滅めつしをせんければ、兎とても尋常なみの人に成れ  
 んぞ」

五「はいく」

僧「是から陰徳を施し、善事を行うが肝心、今までの悪業を消す

は陰徳を積むより他に道はないぞ」

五「有難うございます」

僧「あゝ何うも気の毒な事じやなア、お嬢さん」

三十六

お竹は不思議な事と心の内で忠平の靈に回向をしながら、

竹「ま、わたくし私は助かりましたが、誠に思い掛けない事で」

僧「いやゝ世間は無常のもので、実に夢幻泡沫でじつ実なきものと

云つて、まこと実は真に無いものじゃ、世の人は此の理をし識らんによつ

てもろく諸々のどんよくしゆうしん貪慾執心が深くなつて名みようもんりよう聞利養に心をいぢ焦つて

貪むさぼらんとする、是らは只こんじよう今生こんじようの事のみを慮おもんばかり、旦暮あけくれに妻さいし  
 子眷けんぞく属衣食財宝にのみ心を尽して自ら病を求める、人には病は  
 無いものじや、思う念ねんりよ慮が重なるによつて胸に詰つて来ると毛け  
 孔あなひらが開いて風邪を引くような事になる、人間もと元来病なく、薬やくせき石せき  
 こと／＼、  
 尽く無用、自ら病を求めて病おこが起るのじや、其の病を自分手こしらに拵  
 え、遂に煩惱なやみという苦惱なやみも出る、之これを知らずに居つて、今死ぬと  
 いう間際の時に、あゝ悪いことをした、あゝせつない何う仕よう、  
 此の苦痛を助かりたいと、始めて其の時に驚いて助からんと思つ  
 ても、それは兎とても何の甲斐もない事じや、此の理りを知らずして  
 破戒無慚むざんじやけん邪見ほういつ放逸ほういつの者を人じんちゆう中ちゆうの鬼畜おにちゆうといつて、鬼の畜生  
 という事じや、それ故に大梅たいばいおしろう和尚おしょうが馬祖ばそだいし大師だいしに問うて如何いかな

るか是れ仏、馬祖答えて即心即仏という、大梅が其の言下に大悟したという、其の時に悟ったじや、此の世は実に仮のものじや、只四縁しえんの和合しておるのだ、幾らお前が食物たべものが欲しい著物きものが欲しい、金が欲しい、斯ういう田地ちぢが欲しいと云った処が、ぴたりと息が絶えれば、何一つ持つて行くゆことは出来やアしまい、四縁とは地水火風ちすいかふう、此の四つで自然に出来ておる身体じや、仮に四大（地水火風）が和合して出来て居おるものなれば、自分の身体もありはせん、実は無いものじや、自然に是は斯うする物じやという処へ心が附かんによつて、我心わががあると思われ、我身体わがを愛し、自分に従うて来る人のみを可愛がつて、宜よう訪ねて来てくれたと悦び、自分に背そむく者は憎い奴じや、彼奴あいつはいかんと云うようにな

る、人を憎む悪い心が別にあるかというに、別にあるものでもな  
 い、即仏じゃ、親父が娘を殺して金子を奪とろうとした時の心は実  
 に此の上もない極重悪人なれども、忽たちまち輪りんえ回え応おう報ほうして可愛こい我  
 子を殺し、あゝ悪い事をしたと悔悟かいごして出家になるも、即ち即心  
 即仏じゃ、えゝ他人を自分の身体と二つあるものと思わずに、欲  
 しい惜しいの念を棄てゝしまえば、争あいもなければ憤おこる事もない、  
 自他の別を生ずるによつて隔意かくいが出来る、隔意のある所から、物  
 の争あいが出来るものじゃ、先方むこうに金があるから取つてやろうとす  
 ると、先方むこうでは私わしの物じゃから遣やらん用を勤めたら金を遣やるぞ、  
 勤めをして貰もらうのは当あたり然まえだから、先方さきへくしろ、それを此こつち  
 方やで只取ろうとする、先方さきでは渡さんとする、是こが大きちゆうな

ると戦争いくさじや、実に仏も心配なされて西方極樂世界阿弥陀仏を念じ、称しょう名みょうして感想を凝こらせば、臨終の時に必ず浄土へ往生すと説ときたま給えり、南無阿弥陀仏く」

圓朝が此こん様なことを云つてもお賽さい錢せんには及びません、悪くすると投げける方があります。段々と有難い事を彼かの宗達という和尚さんが説ときしめ示したからお竹も五平を恨む念は毛頭ありません。

竹「お前此の金が欲しければ皆みんなな上げよう」

五「いえく金は要いりません、私わたくしは剃てい髪はつして罪滅しの為ために廻か国こします」

というので剃かみそり刀を取寄せて宗達が五平をくりく坊主にいたしました。早四郎の死骸は届ける所へ届けて野辺の送りをいたし、



後は他人へ譲り、五平は罪滅しのため四国西国へ遍歴に出ること

になり、お竹は是より深い事は話しませんが、

わたくし

「私は糸野美作守の家来渡邊という者の娘で、弟は祖五郎と申して、只今は美作国へまいつて居ります、弟にも逢いたいと存

みまさかのくに

じますし、江戸屋敷の様子も聞きたし、弟もお国表へまいつて家

老に面会いたし、事の仔細が分りますれば江戸屋敷へまいる筈で、

はず

何の道便りをするとは申して居りましたが、案じられてなりませ

んから、家来の忠平という者を連れてまいる途で長く煩いました

みち

上、遂に死別れになりました、心細い身の上で、旅慣れぬ女の

しにわか

こと、どうか御出家様私を助けると思召し、江戸までお送り遊

おぼしめ

ばして下さいますれば、何の様にもお礼をいたしましょう、お忙

どう

よう

しいお身の上でもございましょうが、お連れ遊ばして下さいまし」と頼まれて見ると宗達も今更見棄てる事も出来ず、

宗「それは気の毒なことで、それならば私と一緒に江戸まで行きなさるが宜い私は江戸には別に便る処もないが、谷中の南泉寺へ寄つて已前共に行脚をした玄道という和尚がおるから、それでも尋ねたいと思う、ま兎も角もお前さんを江戸屋敷まで送つて上げます」

と云うので漸うの事にて江戸表へまいりましたが、上屋敷へも下屋敷へもまいる事が出来んのは、予てお屋敷近い処へ立寄る事はならんと仰せ渡されて、お暇になつた身の上ゆえ、本郷春木町の指物屋岩吉方へまいり、様子を聞くと、岩吉は故人になり、職

人が家督あとを相続して仕事を受取つて居りますことゆえ、とて迎も此処の厄介になる事は出来ません。仕方がないので、どうか様子を下屋敷の者に聞きたいと谷中へ参りますと、い好い塩梅に佐藤平馬さとうへいまという者に会つて、様子を聞くと、平馬の申すには、

平「弟御おとごは此方こつちへおいでがないから、此の辺にうろくしておいでになるはお宜しくない、全体お屋敷近い処へ入らつしやるのは、そりやアお心得違いな事で、ま貴方は信州においでゞ、時節を待つてござつたら御帰参かなの叶かなう事もありましよう、御舎弟も春部殿も未だ江戸へはお出いでがない、たとえ仮令御家老どに何んなお頼みがありましても無駄な話でございます」

と撥はねつ付けられ、

竹「左様なら弟は此方こちへまいつては居りませんか」

平「左様、御舎弟は確たしかにお国においてだという話は聞きましたが、

多分お国へ行つて、お国家老へ何かお頼みでもある事でございま

しょう、併しかし大殿様は御病氣の事であるが、事に寄つたら御家

老の福原様ふくはらさまが御出府ごしゅつぷになる時も、お暇ひまになつた者を連れてお

出いでになる筈がないから、是は好よい音信たよりを待つてお国にお出いででござ

いましょう、殿様は御不快で、中々御重症だという事でございま

して、私わたくしども共どもは下役ゆえ深い事は分りませんが、此のお屋敷近

い処へ立廻るはお宜しくない事で」

という。此の佐藤平馬という奴は、内ない々く神原五郎治四郎治の

二人から鼻薬をかわれて下に使われる奴、提ちよう灯ちん持もちの方の悪い

仲間でございますから、斯かく訳の分らんように云いましたのは、

お竹にお屋敷の様子が聞かしたくないから、真実まことしやかに云つて

お屋敷近辺へ置かんように追おっばら払はらいましたので、お竹はどうも致いたしかた

方かたがない、旧来馴染の出入町人の処へまいりましても、長く泊つても居おられません、又一緒にまいった宗達も、長くは居いられません理由わけがあつて、或時お竹に向い、

宗「私わしは何うしても美濃の南泉寺へ帰らんければならず、それに又私は些ちと懇意なものが有つて、田舎寺に住職をしている其の者を尋ねたいと思うが、貴方は是から何処どこへ参らるゝ積りじや」

竹「何処へも別にまいる処もありませんが、お国へまいれば弟が居ります、成程御家老も弟を連れて、お出いでは出来すまい、御帰

参の叶う吉左右きつそうを聞くそれまではお国表にいる事でございませうから、私もどうかお国へ参りとうございませう」

宗「併しかしどうも女一人では行ゆかれんことで、何ともお気の毒な事だ、じゃアまア美作の国といえは是れ百七十八里隔へだつた処、私わしが送る訳にはいかんが、今更見棄てることも出来ないが、美濃の南泉寺までは是非行ゆかんければならん、東海道筋も御婦人の事ゆえ面倒じゃ、手形がなければならんが、何うか工風くふうをして私がお送り申したいが、困つた事で、兎に角南泉寺まで一緒に行ゆきなさい、彼方あつちの者は真実があつて、随分俗の者にも仏ぶつ心しんがあつてな、寺へ来て用や何なんかするからそいらに頼んだら美作の方へ用事があつてまいる者があるまいとも云えぬ、其の折に貴方を頼んでお国へ

行ゆかれるようだと私も安心をします、私は坊主の身の上で、婦人と一緒に歩くのは誠に困る、衆人ひとにも見られて、忌いやな事でも云われると困る、けれども是も仕方がないから、ま行きなさるが宜よい、私は本庄ほんじょうじゆく宿しゆくの海禅寺かいぜんじへ寄ちよつとつて一寸玄道いんげんどうという者に会つて、それから又美濃まで是非ゆ行きますから御一緒にまいろう、それには木曾路の方が銭が要らん」

と御出家おごしは奢おごらんから、寒くなつてから木曾路を引返し本庄宿へまいりまして、婦人ではあるけれどもこれくの理由わけだ、と役僧にお竹の身の上話をして、其の寺に一泊ひかずいたし、段々ひかず日数ひかずを経てまいりましたが、元より貯え金は所持しゆくしている事で、漸ようやく碓氷すいひらを越して軽井沢かるいざわと申す宿しゆくへまいり、中島屋なかじまやという宿屋やどへ宿を

取りましたは、十一月の五日でござります。

三十七

木曾街道でも追おいわけ分くつがけ沓掛か輕井沢などは最も寒い所で、誰たれやらの狂歌に、着て見れば綿わたがうすい（碓氷）か輕井沢ゆきたけ（雪竹）あつて裾すその寒さよ、丁度碓氷の山の麓ふもとで、片方かたは浅間山の裾すそになつて、ピーーという雪風で、暑中にまいましたも砂とばを飛ばし、随分半纏はんてんでも着たいような日のある処で、恐ろしい寒い処へ泊りました。もう十一月になると彼のあ辺は雪でございます、初雪でも沢山降りますから、出立をすることが出来ません、詮せん方かた



がないから 逗とうりゆう留りゆうという事になると、お竹は種いろく々く心配いたし  
 ている。それを宗達という和尚さまが真実にしてくれても何との  
 う気詰り、便りに思う忠平には別れ、弟祖おと五郎の行方は知れず、  
 お国にいる事やら、但たゞしは途中わづらで煩わづらつてゞもいやアしまいか、な  
 どと心細い身の上で何卒どうぞして音信たよりをしたいと思つても何処どこにいる  
 か分らず、御家老様の方へ手紙を出して宜よいか分りませんが、心  
 配のあまり手紙を出して見ました。只今の郵便のようではないか  
 ら容易には届かず、返事も碌に分らんような不都合の世の中でご  
 ざいます。お竹は過越すぎこし方を種々思うにつけ心細くなりました、  
 これが胸に詰しやくつて癩しやくとなり、折々差込みますのを宗達が介抱いた  
 します、相あい宿やどの者も雪のために出立する事が出来ませんから、

多勢おおぜい 困いろり 炉裡まわり の 周かたま 圍まわり へ 塊ぼんやり っ て 茫ぼんやり 然り して 居ま り ます。 中えどっこ には 江えど 戸っこ 子  
 で 土く 地い を 食く 詰い め ま して、 旅く 稼い ぎ に 出く て 来い た と い う よ う な 職く 人い な ど  
 も 居く り ます。

○ 「おい鐵てつ う」

鐵 「えゝ」

○ 「からまア毎めい 日にち く 降ふ 込こ め ら れ て 立た つ こ と が 出で 来き ね え、 江え 戸ど 子  
 が 山やま の 雪ゆき を 見み る と 驚おどろ い ち ま う が、 飯い を 喰く う 時とき に ずす う と 並なら び 膳ぜん が  
 出で て も、 誰たれ も 碌ろく に 口くち を き か ね え な」

鐵 「そうよ、 黙もく っ て い ち や ア 仕し 様やう が ない から 挨えい 拶さつ を して 見み よ う」

○ 「えゝ」

鐵 「挨えい 拶さつ を して 見み よ う か」

○「しても宜いが、きまりが悪いな」

鐵「え、御免ねえ……へえ……どうも何でござえやすな、お寒い  
ことで」

△「はア」

鐵「お前めえさん方は何ですかえ、相宿のお方でげすな」

△「はア」

鐵「何を云やアがる……がアくつて」

○「手前てめえが何か云うからはアというのだ、宜いじゃアねえか」

鐵「変だな、え、毎めえにち日膳が並ぶとお互たげえに顔を見合せて、御おまん

飯まを喰つてしまふと部屋へ入へいつてごろく寝るくれえの事で仕

様がござえやせんな、夜になると退てえくつ屈で仕様が有りませんが、

なんですかえお前まえさん方は何処どこかえお出でなすつたんでげすかえ」

△「私わしはその大和路の者であるが、少し仔細あつて、えゝ長らく江戸表にいたが、故郷こきょうぼう忘じ難がたく又歸りたくなつて歸つて来ました」

鐵「へえー然そうで……其方そちらのお方はお三人連で何方どちらへ」

□「私わしは常陸ひたちの竜ヶ崎りゅうさきで」

鐵「へえ」

□「常陸の竜ヶ崎です」

鐵「へえー何ういう訳で此こ様な寒い処へ常陸からおいでなさつ

たんで」

□「種々いろいろ信心があまりまして、全体毎年まいねん講中こうじゆうがあまりまして、

五六人ぐらいで木曾の御獄様へ参詣をいたしますが、村の者の申し合せで、先達さんもお出になつたもんだから、同道してま  
いりやした、実は御獄さんへ参るにも、雪を踏んで難儀をして行くのが信心だね」

鐵「へえー大變でげすな、御獄さんてえのは滅法けえ高え山だつてね」

□「高いたつて、それは富士より高いと云いますよ、あなた方も信心をなすつて二度もお登りになれば、少しは曲つた心も直りま  
すが」

鐵「えへ、私どもは曲つた心が直つても、側から曲つてしま  
うから、旨く真直にならねえので……え、其方においてなさる

方は何方どちらで」

此の客は言葉が余程鼻にかゝり、

× 「私わしは奥州しん仙でい台」

鐵 「へえ：仙しん台でいてえのは」

× 「奥州で」

鐵 「左様でがすか、えゝ衣を着てお頭つむりが丸いから坊さんでげしよ

う」

× 「いしやでがす」

鐵 「へ何ですと」

× 「医い者しやでがす」

鐵 「石い工しやだえ」

×「いゝや医道いしやうでがす」

鐵「へえー井戸掘にア見えませんね」

×「井戸掘ではない、医者いしやでがす」

鐵「へえーお医者で、私わっちどもはいけぞんぜえだもんだから、お医者と相宿あひやくになつてると皆も氣丈夫でござえます、些ちつとばかり薄荷はつかがあるなら甜なめたいもんで」

×「左様な薬は所持しない、なれども相宿の方に御病氣でお困りの方があつて、薬をくれろと仰しやれば、癒なほる癒らないは、それはまた薬が性しやうに合うと合わん事があるけれども、盛るだけは盛つて上げるて」

鐵「へえー、斯う皆さんが大勢寄つて只茫然ぼんやりしていても面白く

ねえから、何か面白おもしろえ百物語でもして遊ぼうじやアありやせんか、大勢寄っているのですから」

医「それも宜うがすが、ま能よく大勢寄ると阿弥陀の光りという事を致します、鬮くじびき引をして其の鬮に当った者が何か買つて来るので、夜中でも厭いといなく菓子を買けえに行くとか、酒を買けえに行くとかして、客の鬮を引いた者は坐つて、少しも動かずに人の買つて来る物を食しよくして楽しむという遊びがあるのです」

鐵「へえーそれは面白おもしろえが、珍らしい話か何かありませんかな」  
医「左様でげす、別に面白い話ありませんですな」

鐵「気のねえ人だな何か他に」

○「手前てめえ出て先へ喋しゃべるがいゝ」



鐵「喋るたつて己おれア喋る訳には行ゆかねえ、何かありませんかな、  
 お医者さまは奥州仙台だてえが、面おも白しろえ怖おっねえ化ば物けものが出たて  
 えような事はありませんかな」

医「左様で別に化物が出たという話もないが、奥州は不思議のあ  
 るところだな」

鐵「へえー左様でござえやすかな」

医「貴方は何ですかえ、松島見物にお出いでになつた事がありますか  
 え」

鐵「いや何処どこへも行ったことはねえ」

医「松島は日本三景の内うちでな、随分江戸のお方が見物に来られる  
 が此このくらい景色の好よい所はないと云つてな、船で八百八島を巡

り、歌を詠えいじ詩を作りに来る風流人が幾許いくらもあるな」

鐵「へえー松島に何か心中でもありましたかえ」

医「情死などのあるところじやアないが、差さし当あたつて別にどうも

面白い話もないが、医者は此こん様な穢きたない身装みなりをして居てはいけませ

ん、医者は居いなりと云うて、玄関が立派で、身装みなりが好よつて立派に

見えるよう、風俗が正しく見えるようでなければ病びよう者しやが信じ

ません、随つて薬おのずも自おのずから利かんような事になるですが、医者は

頓知頓才と云つて先まず其の薬より病人の氣を料はかる処が第一と心得

ますな」

鐵「へえー何ういう……氣を料る処がありますな」

医「先年乞食が難産にかゝつて苦しんでいるのを、所の者が何う

かして助けて遣りたいと立派な医者を頼んで診て貰うと、是はど  
うも助からん、片足出ていなければ宜よいが、片手片足出て首が出  
ないから身体が横になつて支つかえて、仕様がない、細かに切つて出  
せば命がないと途方に暮れ、立合つた者も皆みな可愛うそうだと云つ  
ている処へ通りかゝつたのが愚老でな」

鐵「へえ……それからお前うまさんが産うめたのかえ」

医「それから療治にかゝろうとしたが、道具たくを宅へ置いて来たの  
で困つたが、此こゝ処が頓智頓才で、出ている片手を段々と斯う撫で  
ましたな」

鐵「へえ」

医「撫うちでている中に掌てを開けました」

鐵「成程」

医「それから愚老が懷中から四文錢を出して、赤児あかごの手へ握らせ  
ますと、すうと手を引込ひっこまして頭の方から安々やすくと産れて出て、

お辞儀をしました」

鐵「へえましない呪まじないでげすか」

医「いや乞食の児こだから悦んで」

鐵「ふゝゝ人を馬鹿にしちやアいけねえ、本当だと思つたのに

洒落者しやれもんだね、田舎者だつて迂濶うっかりした事は云えねい……えゝ其方そちら

の隅においでなさるお方、あなたは何ですかえ、矢張お医者さま

でござえやすか」

僧「いや、私わしは斯ういう姿で諸方を歩く出家でござる」

鐵「え、御出家さんで、御出家なら幽霊などを御覧なすった事がありましたしょう」

僧「幽霊は二十四五度たび見ました」

鐵「へえ、此こいつ奴おもしろあ面白え話だ、二十四五度……どど何んなのが出ました」

僧「種いろく々くなのが出ましたな、嫉やきもち妬もちの怨霊は不実な男に殺された女が、口惜くちおしいと思つた念が凝こつて出るのじやが、世の中には幽霊は無いという者もある、じやが是はある」

鐵「へえ、ど何んな塩あんばい梅ばいに出るもんですな」

僧「形は絵に描かいたようなものだ、朦朧ぼんやりとして判はつきり然其の形は見えず、只ぼうと障子や襖からかみへ映つたり、上の方だけ見えて下の方

は烟けむのようで、どうも不気味なものじやて」

鐵「へえー貴方の見たうちで一番怖いと思つたのはどういいう幽霊  
で」

僧「えゝ、左様さ先年美濃みののくに国から信州の福島在の知己しるべの所へ参

つた時の事で、此の知己は可かなりの身代で、山も持つてゐる者で、

其処そこに暫しばらく厄介あつちになつてゐた、其の村に蓮光れんこうじ寺という寺がある、

其の寺の和尚が道楽あはれをしていかん彼は放逐あはれせねばならんと村中が

騒いで、急に其の和尚を追出すことになつたから、お前さん住職

になつてくれないかと頼たのまれましたが、私わしは住職になる訳にはゆ

かん、行脚あんぎやの身の上で、併しかし葬式しやうしきでもあつた時には困ころうから、

後住ごじゆうの定きまるまで暫しばらくいて上げようと云うんで、其の寺に居まりま

した」

鐵「へえー」

僧「すると私の知己わし しるべの山持の妾が難産をして死んだな」

鐵「へえー」

僧「それがそれ、ま主人あるじが女房に隠して、家うちにいた若い女に手を

付け、それがま懷妊したによつて何時いつか家内の耳に入ると、悵りんぎ

氣ぶか深い本妻が騒ぐから、知れぬうちに墮胎おろしてしまおうと薬を

飲ますと、ま宜いい塩梅に墮おりましたが、其の薬の余毒よじくのため妾は

七転八倒の苦しみをして、うーんうんと夜中に唸うなるじやげな」

鐵「へえー此奴こいつア怖こわえなア」

僧「怨みだな、斯う云う事になつたのも、私わたしは奉公人の身の上相あ

対いたずくだから是非もないが、内儀おかみさんが恠気深いために私わしに斯たいういう薬を飲ましたのじや、内儀さんさえ恠気せずば此の苦しみは受けまい、あゝ口惜くやしい、私わたしは死に切れん、初めて出来た子は墮胎おろされ、私も死に、親子諸共に死ぬような事になるも、内儀さんのお蔭くやしじや、口惜くやしい残念と十一日の間云い続けて到頭死にました、その死ぬ時な、うーんと云つて主人の手を握つてな」

鐵「へえ」

僧「目を半眼にして齒をむき出し、旦那わたくしさま私は死に切れませんよ」

○「やア鐵う、もつと此方こつちへ寄れ……気味が悪い、どうもへえー成程……そこを閉めねえ、風がぴゅー／＼入るから……へえー」



僧「気の毒な事じゃが、仕方がない、そこで私がいた蓮光寺へ葬  
 りました、他に誰も寺参りをするものがないから、主人が七日ま  
 では墓参りに来たが、七日後は打棄りばなしで、花一本供げず、  
 寺へ附つけとゞけ 届もせんという随分不人情な人だな」  
 ○「へえー酷い奴だね、其奴そいつア怨うらまア、直すぐに幽ゆうてき的てきが  
 出ましたか  
 え」

僧「私わしも可愛かわいそうじゃアと思おもうた、斯かういういうう仏ぶつは血けつ盆ぼん地じ獄ごくに墮おち  
 るじゃ、早く云いええば血けつの池いけ地じ獄ごくへ落おるんじゃ」

○「へえー」

僧「斯かういいうう亡もう者じゃには血けつ盆ぼん経きょうをを上あげげててややららんんとと……」

○「へえー……けつ……なんて……けつを……棒ぼうで」

僧「いや血盆経というお経がある、七日目になア其の夜の亥刻前  
じやったか、下駄を履はいて墓場へ行き、線香を上げ、其処そこで鈴りんを  
鳴ならし、長らく血盆経を讀んでしもうて、私わしがすうと立つて帰ろう  
とすると」

○「うん、うん」

僧「前が一面乱塔場らんとうばで、裏はずうと山じやな」

○「うんく」

僧「其の山の藪の所が石坂の様になつて居いるじや、其の坂を下おり  
に掛ると、後うしろでぼーずと呼ぶじやて」

○「ふーん、これは怖こわえな、鐵もつと此方こちへ寄れ、成程お前さん  
を呼んだ」

僧「何も私わしに怨みのある訳はない、縁無しゆじようき衆しゆじよう生せいは度どし難がたしと  
いうが、私わしは此こゝの寺へ腰掛ながら住職の代りに回向えこうをしてやる者  
じゃ、それを怨んで坊主とは失敬な奴じゃと振向いて見た、此方こちら  
の勢いきおいが強いので最もう声がせんな」

○「へえー度胸が宜うござえやすな、強いもんだね、始終死人の  
側にばかりいるから怖くねえんだ、うーん」

僧「それから又行きにかゝると、また皺しわがれ枯かれた声で地じの底の方で  
ぼーずと云うじやて」

○「早はや桶おけを埋うめちまった奴が桶の中でお前さんを呼んだのかね」

僧「誰だと振向いた」

○「へえ……先方せんぼうで驚いて出ましたか、穴の中から」

僧「振向いて見たが何なんにも居ないから、墓はかはら原へ立歸つて見たが、墓には何も変りがない、はて何じやろうと段々探すと、山の根方の藪やまいもの中に大きな薯蕷いもが一本あつたのじや、之これが世いわゆに所謂坊主るく山の芋いもじやて」

○「何こゝの事ことた、人を馬鹿にして、併しかし面白おもしろえ、何か他そに、あゝ其そ方つちにいらつしやるお侍さん、えへゝゝ、旦那何か面おもしろ白しろえお話はありませんか」

侍「いや最前から各々方おのゝがたのお話を聞いていると、可笑おかしくてたまらんの、拙者も長旅で表おもてむき向むらさき紫ちりめん縮ふくさづみ緬はすの服紗包しを斜すに脊せ負よい、裁たっつけ着はを穿はいて頭むすびがみを結むす髪がみにして歩く身の上ではない、形かは斯かくの如ごとく檻ぼろばかま褌かまを穿はいている剣道修行の身の上、早く云う

と武者修行で」

○「これはどうも、左様ですか、武者修行で、へえー然そう聞けばお前さんの顔に似てえる」

侍「何が」

○「いえ、そら久しい以前あと絵に出た芳年よしとしの画かいたんで、鰐わに鮫ざめを竹槍つっころで突殺つっころしている、鼻びなが柘榴ざくろ鼻つばなで口が鰐口わにぐちで、眼まなこが金かなつ壺ぼまなこ眼まなこで、えへへ、御免ねえ」

侍「怪けしからん事をいう、人の顔を讒訴ざんそをして無礼至極」

○「なに、お前さんは左様そんなでもねえけれども、些ちつと似てえるという話だ」

侍「貴公らは江戸のものか、職人か」

○「へえ」

侍「成程」

○「旦那、皆は嘘つぺいばかりでいけません、何ぞ面白え話  
はありませんかね」

侍「貴公先にやったら宜かろう」

○「私どもはいい話が無えんで、火事のあつた時に屋根屋の徳の

野郎め、路地を飛越し損なやアがつて、どんと下へ落ると持出し

た荷の上へ尻餅を搗き、鞆丸を打ち、目をまわし、囊が綻びて

中から丸が飛出して」

侍「然ういう尾籠の話はいけんなア」

○「それから乱暴勝てえ野郎が焚火に烘つて、金太という奴を

殴る機はずみにほっぽと燃えてる燼やけぼ木杭つくいを殴ったから堪たまらねえ、其の火が飛んで金太の腹掛の間へ入へいつて、苦しがつて転がりやアがったが、余程よっほど面白うござえました」

侍「其様そんな事は面白くない」

○「そんなら旦那何ぞ面白え話を」

侍「先刻せんこくから空話そらばなしばかり出たので、拙者の話を信じて聞くまいから、どうもやりにくい」

三十八

向座敷むこうざしきにてぼんくと手を打ち、

宗「誰たれも居ぬかな」

下婢「はい」

此の座敷に寝ているのは渡邊お竹で、宗達が看病を致して居りますので、

婢「お呼びなさいましたかえ」

宗「一寸ちよつとこゝへ入つてくれ」

婢「はい」

宗「序ついでに水を持って来ておくれ、病人がうとく眠ね附つかと思うと向座敷で時々大勢がわアと笑うので誠に困る」

婢「誠まことにお喧やかましゆうござりやしよう」

宗「其そこ処をびつたり閉めておくれ」



婢「かしこ畏まりやした」

と立つて行つて大勢の所へ顔を出しまして、

「どうかあの皆さん相宿の方に病人がありやすから、あんま余り大え声をして、わア〜笑わないように、喧しいと病人が眠り付かねえで困るだから、しずか静になさえましよ」

侍「はい〜宜しい……病人がいるなら止しましょう」

○「小声でやってくださいえ、みんな皆は虚つぼなしぺえ話で面白くねえ、旦那が武者修行をした時の、うわばみ蟒蛇を退治たとか何とかきつ剛いのを聞きたいね」

侍「左様さ拙者は是迄恐ろしい怖いというものに出会つた事はないが、のぶすま鼯鼠に両三度出会つた時は怖いと思つたね」

○「ど何処で」

侍「南部なんぶの恐おそれざん山さんから地獄谷むじょうの向むかへ抜ける時だ」

○「へえー名なからして怖おっかねえね恐山おっか地獄谷むじょうなんて」

侍「此処こゝは一騎打いつきうちの難所なんじよで、右手みぎての方ほうを見ると一筋ひとすじの小川せうがわ

が山の麓ふもとを繞めぐつて、どうどうと小さい石いしを転ころがすように最さいと凄すさま

じく流れ、左手ひだりての方かたを見ると高山こうざん峨々がごとして実じつに屏風びんぷうを建てた

る如ごとく、誠まことに恐おそろしい山やまで、樹きは生おい茂しげり、熊笹くまざさが地ちを掩おおうてい

る、道みちなき所ところを踏ふ分けく段々お下くだりて来たきたところが、人家たえは絶たえ

なし、雨あめは降ふつてくる、困こまったことだと思おもい、暫しばく考かんえたが路みちは

知らず、深更しんこうに及およんで狼おおかみにでも出でられちやア猶更なほさらと大きおほきに心配しんぱ

た、時は丁度秋すえの末すえき、すると向むかうにちらくくと見える」

○「へえー、出たんでござえやすか、狼の眼は鏡のように光るてえから、貴方がうんと立止つて小便をなすつたろう」

侍「なに、小便<sup>ちようず</sup>などを為<sup>し</sup>やアせん」

○「それから」

侍「これは困つたものじゃ、彼<sup>あそこ</sup>処に誰か焚<sup>たき</sup>火でもして居るのじゃアないかと思つた」

○「成程山賊が居て身ぐるみ脱いでけてえと、お前<sup>ひつ</sup>さん引こぬいて斬つたんで」

侍「まゝ黙つてお聞き、そう先走られると何方<sup>どっち</sup>が話すのだかららん、山賊が団<sup>くるまぎ</sup>楽坐になつていたのではない、一軒の白屋<sup>くすや</sup>があつた」

○「へえー山の中に……問屋<sup>といや</sup>でしょう」

侍「なに茅屋あばらや」

○「え、油屋あぶらや」

侍「油屋じゃアない、壊れた家をあばらやという」

○「確しつかりした家は脊骨屋せぼねやで」

侍「そう先走つては困る、其家そこへ行つて拙者は武辺ぶへん修行しゆぎようの者

でござる、斯かかる山さんちゆう中みちに路に踏み迷い、且かつ此の通り雨天にな

り、日は暮れ、誠に難渋を致します、一いち樹じゆの蔭を頼むと云つて

音ずれると、奥から出て来た」

○「へえー肋あばらぼね骨が出て、齒のまばらな白髪頭しらがあたまの婆ばあが、片手

に鉈なた見たような物を持って出たんだね、一つ家やの婆で、上から石

が落ちたんでげしよう」

侍「然<sup>そ</sup>うじやアない、二八余りの賤<sup>しずのめ</sup>女<sup>め</sup>が出たね」

○「それじやア気が無<sup>ね</sup>え、雀<sup>ね</sup>が二三羽飛出したのかえ」

侍「賤<sup>しずのめ</sup>女<sup>め</sup>」

○「え、味噌<sup>おつけ</sup>汁<sup>け</sup>の中へ入れる汁の実」

侍「汁の実じやアない、二八余り十六七になる娘が出たと思いな

さい」

○「へえ、家<sup>うち</sup>に居<sup>おん</sup>たんだね、容貌<sup>おんな</sup>は好<sup>よ</sup>うござえやしたろうね、容<sup>お</sup>

貌<sup>んな</sup>は」

侍「そんな事は何うでも宜<sup>よ</sup>しいが、能<sup>よ</sup>く見ると乙<sup>おつ</sup>な女<sup>さ</sup>さ」

○「へえ、おい鐵<sup>こつち</sup>、此<sup>こつち</sup>方<sup>ち</sup>へ寄<sup>つら</sup>れ、ちよいと見ると美<sup>い</sup>い女<sup>だ</sup>が、

能<sup>よ</sup>く見ると眇<sup>めっ</sup>目<sup>かち</sup>で横<sup>つら</sup>つ面<sup>ら</sup>ばかり見<sup>た</sup>、あ、いう事<sup>や</sup>があるが、矢

つぱり  
張其の質たちなんでしょう」

侍「足下そつかが喋なつてばかり居ゐつては拙せつ者は話が出来ぬ」

○「じやア黙しやくつてますから一つやつて下せえ」

侍「それから紙燭しやくを点つけて出て来て、お武家さま斯様な人も通ら

ん山やま中へ何うしてお出でなさいました、拙せつ者は武術修業の身の上

ゆえ、敢あえて淋あしい処ところを恐れはせぬが如何にも追々よ夜は更けるし、

雨は降ふつて来る、誠に難がた渋しぶいたすによつて一泊願ねがいたいと云うと、

何事なにも行ゆき届とどきません、召上めいじやうる物も何もございませんし、着きせて

お寐ねかし申ます物もございません、それが御承知ごじやうちなれば見苦みくしけれ

ども御遠慮ごえんりょなくお泊り遊あそばせと、親切しんせつな女おんなで汚きたい盥たらへ谷水やみづを汲くん

で来て、足をお洗あらいなさいというので足を洗あらいました」

○「へえー其の娘の親父か何かいましたらう」

侍「親父もいない、娘一人で」

○「へえー……母親おふくろもいませんか」

侍「そう喋つては困りますな」

○「もう云いませぬ、それから」

侍「ところが段々聞くと両親もなく、只一人か斯る山の中に居つて、

躬みづから自然薯じねんじよを掘つて来るとか、あるいきのこと或は菌を採るとか、薪たきぎを採ると

か、女ながら随分荒い稼かせぎをして微かすかに暮しておるといひとりもう独身

者のさ、見れば器量もなかく、好よい、色が白くて目は少し小さい

が、眉毛が濃い、口元が可愛らしく、髪つやの毛の光艶やも好よし、山家やまが

に稀まれな美人で」

○「へえー、ふう成程」

侍「何とも云やアしない、まア黙つてお聞き」

○「へえ」

侍「拙者は修業の身の上で、好い女だとは思いましたけれど、猥らしい事を云い掛けるなどの念は毛頭ない」

○「それは何年頃の事ですか」

侍「丁度五年以前の事で」

○「あなたは幾歳だえ」

侍「其様な事を聞かなくとも宜い、三十九才じや」

○「老けているね……五年以前、じゃア未だア壮な時でござえやすな」



侍「左様」

○「へえ、それから何うしました」

侍「拙者の枕元へ水などを持って来て、喉のどが渴いたら召上れと種いろく々手当をしてくれる、蕎麦搔そばがきを拵こしらえて出したが、不味まずかつたけれども、親切の志有難く旨く喰いました」

○「蕎麦粉は宜うござえやしたろうが、醬油したじが悪かつたに違ちがえねえ、ぷんと来るやつで、此方こっちの醬油したじを持って行ゆきたいね」

侍「何を云っている」

○「へえ、それから」

侍「娘は向うの方へ一人で寝る、時は丁度秋の末の事、山やま冷びえでどうも寒い、雨はばらく降る」

○「成程くうんく」

侍「娘は何うしたか何時までも寝ないようぞ」

○「うん（膝へ手を突き前へ乗出し）それから」

侍「拙者に夜具を貸してしまい、娘は夜具無しで其処へごろりと寝ているから、どうも其方の着る物を貸して、此の寒いのに其方が夜具無しで寝るような事じゃア気の毒じゃ、風でも引かしては宜しくないというと、いえ宜しゅうございます、なに宜しい事はない、掛蒲団かけぶとんだけ持つて行ってください、拙者は敷蒲団をかけた寝るから、いゝえ何う致しまして、それならば旦那さま恐入りますが、貴方のお裾すその方へでも入れて寝かしてくださいませんかと云った」

○「へえー、ふう鐵もつと此方こつちへ出ろ、面白い話になつて来た、旦那は真面目になつてるが、能く見ると助平そんな顔付だ、目尻が下さがつてて、旨く女をごまかしたね、中々油断は出来ねえ、白状おしなさい」

侍「ま、黙つてお聞きなさい、苟かりめにも男女七才なんによにして席を同じゆうせずで、一つ寢床へ女と一緒に寝て、他に悪い評ひとでも立てられると、修行の身の上なれば甚だ困ると断ると、左様ならば御お足みあしでも擦さすらして下さいましと云つた」

○「へえー、女の方で、えへく、矢張山やっぱりの中で男珍らしいんで、えへくく成程うん」

侍「どうも様子が訝おかしい、変だと思つた」

○「なに先で思っていたんでしよう」

侍「それから拙者は此方こつちの小さい座敷に寝ていると、改めて又枕元へ来てぴたりと跪ひざまずいて」

○「其の女が蹴躓けつまずきやアがったんで」

侍「蹴躓いたのではない、丁寧ていねいに手を突いて、先生私わたくしは何をお隠し申しましよう、親かたきの敵を尋ねる身の上でございます」

○「うん、其の女が…成程」

侍「敵は此のひとむら一村隔おいて隣村に居ります、僅わずかに八里山を越すと、現に敵が居りながら、女の細腕で討つことが出来ません、先方は浪人者で、私わたくしの父はそま柚をいたして居りましたが、山やまざかい界の争い事から其の浪人者が仲裁なかに入り、掛合かけあいに来ましたのを恥はずかしめ

て歸した事があります、其の争いに先方さきの山主やまぬしが負けたので、礼も貰えぬ所から、それを遺恨に思ひまして、其の浪人が私の父を殺せつがい害がいいたしたに相違ないという事は、世間の人も申せば、私も左様に存じます、其の傍そばに扇子せんすが落ちてありました、黒骨の渋しぶ扇ぶせんへ金で山水が描かいて有つて、確たしかに其の浪人が持つて居りました扇子おうぎで見覚えが有ります、どうか先生を武術修行のお方とお見受け申して、お頼み申しますが、助太刀をなすつて敵かたきを討たして下さいませんか、始めてお泊め申したお方に何とも恐入りますが、助太刀をなすつて本意を遂げさせて下されば、何どの様な事でも貴方のお言葉は背きません、不束ふつつかな者で、迎とてもお側にいるという訳には参りませんが、御飯焚ごはんたきでもお小間使いでも、お寝間の伽とぎ

でも仕ようという訳だ」

○「へえー、此奴こいつア矢張やっぱり然そういう事があるんでげしよう、へえー、  
 なア……鐵やい、左官まつの松の野郎が火事の時に手伝つて、それか  
 ら御家ごけさま様の処とけえ出入でへえりをし、何日いつか深い訳になつたが、成程然そう  
 いう事がありましたよう、それから何うしました」

侍「然そういう訳なれば宜しい、助太刀をして慥たしかに本意を遂げさ  
 せて遣ろうと受合うと、女は悦んで、あゝ有難ありがたう草葉の蔭におい  
 て両親も嘸さぞ悦びましよう、綺麗な顔で真に随喜の涙を流した」

○「へえー芋いも売がら見たよいもがらうな涙を」

侍「なに有難ありがた涙なみだを」

○「へえ成程それから何うしました」

侍「ところで同衾ひとつに寝たんだ」

○「へえーひど甚いなア……成程、鐵ウもつと前へ出る、大變な話になつて来た」

向座敷で手をぼんくと打つと、又またぞろ候下女がまいつて、

下婢「皆さんお静かになすつて、なるたけわア〜云わねえように願います」

○「へえ〜……それから何うしました、先生」

侍「いや止そう」

○「其そこ処まで遣つて止すてえ事はありません、お願ねげえだから後あとを話しておくなせえ」

侍「病人があると云うから止そう」

○「だって先生、こゝで止めちやア罪です」

侍「こゝらで止める方が宜かろう」

○「落話家はなしかや講釈師ちげたア違えます」

侍「此処こゝが丁度宜いい段落きりどころだ」

○「おい、よ話しておくんねえなく」

侍「困るな：すると其の女にこう□□められた時には、身体痺しんたいしびれるような大だい力りきであつた」

○「へえー、それは化物だ、面白い話だね、それから」

侍「もう止そう」

○「冗談じゃアない、これで止められて堪たまるものか……皆さん誰か一つ旦那に頼んでおくんなせえな、是から面白おもしろえ処ところなんで、



今止められちやア寝てから魅うなされらア」

侍「やるかなア」

○「うん成程、其の女が貴方の顔をペロくな甜めたんで」

侍「なに甜めるものか、うーんと振ふりほぐ解して、枕元にあつた無むそり反の一刀を引抜いて、斬付けようとすると、がらくくくと家鳴震動がした」

○「ふうん」

侍「ばらくくく表へ逃げる様子、尚追掛けて出ると、這こは如何に、拙者が化ばかされていたのじゃ、茅屋あばらやがあつたと思う処が、矢やっぱ張野原で、片かた方はどうどうと溪間たにまに水の流れる音が聞え、片方は恐ろしい巖がんせき石峨がゞ々たる山にして、ずうつと裏手は杉や樅もみな

どの大樹だいじゆばかりの林で、其の中へばらくくと追込んだな」

○「へえー成程、狐狸きつねは尻おしりを出して何かに見せると云うが、貴方それから何うしました」

侍「追掛けて行つて、すうと一刀浴あびせると、ばたり前へ倒れた：化物が：拙者も疲れてどたーり其処そこへ尻餅しりもちを搗ついた」

○「成程是は尤もつともです、痛いとうござえましたろう、其処に大きな石があつたんで」

侍「なに石も何もありません、余計な事を云わずに聞きなさい」  
○「な何の化物でげす」

侍「善よく善く其の姿を見ると、それが伸餅のしもちの石に化かしたのさ」

○「へえ、何故だろなア」

侍「だから何うしてもちぎる訳にいかん」

○「冗談じゃアない、真面目な顔をして嘘うそばかり吐ついてる、皆みんなな嘘うそっぽい話ばなしでいけねえ、己おれのは本ほん当だだ、此うちの中に聞きいた人もあるだろう、何なんの話わき、大だい変へんだな、己おれア江え戸この者ものだ、谷や中ちゆうの久ひさ米やま野の美み作さく様さまの屋や敷しきへ出で入いの職しやく人にんだつたが、其そこ処こに大だい変へんな悪あく人にんがいて、渡わた邊へん様さまてえ人ひとを斬きつて、其その上うへに女めを連れて逃にげたは、え、何なにとかいふ奴やつだつて、然そうよ、春はる部ぶ梅うめ三さん郎らうよ、其その奴やつは甚ひどい奴やつで、重じゆう役やくの渡わた邊へん織お江え様さまを斬き殺ころしたんで、其その子こが跡あとを追お掛かけて行いくと、旨めいく言いいくろめて、欺だまして到た頭だま連れ出でして、何なにとかいふ所ところだつて、然そうく、新しん町まち河か原はらの傍わきで欺だまし討うちに渡わた邊へん様さまの子こを殺ころして逃にげたというんだが、大だい騒さわぎよ、八はち州しゆうが八はち方ほうへ手て配はいりをしたが、山やま越ごし

をして甲府へ入へいったという噂で」

鐵「止しねえく、うっかり喋るな、冗談じゃアねえぜ、若もし八州のお役人が、是これは何う云う訳だ、他人に聞いたんでと云つても追付おツつくめえ」

と一人が止めるのを、一人の男が頻しきりに知つたふりで喋つて居ります。

三十九

別座敷に寝て居りましたお竹が、此の話を洩もれ聞き大きに驚き、竹「もしく宗達様くくく（揺ゆり起おこす）」

宗「あい／＼／＼、つい看病疲れで少し眠ねました、はあー」

竹「よく御ぎよ寝しんなつていらつしやいますから、お起おこし申しましては誠に恐入りますが、少し気になることを向座敷で噂うそをしております、他の者ほかの話は嘘うそのように存じますが、中に江戸屋敷へ出で入いる職人とか申す者の話は、少し心配になりますから、お目を覚さましてくださいますし」

宗「あい……はア……つい何うも……はア大分まだ降つてる様子で、ばら／＼雨が戸へ当りますな」

竹「何卒どうぞあなた」

宗「はい／＼……はア……何じや」

竹「其の話に春部と申す者が私わたくしの弟おとを新町河原で欺だまし討うちにして

甲府へ逃げたと云う事でございますが、何卒委しく尋ねて下さいまし、都合に寄つては又江戸へ帰るような事にもなろうと思ひますから」

宗「それは怪しからん、図らず此処で聞くといいは妙なことじゃ、江戸の、うんく職人体の下屋敷へ出入る者、宜しい……え、御免ください」

と宗達和尚が向座敷の襖を開けて、大勢の中に入りました。見ると矢立を持つて鼠無地の衣服に、綿の沢山入っております半纏を着て居り、月代が蓬々として看病疲れで顔色の悪い坊さんでございますから、一座の人々が驚きました。

○「はい、おいでなさい」

宗「あゝ江戸のお方は何方どなたで」

○「江戸の者は私わっちで、奥州仙台や常陸の竜ヶ崎や何か集つてゐるんで、へえ」

宗「只今向座敷で聞いておつた処が、その江戸に久米野殿の屋敷へ出入りをなさる職人というはあなた方か」

○「えゝ私わっちでござえやす」

鐵「えおい、だから余計なことを言うなつて云うんだ、詰らねえ事を喋るからお互たげえに掛合かゝりあいになるよ」

宗「で、その久米野殿の御家来に渡邊織江と申す者があつて人手にかゝり、其の子が親の敵かたきを尋ねに歩いた処、春部梅三郎と申す者に欺かれて、新町とかで殺されたと云う話、八州が何うとかし

たとの事じゃが、それを委しく話してください」

鐵「だから云わねえ事じゃアねえ、先方は彼な姿で来たつて八州の隠密だよ」

と一人の連の者に云われ、一人は真蒼になり、ぶるくと顫え出し、碌々口もきけません様子。

○「なに本当に知つている訳じゃアござえやせん、朦朧と知つてるんで、へえ一寸人に聞いたんで」

宗「聞いたら聞いたゞけの事を告げなさい、新町河原で渡邊祖五郎を殺害した春部梅三郎という者は何れへ逃げた」

○「あ彼方へ逃げて……それから秩父へ出たんで」

宗「うん成程、秩父へ出て」



○「それからこ甲府へ逃げたんで」

宗「秩父越しをいたして甲府の方へ八州が追掛けたのか」

鐵「お、お、仕様がねえな、本当に手前は饒舌だな」

○「饒舌だつて劍術の先生や何かも皆な喋つたじゃアねえか……」

…何でござえやす……え、其の八州が追掛けて何したんで、当りを付けたんで」

宗「何ういう処に当りが付きましたな」

○「そりやア何でござえやす、鴻の巢の宿屋でござえやす」

宗「は、一鴻の巢の宿屋……（紙の端へ書留め）それは何という宿屋じゃ」

○「私ア知りやせん、其の宿屋へ女を連れて逃げたんで、其の宿

屋が春部とかいう奴が勤めていた屋敷に奉公していて、私通くつついて連れて逃げた女の親里とかいう事で」

宗「うん：それから」

○「それっ切り知りやせん」

宗「知らん事は無かろう、知らんと云つても知らんでは通さん」

○「へえ：：（泣声）御免なせえ、真平まっぴら御免下さい」

宗「あなた方は江戸は何処どこだ」

○「真平御免：：」

宗「御免も何もない、言わんければなりませんよ」

○「へえ外神田そとかんだ金沢町かなざわちようで」

宗「うん外神田金沢町：名前は」

○ 「甚太郎じんたろ」

宗 「甚太つ子という名前がありますか、甚太郎じんたろかえ」

○ 「慥たしか然そうで」

宗 「甚太郎……其方そつちにいるお方は」

鐵 「私わっちは喋わつたんでもねえんで」

宗 「言よわんでも宜よい、名前が宿帳と違ちがうとなりませんぞ、宜よいか

え」

鐵 「へえ、下谷したやか茅か町ちよう 二丁目で」

宗 「お名前は」

鐵 「ガラ鐵てつてえんで」

宗 「ガラ鐵てつという名はない、鐵てつ五郎ごろうかえ」

鐵「へえ」

宗「宜しい」

鐵「御免なさい」

と驚いて直すくに其の晩の内此処こゝを逃出して、夜通し高崎まで逃げたという。其様そんなに逃げなくとも宜しいのに。此方こつちはお竹が病苦の中にて此の話この話をを聞き、どうか直に此処を立ちたいと云う。

宗「何うして今から立たれるものか、碓氷を越さなければならん」

と稍ようやくの事で止めました。翌朝よくあさになると、お竹は尚更癩氣しやくきが

起つて、病氣は益々重体だが当人が何分にも肯ききませんから、駕

籠やとを備やとい、碓氷を越して松井田まついでから安中宿あんなかじゆくへ掛り、安中から

新町河原まで来ますと、とつぷり日は暮れ、往来の人は途絶えた

処で、駕籠から下りてがっかり致し、お竹はまたキヤ／＼差込んで来ました。宗達は驚いて抱起したが、昇夫かこやは此処こゝまでの約束だといふので不人情にも病人を見棄て、其の儘ずん／＼往つてしまいました。宗達は持合せた薬を服のませ、水を汲んで来ようと致しましたが、他に仕方がないから、ろはつという禅宗坊主の持つ碗わんを出して、一杯流れの水を汲んで持つて来ました。漸ようやくお竹に水を飲ませ、頻しきりと介抱を致しましたが、中々はげ烈しい事で、竹「ウ、ーン」

と河原の中へ其の儘そり反かえりました。

宗「あゝ困つたものじゃ、何うか助きたいものじゃ」

と又薬を飲まし、口移しに水を啣くませ、お竹を□□めて我わが肌の

温あたかみで暖めて居ります内に、雪はぱったり止み、雲が切れて十  
 四か日の月が段々と差異つてまいる内に、雪明りと月つき光あかりとで熟  
 く／＼、  
 々 お竹の顔を見ますと、出家でも木竹きたけの身では無い、忽たちまち起  
 る煩惱しゆんじょうに 春 情しゆんじょうが発動いたしました。御出家の方では先まず飲おんし  
 酒ゆかい戒かいと云つて酒を戒め、邪淫戒と申して不義の淫事を戒めてあ  
 ります。つまり守り難いのは此かの戒かいでございませう。此の念を断切たちき  
 る事は何かたうも難い事です、修業中の行脚を致しましても、よく宿  
 場女郎おんなを買い、或あるいは宿屋の下婢おんなに戯れ、酒のためについ墮落して、  
 折角積上げた修業も水の泡に致してしまふ事があります、未まだ壮さか  
 んな宗達和尚、お竹の器量と云い、不断こゝろがけの心こゝろがけ懸かけといひ、実に  
 惚りれ／＼するよりうな女、其の上侍の娘ゆえ中々凛々りんりんしい気象な

れども、また柔やさしい処のあるは真まに是こゝが本当の女で、斯かかる娘は容易やすに無いと疾とうから惚と込んで、看病しんぱんをする内うちにも度々たびたび起おる煩悩ぼんねうを断切つぎりく公案こうあんをしては此こゝの念ねんを払はらって居ゐりましたが、今は迷まよいの道みちに踏ふみ入いって、我われながら魔界まがいへ落ちたと、ぐつとお竹たけを□□める途端とたんに、温あみでふと氣きが附ついたお竹たけが、眼まなこを開あいて見みますと、力ちからに思おもう宗達和尚そうだつおしょうが、常つねにもない不行跡ふぎようせき、髭ひげだらけの頬ほを我われが顔かほへ当て、肌かわを開あいて□□めて居ゐりますから、驚おどいて、

竹「アレー、何を遊あそばします」

と宗達和尚そうだつおしょうを突退つぎのけて向むかうへ駆出かけだしにかゝる袖そでを確しつかり押おえて、宗「お竹たけさん御道理ごもつともじゃ、どうも迷まようた、もうとても出家しゅつがは遂ついにげられん、私わしはお前の看病しんぱんをして枕元まくらもとに附添つい、次の間まに寐ねてい

ても、此の程はお前の身体からだが利かんによつて、便所へ行くゆにも手を引いて連れて行き、足や腰を撫なでてあげると云うのも、実は私が迷いを起したからじゃ、とても此の煩惱が起きては私は出家が遂げられん、真に私はお前に惚れた、□□□私の云う事を肯きいてくだされば、衣も棄て珠数じゆずを切り、生えかゝつた月代さかやきを幸いに一つ竈べつとやらに前そりを剃そりこぼつて、お前の供をして美作みまさかの国くにまで送つて上げ、敵かたきを討つような話も聞いたが、何どの様な事ようか理由わけは知らんが、助太刀も仕ようし、又何の様な事でも御舎弟とともと俱ともに力を添える、誠に面目ない恥入つた次第じゃが、何うぞ私の言う事を肯きいてくだされ」

と云われ、呆れてお竹は宗達の顔を見ますと、宗達の顔色は変



り、眼の色も変り、少し狂気している容子ようすで、掴つかみ付きにかゝるのを突退つきのけて、お竹は腹立紛れに懐へ手を入れて、母の形見の合口の柄つかを握つて、寄らば突殺すと云うけんまくゆえ、此方こちらも顔の色が違いました。

竹「宗達さん、あなたは怪けしからぬお方で、御出家のお身みのうえ上で……御幼年の時分から御修業なすつて、何年の間行脚をなすつて、私わしは斯う云う修業をした、仏法は有難いものじゃ、斯ういうものじゃによつて、お前も迷いを起してはならないと、宿に泊つて居りましても臥床ふせる迄は貴方の御教導、あゝ有難いお話で、大きに悟ることもありました、美作まで送つて遣ろうとおっしゃつても、他の方なれば断る処なれど、御出家様ゆえ安心して願いました甲

斐もなく、貴方が然う云うお心になつてはなりません、何卒迷いを晴らして……憤りはしませんから、元々通り道連れの女と思召して、美作までお送り遊ばしてくださいまし、是迄の御眞実は私が存じて居りますから」

宗「むゝう、是程に云つてもお聞濟みはありませんか」

竹「どうして貴方大事を抱えている身の上で其様な事が出来ますものか」

宗「然うか……そうお前に強う云われたらもう是までじゃ、私もどうせ迷いを起し魔界に堕ちたれば、飽までも邪に行く、私はこれで別れる、あなたは煩うている身体で鴻の巣まで行きなさい、それも宜いが、道の勝手を知つて居るまい、夜道にかゝつて、女

の一人旅は何の様な難儀があろうも知れぬ、さ、これで別れましよう」

竹「お別れ申しても仕方がございませんけれども、貴方の迷いの心を翻えしてさえくだされば、私に於てはお恨みとも何とも存じませんから」

宗「いや、お前は何ともあるまいが、此方に有るのじや、私は還俗してお前のためには力を添えて、何の様にも仕よう、長旅をして、お前を美作まで送つて上げようとは、今迄した修業を水の泡にしてしまうのも皆なお前のためじや、何うぞ私の願を叶えてください、それとも肯かんければ詮方がない、もう此の上は鬼になつて、何の様な事をしても此の念を晴さずには置かん、仕儀

によつては手込てごめにもせずばならん」

と飛付きに掛りますから、お竹は慌あわて、跡へ飛退とびさがつて、

竹「迷うたか御出家、寄ると只は置きませんぞ」

と合口をすらりと引抜いて振上げ、けんまくを変えたから、

宗「おまえは私わしを斬る氣になつたのじやな、最もう此の上は可愛さ  
余つて憎さが百倍、さ斬つておくれ」

と云いながら身を躲かわして飛付きにかゝる。

竹「そんなれば最う是迄」

と引払ひっぱらつて突きにかゝる途端に、ころり足が辻すべつて雪の中へ

転ぶと一杯のりの血で、

宗「おゝ何処どこか怪我アせんか」

竹「私を斬ったな、法衣ころもを着るお身で貴方は恐しい殺生戒を破つて、ハツく、お前さんは鬼になった処どころじゃアない蛇じゃになった、あゝ宗達という御出家は人殺しイ」

と云うが、ピーンと川へ響けます。

宗「あゝ悪い事をした、お竹さんが此こ様な怪我をする事になったのも畢ひつきよう 竟 我が迷い、実に仏罰は恐ろしいものである」

と思つたので宗達はカーと取逆とりのぼ上せて、お竹が持っていた合口ねじとを捻取つて、

「お前一人は殺しはせん、私わしも一緒に死んで、地獄の道案内をしましよう」

と云いながら我腹わがへプツリ。

宗「ウ、ーンく」

竹「もしく……宗達さま」

宗「あいく……あい……はアー」

竹「あなたは大層うな覽うなされていらつしやいました」

宗「あいく、あゝ……おゝ、お竹さま」

竹「はい」

宗「あなたはお達者で」

竹「あなた怖い夢でも御覽なすつたか、大層覽されて、お額へ汗が大変に」

宗「はいく……お前は何うしたえ」

竹「はい、私は大きに熱が退とれましたかして少し落着きました」

宗「左様か、ウ、ン……煩惱経にある睡眠、あゝ夢むちゆう中の夢ゆめじゃ、  
 実に怖いものじゃの、あゝ悪い夢を視みました、悪い夢を視みました」  
 と心うちの中に公案を二十ばかり重ねて云いながら、手拭を出して  
 額あたりと胸の辺の汗を拭いて、ホツと息を吐つき、  
 宗「あゝ迷いというものは甚ひどいものじゃ」

## 四十

さて又桑野の屋敷では丁度八月の六日の事でございます。此の  
 程は大殿様が余程御重症でございます。お医者も手に手を尽して  
 種いろく々の妙薬を用いるが、どうも効能きくめが薄いことで、大殿様はお

加減の悪い中にまた御舎弟紋之丞様は、只今で云えば疝<sup>かんろう</sup>勞とか肺勞とかいうような症で、漸々<sup>だんく</sup>お痩せになりました、勇氣のお方がお咳<sup>せき</sup>が出るようになり、お手当は十分でございませうが、どうも思うように薬の効能が無い、唯今で申せば空氣の異<sup>かわ</sup>つた所へと申すのだが、其の頃では方位が悪いとか申す事で、小梅の中屋敷へいらつしやるかと思うと、又お下屋敷へ入らつしやいまして、谷中のお下屋敷で御養生中でありませうと、若殿の御病氣は変であるという噂が立って来ましたので、忠義の御家来などは心配して居られます。五百石取りの御家来秋月喜一郎というは、彼の春部梅三郎の伯父に当る人で、御内室はお浪<sup>なみ</sup>と云つて今年三十一で、色の浅黒い大柄でございませうが、極<sup>ごく</sup>柔和なお方でございませう。或日



おつと  
良人に對い、

浪「いつもの婆ばあがまいりました、あの大きな籠かごを脊負しよつてお芋だ  
の大根だの、菜なや何かを売りに来る婆でございます」

秋「あ、田端たばたへん辺からまいる老婆か、久しく来んで居つたが、何  
ぞ買つてやつたら宜かろう」

浪「貴方あつちがお詠えいえだと申して塵ごみだらけの瓢ふくべを持つてまいりました  
が、彼あれはお花はな活いけに遊あそばしましても余より好よい姿ではございません」  
秋「然そうか、それはどうも……私わしが去年頼たのんで置いたのが出来た  
のだろう、それでも能く丹誠たんじやうして……早さつ速そく此こゝ処ところへ呼よぶが宜よい、

庭へ通した方が宜かろう」

浪「はい」

と是から下男が案内して庭口へ廻しますと、飛石とびいしを伝つてひよこくと婆さまばあが籠を脊負つて入つて来ました。縁先の敷物の上に座蒲団を敷き、前の処へ烟草盆が出ている、秋月殿は黒手の細かい縞の黄八丈の单衣ひとえに本献上の帯を締めて、下襦袢したじゆばんを着て居られました。誠にお堅い人でございます。目下の者にまで丁寧

に、  
秋「さアく婆ばあこゝへ来いく」

婆「はい、誠に御無沙汰をしましてこんにちま今日はお庭へ通れとおつしやつて、此様こんなはア結構なお庭を見ることは容易にア出来ねえ事だから、ま遠慮申さねえばなんねえが、御遠慮申さずに見て、媳よめつ子や忤めえに話して聞かせべいと思つて参りました、皆様お変わりも

「ごぜえませんで」

秋「婆ばやア丈夫ぢゆうぶだの、幾いくつ歳さいになるの」

婆「はい、六十八になりますよ」

秋「六十八、左様か、アハ、ハ、ハ、いやどうも達者たつしやだな田端でんぱだつけな」

婆「はい、田端でんぱでごぜえます」

秋「名は何という」

婆「はい、お繩なわと申します」

秋「妙な名なだな、お繩なわ：フ、ハ、余り聞かん名なだの」

婆「はいあの私わしの村むらの鎮守ちんしゆ様さまは八幡はちまん様さまでごぜえます、其そのの別当べつたうは真言宗しんげんしゆで東覚寺とうかくじと申します、其そのの脇わきに不動ふどう様さまのお堂だうがごぜえ

まして私のわたくし両親ふたおやが子が無ねえつて其の不動様へ心願しんがんを掛けまし  
 た処が、不動様が出てござらつしやつて、左の手で母親おふくろの腹あは  
しつちば緊縛しつちばつて、せつないと思つて眼え覚めた、申子もうしごでゞもありま  
 すかえ、それから母親がおつ妊ばらんで、だん／＼腹でかが大きくなつて、  
 当る十月とつきに私わしが生れたたてえ話でござえます、縄で腹ア縛られたか  
 らお縄と命つけたら宜よかんべえと云つて附けたでござえますが、是  
 でも生れた時にやア此こ様な婆んアじゃアござえません」  
 秋「アハ、田舎の者は正直だな、手前は久しく来なかつたのう」  
 婆「はい、ま、ね、秋は一番忙がしゆうござえまして、それにな  
わしに私などは田地を沢山持つて居ねえもんだから、他人ひとの田地を手  
 伝をして、小畠こばたで取上げたものを些ちつとべえ売りに参めえります、白山

の駒込の市場へ参つて、めえ彼処で自分の物を広げるだけの場所を借りれば商いが出来ます」

秋「成程左様か、娘が有るかえ」

婆「いえ嫁つ子でござえます、是が心懸の宜いもので、忤と二人で能く稼ぎます、私は宅わしにばかり居ちやア小遣取りこづけえどが出来ましねえから、斯うやつて小遣取りに出かけます」

秋「そうか、茶ア遣れ、さ菓子をやろう」

婆「有難う：おやく／＼まア是れこだけおくんなさいますか、まア此こ様に沢山結構なお菓子を」

秋「宜いよ、また来たたら遣ろう」

婆「はい、此のめえ前参りました時、巨でけえ御紋の附いたお菓子を戴き

ましたつけ、在所に居ちやア迎とても見ること出来ねえ、お屋敷様から戴いたゞえた、有りがたい事だつて村中の子供のある処ちつへ些とずつ遣りましたよ、毎度はや誠に有難い事でござえます」

秋「どうだ、暑中の田の草取りは中々辛いだらうのう」

婆「はい、熱いと思つちやア兎ても出来ませんが、草が生えると

稲が痩せますから、何うしても除とつてやらねえばなりません、

此こねえだも間儲けもんでござえまして、蝦夷虫えどむしいつびき一疋取れば銭い六百ず

つくれると云うから、大概の前栽物せんざいものを脊負しよい出すより其の方が

楽だから、おまえさま捕とつつかめえて、毒なア虫でござえますから、

籠かごへ入れて蓋ふたをしては持つて参めえります」

秋「ム、ウ、それは何ういう虫だえ」

婆「あの斑猫はんみょうてえ虫で」

秋「ム、ウ斑猫……何か一足で六百文ずつ……どんな処にいるものだえ」

婆「はい、豆の葉たかに集つて居ります、在所じやア蝦夷虫えいむしと云つて忌いやがりますよ」

秋「何なんにいたすのだ」

婆「何だかお医者いが随ついて来まして膏藥こうやくに練ねると、これが大でえ薬になる、毒と云うものも、使いいようで薬くすりに成なるだてえました」

秋「ム、ウ、何どの位つか捕つかまった」

婆「左様さやうでござえます、沢山たくさんでなければ利きかねえつて、何なんにするんだか沢山たんとい入いるつて、えら捕つかめえましたつて」

秋「そりやア妙だ、医者は何処どこの者だ」

婆「何処どこの者だか知んねえで、一人男を連れて来て、其の虫を捕つかまつて置きさえすれば六百ずつ置いては持つて往いきます、其の人は今日お前様白山へ参めえりますと、白山様の門の坂の途中の処ところにある、小金屋という飴屋にいたゞよ、私わしは懇ちかづ意だからお前様の家うちは此こゝ処かえと何気なしに聞くと、其の男が言つては悪いというように眼附をしましたつげ」

秋「はて、それから何う致した」

婆「私わしも小声で、今日は虫が沢山たくさんは捕とれましねえと云うと、明日あした己おれが行くから今日は何も云うなつて銭たもとい袂たもとへ入れたから、幾許いくらかだと思つて見ると一貫呉れたから、あゝ是は内儀かみさんや奉公人に内な



いしよう  
証「で毒虫を捕るのだと勘づきましたよ」

秋「ム、ウ白山前の小金屋という飴屋か」

婆「はい」

秋「あれは御当家の出入でいりである……茶の好よいのを入れてください、  
婆「飯を馳走をしようかな」

婆「はい、有難う存じます」

秋「婆ちっア些と頼みたい事があるが、明日手前あしたの家へ私うちが行くがな、  
其の飴屋という者を内々ないくで私に会わしてくれんか」

婆「はい、殿様は彼のあ飴屋の御亭主を御存じで」

秋「いや、知らんが、少し思うことがある、それゆえ貴様の家うち  
へ往いくんだが、貴様の家は二間ふたまあるか、失礼な事を云うようだが、

広いかえ」

婆「店の処とこは土間になつて居りまして、折おりまが曲まがつて内へ入るんですがすが、土間へは、薪まきを置いたり炭俵を積んどくですが、二間ぐれえはごぜえまず、庭も些ちっとばかりあつて、奥が六畳になつて、縁側附で爐ろも切つてあつて、都合が宜うごぜえまず、其の奥の方も畳を敷けば八畳もありましょうか、直すぐに折曲まがつて台所になつて居ります」

秋「そんなら六畳の方でも八畳の方でも宜よいが、その処ところに隠れていて、飴屋の亭主が来た時に私わしに知らしてくれ、それまで私を奥の方へ隠して置くような工夫をしてくれ、ば辱かたじけないが、隠れる処があるかえ」

婆「はい、狭せもうござえますし、それに殿様が入らつしたつて、汚くつて坐る処もないが、上うえの藤右衛門とうえもんの処とこに屏風びょうぶが有りますから、それを立たて廻まわしてあげましょう」

秋「それは至極宜かろう、何でも宜しい、私わしが弁当を持って行くから別に厄介にはならん」

婆「旨うめえものは有りませんが、在郷ざいごのことですから焚立たきたての御飯ぐらいは出来ます、畑物なすの茄子なすぐらい煮て上げましょうよ」

秋「然そうしてくれ、ば千万かたじ辱けないが、事に寄ると私わし一人ひとりで往ゆがな、飴屋の亭主に知れちやアならんのだが、何時なんどきぐらいに飴屋の亭主は来るな」

婆「左様さ、大概お昼を喫あがつてから出て参りますが、彼あれでも未刻やつ

過ぎ  
過ぐらいにはまいりましようか、それとも早く来ますかも知れま  
せんよ」

秋「そんなら私わしは正午前ひるまえに弁当を持ってまいる、村方の者にも云  
つちやアならん」

婆「ハア、それは何うわけいう理由で」

秋「此ほうの方に少し訳があるんだ、注文をして置いた瓢ひょうたん 覃たんを持  
つて来たとな」

婆「誠に妙な形なりでお役に立つか知りませんが」

と差出すを見て、

秋「斯かたうちいう形じやア不都合じやが」

婆「其の代り無代たぐで宜うがंस、口を打欠ぶつけえて種子たねえ投込んで、

担のきへ釣下げて置きましたから、錢も何も要いらねえもんでござえま  
すが、思召おぼしめしが有るなら十六文でも廿四文でも戴ききたいもんで」

秋「是はほんの心ばかりだが、百疋ひき遣る」

婆「いや何う致しまして、殿様此こん様なに戴かいては濟きみません」

秋「いや、取とつとけく、お飯まんを喫たべさせてやろう」

とはからお飯まんを喫たべさせて歸かりました。さて秋月喜一郎は翌日

野掛のがけの姿なりになり、弁当べんとうを持たせ、家来を一人召連ぼれて婆ばの宅うちを尋

ねてまいりました。彼かの田端村から西の方へ深く切れてまいると、

丁度東覚寺の裏手に当ります処ところで。

秋「此こ処ゝかの、……婆ばは在宅うちか、此こ処ゝかの、婆ばはいないか」

婆「ホーイ、おやおいでなせえましよ、さ此こ処ゝでござえますよ、

ままどうも…今朝けさつから忪も悦んで、殿様がおいでがあるとう  
 ので、待まちに待つて居りました処でござえます、何卒直どうぞすぐにお上あがな  
 すつて…お供さん御苦労さまでござえました」

秋「其の様に大きな声をして構つてくれては困る、世間へ知れん  
 ように」

婆「心配ござえませんかからお構えなく」

秋「左ようか…其の包を其の儘こつち此方へ出してくれ」

婆「はい」

秋「これ婆ア、是は詰らんものだが、ほんの土産みやげだ、是れは御新ごし  
 造んでが婆アが寒い時分に江戸へ出て来る時に着る半纏はんでんにでもした  
 ら宜かろう、綿そっちは其方そっちにあらうと云つて、有合せの裏をつけてよ

こしました」

婆「あれアまあ……魂消たまげますなあ、此様こんなに戴きましては済みま

せんでござえます、これやい此処こゝへ来こう忪こや」

忪「へえ御免なせえまし……毎度めえどハヤ婆ばが出まして御鼻おの真まになり

まして、帰けえつて来こましちやア悦えんで、何なにとハア有難ありがたえ事ことで、己おれよ

うな身の上でお屋敷へ出て、立派りつぱなアお方かたさまの側そばで以もてからに

お飯まんまア戴かいたり、直接じかにお言葉ことばを掛かけて下さくだるてえのは冥みよう加か至し

極ごくだと云いつて、毎度めいど帰かえりますとお屋敷おくの噂うわさばかり致いたして居ゐります、

へえ誠まことに有難ありがたい事ことで」

秋「いや、婆ばに碌ろくに手当てあもせんが、今日は少し迷惑めいわくだろうが、

少しの間座敷ざしきを貸かしてくれ、弁当べんたうは持参もちさんしてまいったから、決かし

て心配をしてくれるな、兎や角構つてくれては却かえつて困る、これは貴様の妻か」

嘉「へえ、私の鼻わしかゝあでござえます、そんなもので」

妻「お入い来なせえまし、毎度お母つかが参めえりましては種いろく々御厄介になります、何うかお支度を」

秋「いやもう構つてくれるな、早く屏風を立廻してくれ」

婆かしこま「畏かしこまりました、破けて居りますが、彼あれでも借りてめえりましょ

う、其処そこな家では自慢でござえます、村へ入へいる画工えかきが描かいたんで、

立派というわけには参めえりません、お屋敷様のようにアないが、

丹誠して描いたんだてえます」

秋「成程是は妙な画えだ、福祿寿ふくろくじゆにしては形が変だな、成程大だいぶ



分い宜い画だだ」

婆うちこしら「宅で拵うえた新茶でがんす、嘉かはち八や能くお礼を申上げろ」

嘉「誠に有難うござえます、貴方あんた飴屋めえが参りますと、何かお尋ねなせえますで」

秋「其そん様なことを云つちやアいけない」

嘉「実はその去年から頼まれて居りますが、婆ばアさまの云うにア、それは宜ええが訝おかしいじやアなえか、何ういう理由わけか知んねえ、毒な虫を捕とつて六百文貰つて宜ええかえ、なに構えア事はなえが、黒い羽織を着て、立派なア人が来るです」

秋「まゝ其そん様なことを云つちやアいけない」

嘉「へえく、なに此こゝ処は別に通る人もござえませんけれども、

梅の時分には店へ腰をかけて、草臥足くたびれあしを休める人もありますから、些ちつとべえ駄菓子だかしを置いて、草履草鞋ぞうりわらじを吊下つるさげて、商あいをほんの片手間に致しますので、子供も滅多めだに遊びにも参めえりません、手て習ならいをしまつて寺から帰つて来ると、一文菓子をくれせえと云つて参めえりますが、それまでは誰たれも参めえりませんから、安心して何でもおつしやいまし、お歸りに重おもとうござえましようが、芋ずい茎きが大でく成なりましたから五六把引ばひつこ抜ひいてお土産にお持ちなすつて」

供「旦那さま、芋茎のお土産は御免ごうむを蒙まりとうございます…：御亭主旦那様は芋茎がお嫌いだからお土産は成るだけ軽いものが宜いい」

嘉「軽いものと仰しやつても今上げるものはござえません、南とうな

瓜がちつと残つて居ますし、柿は未だ少し渋が切れないようです  
すが、柿を」

供「柿の樹はお屋敷にもあります」

秋「今日は来ないかの」

嘉「いえ急度参るに相違ござえません」

と云つている内に、只今の午後三時とおもう頃に遣つてまいりましたのは、飴屋の源兵衛でございます。

源「あい御免よ」

婆「はい、お出でなせえまし、さ、お上んなせえまし」

源「あゝ何うも草臥れた、此処まで来るとがっかりする、あい誠に御亭主此間は」

嘉「へえ、是はいらつしやいまし、久しくお出いでがごぜえませんでしたな、漸だん々、秋も末になつて参めえりまして、毒虫も思うように捕とれねえで」

源「これく大きな声をするな、是これは毒きの氣を取つて膏藥こしらを拵こしらえるんだ、私わしは前に藥種屋きぐすりやだと云つたが、昨日きのう婆ばアさんに会つた、隠し事は出来ねえもんだ、これは口止めだよ、少しばかりだが」

嘉「どうもこれは…」

源「其の代り他人ひとに云うといけないよ」

嘉「いえ申しませんでごぜえます」

源「私わしも十露盤そろばんを取つて商いをする身だから、沢山たんの礼も出来な  
いが、五両上げる」

嘉「えゝ、五両……魂消ますな、五両なんて戴く訳もなし、一疋捕まえて六百文ずつになれば立派な立前はあるのに、此様なに、大きく戴きますのは止しましょうよ」

源「いやゝ其様なことを云わないで取ってお置き、事に寄ると為めになる事もあるから、決して他人に云つちやア成りませんよ、私が頼んだという事を」

婆「それは忤も嫁も心配打っています、他の者じやアなし、毒な虫をお前様に六百ずつで売って、何ういう事で間違えでも出来やアしねえかと心配してえます」

源「其様な事は有りやアしないよ、此の虫を沢山捕えて医者様が壇の中へ入れて製法すると、烈しい病も癒るといふは、薬の毒と

病の毒と衝突かちあうから癒るといので、ま其様なに心配しないでも  
宜い」

婆「お金は戴きませんよ、なア忤」

嘉「え、これは戴けません、此間こねえだから一疋で六百ずつの立前たちめえに

なるんでせえ途方も無え事だと思つてるくれえで、これが玉虫と

か皂角虫さいかちむしとかを捕とるのなれば大變だが、豆の葉に集たかつて、誰に

でも捕れるものを大金てえきんを出して下さるだもの、其様そんなに戴いち

やア濟みません」

源「これ、其様そんな大きな声を出しちやアいけない」

嘉「これは何うしても戴きません」

源「そこに種々いろく理由わけがあるんだ、其様そんなことを云つては困る、

これは取つて置いてくれ」

嘉「へえ立前はたちめえ戴きます、ま此方へお上あがんなすつて、なに其処そこを締めろぴつたり締めて置け、砂へいが入つていかねえから……え、風へいが入りますから、ま此方こつちへ……何もござえませんがお飯まんまでも喰たべてつておくんなせえまし」

源「お飯は喫たべたくないが、礼を受けてくれんと誠に困るがな、受けませんか」

嘉「へえ」

と何う有つても受けない、百姓は堅いから何うしても受けません。源兵衛も困つて、

源「そんなら茶代に」

と云つて二分出にぶしますと、

嘉「お構い申しもしませんのに……お茶代と云うだけに戴きましよう、誠にどうも、へえ」

源「今日は帰ります、婆ばアさん又彼方あっちへ来たらお寄り、だが、私が此処こゝへ来たことは家内へ知れると悪いから、店へは寄らん方が宜い、店には奉公人もいるから」

婆「いえ、お寄り申しませんよ、はい左様なら、気を付けてお帰んなせえましょ」

源「あい」

是から麻裏草履はを穿はいて小金屋源兵衛が出にかゝる屏風の中で。

秋月「源兵衛源兵衛」



と呼ばれ、源兵衛は不審な顔をして振りかえり、

源「誰だ……何方どなたでげす、私をお呼びなさるのは何方ですな」

秋「私わしじゃ、一寸ちよつとあげ、ま此方こつちへ入つても宜よい、思い掛ない処で会つたな」

源「何方どなたでげす」

と屏風を開けて入り、其の人を見ると、秋月喜一郎という重役ゆえ、源兵衛は肝きもを潰つぶし、胸にぎっくりと応こたえたが、素知そしらぬ体ていにて。

源「誠に思い掛ない処で、御機嫌宜しゆう」

秋「少し手前に尋ねたい事があつて、急ぐか知らんが、同道しても宜よしい、暫しばらく待つてくれ、少し問う事がある、源兵衛其の方は

何ういう縁か、飴屋風情でお屋敷の出入町人となつてゐる故、殿様の有難い辱かたじけないという事を思ふなら、又此の方が貴様を引廻しても遣つかわすが、真しん以て上かみを有難いと心得てお出入をするか、それから先へ聞いて、後あとは緩ゆっくり話そう」

源「へえ誠にどうも細かい商いでございますが、御用向を仰付けられて誠に有難いことだ、冥加至極と存じまして、へえ結構な菓子屋や其の他のたお出入もある中にて、飴屋風情がお出入とは実に冥加至極と存じて居ります、殿様が有難くないなど、誰そんが其様なことを申しました」

秋「いや然そうじゃアない、真まに有難いと心得て居おるだろう」

源「それは仰しやるまでもございませぬ、此の後のちともお引廻しを

願いとう存じます」

秋「それでは源兵衛、手前が何のど様ように隠しても隠されん処こちらの此方に確かな証拠がある、隠さずに云え、じゃが手前は何ういう訳ではんみよう斑猫ぼんみょうという毒虫を婆ばに頼んで一疋六百ずつで買うか、それを聞こう」

と源兵衛の顔を見詰めている中うちに、顔がんしよく色いろが変つてまいると、秋月喜一郎は態わざとにやく／＼笑いかけました。

四十一

さて秋月喜一郎は、飴屋源兵衛を柔らかに欺だまして白状させよう

という了簡、其の頃お武家が暴あらい事をいたすと、町人は却かえつて驚いて、云うことも前後致したり、言いたいことも言い兼かねて、それがために物の分らんような事が、毎度町奉行所でもあつた事でございます。源兵衛は何うして知れたかと思つて、顔色かおいろを変え、突いていた手がぶる／＼震える様子ゆえ、喜一郎は笑えみを含みまして、物柔らかに、

秋「いや源兵衛何か心配をして、これを言つてはならんとか、彼あれを言つては他役人ほかの身の上にも拘かわるだろうと深く思い過すぐして、隠し立てを致すと却つて為にならんぞ、定めし上役うわやくの者が其の方に折入おりいつて頼んだ事も有るであらうが、其の者の身分柄さわにも障さわるような事があつてはならんから、これは秋月に言つては悪かる

うと、斯う手前が考えて物を隠すと、却つて悪い、と云うのは元もと来とくお屋敷へ出入でいりを致すのには、殿様を大事と心得なければならん、そりやアまた出入町人にはそれ／＼係りの者もあるから、係り役人を粗末にしろと云うのではないが、素もとより手前は上かみの召上り物の御用を達たす身の上ではないか、なア」

源「へえ誠にどうも其の、えゝ：何わたくしうも私がその、事柄わきまを弁えませんものでございまして、唯飴屋風情の者がお屋敷へお出入を致しまして、お身柄のあります貴方様を始め、皆様に直じき々斯やう遣つてお目通りをいたし、誠に有難い事と心得まして、只私はえゝ何うも其の有難くばかり存じますので、へえ自然に申上げます事もその前あと後さきに相成ります」

秋「なに有難く心得て、言う事が前後ぜんごになるといふのは可笑おかしい  
 一体何ういう訳で手前は当家の婆ばあに斑はん猫みょうを捕とつてくれろと頼  
 んだか、それを云えといふんだ」

源「それはその私わたくしが懇意こんいにいたします近辺に医者いしやがございまして、  
 その医者いしやがどうも其の薬くすりを……薬は一体毒なもので、癰疔根太腫ようぢこんたしゅ  
 物もののようなものに貼つけます、膏藥吸出しこうやくすいだしのようなものは、斑猫はんみょう  
 のような毒が入りませんければ、早く吹切りふつきません、それゆえ欲ほし  
 いと申されました事でございまして」

秋「其の人は何処どこの者か」

源「へえ実はその……私わたくしが平常ふだん心こころ易やすくいたしますから、どう  
 かお前頼んでくれまいかと云われて、私が其の医者いしやを同道どうだいたし

てまいりまして、当家の婆ばあに頼みましたのでございます」

秋「ム、ウ、其の医者は何処どこの者だえ、いやさ近辺けりようにいるというが、よもやお抱かえの医者ではあるまい、町医か外療げりようでもいたすものかえ」

源「へえ、その……大概その外療をいたしましたり、ま其の風かぜつ引きぐらいを治ぐあすような工合ぐあで」

秋「何と申す医者だえ」

源「へい、その誠にその、雑ざつといたした医者で」

秋「雑と致した、そんな医者はありません、名前は何というのだえ」

源「名前はその、え……実はその何でございます、山路と申し

ます」

秋「山路……山路宗庵と云うか」

源「へえ、好く御存じさまで」

秋「是は殿様のお部屋お秋の方かたの父で、お屋敷へまいる事もあるで、存じて居るお、其の者に頼まれて、貴様が此処こゝの婆に斑猫を捕とれと頼んだのか、薬に用いるなれば至極道理もつともの事だ……当家の主人は居るおの、一寸ちよつとこゝへ出てくれ」

嘉「はい」

秋「婆も一寸こゝへ」

婆「はい」

と兩人とも秋月喜一郎の前へまいりました。



秋「お前方は何かえ、此の飴屋の源兵衛は前から懇意にいたして居るものかえ、毎度此の飴屋方へも行き、源兵衛も度々此方へ参るような事があるかえ」

嘉「いえなに私が処へお出でなすつた事も何もない、私は御懇意にも何にもしません、婆が商いに出ました先でお目にかゝつたのが初り、それから頼まれましたんで、のうお母」

婆「はい、なに心易くも何とも無えので、お得意廻りに歩き、商いをしべえと思つて籠を脊負つて出て、お前さま、谷中へかゝろうとする途で会つたゞね、それから斯ういう理由だが婆、何うだかと云うから、ま詰らん小商いをするよりもこれ、一疋虫を捕めえて六百ずつになれば、子供でも出来る事だから宜かろうと頼

まれましたんで」

秋「左様か、源兵衛当家の嘉八という男も婆も手前は懇意じゃや無いと云うじゃやないか」

源「へえ、別に懇意という……なにもこれ親類というわけでも何でもないのよ」

秋「親類かと問やアせん、手前が当家の婆とは別懇だから、山路が手前に斑猫を捕る事を頼んだと只今申したが、然らば手前は当家の婆は別懇でも何でもなく、通りかゝりに頼んだか山路も何か入り用があつて毒虫を捕る事を手前に頼んだ事であろうと考えるが、これは誰か屋敷の者の中で頼んだ者でもありはせんか」

源「へえ左様でございますかな」

秋「左様でございますかな、と申して此の方が手前に聞くんのだ」  
 源「へえ……どうか真ま平びら御免遊ばして下さいまし、重々心得違  
 で」

秋「只心得違いでは分らん、白状をせんか、此の程御舎弟様が御  
 病氣について、大分だいふ夜分お咳せきが出るから、水飴を上げたら宜かる  
 うといひるのでお上屋敷からお勧めに相成つて居るお、その水飴を上  
 げる処の出入町人は手前じやから、手前の処で製造して水飴が上あ  
 る、其の水飴を召上つて若しも御病氣でも重おもるような事があれば、  
 手前が水飴の中へ毒を入れた訳ではあるまいけれども、手前が製  
 した水飴を召上つたゝめに病氣が重り、手前が頼んで斑猫を捕とら  
 したという事実がある上は、左様な訳ではなくても、手前が水飴

の中へ毒虫でも製し込んで上へ上げはせんかと、手前に疑ぐりがかゝる、是は当然の事じゃアないか、なア、決して手前を咎にはせん、白状さえすれば素々通り出入もさせてやる、此の秋月が刀にかけても手前を罪に落さんで、相変らず出入をさせた上に、お家の大事なれば多分に手当をいたして遣るやうに、此の秋月が重役等と申合せて計らつて遣わす、何も怖い事はないから有体に言つてくれ、殿様のお為じや、殿様が有難いと心得たら是を隠してはなりませんよ、のう源兵衛」

源「へえ、私が愚昧でございました、それゆえ申上げますことも前後に相成ります事でございました、何かとお疑ぐりを受けま

すことに相成りましたが、なか／＼何う致しまして、水飴の中へ

毒などは入れられません、透すいて見えます極ごくせい製せいでございませうか  
ら、へえ、なか／＼何う致いたしまして、其そん様なことは……御免遊あそば  
して下さいまし」

と泣声なみこゑを出し涙なみだを拭ぬぐう。

秋「何故泣なく」

源「私わたくしは涙なみだつぽろうございます」

秋「涙なみだつぽろいと云つても何も泣なくことはない、別段仔細べつだんしじゆは無ない  
から……左様な事は致いたすまいなれども、また御舎弟様付とお上屋  
敷しきの者と心を合せて、段々手前も存ぞんじて居ゐろうが、どうも御舎弟  
さまを邪魔じゃまにする者があると云うのは、御癩癬ごかんぺきが強く、聊いさかな  
事ことにも暴あらく々くしくお高こう声せいを遊あそばして、手打てうにするなどという烈はげ

しい御気性、乃そこでどうも御舎弟様には附つきが悪いので上屋敷へ諂へつらう者も多いが、今大殿様もお加減の悪い処であるから、誠に心配で、もしも万一の事でもありはせんか、有った時には御順家督ごじゆんかどくで、何うしても御舎弟紋之丞様を直さねばならん、ところがその、此処こゝに婆が居つては……他聞ほかを憚おそることじゃ……婆が聞いても委くわしいことは分るまいが……、婆嘉八とも暫時ざんじ彼方あつちへ退のいてくれ」  
婆「はい」

と立つてゆく。後見あと送りて、

秋「手前も存じて居おる通り、只今其の方が申した医者かたの娘、お秋の方が儲もけられた菊さまという若様がある、其の方かたを御家督に立かたてたいという慾心から、菊様の重役やお附のものが皆心を合せて

御舎弟様を亡なき者にせんと……企たくむのでは有りはすまいが、重役の者一統心配して居おる、御舎弟様は大切のお身の上、万まん一いち間違でもあつては公儀へ対しても相済まんことだが、そりやア手前も心得て居おるだろう、只山路が頼んだというと、山路はお秋の方の實父だから、左様なこともありませんかと私わしは疑うぐる、併しかし然そうで有るか無いか知れんものに疑念を掛けては済まんけれども、大切のことゆえ有ありてい体いに云つてくれ、其の方御舎弟様を大切ほうに思うなれば云つてくれ、秋月が此の通り手を突いて頼たのむ……な……決けして手前の咎めにはせんよ、出入も元々どおりにさせ、また事に寄つたら三人扶持さんにんふちか五人扶持ごにんふちぐらいは、若殿様の御世およになれば私わから直じき々に申上げて、其の方一代ぐらいのお扶持は頂戴ていだいさしてや

る」

と和やわらかに言わるゝ程氣味が悪うございますから、源兵衛は恐おそるゝ首こうべを上げ、

源「へえ、有難う、恐入りますことで、貴方さまのような御重役が、私わたくしごとしき町人風情に手を突いてお頼みでございましたは、誠に恐入ります、私も実はその、えゝ……始めは驚きましてござい  
ますが……実はその、へえ、お立派なお方さまのお頼みでござい  
まして、斑猫てえ虫を捕とつて水飴の中へ入れてくれるというお頼  
みでございます、初めは山路というお医者が、何とかやわらいう、えゝ、  
※にいたして、その毒氣どくきを水飴の中へ入れたら、柔やわかになつて宜  
かろうというお頼みで、迂濶うっかりお目通りをして其の事を伺い、こ



れは意外な事と存じまして、お断りを申上げましたら、其の事が不承知と申すなら、一大事を明あかしたによつて手打に致すとおつしやつて、刀の柄つかへ手を掛けられたので、恟びつくり致しまして、否いやと云えば殺され、応うんと云えば是迄通り出入でいりをさせ、其の上多分のお手当を下さるとの事、お金が欲ほしくはございませんでしたが、全く殺されますのが辛いので、はいと止やむを得ずお受けをいたしました、真まっぴら平御免下さいまし」

秋「うむ、宜く言つてくれた、私わしも然そうだろうと大概推察致して居つた、宜く言つてくれた」

源「え、私わたくしが此の事を申上げましたことが知れますと、私は斬いられます」

秋「いや〜手前が殺されるような事はせん、決して心配するな、あゝ誠に感心、宜く言ってくれた、これ当家の主人」

嘉「はい」

秋「今私わしが源兵衛に云つた事が逐ちくいち一分つたかえ、分つたら話して見るが宜よい」

嘉「なにか仰しやつたようでごせえますが、むずかしくつて少しも分りませんが、若わえ殿様に水飴なを甜めさせて、それから殿様にも甜めさせて、それを何ですかえ両方へ甜めさせるような事にして御扶持ごふちをくれるんだつて」

秋「あはゝゝ分らんか、宜しい、至極宜しい、分らんければ」  
嘉「それで何ですかえ、飴屋さんが御扶持を両方から貰つて」

秋「宜しいく、分らん処が妙だ、どうぞな私が貴様の家へ来て、  
 飴屋と話をした事だけは極内々でいてくれ、宜いか、屋敷の者  
 に……婆が又籠を脊負つて、大根や菜などを売に來た時に、秋月  
 様が入しつたと長家の者に云つてくれちやア困る、是だけは確か  
 と口留をいたして置く、いうと肯かんよ、云うと免さんよ、何処  
 から知れても他に知る者は無いのだから、其の儘にしては置かん  
 よ」

嘉「はい……どうか御免を」

秋「いや、云いさえしなければ宜しいのだ」

嘉「いう処じやアありません、婆さんお前は口がうるせえから」

婆「云うつて云わねえつて何だか知んねえものそれじやア誰が聞

いても、殿様は己<sup>おれ</sup>ア家<sup>うち</sup>へおいでなすつた事はごぜえません、飴屋さんとお話などはなせえませんか

秋「そんな事を云うにも及ばん、決して云つてはならんぞ」

婆「はい、<sup>かしこ</sup>畏まりました」

秋「源兵衛、毒虫を入れた水飴は大概もう仕上げてあるかの」

源「へえ、<sup>あさつて</sup>明後日は残らず出来ます」

喜「<sup>あさつて</sup>明後日出来る……よし宜く知らせてくれた辱<sup>かたじけ</sup>ない、源兵衛手

前に何<sup>なん</sup>ぞ望みの物を取らしたく思う、持合せた金子も少ないが、

是はほんの手前が宅への土産に何ぞ買つて行つてくれ、私<sup>わし</sup>が心ば

かりだ」

源「何う致しまして、<sup>わたくし</sup>私<sup>わたくし</sup>がこれを戴きましては」

秋「いや／＼遠慮をせずに取りつて置いてくれ、就てはの、源兵衛  
大概此の方に心当りもある、手前に頼んだ侍の名前は、これ誰が  
頼んだえ」

源「へえ、是だけは、それを言えば斬ると仰しやいました、へえ、  
何うかまア種々いろくそのお書物かきものの中へ、私わたくしにその、血で爪印をし  
ると仰しやいましたから、少し爪の先を切りました」

秋「左様か、云つては悪いか、併し源兵衛斯こう打明けてしまつた  
事じやから云つても宜かろう」

源「何卒どうぞそれだけは御勘弁を」

秋「云えんかえ」

源「へえ、何うもそれは御免を蒙こうむります」

秋「併し源兵衛、是までに話を致して、依頼者の姓名が云えんと云うのは訝おかしい、まだ手前は悪人へ与くみ致して居おるように思われ、手前が云わんなら私わしの方で云おうか」

源「へえ」

秋「神原五郎治兄弟か、新役の松蔭かな」

源兵衛は仰天して、

源「よよ好く御存じさまで」

四十二

喜一郎は態わざと笑えみを含みまして、

秋「何うも其<sup>そこら</sup>辺だろうと鑑定が附いていた、ま宜しいが、彼の松蔭並びに神原兄弟の者はなか／＼悪才に長<sup>た</sup>けた奴ゆえ、種々<sup>いろく</sup>罨をかけて、私<sup>わし</sup>が云ったことを手前に聞<sup>き</sup>くまいものでもないが、手前決して云うな」

源「何う致しまして、云えば直<sup>す</sup>ぐに私<sup>わたくし</sup>が殺<sup>ころ</sup>されます、貴方様も仰しやいませんように」

秋「私<sup>わし</sup>は決して云わん、首尾<sup>しゆびよ</sup>好<sup>よ</sup>く悪人を見出<sup>みだ</sup>して御当家安堵の想いを為すような事になれば、何うか願<sup>ねが</sup>って手前に五人扶持も遣<sup>や</sup>りたいの」

源「何う致しまして、悪人へ与<sup>く</sup>み致<sup>あ</sup>しました罪で、私<sup>わたくし</sup>はお手打になりまして宜<sup>よろ</sup>しいくらいで、私は命さえ助<sup>たす</sup>かりますれば、御扶

持は戴きませんでも宜しゆうございます、お出入りだけは相変らず願います」

秋「うむ、承知いたしました、一緒に帰ろうか、いや／＼途中で他人に見られると悪いから、早く行け／＼」

源「有難うございます」

ほつと息を吐いて、ぶる／＼震えながら出て、後あとを振り返り／＼二三丁行って、それからかうと駈出して向うへ行く様子を見て、

秋「何も駈出さんでも宜さそうなものだ」

と笑いながら心静かに身支度をいたし、供を呼んで、是から嘉八親子にもくれ／＼礼を陳べて帰られました、丁度八月九日のことで、川添富彌という若様附でございます、御舎弟様は夜分



になりますとお咳が出て、お熱の差引さしひきがありますゆえ、お医者  
 は側に附切りでございます。一統が一通りならん心配で、お夜詰よづめ  
 をいたし、明番あけばんになりますと丁度只今の午前十時頃お帰りにな  
 るのですが、御容態ごようたいが悪いと忠義の人は残っている事がありま  
 すので、富彌様はお留守勝だから、御新造はお留守を守って、ど  
 うかお上かみの御病氣御全快になるようにと、頻しきりに神信心などを致  
 して居ります。御新造は年三十で名をお村むらさんといい、大柄な美  
 い器量の方で、お定さだという女中が居ります。

村「定や〜」

定「はい」

村「あの此処こゝだけを少し片付けておくれ、何だか今年のように用

の遅れた事はない、おち／＼土用干も出来ずにしまつたが、そろ／＼もう綿入近くなつたので、早く綿入物を直しに遣らなければならぬ、それにあわせ大分汚れたから、お襟を取換えて置かなければなるまい」

定「左様でございます、矢張やはり旦那様がお忙しくつて、日々御出勤になりましたり、夜もお歸りは遅し、お留守勝ですから夜業よなべが出来ようかと存じますが、何だか矢張やっぱりせか／＼致しまして、なんでございますよ、御用が段々遅れに遅れてまいりました」

村「あの今日はお明あけぼん番だから、大概お歸りだろうとは思ふが、いつとき一時でも遅れると又案じられて、お上かみがお悪いのではないかと、

何だか私は気が落着かないよ、旦那のお歸り前に御飯を戴いてし

まおうか」

定「何もございませんが、いつもの魚屋が佳よい鰈かれいを持ってまいりました、珍しい事で、鰈を取って置きました」

村「然そうかえ、それじゃアお昼の支度をしておくれ」

定「畏かしこまりました」

と是から午飯ひるはんの支度を致して、午飯ひるはんを喫たべ終り、お定が台所で片付け物をして居ります処へ入つて来ましたのは、茶屋町に居りますお縫ぬいという仕立物をする人で、好よくは出来ないが、袴はかまぐらゐの仕立が出来るのでお家かちゆう中へお出入りをいたしている、独り暮しの女で、

縫「御免遊ばして」

定「おや、お縫さん、よくお出掛け……さ、お上あがんなさい」

縫「誠に御無沙汰をいたしました、此こないだ間は有難う……今日こんにちは御

新しんさんはお宅に」

定「はア奥にいらつしやるよ」

縫「実はたった一人いもとの妹わたくしで、私が力に思っていました其それの者が、

随分丈夫たちな質たちでございましたが、加減が悪くつて、

けに参つて居りまして、看病を致してやつたり、種いろく々の事があ

りまして大分だいぶん遅おそくなりました、尤もつともお綿入もといでございませうから、未ま

だ早いことは早いと存ぞんじまして」

定「出来できましたかえ」

縫「はい、左様さやうでございませう」

定「御新造様、あの茶屋町のお縫どんがまいりました」

村「さ、此方こつちへお入り」

縫「御免遊ばしまし……誠まことに御無沙汰をいたしました」

村「朝晩は余程加減が違つたの」

縫「誠まことに滅めつきり切御様子が違いました、お変り様もさまございませんで」

村「有難う」

縫「御意に入るか存じませんが、お悪ければ直します」

村「大層好く出来ました、誠まことに結構……お前のは仕立屋よりか却かえ

つて着き好いと旦那も仰しやつて、誠まことに好く出来ました、大分色

気も好くなつたの」

縫「これは何でございます、お洗せんい張はりを遊あそばしましたら滅め切きりりお

宜しくなりました、尤もお物が宜しいのでございますから、はい  
したてばえ  
 仕立栄がいたします」

村「久しく来なかつたの」

縫「はいなんでございます、直に大門町にいる妹ですが、平常丈  
じき  
 夫でございましたが、長ながわづら 煩わづらいを致しましたので、手伝いにま

いりまして、伯母が一人ございますが、其の伯母は私のためには  
わたくし  
 力になってくれました、長ながいき命いきで八十四で、此の間死去なくなりました

が、あなた其の歳まで眼鏡もかけず、齒よも好よし、腰こしも曲りません  
しごと  
 ような丈夫でございましたが、月夜の晩に縁側で裁縫しごとを致して居

りましたが、其そこ処こへ倒れたなり、ぽっくり死去なくなりましたので、そ  
いろく  
 れゆえ種々取込んで……お小袖こそでですから間に合わん氣遣いはな

いと存じまして、御無沙汰をいたしました、今年は悪い時候で、上方辺は大分水が出たという話を聞きました、お屋敷の大殿様も若殿様もお加減がお悪いそうで」

村「あゝ誠にお長引きで」

縫「私わたくしは毎ごとも然そう申ましますので、伯母おばが死なく去なりましても悔くむこと

はない、これ〳〵のお屋敷の殿様が御病気で、お医者いしやの五人ごにんも三

人も附ついて、結構けつこうなお薬くすりを召まり、お手当てあては届といても癒なる時とき節ふしに

ならなければ癒ならんから、くよ〳〵思おもう事ことはないと申まして、へえ」

村「何なに分ぶん未まだお宜よろしくないのので、実まことに心配しんぱいしているよ、夜分よるはお

咳せきが出ての」

縫「然そうでございますか、それはまア御心配ごしんぱいでございますね、併しか

しまだお若様でいらつしやいますから、もう程ほどの無う御全快になり  
ましよう」

村「御全快にならなくつちやア大変なお方さまで、一時いつときも早くと  
心配しているのさ」

縫「え、御新造様え、こんな事をお勧め申すと、なんでございま  
すが、他わきから頼まれて、余あんまりお安いと存じまして持つて出ました  
が、二枚小袖の払い物が出ましたので、ま此こん様な物を持つて出た  
り何かして、済みませんが、出所どこも確かな物ですから、お目にか  
けますが、それに八丈の唐もろこし手の細いのが一枚入つて居ります、  
あとは縞縮緬しまちりめんでお裏が宜しゆうございます、お平常ふだん着に遊ばし  
ても、お下着に遊ばしても」



村「私は古着は嫌いだよ」

縫「左様でございませうが、でどころ出所が知れているものですから」

村「じゃア出してお見せ」

縫「かしこ畏まりました」

とお次つぎから包を持ってまいり、取出して見せました。唐手の縞

柄は端手はででもなく、縞縮緬は細格子ほそこうしで、色気も宜うございます。

村「大層好よい縞だの」

縫「誠に宜うございます」

村「これは何どの位というのだえ」

縫「これで先方むこうじゃア最少もうし値売ねうりをしたいように申して居ります

が、此の書付でと申すので」

村 「二枚で此の値段ねだんがき書では大層に安い物だの」

縫 「へい、お安うございます、貴方お裏は新しいものでござい  
ます」

村 「何ういう訳で此れを払うというのだえ」

縫 「先方むこうはよく／＼困っているのでございます」

村 「丈たけや身巾みはぎが違うと困るね」

縫 「左様ならお置き遊ばしては何うでございます、一日ぐらいお  
置きあそばしても宜しゆうございます」

村 「余あんまり縞柄よが好いから、欲しいような心持もするから、置いて  
つておくれ」

縫 「左様でございますか、じゃア私わたくしが今日の暮方までに参りませ

んければ、明朝伺いに上ります」

村「では後あとで好よく檢あらためて見よう」

是をお世話いたせば幾許いくらか儲かるのだから先ず氣に入ったようだとお縫は悦んで帰つてしまふ、後あとでお定を呼んで、

村「手伝つておくれ、解ほどいて見よう、綿どんは何様なか」

と段々解いて見ると。不思議なるかな襟えりすじ筋に縫込んでありました一封の手紙が出ました。

村「おや、定や」

定「はい」

村「此こん様な手紙が出たよ」

定「おや、襟えり中から奇態でございますね、何うして」

村「私にも分らんが、何ういう訳で襟の中へ……訝おかしいの」

定「女物の襟へ手紙を入れて置くのは訝しい訳でございますが、  
情いろおとこ夫の処へでも遣るのでございましょう」

村「だってお前それにしても襟の中へ……訝しいじゃアないか」  
定「左様でございますね、開けて御覧遊ばせよ、何と書いてある  
か」

村「無闇に封を切つては悪かろう」

定「これを貴方の物にして、此の手紙を開けて御覧なすつて、若も  
し入用にゆうようの手紙なれば先方むこうへ返したつて宜いいじゃア有りませんか」  
村「本当に然そうだね、封が固くしてあるよ、何と書いてあるだろ  
う」

定「お禁<sup>まじない</sup>厭<sup>いや</sup>でございますか知らん、随分お守<sup>まもり</sup>を襟へ縫込んで置く事がありますから、疫<sup>やくび</sup>病<sup>びょう</sup>除<sup>よけ</sup>に」

村「父上様まいる菊よりと書いてある、親の処へやつたんで」

定「だつて貴方親の処へ手紙をやるのに、封じを固くして襟の中へ縫付けて置くのは訝<sup>おか</sup>しゆうございますね、尤<sup>もつと</sup>も芸者などは自分の情<sup>いろおとこ</sup>郎<sup>らう</sup>や何かを親の積りにして、世間へ知れないようにお父<sup>と</sup>様<sup>つさま</sup>く〜とごまかすてえ事を聞いて居りますよ」

村「開けて見ようかの」

定「開けて御覧遊ばせよ」

村「面白いことが書いてあるだろうの」

定「屹<sup>きつ</sup>度<sup>との</sup>惚<sup>ろけ</sup>気が種<sup>いろく</sup>々書いてありましようよ」

悪いようだが封じが固いだけに、尚なお開けて見たくなるは人情

で、これから開封して見ますと、女の手で優しく書いてあります。

村「…文ふみして申もうしあげ上※…、極きわっているの」

定「へえ、それから」

村「…益々御機嫌能御暮しよくおくら被成候なされそうろう御事おんこと蔭ながら御嬉おんうれしく

存じ上※」

定「定文句じょうもんくでございますね、併しかし色男の処へ贈る手紙にしちや

ア改あらたまり過ぎてるように存じますね」

村「然そうだの、左候さそうらえば私主人松蔭事ス…神原四郎治と申合

せ渡邊様を殺そうとの悪だくみ…おや」

定「へえ…何ういう訳でございましょう」

村「黙つていなよ、……そのみならず水飴の中へ毒薬を仕込み、若殿様へ差上候よう両人の者しめ謀し合せ居り候を、わたくし図らず私が立聞致し驚き入り候」

定「呆れましたね、誰でございますえ」

村「大きな声をおしでないよ、世間へ知れるとわるいわ……一大事ゆえ文に認め差上候わんと取急ぎ認め候え共、若し取落し候事も有れば、他の者の手に入つては尚々お上のために相成らずと心配致し、あわせ裕の襟へ縫込み差上候間、そえしよ添書の通りお宅にてこれを解き御覧の上渡邊様方に勤め居り候御兄様へ此の文御見せ内々御重役様へ御知らせ下され候様願あげい上※、申上度事数々有之候え共取急ぎ候まゝ書残し※尚おお目もじの上委しく可申

べくそうろう  
上 候、芽出度かしく、父上様兄上様、菊…と、…菊とい

うのは何かの、彼のあ新役の松蔭の処に奉公していた女中は菊と云  
つたつけかの」

定「わたくし私は存じませんよ」

村「松蔭の家うちにいた女中が殺されたような事を聞いたから、旦那  
様に聞いてもお前などは聞かんでも宜よい事だと仰しやるから、別  
段委くわしくお聞き申しもしなかったが、是は容易な事ではないよ」

と申している処へ一ひとこえ声高く、玄関にて、

僕「お帰りい」

村「旦那がお帰り遊ばした」

と慌あわて、お玄関へ出て両手を支つかえ、



村「お帰り遊ばしまし」

定「お帰り遊ばせ」

富「あい、直すぐに衣服きものを着換えよう」

村「お着換遊ばせ、定やお召換だよ、お湯を直すぐに取つて、さぞお疲れで」

富「いやもう大きに疲れました、ハア―どうも夜眠ねられんでな、大きに疲れました、眠ねむれんと云うのは誠にいかんものだ」

是から衣服きものを着替えて座蒲団の上に坐ると、お烟草盆に火を埋いけて出る、茶台に載せてお茶が出る。

村「毎日くお夜詰よづめは誠にお苦勞な事だと、蔭ながら申して居りますが、貴方までお加減がお悪くなると、却かえつてお上かみのお為にな

りませんから、時々は外村様とお替り遊ばす訳にはまいりませんので」

富「いや、外村と代つているよ」

村「今日の御様子は如何いかゞで」

富「少しはお宜しいように見受けたが、どうもお咳が出てお困り遊ばすようだ」

定「御機嫌宜しゆう、お上は如何でございます」

富「あい、大きに宜しい、定まで心配して居おるが、どうも困ったものじゃ」

村「早速貴方に申上げる事がございます、茶屋町の縫がまいりまして」

富「うん」

村「彼かれが払い物だと云つて小袖こそでを二枚持つてまいりましたから、

丈たけは何うかと存じまして、改める積りで解きましたところが、貴方えり襟の中から斯こん様な手紙が出ました、御覧遊ばせ」

と差出すを受取り、

富「襟の中から、はて」

と披ひらいて読み下し、俄にわかに顔色を変え、再び繰返し読直して居りまする内に、何と思つたか、

富「定」

定「はい」

富「茶屋町の裁縫しごをいたす縫というものは何かえ、彼あれは亭主でも

有るのか」

定「いえ、亭主はございませぬ、四年あと已前に死去なくなりまして、子供もなし、寡婦やもめぐら暮しで、只今はお屋敷やお寺方の仕事をいたして居りますので、お召縮緬めしちりめんの半纏はんてんなどを着まして、芝居などへまいりますと、帰りには屹度きつとお茶屋で御膳や何か喫たべますつて」

富「其様そんな事は何うでも宜よい、御新造松蔭うちの家うちにいた下婢おんなは菊と云つたつけの」

村「私わたくしは名を存じませんが、其の下女が下男と不義をいたして殺されたという話を聞きましたから、只今考えて居りますので」

富「只松蔭とのみで名が分らんと、他ほかにない苗字でもなし、尤も神原四郎治は当家の御家来と確かに知れている、その四郎治と心

を合せる者は大藏の外にはないが、先方さきの親の名が書いてあると調べるに都合も宜しいが、ス……これ定、其の茶屋町の縫という女を呼びに遣れや、直すくに……事を改めていうと胡乱うろんに思つて、何処かへ隠れでもするといかんから、貴様一寸ちよつと行つて来い、先刻さつきの衣服きものの事について頼みたい事がある、他に仕立物もある、置いてまいった衣服二枚を買取るに都合もあるから、旦那様もお歸りになり、相談をするからと申してな、それに旨い物が出来たで、馳走をしてやる、早く来いと申して、直すくに呼んでまいれ」

定「じやア私わたくしがまいりましょうか」

富かえ「却つて貴様の方が宜かろう、女は女同志で、此の事を決して  
いふな」

定「何う致しまして、決して申しは致しません」

と急いで出てまいりました。

四十三

お縫は迎いを受けて、衣服きものが売れて幾許いくらかの口銭になることゝ  
悦んで、お定と一緒にまいりました。

定「旦那さま、あのお縫どんを連れてまいりました」

富「おすぐ直に連れて来たか、此方こつちへ通せ」

縫「旦那様御機嫌宜しゅう」

富「其そこ処では話が出来ん、此方こつちへ這入れ構わずうつと這入れ」

縫「はい……毎度御鼻屑さまを有難う……毎度御新造様には種々頂戴物を致しまして有難う存じます」

富「毎度面倒な事を頼んで、大分裁縫が巧いと云うので、大きに妻も悦んでいる、就ては忙しい中を態々呼んだのは他の事じゃアないが、此の払物の事だ」

縫「はい、誠に只お安うございまして、古着屋などからお取り遊ばすのと違って、出所も知れて居りますから上げました、途々もお定どんに伺いましたが、大層御意に入つて、黄八丈は旦那様がお召に遊ばすと伺いましたが、少しお端手かも知れませんが、誠に宜いお色気でございます」

富「それじゃア話が出来んから此方へ這入れ」

縫「御免遊ばして……恐入ります」

富「茶を遣やれよ」

縫「恐入ります……これは大層大きなお菓子でございますねえ」

富「それは上かみからの下されたので」

縫「へえ中々下しも々々では斯こういう結構なお菓子を見る事は出来

ません、頂戴致します、有難う存じます」

富「あゝ此の二枚の着物は何処どこから出たんだえ」

縫「そりやアあの何でございます、私わたくしが極心安い人ごくでございまし

て、その少し都合が悪いので払いたいと申して、はい私の極心安

い人なのでございます」

富「何ういう事で払うのだ」



縫「はい、その何でございます、誠に只もう出所でしこが分つて居りまして、古着屋などからお取り遊ばしますと、それは分りません事で、もしやそれが何でございますね、ま随分お寺へ掛無垢かけむくや何かに成つてまいったのが、知らばつくて払いに出ます事が幾許いくらもございます、左様な不祥ふしような品と違ひまして、出所も分つて居りますから何かと存じまして」

富「それは分つているが、何ういう訳で払いに出たのだえ」

縫「まことに困ります、急にその災難で」

富「むゝう災難……何ういう災難で」

縫「いえ、その別に災難と申す訳もございませんけれども、急に嫁にまいるつもりで拵こしらえしました縁が破談になりました、不用にな

った物で」

富「はゝア、これは何と申す婦人のだえ、何屋の娘か知らんけれども、何と申す人の着物だえ」

縫「そりやアその何でございます、わたくし私のような名でございますね」  
富「手前のような……矢張縫という名かえ」

縫「いゝえ、縫という名じやアございませんが、その心安くいたす間柄の者で」

富「心安い何という名だえ」

縫「それはどうも誠に何でございますね、その人は名を種々いろくに取りかえ取換る人なんで、最初はきんと申して、それから芳よしとなりまして、またお梅となつたり何か致なんしました」

富「むゝう、今の名は何という」

縫「芳と申します」

富「隠しちやアいかんぜ、少し此方こつちにも調べる事があるから、お前を呼んだのじゃ、此の着物を着た女の名は菊といやアせんか」

縫「はい」

富「左様だろうな」

お縫もみで揉手をしながら、

縫「菊という名に一寸ちよつとなつた事もあります」

富「一寸成つたとは可笑おかしい隠しちやアいかん、その菊という者は此方こつちにも少し心当りがあるが、親の家いえは何処どこだえ」

縫「はい」

富「隠しちやアならん、お前に迷惑は掛けん、これは買入れるに相違ない、今代金を遣るが、菊という者なればそれで宜しいのだ、菊の親元は何処だえ」

縫「はい、誠にどうも恐入ります」

富「何も恐入る事はない、頼まれたのだから仔細はなからう」

縫「親元は本郷春木町三丁目でございます、指物屋の岩吉と申します、其の娘の菊ですが、その菊が死なくなりましたんで」

富「うん、菊は同家中に奉公していたが、少々仔細有つて自害致した」

縫「でございますけれども、これはその自害した時に着ていた着物ではございませぬ」

富「いや／＼自害した女の衣類きものだから不縁起だというのではない、  
買つても宜よい」

縫「有難う存じます、その親も死去なくなりました、其の跡は職人が続  
いて法事をいたして、石塔なんや何かを建てたいという心掛なので」  
富「左様か、それで宜しい、もう帰れ／＼……おゝ馳走をすると  
申したつけ、欺だましちやアならん、私わしは直すぐに上あがるから」

と川添富彌は急に支度をして御殿へ出ることになりました。御  
殿ではお夜詰よづめの方々が次第／＼にお疲れでございます。お医者いしやは  
野村覺江のむらかくえ、藤村養庵ふじむらようあんという二人が控えて居ります。お夜詰に  
は佐藤平馬とむらそうえ、外村惣衛とむらそうえと申してお少ちいさい時分からお附き申した御  
家来中田千股なかだちまた、老女の喜瀬川きせがわ、お小姓しげる繁などが交々こも／＼お薬あげを上

る、なれどもどつとお悪いのではない、床とこの上に坐つておいで、庭の景色を御覧遊ばしたり、千股がお枕元で軍書を読んだり、するをお聞きなさる。お熱ぐあひの工合くあひでお悪くなると、ころりと横になる。甚ひどく寒い、もそつと掛けるよと御意があると、綿の厚い夜着よぎを余計に掛けなければなりません。お大名様方は釣夜具だとか申しますが、それほど奢つた訳ではない。お附の者も皆心配して居られます。いまだお年若で、今年二十四五という癩かんしやく癬びんざかりでございます。老女喜瀬川が生まして、

喜かみ「上……上」

紋「うむ」

喜「お上屋敷からお使者がまいりました」

紋「うむ、誰が来た」

喜「上のお使いに神原五郎治がまいりまして、御病気伺いに出ました、お目通りを仰付けられたいと申します、御面倒でございませうが、お使者ではお会いが無ければなりませんまい、如何致しませうか」

紋「うむ、神原五郎治か……彼は嫌いな奴じやが、此処へ通せ」  
 喜「畏りましてございます……若殿がお会いが有りますから、これへ直に」

と中田千股という人が取次ぎますと、結構な蒔絵のお台の上へ、錦手の結構な蓋物へ水飴を入れたのを、すうつと持つて参り、喜「お上屋敷からのお遣い物で」

とお枕元に置く。お次の隔へだてを開けて両手を支え、

五「はア」

と慇懃いんきんに辞儀をする。

五「神原五郎治で、長の御不快蔭ながら心配致して居りました、また上に置かせられてもお聞き及びの通り御病中ゆえ、碌々ろくろくお訪ね申さんが、予の病氣より梅の御殿の方が案じられると折々おりく仰せられます、今日は御病氣伺いとして御名代ごみよだいに罷り出ました、これは水飴でございりますが、夜分になりますとお咳が出ますとのこと、其の咳を防ぎますのは水飴が宜しいとのこと、これは極製くせいの水飴で、これを召上れば宜くお眠よられます、上が殊ことの外御ほか心配なされ、お心を入れさせられし御品おんしな、早々そうく召上られます



ように」

紋「うむ五郎治、あゝ予の病氣は大した事はない、未だ<sup>いま</sup>壮年の身で、少し位の病魔に負けるような事はない、快<sup>よ</sup>い時は縁側ぐらいは歩くが、只お案じ申上げるのはお兄<sup>あにいさま</sup>様の御病氣ばかり、誠に案じられる、お歳といい、此の程はお悪いようじゃが、何うじやな」

五「はア一<sup>いつさくじつ</sup>昨日は余程お悪いようでございましたが、昨日よりいたして段々御快氣<sup>おもむ</sup>に赴<sup>こんちよう</sup>き、今朝などはお粥<sup>かゆ</sup>を三椀程召上りました、其の上お力になる魚類を召上りましたが、彼の分<sup>あ</sup>では遠からず御全快と心得ます」

紋「うむ悦ばしい、予が夜分咳の出るは余程せつないがの、其の

せつない中うちにもお兄様をお案じ申上げて、予の病気は兎も角、ど

うか早くお兄上様の御病氣御全快を蔭ながら祈り居おると申せ」

五「はア、はア、そのお言葉を上かみがお聞きでござつたら、嘸さぞお悦

びでございましょう、御病苦を忘れ、只お上のことのみ思おぼしめ召さ

るゝというのは、あゝ誠にお使者に参じました五郎治ともかたしけ俱に辱おのう

心得ます、只今の御一言早々歸りまして、上へ申上げるでござい

ましょう、実に斯様な事を承わりますのは、誠に悦ばしい事で」

紋之丞殿は急に氣色けしきを変え、声こゑを暴あららげ、

紋「五郎治、申さんでも宜しい、お兄あにいさま様に左様な事を申さん

でも宜しい、弟が兄を思うはあたりまえ当あ前の事じゃ、お兄様も亦また予を

思うて下さるのは何も珍らしい事はない、改めて左様申すには及

ばん、然るを事珍らしく左様の事を申伝えずとも、よも斯様の事は御存じで有ろう、左様に媚こび諂へつらった事を云うな」

五「はア……誠にどうも」

老女「左様なお高こうせい声を遊ばすと却かえつて御病気に障ります、左様な心得で五郎治が申した訳ではありません」

紋「一体斯様な事をいう手前などはな主人を常思つねわんからだ、主人を思わん奴が偶々たま胸に主人の為になる事を浮うかぶと、あゝ忠義な者じやと自ら誇みずか、家来が主人を思うは当あたり然まの事だ、常思わんから偶たまに主人を思う事があると、私わしは忠義だなどと自慢を致す、不忠者の心と引較べて左様に申す、白痴たわけもの者め、早々帰れ」

と以ての外不首尾でございますから、

五「ホ、」

と五郎治は手持不沙汰で、

五「こんにちかみ今日は上の御名代としてまかりで罷出ましたが、せいらいぐまい性来愚昧でございまして、申上げる事もついで遂にお氣に障り、お腹立に相成つたるかは存じませんが、ひとえ偏に御容赦の程を願います」

紋「さが退れ」

五「はっ」

老「五郎治殿御病気とは申しながら誠に御癩癖ごかんぺきが強く、時々斯ういうお高声があります事で、あ悪しからず……あなた、左様なことを御意遊ばすな、それがお悪い、お高声を遊ばすとお動悸が出まして、かえ却つて、お悪いとお医者いしやが申しました」

紋「うむ、今日きょうはお兄上様からお心こころ入いれの物を下され、それを持参もちまいたしたお使者で、平生つねの五郎治では無かつた、誠に使者太た儀いぎ」

ごろりと直すぐに横つ倒しになり、搔卷かいまきを鼻あたの辺あたりまで揺ゆり上げてしまふ。仕方が無いから五郎治はそろり／＼と跡さがへ退る。一同氣の毒に思い、一座白け渡りました。

千「神原氏、余程の御癩癬さお氣に支さえられん様に、我々はお少ちいさい時分からお附き申していてさえ、時々お鉄扇てっせんで打たれる様な事がある、御病中は誠に心配で、腫物はれものに障さるような思いで、此の事は何卒上どうぞかみへ仰せられんように」

五「宜しゅうございます」

老「五郎治殿、誠に今日は遠々きようとおの処御苦勞に存じます、只今の事は上かみへ仰せ上げられんように、何もござりませんが一いっこん献差上げる支度になつて居りますから、あの紅葉もみじの間まへ」  
 と言われて五郎治は是を機会しおに其の座を退しりぞきました。暫く経つと紋之丞様がばと起上つて、

紋「惣衛く」

惣衛「はア」

紋「惣衛、何は帰つたか五郎治は」

惣「え、慥たしかお次ひかに扣ひかえ居りましょう、上かみのお使つかいでございますから、紅葉の方へ案内致しまして、一献出しますように膳の支度をいたして居ります」

紋「じやが何じやの、何故お兄様は彼な奴を愛して側近く置  
くかの、彼はいかん奴じや」

惣「左様な事を今日は御意遊ばしません方が宜しゆうございます」  
紋「云つても宜しい、彼は諂い武士じや、佞言甘くして蜜の如  
しで、神原或は寺島等をお愛しなさるのは、勧める者が有るから  
じやの、惣衛」

惣「御意にござります」

紋「心配じや」

惣「御病中何かと御心配なされては相成りません、程無うお国表  
から福原數馬も出仕致しますから」

紋「あゝ數馬が来たら何うか成るか、あゝ逆上せて来た、折角お

兄様から下すつた水飴、甜なめて見ようか」

惣「召上りませ、お湯を是へ」

是から蓋が附いて高台に載せてお湯が出ました。側に在あります銀の匙さじを執とつて水飴を掬すくおうとしたが、旨くいきません。

紋「これは思うようにいかんの」

惣「極ごく製せいの水飴ゆえ金かな属ものではお取り悪にくうございます、矢張やっばり木を裂さいた箸が宜よろしいそうで」

紋「然そうかの、箸を持て」

と箸を二本纏まとめて漸よう々く沢山捲まき上げ、老女しきが頻しりに世話をいたして、

老「さア〜お口を」



紋「うむ」

と今箸を取りにかゝる処へ駈込んで来たのは川添富彌、物をも云わず紋之丞様が持つていた箸を引奪ひったくつて、突然庭へ棄てた時には老女も驚き、殿様も肝きもを潰つぶしました。

四十四

紋「何じやく」

富「ハツ富彌で」

紋「白痴たわけ……何をいたす」

富「ハア」

と胸を撫なで下おろし、

富「誠に幸いな処へ駈付けました、どうか水飴を召上る事はお止とゞまりを願います、決して召上る事は相あい成なりません」

老「はアどうも私わたくしは恟びりつくしました、これは何という事です、御無

礼至極ではござりませんか、殊ことに只今お上屋敷からお見舞として下されになつた水飴、お咳が出るから召上ろうとする所を、奪とつてお庭へ棄てるとは何事です」

富「いえ、これは棄てます」

紋「富彌、此の水飴はお兄あにいさま様さまがな咳が出るからと云つて養いに遣つかわされた水飴を、何故なぜ其の方は庭へ棄てた」

富「いえたとい仮令お上屋敷から参りましても、天子てんし將軍から参りまし

ても此の水飴は富彌屹度棄てます」

紋「何うか致したな此奴は……これ其の方は予が口へ入れようとした水飴を庭へ棄てた上からは、取りも直さず予とお兄様を庭へ投出したも同様であるぞ、品物は構わんが、折角お心入れの品を投げ棄てたからは主人を投げたも同じ事じゃ」

富「へえ重々恐入ります、其の段は誠に恐入りましたが、水飴を召上る事は決して相成りません」

紋「何故ならん」

富「何でも相成りません」

紋「余程此奴はこやつ何うかいたして居るお、無礼至極の奴じゃ」

富「御無礼は承知して居りますはなは、甚だ相済みません事と存じなが

ら、お毒でござるによつて上げられませんか」

紋「何故毒になる、若し毒になるなら、水飴を上げてても咳の助けには相成らん、却つて悪いから止せと何故止めん」

富「左様な事を口でぐずぐず申している内には召上つてしまひます、召上つては大変と存じまして、お庭へ投棄てました」

紋「余程変じや：」

富「先まずま外村氏安心致しました」

外「安心じゃアない、粗忽そこつ千万な事じやないか、手前は只驚いて何とも申上げ様がない、お上屋敷から下すつたものを無闇にお庭へ投棄てるといふは何ういう心得違いで」

紋「外村彼は云うな、此奴は君臣の道を弁わきまえんからの事じや、予

を嘲ちやうろう弄致すな、年若の主人と侮あなどり何の様な事を致しても宜し

いと存じておるか、幼年の時から予の側近く居おるによつて、いまだに予を子供のように思つて馬鹿に致すな

富「いえ、中々もちまして」

紋「いや容赦ようしやは出来ん、棄置かれん、今日こんにちの挙動ふるまいは容易なら

んことじや」

富「お棄置きに成らんければお手打になさいますか」

紋「尤もつとも左様」

富「私わたくしも素しもとより覚悟の上、お手打になりましたよう」

外「これく何だ、何を馬鹿を申す、少々逆上のぼせて居おる様子、只今

御酒を戴きましたので、惣衛か彼かれに成代なりかわつてお詫をいたします、

富彌儀ひゞぎやくじょう太く逆上おをして居る様子で」

富「いゝえ私わたくしはお手打に成ります」

紋「おゝ手打にしてやる是へ出え」

富「いゝえお止めなすつても私わたくしは出る」

と大變騒々しくなつて来た処へ、這入つて来ましたのは秋月喜一郎という御重役で、お茶台の上へ水飴を載せてスーと這入つて来ながら此の体ていを見て。

喜「何を遊ばすの、御病中お高声はお宜しく有りませんが、富彌如き者をお相手に遊ばしてお論じ遊ばすのはお宜しくない、富彌も控えよ」

富「へえく」

と云つたが心の中うちで、此の秋月は忠義な者と思つたから。

富「何分宜しく、併しかし水飴はお止とどめ申します」

紋「え、喜一郎、今日きょうは富彌の罪は免ゆるさんぞ、幼年の折から側近くいて世話致しくれたとは申しながら、余りと云えば予を嘲弄いたす、予を蔑ないがしろにする富彌、免し難い、斬るぞ」

喜「これは又大した御立腹、全体何ういう事で」

紋「予が咳を治さんとて、上屋敷から遣わされたお心入れの別製の水飴を甜めようとする処へ、此奴が駈込んで参り突いきなり然予が持つていた箸を引ひ奪たくつて庭へ棄てた、これ取とりも直さず兄上を庭へ投げたも同じ事じゃから免さん、それへ直れ、怪けしからん奴じゃ」

喜「これは怪しからん、富彌、何ういう心得だ、上かみから下された

水飴というものは一通りならんと、梅の御殿様の思おほしめ召すところは御情合ごじょうあいで、態々わざく仰附おおせつけられた水飴を何で左様な事をいたしました

富「お毒でございますから、お口に入はいらん内にと口でお止とめ申す間合まあいがございませぬから、無沙汰にお庭へ棄てました」

喜「それは又何ういう訳で」

富「何ういう訳と申して、只今申上げる訳にはまいりませんが、至つてお毒で」

喜「ム、ウ、是は初めて聞く水飴は周の世の末に始めて製したるを取つて柳下りゆうか恵けいがこれを見て好よい物が出来た、齒のない老人や乳のない子供に甜めさせるには妙である、誠に結構なものが出来



た、後の世の仕合しあわせであると申したという、お咳などには大妙薬である、斯かる結構な物を毒とは何ういう理由わけだ尤も其の時に盗とうせ跖きという大盜賊が手下に話すに、是これは好よいものが出来た、戸の枢くろに塗る時は音がせずひらに開く、盗みに忍いび入るには妙である至極よ宜い物であると申したそうだ、同じ水飴でも見る人によつては然そう違ちがう、拙者もお見舞いに差上る積りで態々白山前の飴屋源兵衛方から持参もいたした此の水飴

富「これは怪けしからん秋月の御老人に限そんつて其様なことは無いと存じていたが、是は怪しからん、あなたは何うかなすつたな」

喜「其の方こそ何うかして居いる、お咳のお助けになり、お養いいになる水飴を」

富「ス……はてな」

と心の中で川添富彌が忠義無二の秋月と思いの外、上屋敷の家老寺島或は神原五郎治と与して、水飴を上へ勧めるかと思ひましたから、顔色を変えてジリ、と膝を前へ進め。

富「相成りません」

紋「白痴……喜一郎あのような事を申す、余程訝しい変になつた」

喜「余程変に相成りましたな」

富「御老臣が献ずる水飴でも決して相成りません、私はお手打に成ります、上のお手打は元より覚悟、お手打になつても聊か厭い  
はございませんが、水飴は毒なるものと思召しまして此の後も  
召上らんように願います、仮令喜一郎が持つて参りましようとも、

水飴を召上る事は相成りません」

紋「何じなんや何の事じや、白痴たわけめ」

喜「拙者が持つて参つた水飴が毒じやと申すのか、ム、ウ……それじやア斯う致そう、拙者がお毒味を致そう。上かみお匙さじを拝借致します」

と入いれもの物の蓋を取り除けて水飴を取りにかゝるから、川添富彌がはてなと見て居ります。秋月は富彌の顔を見ながら、水飴を箸さきの端さきへ段々と巻揚まきあげるのを膝へ手を置いて御舎弟紋之丞殿が見詰めて居りましたが、口の処へ持つて来るから。

紋「喜一郎、毒味には及ばん」

喜「はっ」

紋「もう宜しい、予は水飴は嫌いになった、毒味には及ばん、水飴は取棄てえ」

喜「はッ」

紋「喜一郎が勧めるのも忠義、富彌が止むるも忠義、二人して予を思うてくれる志辱かたじけなく思うぞ」

喜「ほう」

富「ほう」

御ごん懇の御意で喜一郎富彌は落らくるい涙致しました。

喜「富彌有難く御挨拶を申せ……有難うございます」

富「あゝ有難うございます」

と涙を払い

富「無礼至極の富彌、お手打になつても苦しからん処、格別のお言葉を頂戴いたし、富彌死んでも聊か悔む所はございません」

紋「いや喜一郎と富彌の兩人へ何か馳走をして遣れ、喜瀬川は料理の支度を」

老女「はい」

と鶴のひとこえ一声で、忽ち結構なお料理が出ました。水飴をすて棄ると、

お手飼てがいの梅鉢うめばちという犬が来てペろく皆甜めてしまいました。

それなりに夜よに入りますとお庭先しんが寂しんと致もつとしました。尤も御案内

の通り谷中三崎村の辺へんは淋しい処で、裏手はこうくとした森で

ございます。所へ頭巾まぶか目深まぶかに大小を無地の羽織の下おとしぎに落差しにし

て忍んで来る一人の侍、裏手の外庭の林の前へまいると、グツク

と云うものがある。はて何だろうと暗いから、透すかして見ると、お  
 手飼しろぶちの白班しろぶちの犬もがが悶もがいて居ります。怪あやしの侍しばらが暫しばらく視いて居る。  
 最前うえごから森下の植込うえごみの蔭かげに腕うでを組くんで様子ようすを窺うかがうて居るのは彼か  
 の遠山とんざん權六ごんりくで、曩さきに松蔭しょういんの家来けらい有助すけを取とつて押おえたが、松蔭しょういんがお  
 羽振はねが宜いいので、事ことを問と糺たださず、無闇むいんに人ひとを引ひ括くり、上かみへ手  
 数かずを掛かけ、何なにも弁わえん奴まだと權六ごんりくは遠慮えんりょを申ま付けられました、遠  
 慮りょといいうのは禁おしこめ錮この事ことですが、權六ごんりく些ちととも遠慮えんりょをしません、相  
 変よならず夜よ々なのそそく出でてお庭にわを見巡みまつて居いりますので、今いま權六  
 が屈かんで見みて居いりますと、犬いぬがグツクぐくと苦くしみ、ウーンワン  
 くと忌いやな声こゑで吠ほえる、暫しばらく悶もがいて居いりましたが、ガバばくと  
 と泡あわのような物ものを吐ついて土つちをむしり木の根方ねかたへ頭あたまをこすり附つけて

横つ倒しに斃たおれるのを見て、怪しの侍が抜打ぬきうちにすうと犬の首を  
 斬落きりおとして、懐から紙を取出し、すつかり血を拭ぬぐい、鐙鳴つばなりをさ  
 せて鞆さやに収め、血の附いた紙を藪蔭へ投込んで、すうと行きゆに掛  
 るから權六は怪しんですうツと立上り、

權「いやア」

と突然だしぬけに彼の侍かの後うしろから組附いた時には、身体しんたいも痺しびれ息とまも止  
 るようですから、侍は驚きまして、

曲者「放せ」

權「いや放さねえ、怪しい奴だ、何者だ、何故犬う斬つた、さ何  
 者だか名前を云え」

曲「手前たちに名前を申すような者じゃアねえ、其処そこ放せ」

權「放さねえ、さ役所へ行け」

曲「役所へ行くような者じゃア無え」

權「黙れ、頭巾を深く被りやアがつて、大小を差して怪しい奴だ、此のまア御寢所近え奥庭へ這入りやアがつて、殊に大切な犬を斬つてしまやアがつて、さ汝何故犬を斬つた」

曲「何故斬つた、此の犬は己に咬付いたから、ム、咬付かれちやアならんから斬つたが何うした」

權「黙れ、己ア見ていたぞ、咬付きもしねえ犬を斬るには何か理由があるだろう、云わなければ汝絞殺すが何うだ」

曲「ム、せつないから放せ」

權「放せたつて容易にア放さねえ、さ歩べ、え行かねえか」



と大力無双だいきむその權六とらに捉とらえられたのでございませうから身動きが出来ません。引摺ひきずられるようにしてお役所へ参り、早々届よけに成りました事ゆえ、此の者を縛くし上げまして、其の夜罪よとがにん人を入れ置く処へ入れて置き、翌日お調べというのでお役所へ呼出しになりました時には、信樂しがらき豊前ぶせんというお方がお目付役を仰付けられて、掛りになりました。此の信樂しんがという人は左さしたる宜よい身分でもないが、理非明白な人でありますから、お目付になつて、内ない々ない々ない叛謀人むほんにん取調べの掛りを仰付けられました。差添さしぞえは別府新八べつぷしんぱちで、曲者は森山もりやま勘八かんぱちと申す者で、神原五郎治の家来であります。呼出しになりました時に、五郎治おとの弟四郎治まかが罷り出ます事になりお縁側の処へ薄縁うすべりを敷き、其の上に遠山權六が坐つて

居ります。お目付は正面に居られます。また砂利の上に<sup>むしろ</sup>莚を敷きまして、其の上に<sup>たかてこて</sup>高手小手に<sup>くく</sup>縛されて森山勘八が居ります。お目付が席を進みて。

目付「神原五郎治<sup>だおと</sup>代弟四郎治、遠山權六役目の儀ゆえ言葉を改めますが、左様に心得ませえ」

四「はっ」

權「ほう」

目付「權六其の方昨夜外庭見廻りの折<sup>おり</sup>、内庭の<sup>ひのきやま</sup>檜木山の蔭へまいる折柄<sup>おりから</sup>、面部を包みし怪しき侍体<sup>てい</sup>のものが、内庭から忍び出で、お手飼の梅鉢を一刀に斬りたるゆえ、怪しい者と心得て組付き、引立て来たと申す事じゃがそれに相違ないか」

權「はい、それに相違ごぎいません、どうも眼ばかり出して、長ながえ物を突差つっさしまして、あの檜木山の間から出て来た……、怪しい奴と思えやして見ているうち、犬を斬りましたから、何でも怪しいと思えやしたから、ふん捕づかめえました」

目付「うん……神原五郎治家来勘八、頭かしらを上げえ」

勘「へえ」

目「何才になる」

勘「三十三でございます」

目「其の方陪ばいしん臣の身の上でありながら、何故なにゆえに御寝所近い内庭へ忍び込み、殊ことには面部を包み、刃物を提げ、忍び込みしは何なにゆ故えの事じゃ、又お手飼の犬を斬つたと申すは如何いかなる次第じゃ、

さ有ありてい体に申せ」

と睨ねめつけました。

四十五

勘八は凶太い奴でございますから、態わざと落著おちつきはら振りまして、

勘「へえ、誠に恐入りましてございます。お庭内へ参りましたのは、此の頃は若殿様御病気でございまして、皆さんが御看病なすつていらつしやるので、どうもお内庭はお手薄でございましょうから、夜々よるく見廻った方が宜いいと主人から言いつかりました、それにお手飼の犬とは存じませんで、檜木山の脇わたくしへ私が参りましたら、

此の節の陽気で病付やみついたと見えまして、私に咬付かみつきそうにしましたから、咬付かれちやア大変だと一生懸命で思わず知らず刀を抜いて斬りましたが、お手飼の犬だそうで、誠にどうも心得んで、とんだ事を致しました、へえ重々恐入りましてございます」

目「そりやアお手飼の犬と知らず、他の飼犬にも致せ、其の方陪臣もつの身を以て夜やちゆう中大小を帶たいし、御寢所近い処へ忍び入つたるは怪しい事であるぞ、さ何者にか其の方頼まれたので有ろう、白状いたせ、拙者屹度きつとらべ調るぞ」

勘「へえ、何も怪しくも何ともないんでございます、全く氣を付けて時々お庭を廻れと云われましたんでございます、それゆえ致しました、此処こゝにおいてなさいます主人の御舎弟四郎治様も爾そう

仰しやつたのでございます」

目「うむ、四郎治其の方は此の者に申付けたとの申もうしたて立たじやが、

全く左様か」

四「えゝ、お目付へ申上げます、実は兄五郎治は此の程お上屋敷のお夜詰よづめに参つて居ります、と申すは、大殿様御病氣について、

兄も心配いたしましたして、えゝ、番でない時も折々は御病氣伺いにまか罷り出いで又御舎弟様も御病氣に就つきお夜詰の衆、又御看護のお方

々もお疲れでありますよう、又疲れて何事も怠り勝の処へ付入つけいつて、狼藉者ろうぜきものが忍入るような事もあれば一大事じゃから、其の方

己おれがお上屋敷へまいつて居おる中うちは、折々お内庭を見廻れ、御寝所  
近い処も見廻るようと兄より私わたくしが言付いかつて居ります、然しかる処

昨日御家老より致しまして、火急のお呼出しで寅の門のお上屋敷へまかりで罷出ましたが、私は予々かね／＼兄より言付かつて居りますから、是なる勘八に、其の方代つてお庭内を廻るが宜いと申付けたに相違ござらん、然るに彼がお手飼の犬とも心得んで、吠えられたに驚き、梅鉢を手打にいたしました段は全く彼何も弁えん者ゆえ、斯様な事に相成つたので、兄五郎治に於ても迷惑いたします事でござる、併し何も心得ん下人の事と思召しまして、幾重にも私おほしめが成代つてお詫を申し上げます、御高免ごこうめんの程を願ひとうござる、全く知らん事で」

目「むう、そりや其の方兄五郎治から言付けられて、其の方が見廻るべき所を其の方がお上屋敷へまいつて居る間、此の勘八に申

付けたと申すのか、それは些と心得んことじやアないか、うん、これ申付けても外庭を見廻らせるか、又はお馬場口を見廻るが当然、陪臣の身分で御寝所近い奥庭まで夜廻りに這入れと申付けたるは、些と訝おかしいようだ、左様な事ぐらいは弁わえのない其の方でもあるまい、殊ことに又帯刀をさせ面部を包ませたるは何う云う次第か」

四「それは夜陰やいんの儀でござるで、誠にお馬場口や何か淋しくてならんから、彼に見廻りを申付ける折おりに、大小を拝借致したいと申すから、それでは己おれの積つもりで廻るが宜よいと申付けましたので、大小を差しましたる儀で、併しかし頭巾を被りましたことは頓とんと心得ません……これ勘八、手前は何故なぜ目深めぶかい頭巾で面部を包んだ、それは



何ういう仔細か、顔を見せん積りか」

勘「え、誠にどうも夜よになりますと寒うございますんで、それゆえ頭巾を被りましたんで」

目「なに寒い……当月は八月である、未だ残暑も失うせず、夜陰といえども蒸いれて熱い事があるのに、手前は頭巾を被りたるは余程寒がりと見ゆるな」

勘「へえ、どうも夜よは寒うございますので」

目「寒くば寒いにもせよ、一体何ういう心得で其の方が御寢所近くへ這入った、仔細があらう、如何い様に陳ちんじても遁のがれん処であるぞ、兎や角陳ずると厳しい処の責めに遇あわんければならんぞ、よく考えて、迎とても免のがれん道と心得て有ありてい体に申せ」

勘「有体たつて、わたくし私は何も別に他から頼まれた訳はございませんで、へえ」

目「中々此奴こやつしぶとい奴だ、此の者を打ちませえ」

四「いや暫く……四郎治申し上げます、暫くどうぞ、彼は陪臣でござつて、お内庭へ這入りました段は重々相済まん事なれども、

五郎治から私わたくしが言付けられますれば、即ち私すなわが、兄五郎治の代だいを

勤むべき処、御用あつて御家老からお呼出しに相成りましたから、

止むを得ず家来勘八に申付けましたので、取も直さず勘八は兄五

郎治の代だいでござる、何も強しいて之これを陪臣と仰せられては誠に夜廻

りをいたし、上かみを守ります所の甲斐もない事でございます、勘八

のみお咎とがめが有りましたは偏かたおとし頗しのお調べかと心得ます」

目「それは何ういう事か」

四「え、是れなる遠山權六は、とうはるじゆう当春中松蔭大藏の家来有助と

申す者を取押えましたが、有助は何分にも怪しい事がないのを取  
押えられ堪り兼て逃にげどころ所を失い、慌あわてゝ權六に斬付けたるを怪

しいという処から、お調べが段々長く相成つて、再度松蔭大藏も

お役所へ罷出まかりでました。其の折おりは御用多端の事で、御用の間まを欠き、

不取調べをいたし、左様な者を引いてまいり、上役人かみやくにんの迷惑に

相成る事を仕出しでかし、御用の間を欠き、不届ふとゞきの至りと有つて、

權六は百日の遠慮を申付かりました、未だ其の遠慮中の身をも顧かえり

みず、夜なくお屋敷内を廻りまして宜しい儀でござるか、權六

に何のお咎めもなく、私わたくしの兄へお咎めのあると云うのは、更に其

の意を得んことゝ心得ます、何ういう次第で遠慮の者が<sup>みだ</sup>妄りに外出をいたして宜しいか、其の儀のお咎めも無くつて宜しい儀でござるなれば、陪臣の勘八がお庭内を廻りましたのもお咎めはあるまいかと存じます」

目「うむ：權六其の方は百日遠慮を仰付けられていると、只今四郎治の申す所である、何故に<sup>なにゆえ</sup>其の方は遠慮中妄りにお庭内へ出た」  
權「えゝ」

目「何故に出た」

權「遠慮というのは何ういう訳だね」

目「何う云う訳だとは何だ、其の方は遠慮を仰付けられたであらう」

權「それは知っている、知っているが、遠慮と云うのは何を遠慮するだ、私わしが有助を押えてお役所へ引いて出ました時は、お役人様が貴方と違つて前の菊田様きくたてえ方で、悪人の有助ばかり鼻負いして私をはア何でも彼かんでも、無理こじつけに遣り込めるだ、さつぱり訳が分らねえ、其の中うちに御用の間を欠いた、やれ何なんの彼かのと廉かどを附けて長え間お役所へ私は引出されただ、一二月にぎやつから四月しがつまでかゝりましたよ、牢の中へ入はいつてゐる有助には大層な手当があつて、何だか御重役からお声がゝりがあるつて榮ちやくうしている、私は押込められて遠慮だゝと何を遠慮するだ私の考かんがえでは遠慮といふものは芽出度い事があつても、宅うちで祝いわねえう所は祝いわねえうようにし、又見物遊山非番の時に行きたくても、其そん様な事をして榮えよう耀をしち

やアならんから、遠慮さ、又旨え物を喰おうと思つても旨え物を  
 喰つて楽しんでやアどうも濟まねえと思つて遠慮をして居ります、  
 何も皆遠慮をしているが私が毎晩めえばんく御寢所近ぢけえお庭を歩いて  
 いるは何の為だ、若殿様が御病気ゆえ大切に思えばこそだ、それ  
 に御家来の衆も毎晩めえばんのことだから看病疲れで眠りもすりやア、  
 明あけがた方には疲れて眠る方も有るまい者でもねえ、其の時怪しい者  
 が入へいつちやアならねえと思うからだ、此の程は大分貴方あんた顔なんど  
 隠しちやア長い物を差した奴がうろつかくして、御寢所の縁の  
 下などへ入へいる奴があるだ、過般こねえだも私がすうと出たら魂消たまげやアが  
 つて、面つらか横つ腹どつか何所か打つたら、犬う見たように漸ようよう這上つ  
 たから、とつ捕つかめえて打つてやろうと思つちう中に逃うちげちまつたが、

爾<sup>そ</sup>うして氣を付けたら私はこれを忠義かと心得ます、他<sup>ほか</sup>の事は遠慮を致しますが、忠義の遠慮は出来ねえ、忠義というものは誠だ誠の遠慮は何うしても出来ません、夜巡<sup>よるまわ</sup>ることは別段誰にも言付かつたことはない、役目<sup>ほか</sup>の外だ、私も眠いから宅<sup>うち</sup>で眠れば楽だ、楽だが、それでは済みませんや、大恩のある御主人様の身<sup>あたり</sup>辺へ氣を付けて、警護をしていることを遠慮は出来ませんよ、無理な話だ、巡<sup>まわ</sup>つたに違<sup>ちが</sup>えねえ、それでもまだ遠慮して外庭ばかり巡つて居りました、すると勘八の野郎が……勘八とは知んねえだ初まりは……犬う斬つたから野郎と押えべいと出たわけさ、それに違<sup>ちげ</sup>えねえでございますよ、はいそれとも忠義を遠慮をしますかな」

と弁舌<sup>さわや</sup>爽かに淀みなく述立てる処は理の当然なれば、目付も少

し困つて、其の返答に差支えた様子であります。

目「むゝう、權六の申す所一応は道理じやが、殿様より遠慮を仰せ出された身分で見れば、それを背いてはならん、最も外出致すを遠慮せんければならん」

權「外出だつて我儘に旨え物を喰いに往くとか、面白いものを見に往くのなれば遠慮ういたしますが、殿様のお側を守るな遠慮は出来ねえ、外出するなつて其様な殿様も無えもんだ」

四「えゝ四郎治申上げますあの通り訳の分らん奴で、然るをお目付は權六のみを鼻肩いたされ、勘八一人唯悪い者と仰せられては甚だ迷惑をいたします事で、殊にお目付も予てお心得でござろう、神原五郎治の家は前殿様よりお声掛りのこれ有る家柄、殊に遠山



權六が如き輕輩と違つて重きお役をも勤める兄でござる、權六と同一には相成りません、權六は上の仰せ出されを破り、外出を致したをお咎めもなく、格別の思召のこれ有る所の神原五郎治へお咎めのあるとは、実に依怙の御沙汰かと心得ます、左様な依怙の事をなされては御裁許役とは申されません」

目「黙れ四郎治、不束なれども信樂豊前は目付役であるぞ、今んにち  
 日「其の方らを調ぶるは深き故有つての事じゃ、此の度御出府に成られた、御国家老福原殿より別段のお頼みあつて目付職を勤めるところの豊前に対して無礼の一言であるぞ」

四「ではございますが、余り片手落のお調べかと心得ます」

目「其の方は部屋住の身の上で、兄の代りとはいえども、其の方

から致して内庭へ這入るべき奴では無い、然るを何んだ、其の方が家来に申付けて内庭を廻れと申付けたるは心得違ひの儀ではな  
 いか、前殿様ぜんより格別のお声が、りのある家柄、誠に辱かたじけない事と  
 主恩しゅおんを弁わえて居おるか、四郎治

四「はい、心得居ります」

目「黙れ、新参の松蔭大藏と其の方兄五郎治兄弟の者は心を合せ  
 て、菊之助様をお世嗣よつぎにせんが為ために御舎弟様を毒殺いたそうと  
 いう計策たくみの段々は此の方心得て居おるぞ」

四「むゝ」

目「けれども格別のお声が、りもこれ有る家柄ゆえ、目付の情を  
 以て柔和に調べ遣つかわすに、以ての外ほかの事を申す奴だ、疾とくに証拠あ

つて取調べが届いて居るぞ、最早遁れんぞ、兄弟共に今日物こんにもの頭らへ預け置く、勘八其の方は不埒至極の奴、吟味中入牢じゅうろう申付

ける、權六

權「はい私も牢へいへ入りますかえ」

目「いや其の方は四月の二十八日から遠慮になつたな」

權「えゝ」

目「二十八日から丁度昨夜が遠慮明けであつた」

權「あゝ然そうでございますか」

目「いや丁度左様に相成る、遠慮が明けたから、其の方がお庭内を相交らず御主君のお身の上を案じ、御当家を大切と思ひ、役目の外に夜廻りをいたす忠義無二のことと、上かみにも御存じある事で、

後してはまた格別の御褒美もあるうから、有難く心得ませい」

權「有難うございます、なにイ呉れます」

目「何を下さるかそれは知れん」

權「なに私は種々いろいろな物を貰うのは否いやでございます、どうかまア

悪い奴と見たら打殺ぶつころしても構わないくらいの許しを願ねげえてえも

ので、此の頃は余程悪い奴がぐる／＼廻つて歩きます、全体此の

四郎治なんという奴は打殺して遣やりてえのだ」

目「これこれ控えろ、追つて吟味に及ぶ、今日こんにちは立ちませえ」

と直すぐに神原兄弟は頭かしら預あずけになつて、宅たくばん番の附くような事

に相成り、勘八という下男は牢へ入りました。權六は至急お呼出しになつて百日の遠慮は免ゆるりて、其の上お役が一つ進んで御加増

となる。遠山權六は君恩かたじけの辱ないことを寝ても覚めても忘れやらず、それから毎夜ぐる／＼廻るの廻らないのと申すのではありません。徹よどおし夜寝ずに廻るといふは、実に忠義なことでございます。此の事を聞いて松蔭大藏が不審を懷いだき、どうも神原兄弟が頭預けになつて、宅番が附いたは何ういう調べになつた事かはて困つたものだ、彼奴あいつらに聞きたくも聞くことも出来ん自分の身の上、あゝ案じられる、国家老の出たは容易ならん事、どうか国家老を抱込みたいものだど、素もとより悪才に長たけた松蔭大藏種いろく々考えまして、濱名左傳次はまなさでんじにも相談をいたし、国家老を引出しましたのは市ヶ谷はらまち原町のお出入町人秋田屋清左衛門あきたやせいざえもんという者の別荘が橋場はしばにあります。庭が結構で、座敷も好よく出来て居ります。これへ連出し馳

走というので川口から立派な仕出しを入れて、其の頃の深川の芸者を二十人ばかり呼んで、格別の饗応になると云うのであります。

## 四十六

時は八月十四日のことで、橋場の秋田屋の寮へ国家老の福原數馬という人を招きまして何ぞ隙すきがあつたらば……という松蔭たくが企み、濱名左傳次という者と謀しめし合せ、更ふけて遅く歸るようであつたらば隙うかゞを覗うかがつて打果してしまふか、或あるいは旨こちらく此方へ引入れて、家老ぐるみ抱込んでしまふかと申す目論見もくろみでございます。大藏は悪才には長たけ弁よも能し愛敬のある男で、秋田屋に頼んで十分の手

当でございます。此の寮も大して広い家ではございせんが客席  
 が十五畳、次が十畳になつて、入側も附いて居り誠に立派な住  
 居でございます。普請は木口を選んで贅沢なことで建て、から  
 五年も経つたらうという好い時代で、落着いて、なか／＼席の工  
 合も宜しく、床は九尺床でございまして、探幽の山水が懸り、  
 唐物の籠に芙蓉に桔梗刈萱など秋草を十分に活けまして、  
 床脇の棚等にも結構な飛び青磁の香炉がございまして、左右に古  
 代蒔絵の料紙箱があります。飾り付けも立派でございまして、  
 庭からずうと見渡すと、潮入りの泉水になつて、模様を取つて  
 土橋が架り、紅白の萩其の他の秋草が盛りで、何とも云えん好い  
 景色でございます。響応を致しますに、丁度宜しい月の上りを見

せるといふ趣向。深川へ申付けました芸者は、極頭ごめたまだった処の福

吉くきち、おかね、小芳こよし、雛吉ひなきち、延吉のぶきち、小玉こたま、小さん、などとい

う皆其の頃の有名の女計りばか、鳥羽屋五蝶とばやごちように壽樂じゆらくと申しますたいこ 幫

間もちが二人、是れは一寸ちよつと荻江節おぎえがしもやります。荻江喜二郎おぎえきさぶろうの

弟子だといふので、皆美々びびしく着飾つて深川の芸者は只今の芸者

と違ひまして、長箱ながばこで入りましたもので、大概橋場あたりで言

付ければ残らず船でまいりまして、着換えなど沢山着換えまして、

髪は油気なし、潰つぶしといふ島田に致しまして、丈長たけながと新藁しんわらを

かけまして、笄こうがいは長さ一尺で、厚み八分ぶも有つたといふ、長い物

を差して歩いたもので、狭い路地などは通れませんような恐ろし

い長い笄で、夏紹ろを着ましても皆肌襦袢はだじゆばんを着ませんで、深川の



芸者ばかりは素肌へ着たのでございませう。裾模様すそもようが付いて居ります、紅べにかけ花色、深川鼠ろこうちや、路考茶ろこうちやなどが流行はやりまして、金きんど緞子んすの帯を締め、若い芸者は縞しまじゆす縷子りゆすの間に緋鹿ひがの子こをたゝみ、畳み帯はぎ、挟み帯などと申して華やかなこしらえ、大勢並んで、次之間にお客様のおいでを待つて居ります。秋田屋清左衛門の番頭も、其の頃大名の御家老などが来ると家の誉いえほまれ名みようもん聞きだといふので、庭の掃除などを厳しく言付けぐるく見廻みまわつて居ります。そらおいでだと云つてお出迎いせいをいたし、

番「えゝ、いらつしやいまし」

數「あゝ、これは成程どうも好よい庭で、松蔭好いい庭だの」

大「はい誠にその、当家の亭主が至つて茶人で、それゆえ此の庭

や何かは、更に作りませんで、自然の様を見せました、実に天然のような工合で」

數「うん余程好い庭である、むう、これは感心……岩越何うだえ」

岩「へえ、私は斯様な処へ参つたのは始めてゞごすな、国にいては<sup>とて</sup>迎も斯ういう処は見られませんな、うゝん、これはどうも」

數「お前は何だ」

大「えゝ、これなるは当家の番頭、伊平と申します不調法者で」

番「えゝ、今日は宜うこそ御尊来有難い事で、貴所方のお入

来のございますのは実に主人も悦び居りまして、此の上ない冥

加<sup>が</sup>至極の儀で、土地の外聞で、私<sup>わたくし</sup>においても、誠に有難いこと

で」

數「いや其様そんなに、大層に云わんでも宜よい、土地の外聞なんて、

亭主は余程好事家こうずかのようだな」

番「えゝ鬼灯ほおずきなどは植えんように致してございます」

數「うふゝゝ鬼灯じゃアない、風流人と申すことじゃ」

番「でございますか、なにほうずは出来ます」

數「何を申す」

番「へい、船の上をずるゝ何時いつまでも曳ひいているような長いも

のをほうずと申しますそうで」

數「いや中々の博識ものしりじゃ、うふゝゝ面白い男だの、此の泉せんすい水

は潮しお入いりかえ」

番「へえ何と…」

數「いやさ此の泉水は潮がはい入るかえ」

番「へえ、何と御意遊ばします」

數「潮入りかというのじゃ」

番「へえ〜只今差上げますあの誰かお盆へ塩を持って来て上げな、どうも御ごかんべき癩癬だから、お手をお洗い遊ばすのだろう、へえ

お塩を」

數「何を持って来るのだ、此の泉水は潮入かと申すのだ」

番「へえ、左様でございます」

大「何卒どうぞこれへ入らっしゃいまし」

數「うん岩越、ひよろ〜歩くと危いぞ池へ落おっこちるといかん、

あゝ妙だ、家根は惣体葺屋だな、とんと在体の光景だの」

大「外面から見ますと田舎家のようで、中は木口を選んで、なか

く好事に出来て居ります」

數「其の許は斯ういう事も中々委しい、私ほとんど知らんが、石  
しどうろう」

灯笼は余りなく、木の灯笼が多いの」

大「えゝ、これはその、野原のような景色を見せました心得でございましょうか」

數「あ成程、これは面白いく……此処から上るのか、成程玄関  
の様子が面白く出来たの、入口かえ」

大「これからお上り遊ばしませ、お履物は私がしまし置きます」

數「これは好い席だ」

大「さゝ、是へどうぞ〜」

と松蔭が段々案内をいたし、座敷の床の前へ褥しとねを出し、烟草盆や何か手当が十分届いて居ります。

大「どうぞ此処これへお坐りを願います」

數「余り好よい月だによつて、縁先で見るのが至極宜しい、これは妙だ、此の辺は一体隅田川の流れて……あれに見ゆるのは橋場の渡しの向うかえ、如何いかにも閑地かんちだから、斯ういう処は好よいの、えゝちよちよいと一寸秋田屋をこれへ」

大「えゝ御家老これが当家の主人秋田屋清左衛門と申します、年来お屋敷へお出入を致すもので、染しみ々／＼未いまだお目通りは致しません、日いつぞや外いっぞやあの五六年以前、大夫たいふが御出府の折おりにお目通りを

致した事がありますと申し、斯様な見苦しい処ではござるが、一度御尊来を願いたいと申して居つたので、当人も悉くことごとく今日は悦び居ります、どうかお言葉を」

數「は、あ、秋田屋か」

清「へえ、え、今日はこんにちよ宜うこそ、御尊来で、誠に身に取りまして有難い事でございます、え、年来お屋敷さまへお出入をいたします不調法者で、此の後のちとも何分御贖お引廻しを願います」

數「あい、秋田屋か、成程、貴公は知らんが、貴公の親父の時分であつたか、江戸詰の時種々いろく世話になつた事もあつた、中々立派な好よい家いえだ、至極面白い」

清「いえ、見苦しゆうございまして、此の通り粗木そぼくを以て拵こしらえま

したので、中々大夫さまなどがお入来いでと申すことは容易ならんこととて、此の家いえに箔はくが付きます事ゆえ、誠に有難いことで

數「いやく、格別の手当かたじけで辱ない、あいにく、成程、これは中々立派な茶碗だな、余程道具好きだと見えるな」

大「はい、好よい道具を沢山所持して居おる様子でございませ、今こんに日は御家老のお入来いでだと、何か大切な品を取出した様子で、なに碌ろくなものもございませまいがほんの有あり合あいで」

數「いや中々好よい茶碗だ」

大「え、道具は麁末そまつでござるが、主人が心入れで、自ら隅田川の水みず底の水を汲上げ、砂漉すなごしにかけ、水を柔やわらかにして好よい茶を入れましたそうで」



數「成程それは有難い、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>が親切というもので、茶はたとえ番茶でも水を柔かにして飲ませる積りで、自身に川中まで船で水を汲みに往<sup>ゆ</sup>く志というものは、千万金<sup>きん</sup>にも替えがたく好い茶を飲ませるより福原辱<sup>かたじけ</sup>なく飲む」

大「え、恐入りました事で」

數「大藏、立派な菓子を取ったの」

大「いえ、どうも甚<sup>はなは</sup>だ何もございませんで、此の辺は誠にどうも……市ヶ谷から此<sup>これ</sup>処<sup>こ</sup>へ出張<sup>でば</sup>りますことで、好<sup>い</sup>い道具や何かは皆<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>ちから</sup>の蔵へ入れ置きますという事で」

數「成程、火事がないから道具の好<sup>よ</sup>いのを運んで置くか、それは宜<sup>よろ</sup>かろう」

大「今日こんにちは何も御馳走は有りませんが、御家老へ此の向うから月の上あがります景色を……これは御馳走でございませぬ、求めず天然の楽たのしみで、幸い今宵は満月の前夜で」

數「おゝ成程な、いやかけ違つて染しみ々々、挨拶もしなかつたが、段々と上屋敷の事も下屋敷の事も、貴公が大分に骨を折つて大きに殿様にも格別に思おぼしめ召し、新参でありながら、存外の昇進で、えらいものだ」

大「えへへへ、不束ふつつかの大藏格別上のお思召おぼしめしをもちまして、重きお役を仰付けられ、冥加至極の儀で、此の上とも何卒どうぞ御家老のお引立を蒙こうむりたく存じます」

數「其そん様なに出世をしては往ゆく処があるまい、中々どうして男は

好し、弁に愛敬を持ち、武芸も達しておるから自然と昇進をする  
質だたち」

大「えゝ、恐入りました事で」

數「手前も壮年の折おりから柄は一体虚弱だが、大きに老年に及んで丈夫になつたが、どうも齒が悪くなつて、旨い物を喰たべても余り旨いとは思わん、楽しみと云つても別になし、国に居おれば田舎侍だから美食美服は出来んばかりでは無い、一体若い時分からさういう事は嫌いじゃ、斯ういう清せい々とした処を見るが何よりの楽しみじゃ」

大藏は座を進ませまして、

大「えゝ、どうも今日こんにちは何もお慰なぐさみもなく、お叱りを受けるかは存

じませんが、亭主が深川の芸者を呼び置きましたと申すことで、

ちよつと

一寸お酌を取りましても、武骨な松蔭や秋田屋がお酌をいたしましては、池田伊丹の銘酒も地酒程にも飲めんようなことで、甚だ御無礼ではございますが、お目通りへ其の深川の芸者どもを呼寄せることに致します」

數「おゝ成程その噂は聞いている、深川には大分美人も居り、芸の好いものも居るといふ事だが、それは宜いの、手前は芸者に逢つた事はない、武骨者で殊に岩越といふ男が是非一緒に往きたい、何でも連れてつてくれ、未だ碌に御府内を見たことが無いというから同道して来たが、起倒流の奥儀を究めあるだけあつて、膂力が強いばかりで、頓と風流氣のない武骨者じゃ」

岩越「え、拙者は岩越賢藏けんぞうと申す至つて武骨者で此のご後ともお見知り置かれて御別懇に」

大「今日はこんにち凶らず御面会を致しました、手前は松蔭大藏で……好い折柄、此の後とも御別懇に……御家老此これは濱名左傳次と申す者で、小役人でございましたが、凶らず以上に仰付けられ、今こんに日は何うかお目通りを致しまして、何かのお話を承われば身の修行だと申して居ります、武骨ではござるが洒落しゃれた口もき、皺し枯やがれつ声で歌を唄い、面白い男ゆえお目をお掛け遊ばして、何分お引立を」

數「はいく、中々様子の好よい男、なれども近い処だと宜よいのが、上屋敷までは遠いから、どうか些ちつと早く帰りたいがの」

大「いえ、今晚は小梅のお中屋敷へ御一泊遊ばしては如何いかゞ、寺家じけ田だの座敷が手広でござる、彼あれへ御一泊遊ばしますように、是から虎の門までお帰りになつては余り遅うなりますから」

數「それは宜かろう」

大「じゃア早く〜」

と是からお吸物に結構な膳椀で、古ふる赤あか絵えの向む付こうけづに搔か鯛きだいのいりぎけのようなものが出ました。続いて口取くちとり焼やき肴ざかなが出る。数々料理が並ぶ。引続いて出て来ましたのは深川の別べつ嬪びんでございます。

大「さ、これへ」

芸こんにち「今日は」

數「いや〜大勢呼んだの」

大「さ、これへ来てお酌を、たいふさま大夫様から」

芸「へえ、大夫様お酌をいたしましょう」

數「いや成程これは綺麗、あい〜、成程松蔭年を老とつても酌はたぼと云つて幾歳いくつになつても婦人は見て悪くないもんだの、む〜う、中々どうも…なん何てえ名だなに、小玉か成程、どんやつこずり奴の男がいる、あれは何だ」

幫間「え〜手前は鳥羽屋五蝶と申しますたいこ幫間で」

數「ほ〜う、なに太鼓を叩くか」

五「いえ、只口で叩きます」

數「口で太鼓を…唇でかえ」

五「いえ、なに、太鼓持で、えへへへ」

數「うん成程、口くちがる軽なことをいう、幫ほうかん間か、成程聞いていた、

中々面白い頭だの」

五「へへへ、どうも未まだどんずり奴やつこでございます」

數「太鼓持の頭は、皆みな此こん様なかえ」

五「皆みんなお揃いと云う訳ではございませんが、自然と毛が薄くなり  
ましたので」

數「いや形が變つて妙だ、幫たいこもち間は口軽だというが、何か面白

いことを云いなさい」

五「これは恐入りましたな、御家老さま、改まつてこれを云えと  
仰せられますと困りますが……喜三郎こゝへ出なよ、金きんこう公や



此処へ出なよ」

喜「口軽なんぞ<sup>とて</sup>迫もお目通りは出来ないというのは何うだ」

五「何だえ、それは」

喜「足軽という洒落だ」

五「縁が遠いの、口軽と足軽では」

數「私<sup>わし</sup>は酒が頓といかん、岩越一<sup>いっぱい</sup>盃やれ」

岩「私<sup>わたくし</sup>は斯ういう形のもの<sup>は</sup>始めて見ました、余程違つて居りま

す、云うことも中々面白いようで」

五「これから追々<sup>おい</sup>繰出します」

四十七

ほうかん  
 幫間の五蝶が、

五「大夫様、此のお庭は好よいお庭でございますな」

數「なか／＼好いの」

五「大きな緋鯉ひじいが居ります、更紗さらさらや何か亀井戸もよろしく申すので」

數「何ういう訳で、誰が亀井戸でよろしくと申した」

五「いえなに、然そういう訳ではありません、これはどうも恐入りましたな」

數「私わしも一つ洒落ようかな」

五「これは恐入ります、皆みんなな此こゝ処へ来て伺いな、大夫様がお洒落

遊ばすと、お上屋敷の御家老様が」

數「貴公は甘い物で洒落るから、私も一つ洒落よう」

五「改まって洒落ようというお声がかりは恐入ります」

數「私が国は美作で」

五「へえ成程」

數「私は城代家老じゃ」

五「へえ〜」

數「そこで洒落るのだ」

五「大層どうもお洒落の御玄関ごげんかんから大広間おおびろまは恐入りました、

へえ、成程」

數「美作城代家老私みまさかじょうだいからうわし、というのは何うだ」

五「へえ、恐入りましたな、それは何ういう訳なんで」

數「分らんの、いまさか羊ようかん羹鹿かの子餅こもち」

五「へへえ、成程気が付きません、美作城代家老私、いまさか羊羹鹿の子餅、これは恐入りました……どうも恐入ったね」

喜「恐入りました、御家老様からお洒落がお菓子で出たから、可笑かしな洒落と云うのをやろうかね、さアと云うと一寸ちよいと出ないものでげすが」

みの吉「私がちよいと一つやるよ」

喜「や、これはみの吉さん感心」

みの「私が赤飯おこわを喫たべたんだよ」

喜「可笑しな洒落だね」

みの「汁粉屋で赤飯を出したのだよ」

喜「此の節は汁粉屋で赤飯を売るよ」

みの「だから白木屋お駒しろきや こまというのを汁粉屋赤飯しるこやおこわさ」

喜「前さきに本文ほんもんを断ことわつて後あとから云うのは可笑しい」

岩越「手前が一つ洒落ようかの」

五「岩越さま、あなた様のお洒落は」

岩「手前は考えたが余程むずかしいで、これはム、ウ…待ってくれ、えー阿部川餅あべかわもちというのが有るの」

五「へえ〜ございます」

岩「一つ八文で」

五「阿部川、へい、一つは八文で」

岩「あべ川の八錢では本当の直ねだというのは何うだ」

五「へえー、変なお洒落で、それは何う云う訳なんで」

岩「姉あねかわ川の合かつせん戦、本多ほんだが出たというのだ」

五「それは余りお固いお洒落でげすな、私わたくしが洒落ましよう、斯う

いうのは何うでございます、大黒様こたつが巨燧あたに烘あつてるのでござい

ます、大黒あつた暖かいと」

數「うん、成程是は分つた、大福あつた暖かいか」

五「御家老様の御意いに入りましたか」

數「私わしが最もう一つ洒落ようか、是は何うだの、松風は固い岩おこ

しは柔らかいと云うのは」

五「へえ、それは何ういう訳で」

數「松蔭は堅い男、岩越は柔術家やわらとり」

五「へえ成程中々ちよつくら分りませんが誠に恐入りました事で、早くお三味線を」

とお座付ざつきが済み、後は深川の端唄はうたで賑かにぎやかにやる大分興に入つた様子、御家老も六十近いお年で、初めて斯ういう席に臨みましたので快く大分に召上りました。

數「お前のお蔭おかげで私わたしは斯様こんな面白い事に逢つたのは初めてだ、実に堪たまらんな、又また其そのの中うち来こたいものだ」

大「何うか御在府中御遠慮なくおいで下されば、清左衛門は如何いかばかりの悦びか知れませんが、芸者どれは孰どれがお氣に入りました」

數「皆宜よいの、其そのの中うちにも彼あれが好よいの、小まんに雛吉か」

大「彼あれが御意に入りましたら、今度はお相手に前々ぜんぜんから頼み置きまして、呼寄せるように致しましょう」

數「それは誠に辱かたじけない、大きに酔うたな、殿様は御病氣での」

大「へえわたくし、私も大きに心配を致して居ります」

數「併しかし私わしが顔を御覧があつてから、大きにお力が附いて大分に宜しいと、殊ことの外ほかお悦びでお食しよくも余程進むような事で」

大「大夫、何ぞお慰なぐさみを」

數「いや私わしは誠に武骨な男で、音おんぎよく曲くわや何かはほとんど分らん、

能が好きじゃ」

大「はア、左様でございますか、それでは能役者を」

數「いや連れて来たよ、二人次の間に居おるが、せめて鼓つづみぐらいは



なければなるまいと思つて、婦人で鼓を能く打つ者があつて、幸  
いだから、私が其の婦人を連れてまいつた」

大「それは少しも心得ませんでした、何時の間にもいりましたか」  
數「芸者どもは少し端へ寄つて居れ」

と是から灯を増し折から月が皎々と差上りまして、前の泉水

へ映じ、白菽は露を含んで月の光りできらくいたして居る中

へ灯を置きまして、此方には芸者が並んで居りますから、何方を

見ても目移りが致しますような有様、今襖を開けて出て来ました

は仙台平の袴に黒の紋付でございます。其の頃だから半髪

青額でまだ若い十七八の男と、二十七八になる男と二人がすう

と摺足をして出て来ました。脇を見ると隅の方に女が一人振

袖でを着まして、調べを取ってポン／＼という其の鼓の音が裏皮

へ抜けまして奥へ響き中々上手に打ちます。大藏は何うして何時

の間に斯か様な能役者を連れて来たかと思つて見ますと、どうも見

た様な能役者であるとは思いましたが、松蔭にも分りません。少

し前へ膝を進めて熟よく々見ますと若い方は先年いとまお暇が出て、お屋敷

を追放になりました渡邊織江の悴せがれの祖五郎、今一人は春部梅三郎、

兩人共にお屋敷を出て居おつて、二人が何うして此こゝ処へ能役者に成

つて来たことかと、鼓つづみうち打を見ると祖五郎の姉のお竹ですから

松蔭は驚きまして、是は何ういう訳かと濱名左傳次と互たがいに顔を見

合せて居ります内に、舞もしまいました。

數「大きに御苦労／＼、さア／＼こゝへ来て、ずうつとこゝへ来

な、構わずに此処へ来て一盃……それから松蔭もこゝへ来て……え、これは貴公も知つて居る通り、渡邊織江の悴祖五郎で、彼は春部梅三郎じゃ、不調法があつてお暇になり、浪人の活計に迫り、自分も好きな所から能役者となりたいと、何うやら斯うやら今では能役者でやつて居るそうだ、これは祖五郎の姉だ、器量も好いがお屋敷へ帰るまでは何処へも嫁付くことは否だと、鼓を打つたり、下方が出来る処から出入町人の亭主に心安い者があつて、其処にいと云うが、今日は幸いな折柄で、どうか又鼻屑にして斯ういう事が有つたら前々屋敷にいた時の馴染もあるから呼んでやつてくれ」

大「これは思掛けない事で、祖五郎殿にも春部氏にも暫く……」

と松蔭も腹の中では驚きました。

大「え、只今は何処どこに」

數「いや、国へ尋ねて来た、それからま何うするにも仕方がないから、奈良辺あたりで稽古をして、此方こちらへ出て来たので、是からが本当の修業じゃ、さアくいっばい一盃く」

梅「松蔭殿、面目次第もない、尾羽打枯した浪人の生計たつき、致し方なく斯様な営業なりわいをいたして居り、誠に恥入りました訳で、松蔭殿にお目通りを致しますのも間の悪い事でございますが、構わんから参れと、御家老の仰せを受けて罷出まかりでました、貴方様には追おい々御出世、蔭ながら悦び居ります」

祖「祖五郎も蔭ながら、貴方様の御出世は父織江がお世話致した

甲斐がござると蔭ながら悦び居ります、今日こんにちは思掛おもけなく御面会ごめんかいを致いたしました、此この後共御ご鬣はつ貞まことを願ねがいとう……斯ごと様な御酒宴ごしゆゑんのございます節には必ずお招まねきを願ねがいます」

竹「松蔭さま暫しばらくく、竹でございます」

大「これはお竹さま、これは実に妙たぎでげすな」

數「いや実に妙たぎだ、芸者げいしやは歸かえしたら宜よろかろう、却かえつて此こゝ処ところにいる

と屋敷やしきの話わも出来できんから、取急とくきゅういで秋田屋あきたや芸者げいしや共どもを早く歸かえせ〜」

番頭ばんとう「へえ〜」

と急に船ふねに載のせて歸かえりました、

數「さ、こゝへ来て昔むかしの話わをしよう、この祖五郎そごろうの父ちち織江おりゑは福原ふくはら別わか懇ごんであつた、忠義ちゅうぎ無な二にな男おとこであつたが、武運ぶゑん拙つたなくして谷中やちゆう瑞麟ずいりん

寺の藪蔭で何者とも知れず殺せつがい害され、不束ふつゝかの至りによつて永ながのお暇いとまを仰付けられ、討つたる敵かたきが知れんというが、さぞ残念であらう」

祖「はつ、誠に残念至極で」

と眼に涙を浮うかめてお竹と祖五郎が松蔭の顔をじろりと横目で睨ねめ上げるから、松蔭は気味悪くなり、下を向いている。

數「春部梅三郎は腰元の若江と密通して逃げたという事だったの」  
梅「はい、誠に恥入った事でございます」

數「うん、それが露顕した訳でもなし、是まで勤むきめ向も堅く、ほんの若氣わかげの至りで、女を連れて逐電しゆでんいたしたのじゃが、未いまだお暇いとまの出たわけではなし、只家出をした廉かどだから、お詫をして帰参の

叶かなう時節もあろう、若江という小姓ちいも小さい時分から奉公をして  
 いた者で、先年ていよ体好くお暇ひまになつたとの事、是も出入りは出来よ  
 うかと思う、所でお前たちに私わしが問うがな、大殿様は今年はもう  
 五十五にお成りなさる、昨今の処では御病氣も大きに宜よいようじ  
 やが、どうもお身上みじようが悪いので、今度の御病氣は數馬決して安心  
 せん、もしお逝去かくれにでもなつた時には御家督相続は誰が宜かろう、  
 春部だの祖五郎はお暇になつてゝも、代々の君恩かたじけの辱ない事は忘  
 却致すまい、君恩を有難いと考えるならば、御家督は何う致すが  
 宜しいか少しは考えも有ろう」  
 祖「手前の考えでは若様は未だまお四才よつかお五才いつで御頑ごがんぜ是もなく、  
 何弁わきまえない処のお子様でございますから、万々まんく一大殿様がお逝去かく

れに相成つた時には、お下屋敷にならせられる紋之丞様より他に御家督御相続のお方は有るまいかと存じます」

數「それは些ちと違うだろう、菊様はお血統ちすじだ、仮令たとえお四才よっつでも菊様が御家督にならなければなるまい、御舎弟を直すのは些と道理に違つて居おるように心得る」

梅「いや、それは違つて居りましょう」

數「違つては居らん」

梅「併しかしお四才よっつになる者を御家督になされば、矢張やっぱり御後見が附か

なければなりません、それよりは矢張やっぱりお下屋敷の御舎弟紋之丞様

が御家督御相続になつて、菊様追々御成人のちの後、御順家督ごじゆんかどくに相

成るが御当然ごとうぜんのことゝ存じます」



數「いや／＼然うでない、お血統は別だ、誰しも我子は可愛もので、御実子を以て御家督相続と云えば殿様にもお快くお臨終が出る、御兄弟の御情合も深い、深いなれども御舎弟様が御家督と云えばお快くないから御臨終が悪かろうと思う、どうもお四才でもお血統はお血統、若様を御家督にするが当然かと心得るな」

祖「是は御家老様にお似合いなさらんお言葉で、紋之丞様が御家督相続に相成れば、万事御都合が宜しい事で、お舎弟様は文武の道に秀で、お智慧も有り、先ず大殿様が御秘蔵の御方度々お賞めのお言葉も有りました事は、父から聞いて居ります」

數「それはお前たちの知らん事、何でも菊様に限る」

大「え、松蔭横合より差出ました横槍を入れます、これは春部

氏祖五郎殿の申さるゝが至極尤もかと存じます、菊様は未だお四才で、何のお弁えもない頑是ない方をお世嗣に遊ばしますのも、些と不都合かのように存じます、菊様御成人の後は兎も角こゝ十四五年の間は梅の御印様が御家督になるのが手前に於ては当然かと、憚りながら存じます」

數「然うじやアあるまい」

大「いや〜それは誰が何と申しても左様かと心得ます」

福原數馬は俄に面色を変え、容を正して声を張上げ。

數「黙れ……白々しい事を申すな、松蔭手前はそれ程御舎弟紋之丞様を大切に心得て居るならば、何故飴屋の源兵衛を頼んだ」

大「はっ」

數「神原五郎治、四郎治と同意致して、殿を蔑ろにする事を私が  
 知らんと思うて居るか、白痴め、左様に人前を作り忠義立を申  
 してもな、其の方は大恩人の渡邊織江を谷中瑞麟寺脇の細道にお  
 いて、手槍をもつて突殺した事を存じて居るぞ、其の咎を梅三郎  
 に負わそうと存じて、証拠の物を取置き、其の上ならず御舎弟様  
 を害そうと致した事も存じて居る、百八十余里隔つた国にいても  
 此の福原數馬は能く心得て居るぞ、人非人め」  
 と云い放たれ、恟り致したが、そこは悪党でございますから、  
 じりゝと前へ膝を進めて顔色を変え。  
 大「御家老さま怪しからん事を仰せられます、思い掛けない事を  
 仰せられます……手前が何で渡邊織江を殺害し、殊に御舎弟

紋之丞さまを失おうとしたなどと誰が左様な事を申しました、手前に於ては毛頭覚えはございません、何を証拠に左様なことを仰しやいますか、承わりとうござる」

數「これ、まだ其様なことを云うか、手前は五分試しにもせにアならん奴だ、うゝん……よく考えて見よ、先奥方さま御死去にな

つてから、お秋の方の氣儘氣随神原兄弟や手前達を引入れ、殿様を蔑ないがしろにいたす事も皆みな存じて居る。殊に其の方を世話いたした渡

邊を殺せつがい害致したり、もと何処どこの者か訳も分らん者を渡邊が格別取とりなし做を申したから、お抱えになつたのじゃ、上かみへ諂へつらい媚こびを献じ

て、とうとう寺島主水を説伏せ、江戸家老を欺おわき遂せて、菊様を世に出そうが為、御舎弟様を亡なき者にしようと言ふ事は、疾とうに

忠心の者が一々国表へ知らせたゆえに、老体なれども此の度態たひわざり  
 々々出て参つたのだ、其の方のような悪人は年を老とつても人指ひとさしゆ  
びとおやゆび指ひねで捻り殺すぐらいの事は心得て居おる、さアそれとも言  
 訳があるか、忠義に凝こつた若者らは不忠不義の大罪人八裂やつざきにし  
 ても飽足あきたらんと憤いきどおつたのを、私わしが止めた、いやそれは宜しくない、  
 一人を殺すは何でもない、況まして事を荒立あきる時には殿様のお眼識めがねち  
が違ちがひになりお恥辱はじである、また死去致した渡邊織江の越度おちどにも  
 相成あひある事、万一此の事が將軍家の上じようぶん聞きに達すれば、此の上も  
 ない御当家のお恥辱はじになるゆえ、事穩おんびん便べんが宜しいと理解をいた  
 した、こりや最早何どの様ように陳のじても遁のがれる道はないから、神原兄  
 弟は国表へ禁錮おしこめ申し付け、家老役御免、跡役は秋月喜一郎に仰

付けられるよう相あいさだ定だつて居おる、手前は不忠な事を致し、面目  
 次第もない、不忠不義の大罪人御奉公も相成り兼かねるによつて永なが  
 暇いとま下されたしという書面を書け、これ祖五郎此の松蔭に父を討た  
 れ、無念の至りであろう、手前はお暇を蒙こうむつて居おる身の上、仮令たとえ  
 悪人でも殿様のお側近くへまいる役柄を勤める大藏を、敵かたきと云つ  
 て無闇に討つことは出来んから、暇を取つたら、直すぐに討て……梅  
 三郎貴様は大藏のため既に罪に陥おとされし廉かどもあり、祖五郎は未だいま  
 年若じやによつて助太刀を致してやれ、これに岩越やわらとという柔術  
 取りの名人が居おるから心配は無い、貴様力を添えてやれ、さ松蔭  
 書付を書いて私わしへ出せばそれで手前はお暇になつたのだ……秋田屋  
 の亭主気の毒だが此の庭で敵かたきうち討うちを致させるから少し貸せ」

清「へえ」

と驚きました。

清「泉水がございますが」

數「いや、びちやく落こつても宜しい、急に一時に片を附けなければならんのだ、さ書け書かんかえ」

大「はっ……併し何の様の証拠がござつて、手前は神原兄弟と心を合せて御家老職を欺き、剩さえ御舎弟様を手前が毒害いたそうなどと、毛頭身に覚ええない事で、殊に渡邊織江を殺害いたしたなどと」

梅「黙れ此の梅三郎が宜く心得て居るぞ、手前は神原と心を合せて織江殿を殺害致した其の時に、此の梅三郎は其の場に居合せ、

下男を取押えて密書を奪い現に所持いたして居る、最早遁れる道はないぞ」

祖五郎は血眼ちまなこになつて前へ進み、

祖「やい大藏、人非人恩知らず、狗畜生いぬちくしょう、やい手前はな父を

討つたに相違ない、手前は召使めしつかいの菊を殺し、又家来林藏も斬きりころ

殺し、其の上ならず不義密通だと云つて宿へ死骸を下げたが、

其の前々菊まえくが悪事の段々を細かに書いて、小袖の襟へ縫附けて親

元へ贈つた菊の書付けを所持して居る、最早遁れる道はないぞ、

手前も武士じゃないか、尋常に立上つて勝負いたせ」

大「はつ……不忠不義の大罪重々心に恥じ、恐入りましてござる」

數「さ、書け、もう逆とてもいかなから書け、松蔭手前も諦めの悪い



男だ、最早遁るも引くも出来やせん、書け」

大「はっ」

數「まだ恐れ入らんか」

大「はっ」

數「も一つ云おうか、白山前の飴屋小金屋源兵衛を欺し宗庵という医者を抱込んで、水飴の中へ斑猫を煮込み、紋之丞様へ差上げようと致したな、それは疾うに水飴屋の亭主が残らず白状致してある、遁れる道はない」

大「あゝ残念：是まで十分仕遂せたる事が破れたか、あゝ」

と震えて袴の間へ手を入れ、松蔭大藏は齒齧をなして居りまし

たが、最早詮方がないと諦め、平伏して、

大「恐れ入つてござる」

數「おゝ、恐れ入れればそれで宜しい、お秋の方も剃ていはつ髪させ、国へ押込める積つもりだ、さ書けく」

大「只今書きまする」

と云いながら後あとへ退さがるから、岩越という柔術やわらとり家が万もし一逃にげにかゝつたら引倒して息の根を止めようと思つて控えて居ります。後へ退つて大藏すざりが硯すざりを引寄せて震ふるえながら認しためて差出す。

數「爪印を押せ、其そこ処へ」

大「はっ」

と爪印を捺おして福原數馬の前へ差出し、

大「重々心得違い、是これにて宜しゆうございますか、御披見ごひけん下さ

い

數「其の方の手跡しゆせきだから宜しい、さ是从庭へ出て敵かたきうち討だ

く

と云うと大藏は耐えかねて小刀を引抜くが早いか脇腹へ突つ込こんで引廻ひまわりました。

祖「汝おのれ切腹致したな」

と祖五郎が飛掛つて二打三打斬付け、遂ついに仇あだを討うち遂おせて、直すぐにお屋敷へお届けに相成り、とうとう悪人は残らず国表へ押込められて、お上屋敷の御家来十七人切腹致し、渡邊祖五郎、春部梅三郎はお召めしかえ歸しに相成り、渡邊祖五郎は二代目織江と成り、菊様の後見と相成つて、お下屋敷にまいりました。また秋月は跡あとか

家老職を仰付けられ、こゝに於て福原數馬は安心して国へ歸る。殿様は御病氣全快し、其の後大殿お逝去になつて、紋之丞さまが乗出し、美作守に任せられ。又お竹を何くれ親切に世話をした雲水の宗達は、美作の国までお竹を送り届け、それより廻国を致し、遂に京都で大寺の住職となり、鴻の巣の若江は旅籠屋を親族に相続させ、更めて渡邊祖五郎が媒妁人で、梅三郎と夫婦になり、お竹も重役へ嫁入りました。大力の遠山權六は忠義無二との取沙汰にて百石の御加増に相成りましたという。お芽出たいお話でございますが、長物語で嘸御退屈。

(抛酒井昇造筆記)





## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の九」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1964（昭和39）年2月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の九」春陽堂

1927（昭和2）年8月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、くの字点（二倍の踊り字。「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）はそのまま用いました。二の字点（漢数字の「二」を一筆書

きにしたような形の繰り返し記号)は、「々」「ゝ」「ゝ」「ゝ」にかえしました。

総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

※本作品中には、人名などの固有名詞に一部不統一が見られますが、あきらかな誤植と思われる場合を除き、原則として統一はせず、底本のままとしました。



※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：かとうかおり

2001年1月6日公開

2004年7月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 菊模様皿山奇談

三遊亭圓朝

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>